

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（40）

南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

ろく た ん が ま る
六反ヶ丸遺跡 2
— B 地点 —

（出水市六月田町）

2021年 3 月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡全景（東方向から）

序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）の建設事業に伴って、平成29年度から実施している出水市六月田町六月田下に所在する六反ヶ丸遺跡B地点の発掘調査の記録です。

本遺跡は、出水平野を流れる米ノ津川の右岸、標高約6mの河岸段丘上に位置する縄文時代～近世までの複合遺跡であり、発掘調査により発見された遺構・遺物は、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。

本報告書では、遺跡の中央部にあたるB地点についての調査成果を報告しています。特筆すべきは、大型円形竪穴建物跡の発見です。3段のテラスを有する構造で、上部構造を支えるためのピットが多数巡っています。床面付近には甕や壺、高坏などの土器類や、磨敲石、砥石などの石器、炭化した柱材など多数の遺物が出土しました。土器は在地の土器や中九州以北の特徴を有するものなどが混在しており、九州北部との交流が盛んであったことが窺える貴重な資料であると考えます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに、文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり、御協力いただきました国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所、出水市教育委員会、並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業、整理作業に従事された方々に対し、厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 中原一成

報告書抄録

ふりがな	ろくたんがまるいせき							
書名	六反ヶ丸遺跡2-B地点-							
副書名	南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第40集							
編著者名	眞邊彩 浦博司 小田裕人 百枝勇一							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574							
発行年月	西暦2021年3月							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
ろくたんがまる 六反ヶ丸遺跡	かこしまけん 鹿児島県 いずみし 出水市 ろくがつだちょう 六月田町	46208	208-73	31° 6′ 15″	130° 20′ 39″	本調査 20170901～ 20180130	174㎡	南九州西回り 自動車道（芦 北出水道路） 建設に伴う埋 蔵文化財発掘 調査
						本調査 20180507～ 20190130	1,585㎡	
						本調査 20190507～ 20191128	144㎡	
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	散布地 集落跡	縄文時代	なし		晩期土器			
		古墳時代	竪穴建物跡 遺物集中 土坑		在地系土器， 外来系土器 砥石，磨敲石，硯状石製品			
		古代～中世	—		土師器，青磁 須恵器 瓦質土器			
近世～近代		掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構		陶磁器 羽口				
	時期不詳	ピット		砥石，凹石，鉄滓				
遺跡の概要	六反ヶ丸遺跡は，出水平野を流れる米ノ津川の右岸，標高約6mの河岸段丘上に位置し，縄文時代晩期から近世までの複合遺跡である。発掘調査対象部分は東西に細長く，市道を挟んで西側からA～D地点に分けられる。本報告書は，B地点（平成29・30年度，令和元年度に調査実施）の調査結果について掲載している。 調査区全体が，幾度にわたる河川の氾濫による堆積物に覆われていたが，古墳時代の竪穴建物跡，土坑，中近世の掘立柱建物跡，土坑及び時期不詳の多数のピットを検出した。遺物は流れ込みのものも多く含まれるが，縄文時代土器，古墳時代の脚台付甕や丸底甕・壺形土器・高坏，古代の土師器・須恵器，中・近世の陶磁器などが出土した。							



六反ヶ丸遺跡 位置図 (1:25,000)

例 言・凡 例

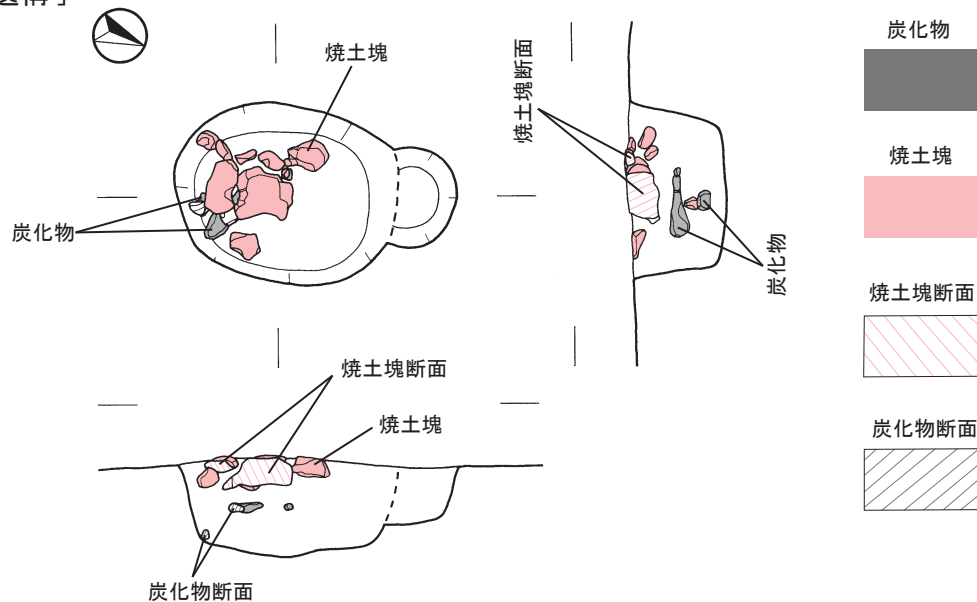
例 言

- 1 本書は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設に伴う六反ヶ丸遺跡の発掘調査報告書である。本書では、B地点の調査報告を行う。
- 2 六反ヶ丸遺跡は、鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下「鹿児島国道事務所」という。）から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「調査センター」という。）へ調査を委託して実施した。
- 4 発掘調査は、発掘調査支援業務を平成29年度に株式会社九州文化財研究所、平成30年度・令和元年度に株式会社島田組へ委託し、調査センターの指揮・監督のもと発掘作業を行った。
- 5 整理・報告書作成事業は、平成30年度から令和2年度まで調査センターが実施した。
- 6 掲載遺構番号は、遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
遺構番号はA地点からの連番とする。
 竪穴建物跡2号～
 土坑6号～
 掘立柱建物跡1号～
 溝状遺構2号～
 ピット39号～
掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は「ロク」である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高度である。
- 10 本書で使用した方位は、すべて座標北（G. N.）であり、測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。
- 11 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、平成30年度・令和元年度に株式会社ふじたに再委託した。
- 12 本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは眞邊・浦・小田の指示・確認のもと、調査センターの整理作業員が行った。
- 13 本書に係る出土遺物の実測・トレースは、眞邊・浦・小田・百枝の指示・確認のもと、調査センターの臨時職員が行った。なお、報告書の作成には、adobe 社製の「Illustrator CC」,「Photoshop CC」を使用した。

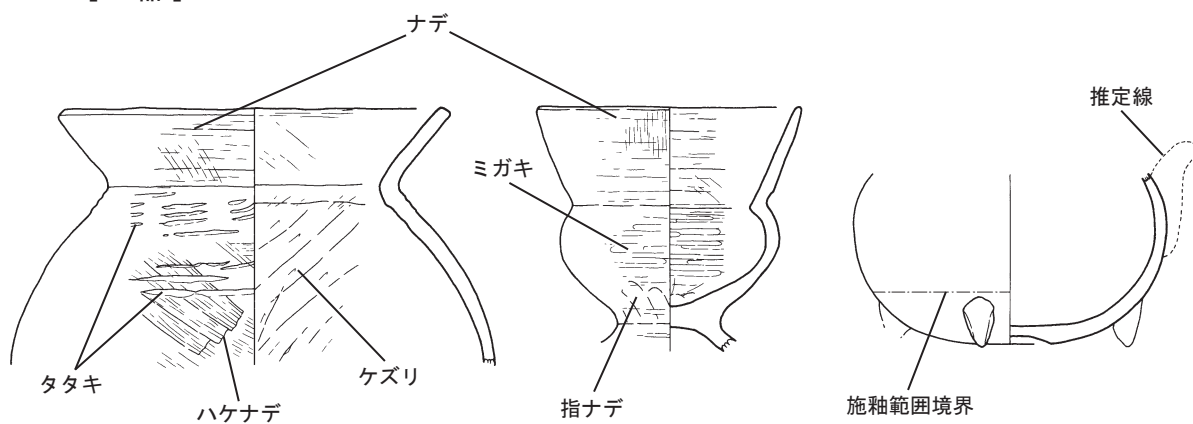
- 14 出土遺物の写真撮影は、福永修一が行った。
- 15 金属製品の保存処理は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の永濱功治が実施した。
- 16 本書に係る自然科学分析は、年代測定及び樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社と株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 17 本書の執筆は次のように分担し、編集は眞邊・小田が行った。
第Ⅰ章 百枝
第Ⅱ章 百枝
第Ⅲ章 百枝
第Ⅳ章 眞邊 浦 小田
第Ⅴ章 パリノ・サーヴェイ株式会社
株式会社加速器分析研究所
第Ⅵ章 眞邊・小田
- 18 記載した土色は『新版 標準土色帖』（1970 農林水産省技術会議事務局監修）に基づく。
- 19 ピットとしたものは、柱穴状の形態の小土坑を指す。
- 20 遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。遺構の略記号を以下に示す。
 S H ：竪穴建物跡
 S K ：土坑
 S B ：掘立柱建物跡
 S D ：溝状遺構
 P ：ピット
- 21 遺構図の縮尺は、以下を基本とした。また、各図中にも縮尺を示している。
 竪穴建物跡 ：1/60
 掘立柱建物跡：1/60
 土坑 ：1/10, 1/20
 溝状遺構 ：1/40, 1/100
- 22 遺構図の断面については、平面図と同縮尺とした。
- 23 遺物の縮尺は、以下を基本とした。また、各図中にも縮尺を示している。
 土器・土師器・須恵器・土製品・陶磁器：1/3
 石器・鉄器：1/2～1/3
- 24 観察表のうち、口径・底径が括弧書きのものは復元径、器高が括弧書きのものは残高である。
- 25 遺構番号については、調査時に付されたものから、報告書掲載順に付け替えた。
- 26 本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し、展示・活用を図る予定である。

凡 例

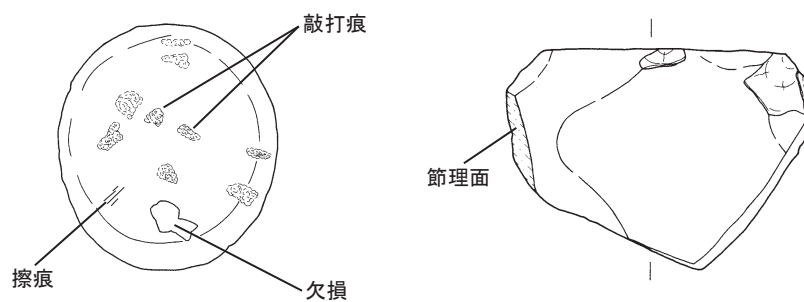
〔遺構〕



〔土器〕



〔石器〕



目 次

巻頭図版

序文

報告書抄録

例言・凡例

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
1 分布調査	1
2 試掘調査	1
3 確認調査	2
4 本調査	2
第3節 調査の経過	3
第4節 整理作業の経過	6
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第Ⅲ章 調査の方法と層序	14
第1節 確認調査	14
1 確認調査の方法	14
2 確認調査の概要	14
第2節 本調査	14
1 発掘調査の方法	14
2 遺構の検出方法	15
第3節 整理・報告書作成作業	15
1 整理作業の方法と内容	15
2 報告書作成作業の方法と内容（令和元年度）	16
3 報告書作成作業の方法と内容（令和2年度）	16
第4節 層序	16
第Ⅳ章 調査の成果	20
第1節 縄文時代の調査成果	20
1 調査の概要	20

2 遺物	20
第2節 古墳時代の調査成果	23
1 調査の概要	23
2 遺構	23
3 包含層出土遺物	59
第3節 古代～中世の調査成果	63
1 調査の概要	63
2 遺物	63
3 包含層出土遺物	79
第4節 近世・近代の調査成果	66
1 調査の概要	66
2 遺構	66
3 包含層出土遺物	79
第5節 その他の調査成果	82
1 ピット	82
2 包含層出土の時期不詳遺物	88
第Ⅴ章 自然科学分析	96
第1節 分析の概要	96
第2節 六反ヶ丸遺跡の樹種同定	96
第3節 六反ヶ丸遺跡出土材の樹種同定	97
第4節 六反ヶ丸遺跡における放射性炭素年代 （AMS測定）	99
第Ⅵ章 総括	102
第1節 六反ヶ丸遺跡の地形的特徴	102
第2節 縄文時代～弥生時代	102
第3節 古墳時代	102
1 遺構	102
2 遺物	103
第4節 古代～中世	105
第5節 近世以降・その他の遺構	105
1 遺構	105
2 遺物	106

挿図目次

第1図 六反ヶ丸遺跡 周辺地形図	8
第2図 六反ヶ丸遺跡 周辺遺跡位置図（1：25,000）	12
第3図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図	13
第4図 六反ヶ丸遺跡 確認トレンチ配置図	14
第5図 六反ヶ丸遺跡B地点 グリッド配置図	15
第6図 六反ヶ丸遺跡 全体図及び年度別調査範囲	17

第7図	土層断面図1	18
第8図	土層断面図2	19
第9図	縄文時代 出土遺物	20
第10図	遺構配置図（全時代）	21
第11図	古墳時代遺構配置図及び 縄文～古墳時代包含層出土遺物位置図	22
第12図	竪穴建物跡2号 遺物出土状況	24
第13図	竪穴建物跡2号 平面図・断面図	25
第14図	竪穴建物跡2号 ピット断面図	26
第15図	竪穴建物跡2号 遺物接合状況	28
第16図	竪穴建物跡2号 出土遺物1	30
第17図	竪穴建物跡2号 出土遺物2	31
第18図	竪穴建物跡2号 出土遺物3	32
第19図	竪穴建物跡2号 出土遺物4	33
第20図	竪穴建物跡2号 出土遺物5	35
第21図	竪穴建物跡2号 出土遺物6	36
第22図	竪穴建物跡2号 出土遺物7	37
第23図	竪穴建物跡2号 出土遺物8	38
第24図	竪穴建物跡2号 出土遺物9	39
第25図	竪穴建物跡2号 出土遺物10	41
第26図	竪穴建物跡2号 出土遺物11	42
第27図	遺物集中1 遺物出土状況	43
第28図	遺物集中1 遺物接合状況	44
第29図	遺物集中1 出土遺物1	45
第30図	遺物集中1 出土遺物2	46
第31図	遺物集中2 遺物出土状況及び断面図 (1 面目).....	48
第32図	遺物集中2 遺物出土状況及び部分立面図 (2 面目).....	49
第33図	遺物集中2 遺物接合状況	50
第34図	遺物集中2 出土遺物1	51
第35図	遺物集中2 出土遺物2	52
第36図	遺物集中2 出土遺物3	53
第37図	遺物集中2 出土遺物4	54
第38図	遺物集中2 出土遺物5	55

第39図	遺物集中2 出土遺物6	56
第40図	土坑6・7号	58
第41図	古墳時代 包含層出土遺物1	60
第42図	古墳時代 包含層出土遺物2	61
第43図	古墳時代 包含層出土遺物3	62
第44図	古代～中世 包含層出土遺物1	63
第45図	古代～中世 包含層出土遺物2	64
第46図	近世以降遺構配置図及び古代以降 包含層出土遺物位置図.....	65
第47図	掘立柱建物跡1号及び出土遺物1	66
第48図	掘立柱建物跡1号 出土遺物2	67
第49図	掘立柱建物跡2号	68
第50図	掘立柱建物跡3号	69
第51図	掘立柱建物跡4号	70
第52図	土坑8号	71
第53図	土坑9・10号及び出土遺物	72
第54図	土坑11・12号	73
第55図	土坑13号及び出土遺物	74
第56図	土坑14号	75
第57図	土坑15号	76
第58図	土坑16・17号	77
第59図	溝状遺構2号	78
第60図	近世～近代 包含層出土遺物1	79
第61図	近世～近代 包含層出土遺物2	80
第62図	近世～近代 包含層出土遺物3	81
第63図	ピット位置図（全体）	85
第64図	ピット位置図（拡大）	86
第65図	ピット内出土遺物	87
第66図	時期不詳 包含層出土遺物	88
第67図	炭化材	98
第68図	暦年較正年代グラフ（参考）	101
第69図	B地点検出の噴礫	102
第70図	B地点Ⅲ層上面地形図	103
第71図	関連資料	104
第72図	埋土別ピット位置図	106

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表1	10	第13表	土器・土師器・須恵器観察表4	92
第2表	周辺遺跡一覧表2	11	第14表	土器・土師器・須恵器観察表5	93
第3表	基本層序	16	第15表	土器・土師器・須恵器観察表6	94
第4表	竪穴建物跡2号 埋土	26	第16表	陶磁器等観察表	95
第5表	竪穴建物跡2号 ピット埋土	27	第17表	石器観察表	95
第6表	ピット埋土・分類表	82	第18表	鉄器観察表	95
第7表	ピット計測表1	82	第19表	樹種同定結果	97
第8表	ピット計測表2	83	第20表	樹種同定結果	98
第9表	ピット計測表3	84	第21表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值)	100
第10表	土器・土師器・須恵器観察表1	89			
第11表	土器・土師器・須恵器観察表2	90	第22表	放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正 ^{14}C 年代, 較正年代)	101
第12表	土器・土師器・須恵器観察表3	91			

図版目次

図版1	調査状況・土層断面	107	図版11	竪穴建物跡2号 出土遺物6	117
図版2	古墳(竪穴建物跡2号①)	108	図版12	竪穴建物跡2号 出土遺物7	118
図版3	古墳(竪穴建物跡2号②)	109	図版13	竪穴建物跡2号 出土遺物8	119
図版4	古墳(遺物集中1・遺物集中2・包含層)	110	図版14	竪穴建物跡2号 出土遺物集合写真	120
図版5	近世以降(掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構)	111	図版15	遺物集中1・2 出土遺物	121
図版6	竪穴建物跡2号 出土遺物1	112	図版16	遺物集中2 出土遺物1	122
図版7	竪穴建物跡2号 出土遺物2	113	図版17	遺物集中2 出土遺物2	123
図版8	竪穴建物跡2号 出土遺物3	114	図版18	古墳時代 出土遺物	124
図版9	竪穴建物跡2号 出土遺物4	115	図版19	古代～中世及び近世・近代出土遺物	125
図版10	竪穴建物跡2号 出土遺物5	116	図版20	近世・近代出土遺物	126
			図版21	近世・近代及び包含層出土遺物	127

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき、鹿児島国道事務所は、南九州西回り自動車道（芦北出水道路）建設の施工計画に基づき、事業対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「県文化財課」という。）に照会した。

これを受けて埋文センターが、平成26年度に計画路線（芦北出水道路のうち、県境～出水IC間）の分布調査を実施した結果、事業区内には周知の遺跡を含め10か所の遺物散布地の存在が判明した。このうち六反ヶ丸遺跡は周知の遺跡にあたる。分布調査の結果をもとに事業区内の埋蔵文化財の取り扱いについて、鹿児島国道事務所、県文化財課、埋文センターの三者で協議を行い、埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため、事業着手前に発掘調査を実施することとした。

なお、平成21年度まで当該事業の確認調査は、事業の円滑な推進を図る観点から本調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが、平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を導入し、「県内遺跡事前調査事業」として県文化財課が実施している。

これを受けて、遺跡の残存状況をより詳細に把握するため、県文化財課が平成28年12月21日に試掘調査、埋文センターが平成29年5月8日から5月28日にかけて確認調査をそれぞれ行ったところ、事業区域内の表面積7,000㎡の範囲に遺物包蔵地が存在することが判明した。

試掘調査、確認調査の結果、本調査は、県文化財課からの委託を受けて調査センターが担当することとなった。平成24年度に埋文センターは、出水阿久根道路建設に伴う中郡遺跡群の発掘調査を「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要項」に基づき、民間調査組織と支援業務委託契約を締結して実施した実績があった。また、平成25年度に設立された調査センターは東九州自動車道建設に伴う発掘調査において、増大する事業量に伴う発掘調査の円滑かつ効率的な実施と事業推進の調整を図るため、民間組織と支援業務委託契約を結んで実施してきた実績があった。このような経緯のもと、鹿児島国道事務所からの要望を受け、平成29年6月に鹿児島国道事務所と県文化財課、調査センターの三者で協議を行った結果、六反ヶ丸遺跡の本調査においても民間支援組織を導入し、支援業務委託契約を締結して実施することとなった。

本調査が必要と判断された総表面積7,000㎡（延面積14,000㎡）のうち、平成29年度は、調査着手のための条件が整った範囲（A地点＋B地点の一部）、表面積1,609㎡（延面積4,747㎡）の調査を行い、終了した。調査期間は、平成29年9月1日（金）から平成30年1月30日（火）（実働85日間）である。その中で、B地点の調査表面積は174㎡（延面積522㎡）である。

平成30年度は、B・C地点の本調査を行い、表面積2,849㎡（延面積4,131㎡）の調査を終了した。調査期間は、平成30年5月7日（月）から平成31年1月30日（水）（実働146日間）である。その中で、B地点の調査表面積は1,585㎡（延面積2,285㎡）である。

令和元年度は、B・C地点の未調査部分とD地点の調査を行い、表面積1,776㎡（延面積2,124㎡）の調査を行い、終了した。調査期間は、令和元年5月7日（火）から令和元年11月28日（木）（実働81日間）である。その中で、B地点の調査表面積は144㎡（延面積144㎡）である。

第2節 調査の組織

1 分布調査（平成26年度）

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課
調査者	鹿児島県教育庁文化財課 文化財主事 黒川 忠広 県立埋蔵文化財センター 調査課第一調査係長 大久保浩二 文化財研究員 眞邊 彩
立会者	出水市教育委員会生涯学習課 主査 岩崎 新輔 国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所 企画係長 井久保和博 技官 下川 恭平 南九州西回り自動車道（出水～阿久根） プロジェクト推進室 建設専門官 原田 修

2 試掘調査（平成28年度）

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査企画	鹿児島県教育庁文化財課

調 査 者 〃
文化財主事 黒川 忠広
立 会 者 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
計画課専門職 西森 功
調 査 協 力 出水市教育委員会生涯学習課
主査 岩崎 新輔

3 確認調査（平成29年度）

事 業 主 体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調 査 主 体 鹿児島県教育委員会
調 査 企 画 鹿児島県教育庁文化財課
調 査 統 括 県立埋蔵文化財センター
所長 堂込 秀人
次長 大久保浩二
総務課長 高田 浩
第一調査係長 中村 和美
調 査 者 文化財主事 樋之口隆志
文化財主事 中村幸一郎
文化財主事 藤島伸一郎
調 査 事 務 主査 新穂 秀貴
調査協力者 出水市教育委員会生涯学習課
係長 岩崎 新輔
主査 橋元 邦和

4 本調査

平成29年度

事 業 主 体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調 査 主 体 鹿児島県教育委員会
調 査 統 括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 前迫 亮一
調 査 企 画 総務課長兼総務係長 中村伸一郎
調査課長 中原 一成
調査第二係長 岩澤 和徳
調 査 担 当 文化財専門員 元田 順子
調 査 事 務 主査 荒瀬 勝己
事業推進員 川崎 麻衣

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社九州文化財研究所へ本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員1名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委 託 先 株式会社 九州文化財研究所
調 査 体 制 株式会社 九州文化財研究所
主任技術者 尾ノ上尚平
主任調査支援員 飯島 義広
(9～11月)
石橋 和久
(11～1月)
石橋 和久
(9～11月)
調査支援員 尾方 慎莉
調査支援員 西田 茂
委 託 期 間 平成29年8月4日～平成30年3月9日
委 託 内 容 記録保存調査 1式
測量業務 1式
土工業務 1式
検 査 中間検査 平成29年12月4日(月)
完成検査 平成30年2月22日(木)
(実地検査)
平成30年3月5日(月)
(成果物検査)

平成30年度

事 業 主 体 国土交通省
九州地方整備局鹿児島国道事務所
調 査 主 体 鹿児島県教育委員会
調 査 統 括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 前迫 亮一
調 査 企 画 総務課長兼総務係長 中村伸一郎
調査課長 中原 一成
調査第二係長 福永 修一
調 査 担 当 文化財専門員 平木場秀男
調 査 事 務 主査 小牧 智子

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社島田組へ本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員1名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委 託 先 株式会社 島田組
調 査 体 制 株式会社 島田組
主任技術者 山本 瞬
主任調査支援員 宮下 貴浩
調査支援員 高見澤太基
丹生 泰雪
委 託 期 間 平成30年4月8日～平成31年3月13日

委託内容	記録保存調査	1式		土工業務	1式
	測量業務	1式		中間検査	令和元年11月15日(金)
	土工業務	1式		完成検査	令和2年2月25日(火)
検査	中間検査	平成30年10月16日(火)			(実地検査)
	完成検査	平成31年2月25日(月)			令和2年2月28日(金)
		(実地検査)			(成果物検査)
		平成31年3月1日(金)			
		(成果物検査)			

令和元年度

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原 一成
調査企画	総務課長兼総務係長	中島 治
	調査課長	寺原 徹
	調査第二係長	有馬 孝一
調査担当	文化財専門員	眞邊 彩
調査事務	主査	有川 剛弘

発掘調査の実施にあたり、調査センターは「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、株式会社島田組へ山ノ段遺跡と併せて本調査（記録保存調査）等の支援業務委託を実施した。

なお、調査センター職員1名が常駐し、調査支援の方法及び業務内容に係る指導・助言及び調査現場の監理を行った。

委託先	株式会社 島田組	
調査体制	株式会社 島田組	
	主任技術者	岩佐 篤志
	主任調査支援員	宮下 貴浩
		(～5月)
	主任調査支援員	土居 和幸
		(5～7月)
	調査支援員	堀井 泰樹
		(7月～)
	調査支援員	丹生 泰雪
	調査支援員	三ツ股正明
		(5～6月)
	調査支援員	井上 索裕
		(6月～)

委託期間 平成31年4月5日～令和2年3月6日
(六反ヶ丸遺跡調査期間は令和元年5月9日～令和元年10月31日)

委託内容	記録保存調査	1式
	測量業務	1式

土工業務	1式
中間検査	令和元年11月15日(金)
完成検査	令和2年2月25日(火)
	(実地検査)
	令和2年2月28日(金)
	(成果物検査)

令和2年度

事業主体	国土交通省	
	九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター	
	センター長	中原 一成
調査企画	総務課長兼総務係長	中島 治
	調査課長	寺原 徹
	調査第二係長	有馬 孝一
調査担当	文化財専門員	浦 博司
	文化財専門員	百枝 勇一
調査事務	主事	上園 慶子

第3節 調査の経過

調査の経過については、日誌抄を年度ごと及び月ごとに集約して記載する。

調査の過程（日誌抄 B地点関係のみ記載）

平成29年度

29年9月

4日	調査開始	
7日	現地視察	前迫センター長
	現地調査	岩澤係長
26日	監理業務	中村係長（埋文センター）
	現地調査	岩澤係長

10月

B-14～17区	表土剥ぎ（重機使用）
	先行トレンチⅠ～Ⅱb層掘削
	土層断面実測

3日	監理業務	平文化財主事（県文化財課）
		鹿児島国道事務所来跡

17日	調査センターへ遺物搬入
-----	-------------

18日	現地調査	岩澤係長
-----	------	------

23日	安全パトロール
-----	---------

26日	監理業務	中村係長（埋文センター）
		平文化財主事（県文化財課）
		出水市教育委員会文化財係課 橋元主査来跡

11月

B-14～17区	表土～Ⅱc層掘削、Ⅲ層上面検出精査、完掘状況、写真撮影、Ⅱc層コンター
----------	-------------------------------------

図作成

B・C-17区 東壁土層断面実測

6日 現地視察 前迫センター長

16日 監理業務 堂込所長（埋文センター）

出水市教育委員会文化財課 橋元主査来跡

17日 中間検査事前指導 岩澤係長

28日 出水市教育委員会文化財課 岩崎係長来跡

12月

※A地点のみ調査実施

12日 現地視察 前迫センター長

15日 現地調査 岩澤係長

19日 阿久根市文化財審議委員 河北篤司氏来跡

30年1月

B・C-14～17区 礫層掘削（重機使用）

B・C-17区 III a層掘削，調査区東壁清掃

現地説明会準備，機材収納，現場内環境整備

10日 安全パトロール

12日 現地調査 岩澤係長，倉元文化財専門員，眞邊文化財専門員

13日 現地公開 現地視察 前迫センター長

現地指導 中村総務課長

現地指導 中原調査課長

現地調査 岩澤係長

16・17日 現地調査 岩澤係長

18・19日 現地調査 武安文化財主事（埋文センター）

20日 監理業務 宗岡係長（埋文センター）

25日 監理業務 平文化財主事（県文化財課）

出水市教育委員会文化財課 橋元主査来跡

30日 空中写真撮影

B-14～17区 埋め戻し

調査終了

平成30年度

30年5月

C・D-18～20区 表土剥ぎ（重機使用），II c層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ

9日 現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

16日 調査区幅杭打ち直し作業

25日 D地点試掘調査 文化財課 平文化財主事

出水市教育委員会文化財課 橋元主査

現地視察 前迫センター長

現地指導 中原課長

現地調査 福永係長

6月

※C地点のみ調査実施

11・14日 現地調査 福永係長

23日 安全パトロール

26日 監理業務 堂込所長（埋文センター）

現地調査 福永係長

7月

C・D-18～20区 II c層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ，遺構検出

10日 出水市教育委員会文化財課 岩崎係長来跡

11日 現地視察 前迫センター長

現地指導 中原課長

現地調査 福永係長

23日 監理業務 平文化財主事（県文化財課）

8月

C・D-18～20区 II c層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ，遺構検出，遺物集中1，掘立柱建物跡1・2号検出・掘り下げ・写真撮影・実測

C・D-21～22区 表土剥ぎ（重機使用），II c層掘り下げ，遺物取り上げ，遺構検出，確認トレンチ設定・掘り下げ

2日 現地指導 成尾英仁氏（伊集院高教諭）

現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

16日 現地指導 近江俊秀調査官（文化庁）

現地視察 前迫センター長

現地指導 中原課長

現地調査 福永係長

監理業務 森文化財主事（県文化財課）

21日 現地指導 永山修一氏（ラ・サール学園教諭）

現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

23日 産業医夏期現場視察 安全パトロール

9月

C・D-17・18区 表土剥ぎ（重機使用）II b・II c層掘り下げ，遺構検出・遺物取り上げ

C・D-18～20区 遺物集中1実測・写真撮影，掘立柱建物跡1・2号実測・写真撮影，III層上面コンター図作成，土層断面図作成，III層掘り下げ・下層確認・埋め戻し（重機使用）

C・D-20～22区 II c層掘り下げ，遺物取り上げ，遺構検出，竪穴建物跡2号検出・写真撮影・掘り下げ・遺物取り上げ

3日 現地視察 前迫センター長

5日 出水市教育委員会文化財課 橋元主査来跡

11日 ラ・サール学園教諭 永山修一氏来跡

12日 現地調査 福永係長

19日 監理業務 中村（和）係長（埋文センター）

10月

- C・D-14～17区 表土剥ぎ（重機使用）Ⅱc層掘り下げ、遺構検出、ピット実測
- C・D-17・18区 掘立柱建物跡3・4号検出・掘り下げ・実測・写真撮影、土層断面図作成Ⅲ層上面コンター図作成、Ⅲ層掘り下げ・下層確認・埋め戻し（重機使用）
- C・D-20～22区 竪穴建物跡2号掘り下げ・遺物取り上げ・写真撮影、一部埋め戻し

- 2日 現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長
- 11日 現地調査 福永係長
- 18日 現地視察 前迫センター長
- 24日 監理業務 堂込所長（埋文センター）
安全パトロール
- 25日 現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長
現地調査 鶴田文化財専門員
中村（幸）文化財主事（埋文センター）
- 31日 遺物指導 小田裕樹氏（奈良文化財研究所）

11月

- C・D-14～17区 Ⅱc層掘り下げ、土坑、溝状遺構検出・掘り下げ・実測・写真撮影、ピット実測、土層断面図作成、Ⅲa層上面コンター図作成、Ⅲ層掘り下げ・下層確認・埋め戻し（重機使用）
- C・D-20～22区 竪穴建物跡2号掘り下げ・遺物取り上げ、写真撮影、土層断面図作成、一部Ⅲ層上面コンター図作成、Ⅲ層掘り下げ・下層確認・一部埋め戻し（重機使用）

- 1日 現地指導 小田裕樹氏（奈良文化財研究所）
現地指導 深野信之氏（奈良市教育委員会）
現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長
- 6日 伊集院高教諭 成尾英仁氏来跡
- 7日 現地調査 福永係長
- 8日 現地指導 森脇 広氏（鹿児島大学名誉教授）
現地指導 中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長）
現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長
現地調査 有馬文化財専門員
空中写真撮影
- 10日 現地説明会
現地視察 前迫センター長

現地指導 中村総務課長 中原調査課長

現地調査 福永係長

現地調査 有馬・本高・田中・平屋・鶴田

20・26日 現地視察 前迫センター長

12月

- C・D-14～17区 Ⅱc層掘り下げ、土坑、溝状遺構検出・掘り下げ・実測・写真撮影、ピット実測、土層断面図作成、Ⅲa層上面コンター図作成、Ⅲa層掘り下げ・下層確認・埋め戻し（重機使用）
- C・D-20～22区 竪穴建物跡2号掘り下げ・遺物取り上げ、写真撮影、土層断面図作成、一部Ⅲa層上面コンター図作成、Ⅲa層掘り下げ・下層確認・一部埋め戻し（重機使用）

- 7日 現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長
- 12日 安全パトロール
- 14日 現地指導 小鹿野 亮氏（筑紫野市教育委員会）
現地視察 前迫センター長
現地調査 福永係長

17・18日 現地調査 有馬文化財専門員

20日 現地視察 前迫センター長

20・21日 現地調査 福永係長

1月

- C・D-19～21区 ビット実測、Ⅲ層掘り下げ・下層確認・埋め戻し（重機使用）、調査終了

9日 現地指導 北村良介氏（鹿児島大学名誉教授）
現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

15日 現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

24日 遺跡検討会

埋文調査センター 前迫センター長・中原課長
福永係長・三垣係長

県埋文センター 堂込所長・大久保次長
東調査室長補佐・宗岡係長

県文化財課 寺原係長

30日 現地視察 前迫センター長

現地調査 福永係長

調査終了

令和元年度

元年5月

- C・D-21・22区 表土剥ぎ（重機使用）、壁面整形、地形測量、東端および南壁沿いの遺

構（遺物集中2・土坑6・7号・ピット他）検出，乾燥防止のためシート養生

15日 調査開始
現地視察 中原センター長

6月
C・D-21・22区 排水及びシート養生，土器溜まり・土坑6・7号検出・掘り下げ・写真撮影・実測，遺物集中2掘り下げ，東端トレンチの延長

6日 現地指導 寺原調査課長
現地調査 有馬係長

10日 現地調査 有馬係長

12・13日 現地調査 倉元文化財調査員

13・14日 現地調査 横手係長

17日 安全パトロール

18日 現地調査 有馬係長

24・25日 現地調査 横手係長

7月
C・D-21・22区 遺物集中2実測・遺物取り上げ・写真撮影，台風養生，南北方向サブトレンチ掘り下げ

8・9日 現地調査 有馬係長

16日 産業医夏期現場視察

17日 監理業務 宗岡係長（埋文センター）
現地指導 寺原課長

31日 現地調査 倉元文化財調査員

8月
C・D-21・22区 遺物集中2写真撮影・掘り下げ・実測・下層遺物検出，ピット実測，台風養生，Ⅱc-2層完掘写真撮影

1・2日 現地調査 倉元文化財調査員

5・8日 現地調査 平木場文化財専門員

20日 監理業務 三垣係長（埋文センター）

21日 安全パトロール

9月
C・D-21・22区 遺物集中2掘り下げ・精査・遺物取り上げ・写真撮影・実測，Ⅱc-2層上部掘り下げ（重機使用），ピット4基検出・写真撮影・実測・掘り下げ

3・4・12日 現地調査 平木場文化財専門員

26日 空中写真撮影
現地調査 福永係長

10月
C・D-21・22区 Ⅱc層掘り下げ（重機使用），Ⅲa層上面検出・写真撮影，地形測量，埋め戻し
調査終了

9日 安全パトロール

10日 現地調査 福永係長

15・16日 現地指導 趙哲済氏（大阪市文化財協会）

15日 現地調査 有馬係長

23日 監理業務 前迫所長

28・29日 現地調査 有馬係長

31日 現地調査 倉元文化財調査員
調査終了

第4節 整理作業の経過

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，調査センターで行った。

平成30～令和元年度は，出土遺物の水洗い，注記，遺物の仕分けなどの基礎的作業，遺物の実測及び拓本，一部トレース，遺構の一部トレース，原稿執筆等の整理作業を行い，令和2年度は，トレース，レイアウト，写真撮影，原稿執筆等の報告書作成業務及び遺物収納を行った。

整理・報告書作成作業に関する調査組織及び整理作業の経過は以下のとおりである。

調査組織

平成30年度

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長	前迫 亮一
調査企画	総務課長兼総務係長 調査課長 調査第二係長	中村伸一郎 中原 一成 福永 修一
調査担当	文化財専門員	有馬 孝一
事務担当	主査 事業推進員	小牧 智子 川崎 麻衣

作業の経過

遺構……図面チェック
遺物……水洗い，注記，接合
土層断面……図面チェック
自然科学分析委託……土壌分析1件
遺物指導 中村直子氏（鹿児島大学）

令和元年度

事業主体	国土交通省 九州地方整備局鹿児島国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター センター長	中原 一成

調 査 企 画	総務課長兼総務係長	中島 治
	調査課長	寺原 徹
	調査第二係長	有馬 孝一
調 査 担 当	文化財専門員	平木場秀男
	文化財調査員	倉元 良文
事 務 担 当	主査	有川 剛弘
	事業推進員	川崎 麻衣

作業の経過

遺構……図面チェック、遺構配置図作成
 遺物……土器分類、接合、実測、拓本、復元
 土層断面……図面チェック、下図面作成
 原稿執筆
 自然科学分析委託……樹種同定分析1件、
 年代測定分析1件
 遺物指導 久住猛雄氏（福岡市経済観光文化局）
 中村直子氏（鹿児島大学）
 石田智子氏（鹿児島大学）

第1回報告書作成指導委員会

令和元年6月11日 寺原課長他4名

第1回報告書作成検討委員会

令和元年6月17日 中原センター長他4名

第2回報告書作成指導委員会

令和元年8月7日 寺原課長他5名

第2回報告書作成検討委員会

令和元年8月22日 中原センター長他5名

第3回報告書作成指導委員会

令和元年10月3日 寺原課長他5名

第3回報告書作成検討委員会

令和元年10月9日 中原センター長他5名

第4回報告書作成検討委員会

令和元年10月31日 中原センター長他5名

令和2年度

事業主体 国土交通省
 九州地方整備局鹿児島国道事務所
 調査主体 鹿児島県教育委員会
 調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

	センター長	中原 一成
調 査 企 画	総務課長兼総務係長	中島 治
	調査課長	寺原 徹
	調査第二係長	有馬 孝一
調 査 担 当	文化財専門員	眞邊 彩
	文化財専門員	浦 博司
	文化財専門員	小田 裕人
	文化財専門員	百枝 勇一
事 務 担 当	主査	有川 剛弘

事業推進員 塩屋奈諸美

作業の経過

遺構……図面チェック及び検討、トレース、デジタル
 トレース、トレースチェック、レイアウト、
 遺構配置図作成
 遺物……土器分類、接合、実測、拓本、復元、トレ
 ス、トレースチェック、レイアウト、遺物観
 察表作成
 土層断面……図面チェック、トレースチェック、レイ
 アウト
 図版……レイアウト（現場・遺物）、掲載遺物写真撮影
 原稿執筆・校正
 遺物・写真・図面等の整理及び収納
 自然科学分析委託……樹種同定分析1件、
 年代測定分析1件
 遺物指導 中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査セ
 ンター）
 檀 佳克氏（八女市教育委員会）

第1回報告書作成指導委員会

令和2年6月2日 寺原課長他4名

第1回報告書作成検討委員会

令和2年6月11日 中原センター長他4名

第2回報告書作成指導委員会

令和2年8月5日 寺原課長他5名

第2回報告書作成検討委員会

令和2年8月11日 中原センター長他5名

第3回報告書作成指導委員会

令和2年10月7日 寺原課長他5名

第3回報告書作成検討委員会

令和2年10月13日 中原センター長他5名

第4回報告書作成指導委員会

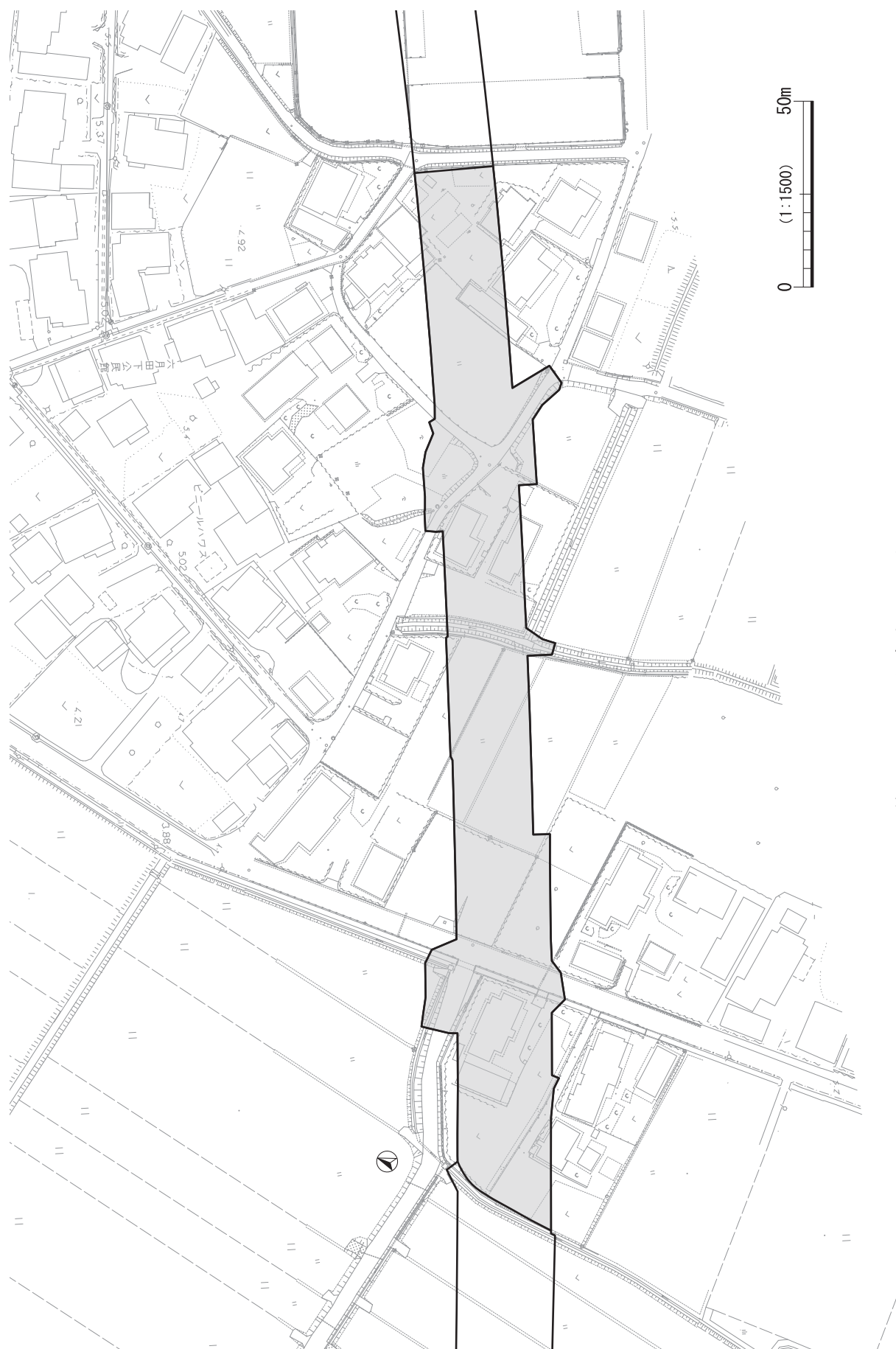
令和2年11月4日 寺原課長他5名

第4回報告書作成検討委員会

令和2年11月10日 中原センター長他5名

第5回報告書作成検討委員会

令和2年11月19日 中原センター長他5名



第1図 六反ヶ丸遺跡 周辺地形図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

六反ヶ丸遺跡は、鹿児島県出水市六月田町六月田下に所在する。本遺跡の所在する出水市は、1954（昭和29）年に出水町と米ノ津町が合併し、誕生した。その後、2006（平成18）年には出水市と野田町・高尾野町が合併し、現在の出水市となった。市域は東西約27km、南北約23kmで面積は329.98km²を測る。令和2年4月時点で世帯数25,356世帯、人口53,018人を数える。

出水市の北東部には矢筈岳を主峰とする肥薩山塊があり、北は熊本県水俣市に、東は伊佐市に接する。南部には北薩一の高峰である紫尾山を中心とする紫尾山地が横たわり薩摩川内市、さつま町と接する。西は阿久根市と接し、北西側には八代海（不知火海）が広がり、長島や天草を望む。紫尾山地の北側では、南九州で広く見られるシラス台地がわずかしこ存在せず、これに代わって標高100m以下には出水扇状地・高尾野扇状地・野田扇状地・米ノ津扇状地が形成され、出水平野の大半を占める。扇状地の周辺には知識面と呼ばれる河岸段丘が細長く形成される。六反ヶ丸遺跡は米ノ津川（広瀬川）の中流域の右岸に位置するが、この付近は米ノ津面と呼ばれる沖積地が発達している。下流域では氾濫原により沖積低地が発達し、県内でも有数の穀物地帯となっている。さらに、河口付近には三角州や海岸平野も見られ、遠浅な海岸部は江戸時代から干拓が行われ、現在の水田地帯となっている。なかでも、荒崎地区は国の特別天然記念物として指定されているツルの越冬地として有名である。また、紫尾山地と扇状地との間には、熊本県水俣市から出水市野田町へと延びる出水断層がある。その長さは約20kmで、ほぼ北東－南西方向に延びる。六反ヶ丸遺跡においても、平成29年度及び令和元年度の調査で噴礫跡が確認されている。

米ノ津川は出水市上大川内朝日嶽に源を発し、その大半は山地である。途中、出水市広瀬で平良川と合流し、下流部は扇状地の出水平野となる。出水平野を八代海へ北流する間、沖田と六月田付近で2度西側へ蛇行する。本遺跡は六月田付近で蛇行する米ノ津川の自然堤防上に形成された遺跡で、周辺の標高は6m前後となる。本遺跡の所在する「六月田」という字について『出水郷土誌』では柳田國男『地名の研究』によると“信仰上の用途に指定された耕地の名”といわれ、“毎年其日に祭を営む社があって其日の費用を弁ずる為に設けられた田の所在である”とすれば、六月田付近に「社」があったことが予想され、その歴史が古くなる可能性を指摘している。また、石田三成の文禄検地によるものと思われる慶長4

（1599）年の『御知行目録』の中には当時の村落名と石高が記されているが、出水関係では36ヶ村の記載があり、うち六月田村は約604石と最も石高が高く、穀倉地帯であったことが分かる。遺跡周辺には沖田溝・下知識溝・六月田溝と呼ばれる灌漑用水路が17～18世紀に整備されている。

現在、遺跡周辺は集落が形成され、遺跡の東側には米ノ津川と並行するように国道447号が走り、大型店舗が立ち並んでいる。

第2節 歴史的環境

出水市の東部、標高約500mの上場高原一帯は、上場遺跡を核に半径4km圏に狸山遺跡、大久保遺跡、郷田遺跡、池ノ段遺跡等の40か所を越す遺跡が集中する。上場遺跡は県内で初めて発掘調査が実施された旧石器時代の遺跡である。調査の結果、爪形文土器と細石刃文化期の相伴やナイフ形石器、台形石器等を包含する7時期の文化層の存在が明らかになった。大久保遺跡では、細石器文化期の逆茂木跡をもつ落とし穴が検出された。

出水平野での遺跡の立地は主に河岸段丘や山麓縁辺・裾部に集中し、縄文時代早期・前期・後期の牟田尻遺跡やカラン迫遺跡、前期の荘貝塚、中期・後期の柿内遺跡や江内貝塚が知られている。縄文時代後期末から晩期前半にかけての遺跡では、数多くの埋設土器が検出され、玉類の製作地であることが明らかになった大坪遺跡が著名である。さらに、本遺跡から約2.5km南には出水式土器の標式遺跡として有名な出水貝塚が位置する。その他、沖田岩戸遺跡、中里遺跡、下柵迫遺跡が知られている。

弥生時代の遺跡としては、中期の覆石墓から後期の葺石土壇、古墳時代の地下式板石積石室へと移行する埋葬形態の変遷を知ることができる堂前遺跡や下高尾野遺跡がある。

古墳時代では洪積台地縁辺に位置し、地下式板石積石室に伴い短甲や金環等の副葬品が出土した溝下古墳群、海岸沿いに位置する箱式石棺が検出された切通古墳が知られている。また、出水市の西方に海を隔てて位置する長島では5世紀から7世紀にかけて積石塚古墳が出現する。

出水の地名が文献資料に明記されているのは『続日本紀』である。奈良時代後期の宝亀9（778）年11月の条に遣唐船が出水海岸に漂着したとされている。その後『和名類聚抄』に「伊豆美」とあり、『薩摩国建久岡田帳』に「和泉郡」として登場する。平安時代には「院」が成

立し山門院となり和泉郡から荘園化し、島津荘の成立と共に吸収される。島津荘は日向国島津院を中心に薩摩・大隅・日向にまたがる大荘園であった。その後、守護被官本田氏一族の所領に組み込まれ、やがて島津用久が薩州家を興すと共に荘園は崩壊する。また、惟宗忠久が文治元（1185）年に島津荘下司職に補任され、初代島津氏になる。忠久は木牟礼城に守護被官本田貞親を入部させ、木牟礼城は五代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となる。なお、木牟礼城跡に隣接する中郡遺跡群の発掘調査では中世前半期の掘立柱建物跡や堅穴建物跡等が検出され、同時期の貿易陶磁器の中には全国的にも出土例の少ない龍首水注が出土している。

藩政期になると島津家の外城制度の下に藩境地としての政治的要所の性格を強め、藩内外から派遣された郷士が居を構える県内でも最大規模の武家屋敷等の集中地である「麓」を形成するに至った。麓を構成する武家集落は現在も受け継がれ、平成7年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、令和元年には「薩摩の武士が生きた町」として日本遺産に認定された。

昭和に入ると、海軍是水田地帯を収容し、昭和15年に出水基地飛行場を建設した。昭和18年に練習航空隊の出水海軍航空隊が設置され、昭和20年には戦況の悪化で特攻隊基地となるも度重なる空襲により基地は壊滅する。

当時の遺構として滑走路跡の一部や司令部壕、掩体壕等が現在も残り、平成25年出水市が掩体壕の調査・実測を行い、これらの活用を計画している。

第3図は、南九州西回り自動車道（出水・芦北道路）建設関係の遺跡位置図である。これに係る発掘調査として本遺跡の近隣に中尾遺跡、前原遺跡がある。中尾遺跡は平成25年度に発掘調査が実施され、縄文時代晩期の土坑1基が検出され、土器片及び黒曜石の剥片が確認された。また、前原遺跡は平成25・26年度に調査が実施され、縄文時代晩期と考えられる集石2基、土坑1基等と縄文時代中期から晩期にかけての遺物が主に出土した。

ー引用参考文献ー

出水市郷土誌編集委員会『出水郷土誌』1968

出水市郷土誌編集委員会『出水の歴史と物語』1984

山川出版社『県史46 鹿児島県の歴史』1999

出水市教育委員会『出水貝塚』2000

鹿児島県立埋蔵文化財センター『大坪遺跡』2005

鹿児島県教育委員会『先史・古代の鹿児島』2006

出水市教育委員会『出水麓遺跡』2010

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群』2014

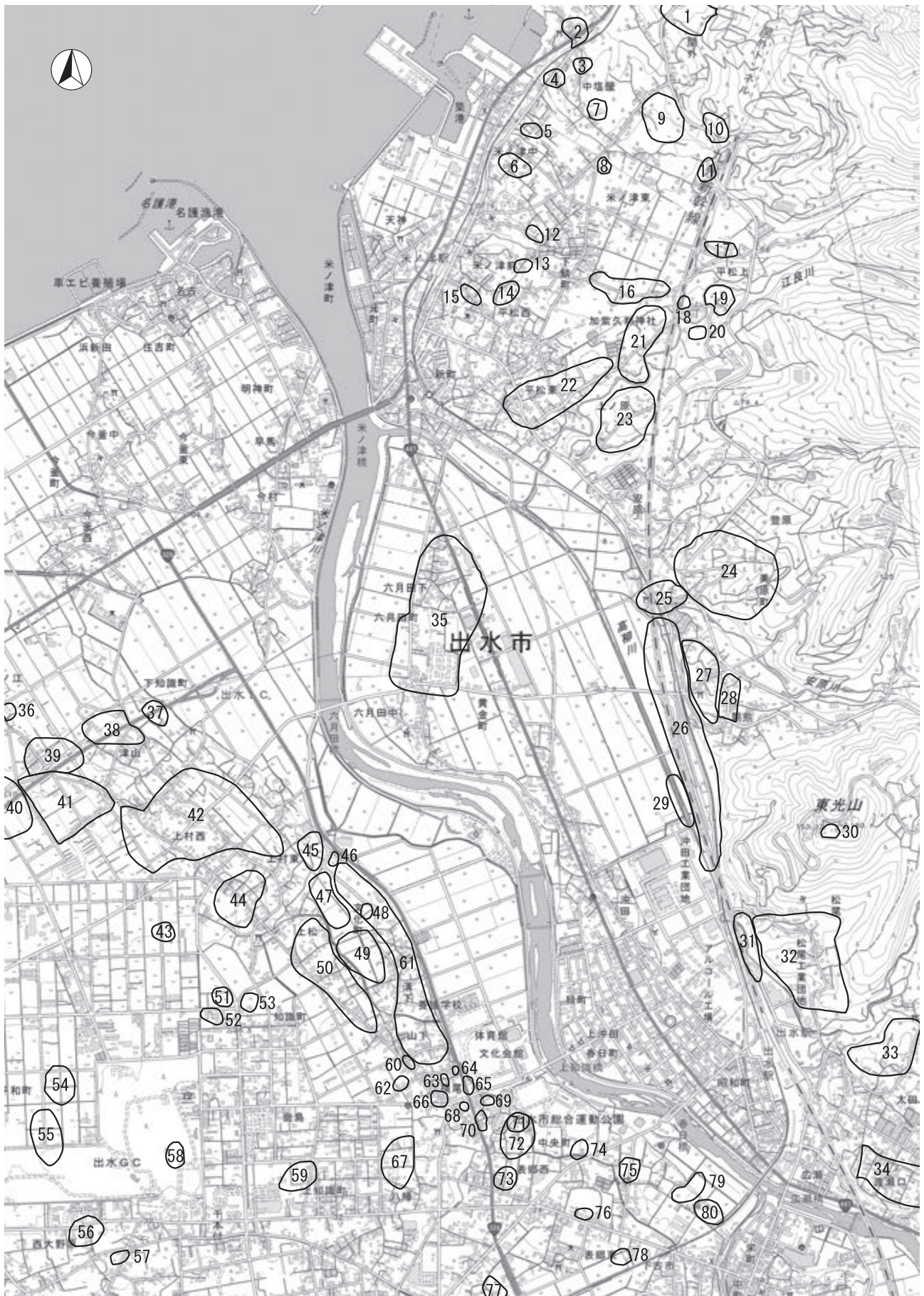
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター『中郡遺跡群Ⅱ・中尾遺跡・前原遺跡』2016

第1表 周辺遺跡一覧表 1

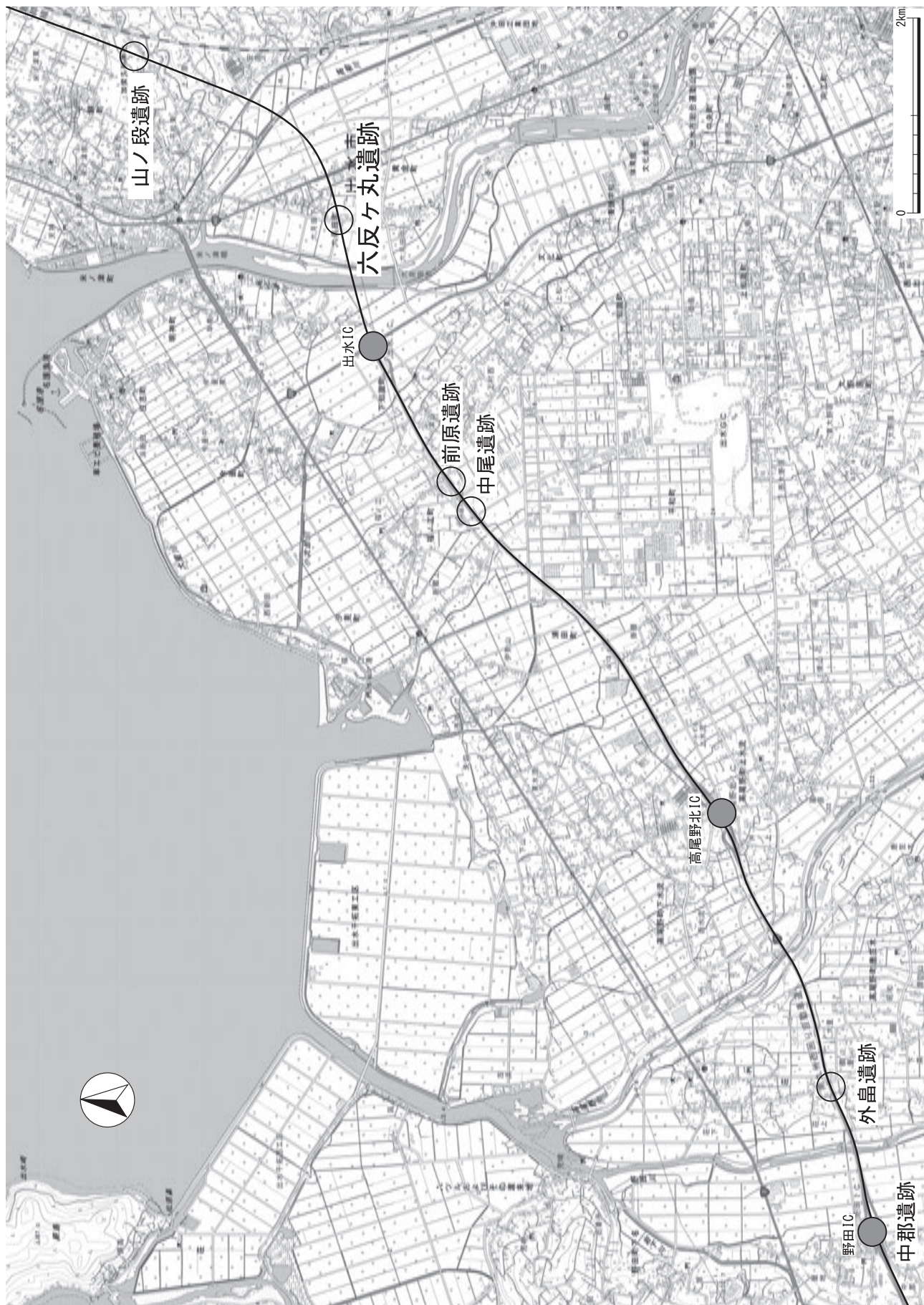
番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
1	208	203	坂元A	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代,近世
2	208	205	中塩屋	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代,古代,中世
3	208	206	供養元	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代
4	208	207	外間	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代,古代
5	208	213	野間	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代
6	208	214	坪ノ後	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津中	散布地	縄文時代
7	208	208	上窪	鹿児島県出水市境町中塩屋	散布地	縄文時代,近世
8	208	117	野間の関跡	鹿児島県出水市下鯖町堀之内	その他	近世,近世 安土桃山
9	208	209	永坂下元段	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代,近世
10	208	210	孫山	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代
11	208	211	永坂	鹿児島県出水市境町関外	散布地	縄文時代
12	208	215	坪ノ前	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	古墳時代
13	208	216	野畑A	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代,近世
14	208	217	野畑B	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代,中世,近世
15	208	218	野畑C	鹿児島県出水市米ノ津町米ノ津東	散布地	縄文時代,中世,近世
16	208	219	加紫久利山	鹿児島県出水市下鯖町平松西	散布地	縄文時代,近世
17	208	212	野間原	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代,近世
18	208	221	狩集	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代
19	208	222	山ノ田A	鹿児島県出水市下鯖町上ノ原・平松上	散布地	縄文時代
20	208	223	山ノ田B	鹿児島県出水市下鯖町上ノ原・平松上	散布地	旧石器時代,縄文時代,近世
21	208	220	山ノ段	鹿児島県出水市下鯖町平松上	散布地	縄文時代,近世
22	208	83	平松	鹿児島県出水市下鯖町平松東	散布地	縄文時代,古墳時代,古代,古代 奈良,古代 平安
23	208	224	美原上ノ原	鹿児島県出水市美原町上ノ原	散布地	縄文時代
24	208	31	安原城跡	鹿児島県出水市美原町上ノ原	城館跡	中世
25	208	39	安原鐘	鹿児島県出水市美原町安原	散布地	縄文時代,弥生時代,古墳時代
26	208	51	大坪	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期),古代(奈良・平安)
27	208	23	朝熊城跡	鹿児島県出水市美原町朝熊	城館跡	中世

第2表 周辺遺跡一覧表2

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種別	主な時代
28	208	84	諏訪後	鹿児島県出水市美原町朝隈	散布地	縄文時代,古代,古代 奈良,古代 平安
29	208	8	沖田岩戸	鹿児島県出水市黄金町・美原町	散布地	縄文(晩期),古代(奈良・平安)
30	208	122	牛ヶ迫東平	鹿児島県出水市上鯖淵山頂	散布地	中世
31	208	47	宮ノ脇	鹿児島県出水市上鯖淵松尾	散布地	弥生時代
32	208	30	松尾城跡	鹿児島県出水市上鯖淵松尾	城館跡	中世
33	208	26	太田城跡	鹿児島県出水市上鯖淵太田	城館跡	中世
34	208	85	井手ノ原	鹿児島県出水市上鯖淵渡瀬口	散布地	縄文時代,古墳時代
35	208	73	六反ヶ丸	鹿児島県出水市六月田町六月田下	散布地	古墳時代, 古代, 古代 奈良, 古代 平安
36	208	89	長松寺	鹿児島県出水市福ノ江町福ノ江	散布地	縄文時代
37	208	90	西宮ノ脇	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	古墳時代
38	208	360	野添	鹿児島県出水市下知識町	散布地	縄文時代,弥生時代,古墳時代,古代
39	208	361	前原	鹿児島県出水市下知識町	散布地	弥生時代,古墳時代,古代
40	208	362	中尾	鹿児島県出水市福ノ江町	散布地	古墳時代,古代,中世
41	208	258	穴水	鹿児島県出水市下知識町津山	散布地	縄文時代
42	208	92	御堂	鹿児島県出水市下知識町上村西	散布地	古墳時代,中世
43	208	252	挾六	鹿児島県出水市平和町上村	散布地	縄文時代,近世
44	208	93	庵木園	鹿児島県出水市知識町上村東	散布地	縄文時代,古墳時代
45	208	28	谷城跡	鹿児島県出水市下知識町上村西	城館跡	中世
46	208	69	川除	鹿児島県出水市文化町上村東	散布地	古墳時代,古代
47	208	257	拝松	鹿児島県出水市下知識町上村	散布地	古墳時代
48	208	11	溝下古墳群	鹿児島県出水市文化町399	地下式板石積石室	古墳時代
49	208	256	下春川	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	古墳時代
50	208	94	上松	鹿児島県出水市文化町上松	散布地	縄文時代
51	208	251	堤原	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	中世
52	208	250	北吉子	鹿児島県出水市平和町鹿島	散布地	縄文時代,古代
53	208	249	堀込	鹿児島県出水市知識町鹿島	散布地	縄文時代,古代
54	208	253	下大野原下	鹿児島県出水市浦田町掛腰	散布地	近世
55	208	115	金松	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場北	散布地	古墳時代
56	208	246	会所	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	古代,近世
57	208	247	会所前	鹿児島県出水市大野原町東大野原	散布地	縄文時代
58	208	124	高見下	鹿児島県出水市平和町ゴルフ場内	散布地	縄文時代
59	208	248	西茶園堀	鹿児島県出水市知識町茶園堀	散布地	古代
60	208	55	正八幡	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	縄文時代,弥生時代,古墳時代,古代
61	208	95	下郡山	鹿児島県出水市文化町溝下	散布地	縄文時代,古墳時代
62	208	56	再願	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安
63	208	57	山下	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安,中世
64	208	58	野中田	鹿児島県出水市文化町山下	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安
65	208	68	尾崎B	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	縄文(後期・晩期),古代(奈良・平安),中世,近世
66	208	59	慶頭原	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安
67	208	102	八幡	鹿児島県出水市上知識町八幡	散布地	古墳時代,中世
68	208	60	新村A	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安
69	208	61	新村B	鹿児島県出水市文化町横尾	散布地	古代,古代 奈良,古代 平安
70	208	67	尾崎A	鹿児島県出水市中央町表郷西	散布地	縄文(後期・晩期),古代(奈良・平安),中世,近世
71	208	1	出水貝塚	鹿児島県出水市中央町尾崎	貝塚	縄文(早期・中期・後期),中世
72	208	27	尾崎城跡	鹿児島県出水市中央町尾崎	城館跡	中世
73	208	123	表郷東	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	中世
74	208	103	一町樋	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	古墳時代
75	208	9	成願寺	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代,古墳時代,近世,近世 安土桃山
76	208	104	天神原	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代
77	208	106	塚込	鹿児島県出水市中央町西町	散布地	古墳時代
78	208	105	並松	鹿児島県出水市中央町表郷東	散布地	古墳時代,古代,古代 奈良,古代 平安
79	208	10	田中	鹿児島県出水市中央町八坊	散布地	弥生時代
80	208	32	内城跡	鹿児島県出水市中央町八坊	城館跡	中世



第2図 六反ヶ丸遺跡 周辺遺跡位置図 (1:25,000)



第3図 南九州西回り自動車道関係遺跡位置図

第Ⅲ章 調査の方法と層序

第1節 確認調査

本章では、確認調査の方法と結果、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業、B地点の層序について簡潔に述べる。

1 確認調査の方法

遺跡の確認調査は、平成29年5月8日～28日（10日間）、本調査が必要とされた総表面積7,000㎡中4,900㎡に対して行った。調査対象区を市道や用水路を挟んで3つのエリアに分け、B～E-12～15区を南北に縦断する市道を境に、西側をA地点、中央をB地点、東側をC地点として調査を実施した。さらに、A地点2ヶ所、B地点3ヶ所、C地点2ヶ所の計7ヶ所にトレンチを設定した。いずれも現況は住宅地跡や耕作地であり、トレンチの大きさは2×5mを基本とし、必要に応じて拡張を行った。トレンチの表面積合計は80㎡である。調査は、トレンチ部分の表土を重機により剥いだ後、人力掘削を基本として遺構・遺物の検出を行った。

2 確認調査の概要

確認調査の結果は以下のとおりである。

A地点（1・2T）

1Tからは、縄文時代晩期、弥生時代から古墳時代の土器片や時期不明の土器片が多数出土した。2Tでは、削平により薄かったが、包含層が安定して堆積し遺物の残存も見られた。下層には流れ込みによる自然堆積の砂礫層が厚く堆積していた。

B地点（3～5T）

3Tでは、宅地造成のため削平・盛土が行われており、古代～近代までの遺物が混在して出土した。4Tは旧水田地であり、遺物の出土はわずかであった。また、中世以降と思われる柱穴も確認した。5Tからは、弥生時代～古墳時代の土器片が多数出土した。

C地点（6・7T）

他のトレンチと異なり住宅地に隣接し、造成土の層が厚く堆積していた。6Tからは、砂礫層から摩耗の激しい遺物が多く出土する事が確認された。7Tは、住宅地のため大きく削平を受け、遺物は確認されなかった。

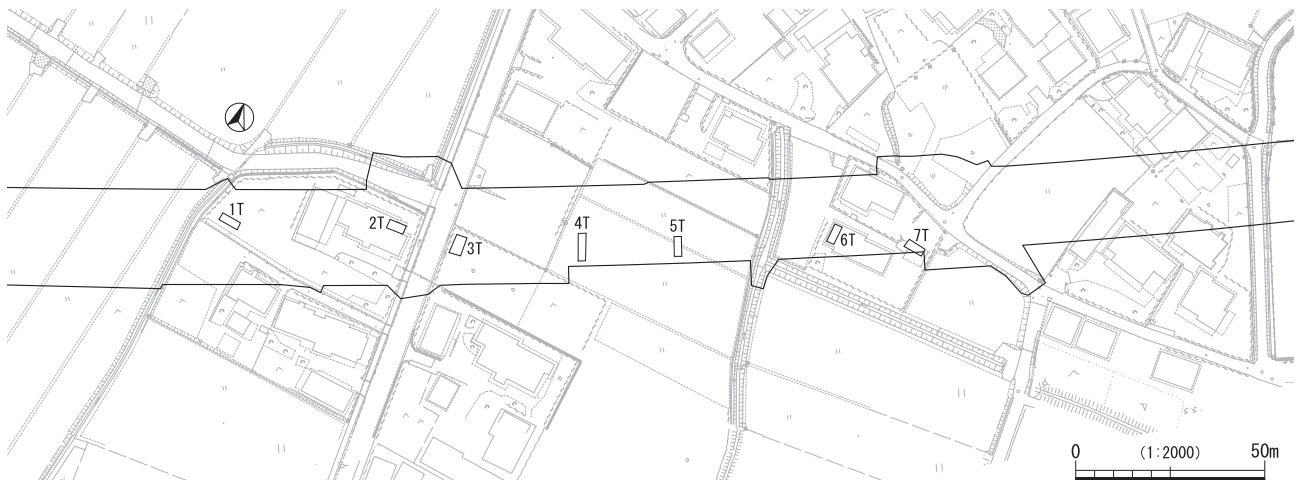
確認調査の結果、今回調査対象とした全体を本調査が必要と判断した。

第2節 本調査

1 発掘調査の方法

調査に先立ち、鹿児島国道事務所が打設した道路建設用センター杭「STA No.345 (-98828.424・-62292.445)」と「STA No.346 (-98835.044・-62311.326)」を結ぶ線を基準に、調査区内に10m間隔の区画（以下グリッドという）を設定し、この延長線を中心に南側から北側に向かってA、B、C・・・列、西側から東側に向かって1、2、3・・・列と設定し呼称することとした。A地点は7～10区を先行し、後に11～13区の調査を行った。

調査は、確認調査の結果に基づき、重機で表土（耕作土・造成土）を遺物包含層上面まで除去した後、遺物包含層については人力で掘り下げ（山鋤、鋤簾、ねじり鎌、手鋤等の発掘道具）を行った。出土した遺物については、必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後、A地点のみ5m間隔のグリッドを再設定し、実測が必要なものを除き、原則として層ごとに一括で取り上げた。さらに、遺物包含層の調査と並行して、下層確認用の先行トレンチを設定し、掘り下げを行った。検出遺構については、移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し、調査の進捗に応じて、検出状況、半截状況、完掘状況等の写真撮影を行い、図化作業等の記録保存を行った。さらに、無遺物層の一部を重機及び人力で除去し、



第4図 六反ヶ丸遺跡 確認トレンチ配置図

基盤層が無遺物の砂礫層であることを確認し調査を終了した。

調査が終了した調査区については、重機及び人力による埋め戻しを行った。

2 遺構の検出方法

遺構の検出については、調査方法として当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、全体として宅地造成や耕作地整備のための削平や造成が大規模に行われており、包含層が良好に残存する場所が部分的なものであったため困難であった。また、沖積地特有の河川の氾濫による土砂の流入が頻繁に繰り返されたため、遺構上位にも遺物がたまるような状況であった。そこで、上位に堆積した遺物を取り上げながら慎重に検出を行い、確実な遺構面を記録した後で、再度ベルト断面の再検討を行い、遺構の全体像を確定させた。沖積地における調査は、大量の遺物や地層の乱れなどを考慮した遺構検出が求められることから、これまで以上に調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしたい。

遺構の認定は、検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえでを行った。竪穴建物跡は、埋土や形状、床面の有無や構造、遺物の出土状況など総合的に判断した。土坑及びピットは、ほぼ円形で径50cm程度のものをピット、それ以上のものを土坑とした。溝は、筋状に細長く掘り込まれたものとした。掘立柱は、埋土ごとに分類したピットの配置等から、範囲を確定した。

第3節 整理・報告書作成作業

六反ヶ丸遺跡B地点の整理・報告書作成作業は、平成30年度・令和元・2年度の3年にわたり、調査センター第一整理作業所で実施した。

1 整理作業の方法と内容（平成30年度）

図面整理は、遺構実測図、遺物出土分布図、土層断面図、地形図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。

注記は、水洗いと並行して未注記のものに対して順次行った。遺物量が多いため、手注記の他にジェットマーカーを使用し効率を高めた。薬品を使用するため換気に注意しながら進めた。その際、包含層遺物の摩耗が激しいものや小片のものは注記対象から外し、小グリッドごとに一括で重量測定のみ実施し記録した。記号については、これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認を取り、遺跡名を表す記号を「ロク」とした。

土器の分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、遺構内遺物を中心に行い、包含層出土土器については、土器の胎土や器種、文様等で分類し接合した。その後、掲載遺物の抽出を行った。石器については、器種ごとに分類した。その後、掲載遺物の抽出を行った。脆弱な資料については、接合前段階で薬剤含浸による強化を行った。

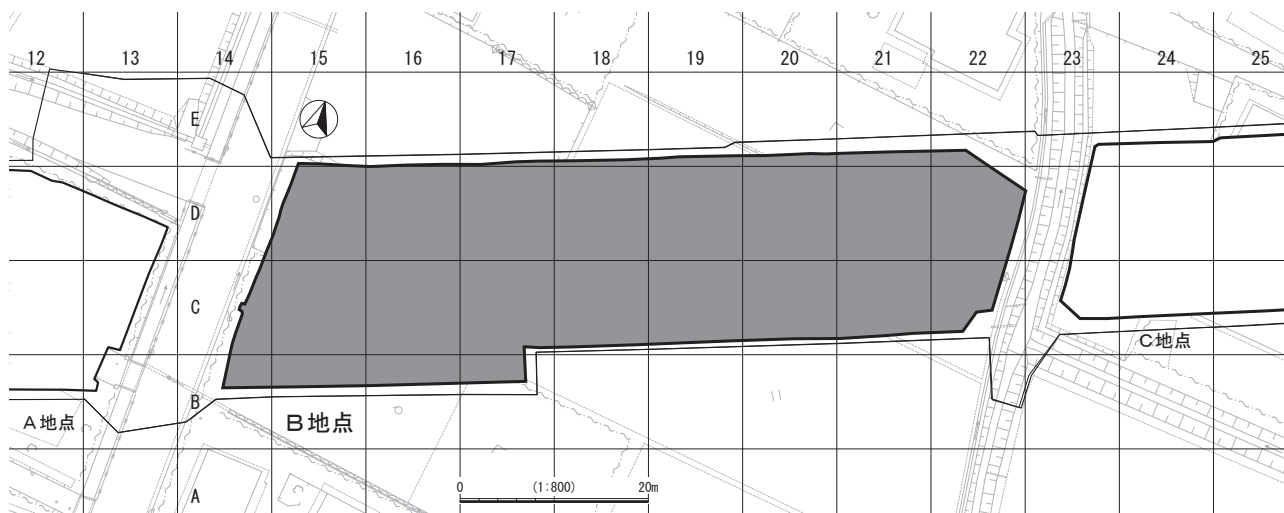
当初は機械計測による一点取り上げを行っていたが、流れ込みと思われる遺物が大量に出土し、遺構または小グリッドごとの一括取り上げに変更していたため、遺物出土状況図は、重量による分布状況とした。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて再検討し確定した。掲載スケール決定後、それにあった下図面を鉛筆トレースで作成し、点検・修正後、ペントレースまたはデジタルトレースを行った。トレースは基本的にペントレースで行ったが、一部の遺構ではデジタルトレースで行った。

遺構配置図、土層断面図、地形図は、鉛筆トレースで下図を作り、点検・修正後、トレースを行った。

写真図版については、現場写真の抽出を行った。

本編の報告書作成作業も同時に行い、一部原稿執筆も開始した。



第5図 六反ヶ丸遺跡B地点 グリッド配置図

2 報告書作成作業の方法と内容（令和元年度）

遺構図については、再度見直しレイアウトを行った。当初予定していた縮尺を変更したものについては、再度トレースを行い掲載した。

掲載遺物については、主に石器のトレースを、前年度に引き続き継続して行った。トレース終了後、掲載遺物すべてのトレース図確認を行い、必要な修正・再トレースを行った。遺構内出土遺物については、再検討を行い遺構ごとに掲載した。また、出土位置が確定できるものについては、遺構図内に明示した。包含層出土の掲載土器については、時代別、器種別、部位別、特徴別の順番で分類した後、レイアウトを行った。土器ごとに残存状況が異なるので、特徴を考慮しながら1個体や接合資料を優先的に配置した。

石器については、遺構に伴うもの以外は時期判定が困難なものが多かった。一括資料がほとんどであり、上流からの流れ込みの可能性も高いことから、器種別に分類した後、剥片石器、礫石器の順にレイアウトを行った。遺構に伴う石器は、再検討を行い選別して掲載した。

鉄製品についても、調査区内から多数出土したが、一括取り上げで時期判断が困難なものが多かった。器種が分かるものについては、実測を行い時期不明遺物として掲載した。

写真図版については、抽出済み現場写真のレイアウト、遺物写真のレイアウト、写真撮影を行った。その際、接合資料については、写真撮影用の復元を部分的に行った。

文章執筆、観察表作成、写真撮影等終了後、印刷・製本を行った。

なお、整理作業の方法や遺物については、鹿児島大学埋蔵文化財調査センター中村直子氏、鹿児島大学法文学部石田智子氏、福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課久住猛雄氏に指導を受けた。

3 報告書作成作業の方法と内容（令和2年度）

遺構図については、図面チェックを行い、検討を重ねた上で、トレースを行った。

掲載遺物については、前年度に引き続き土器・陶磁器・石器の実測・トレースを行った。必要に応じて修正・再トレースを行った。遺構内出土遺物については、埋土と出土位置を精査し、遺構ごとに掲載した。また、出土位置が確定できるものについては、遺構図内に明示した。包含層出土の掲載土器については、時代別、器種別、部位別、特徴別の順番で分類した後、レイアウトを行った。土器ごとに残存状況が異なるので、特徴を考慮しながら1個体や接合資料を優先的に配置した。

石器については、上流からの流れ込みの可能性も高いことから、時期判定が困難なものが多かった。器種別に分類した後、実測・トレース、レイアウトを行い、遺構

に伴う石器は、検討を行い掲載した。

鉄製品については、調査区内から数点出土しているが、石器同様時期判定が困難であった。時期不明遺物として一部掲載した。

写真図版については、現場写真のレイアウト、遺物写真のレイアウト・写真撮影を行った。その際、接合資料については、写真撮影用の復元を部分的に行った。

原稿執筆、観察表作成、写真撮影等の作業を実施後、原稿の校正等の報告書作成作業、印刷・製本を行った。

なお、整理作業の方法や遺物については、中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）や檀佳克氏（八女市教育委員会）に指導を受けた。

第4節 層序

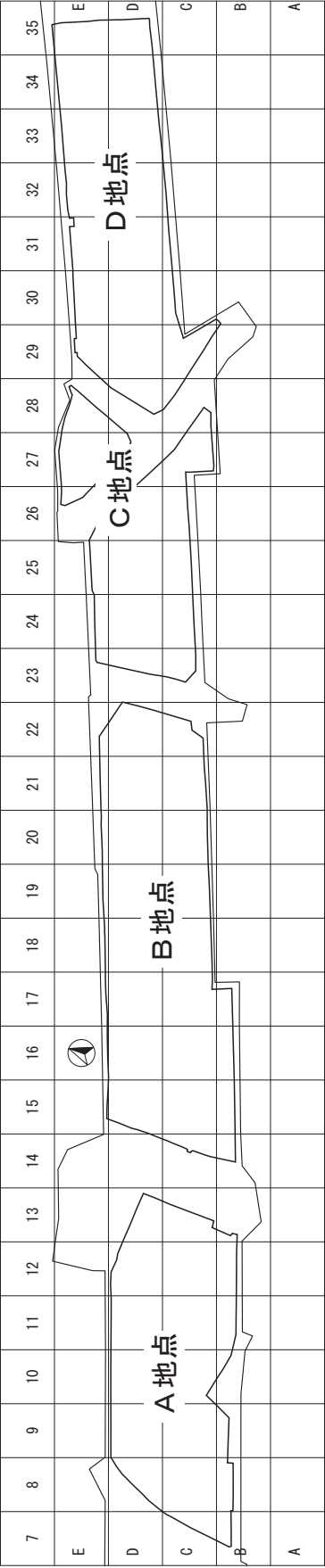
本遺跡は、出水平野が広がる平坦部の中のわずかな微高地であり、現在は耕作地、または住宅地として使用されている。近世・近代及び昭和40年代以降の圃場整備や耕作、宅地造成、攪乱削平を受けた箇所が広範囲に認められたため、地層の堆積・残存状況が良好な調査区北壁を基本とした。なお、本調査着手後、確認調査の結果を補完するため、先行トレンチを設定し、地層の堆積状況と層厚の確認を行った。

その結果、遺跡の西側を流れる米ノ津川に近い調査区において、運搬・堆積作用によるシルト質の堆積層が複数枚観察されたため、確認調査時の基本層序の見直しと細分を行った（第3表）。細分したⅡc層のシルト質の堆積は、調査区を東に向かうにつれて次第に認められなくなり収束する。

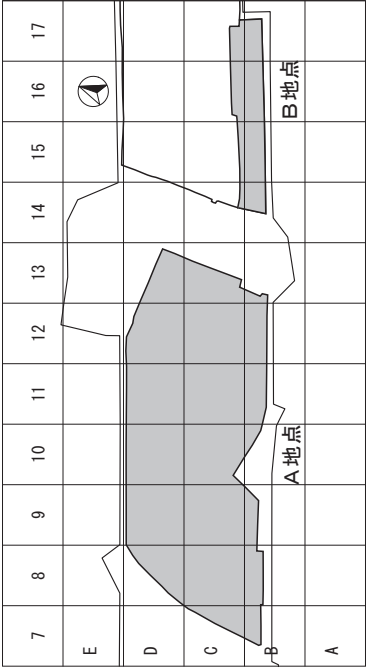
各層の詳細については、以下のとおりである。

第3表 基本層序

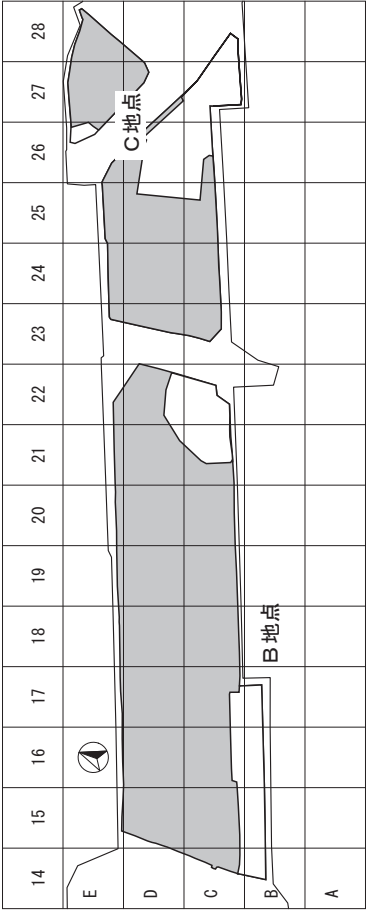
層	色調など	層厚 (cm)
I層	表土 遺跡を覆っていた堆積土で攪乱等を含む	15
Ⅱa層	暗灰褐色土 シルト質 弥生時代中期～現代までの遺物を含む層 酸化鉄・マンガン粒・円礫(2～5cm)を少し含む	15
Ⅱb層	暗黄褐色土 シルト質 弥生時代中期～古墳時代の遺物を含む層 酸化鉄・マンガン粒を多く含む遺物多量に包含する	20
Ⅱc-1層	暗黄褐色土 シルト質 無遺物層 砂質が強い 酸化鉄・マンガン粒を全体的に含む 小円礫(径2～5cm)を少し含む	25
Ⅱc-2層	淡褐色黄土 シルト質 無遺物層 Ⅱc-1層より粘性強い 酸化鉄・マンガン粒が多く混ざる 小円礫(径1～5cm)を少し含む	30
Ⅱc-3層	茶褐色土 シルト質 無遺物層 粘性が強い 酸化鉄・マンガン粒を少し含む	15
Ⅱc-4層	淡褐色土 シルト質 縄文時代後期～晩期の遺物を含む層 粘性が強い 酸化鉄・マンガン粒を少し含む	30
Ⅱc-5層	褐色土 シルト質 粘性が強い 酸化鉄・マンガン粒を多く含む	10
Ⅱd-1層	青灰色土 シルト質 酸化鉄・マンガン粒を多く含む	15
Ⅱd-2層	青灰色土 シルト質 Ⅱd-1層より多量の酸化鉄・マンガン粒含む	5
Ⅲa層	砂礫土 径2～5cmの円礫を含む	10
Ⅲb層	砂礫土 径5cm程度の円礫を多く含む	-



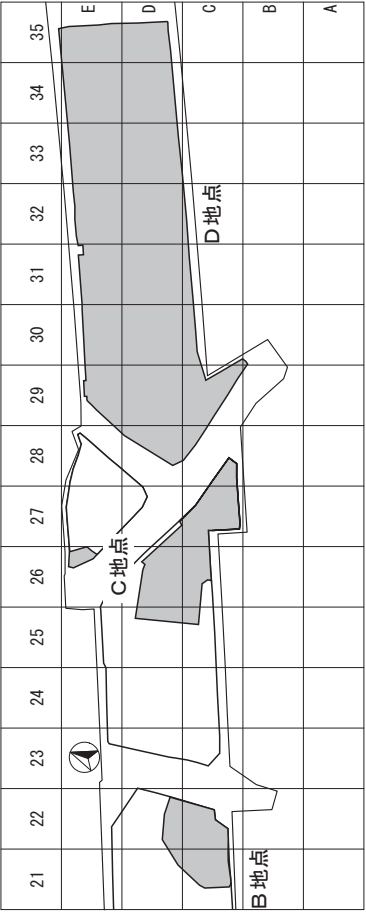
全体図



H. 29 年度



H. 30 年度

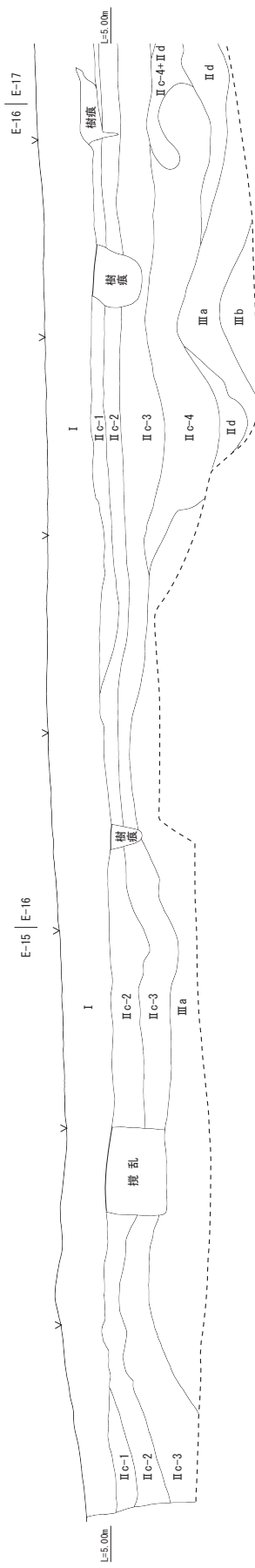


R. 元年度

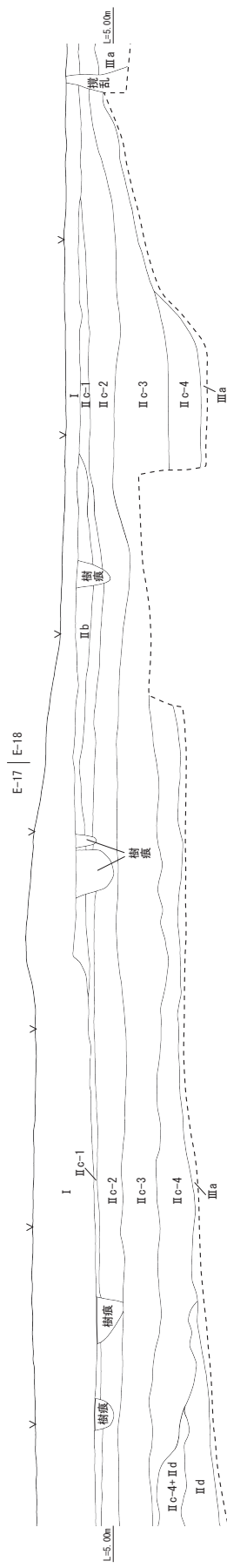


第6図 六反ヶ丸遺跡 全体図及び年度別調査範囲

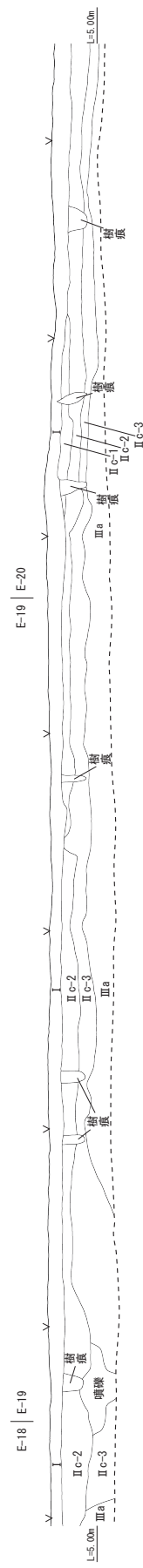
北壁①



北壁②



北壁③



第7図 土層断面図 1

第Ⅳ章 調査の成果

B調査区は、圃場整備等による削平を受けており、表土直下にⅡc層がある箇所が大部分である。

B調査区で検出した遺構は、古墳時代の竪穴建物跡、遺物集中、土坑、近世の掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、時期不明のピットである（第10図）。縄文時代と弥生時代、古代に比定される遺構は検出されなかった。遺構では近世が検出数は多く、遺物は古墳時代ものが主体であった。特にまとまった遺物の出土は竪穴建物跡2号が大半である。

古墳時代の遺構は、20区から東側で確認されている。竪穴建物跡2号は、古墳時代唯一の建物跡である。近世の遺構は、主に15区～19区で確認されている。掘立柱建物跡が17区～19区に集中し、溝状遺構を挟んで土坑が位置している。

遺物はⅡ層が中心であり、Ⅱa層及びⅡb層は古代以降、Ⅱc層は古墳時代の遺物が主体を占める。出土した土器は、ローリングを受け断面が丸みを帯び、器面が摩耗したものが大部分を占め、完形復元できた資料は少なく破片が目立つ。その中でも、古墳時代の遺物が最も多く出土している。特に、竪穴建物跡2号からは、比較的まとまった個体が確認された。

掲載遺物については、遺構、包含層ごとに総出土点数を数え、実測対象遺物を選別し図示した。なお、古代以降の資料は遺構に伴わず、一部は表土または攪乱層中の出土例も含む。各遺物の出土地点及び層位については、第10～18表を参照とされたい。

第1節 縄文時代の調査成果

1 調査の概要

調査範囲では縄文時代の遺物包含層は確認されず、他の層に混ざって遺物が数点出土した。遺物は、縄文時代晩期の土器片と考えられる。出土量は少なく、摩滅したものが多いため、河川の堆積作用により運ばれた可能性がある。なお、縄文時代の遺物は他のA・C・D地点でも出土例が少ない。

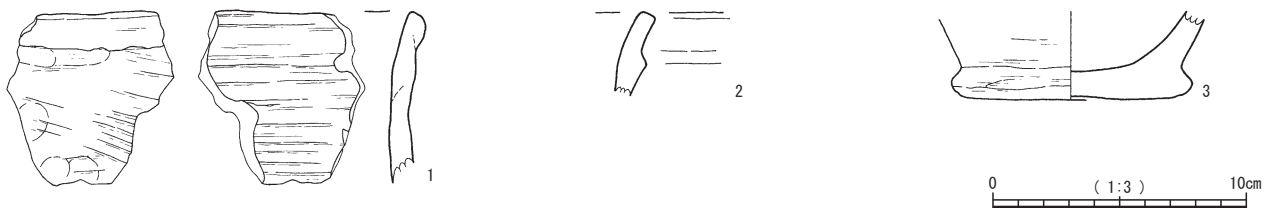
2 遺物（第9図 1～3）

縄文時代の出土遺物はいずれも破片資料であり、前述のとおり晩期土器と想定される。出土位置は第11図に示した。

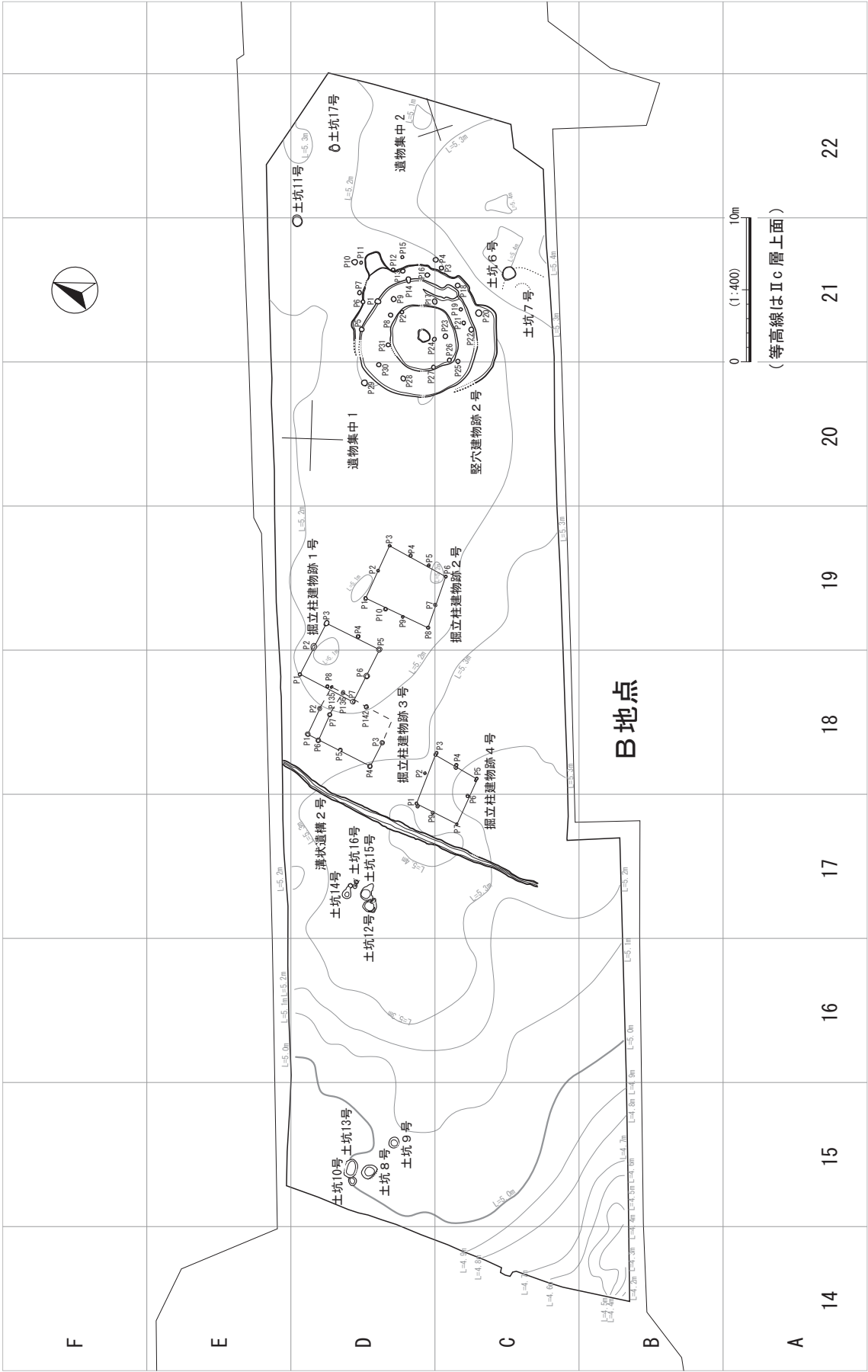
1は、深鉢形土器の口縁部である。折り返し口縁であり、外面に接合痕が明瞭に残る。外面は指頭押圧の後、貝殻条痕調整が施され、外面は斜位、内面は横位の条痕が明瞭に残る。胎土には、5mm大の白色・褐色の円礫をまばらに含む。

2は、口唇部がわずかに残る口縁部片で、外面に段を有する。粗製土器と考えられるが、器形の復元には至らなかった。内外面ともナデ調整で仕上げられており、内面はナデ調整の前に横位のケズリ調整が加えられている。

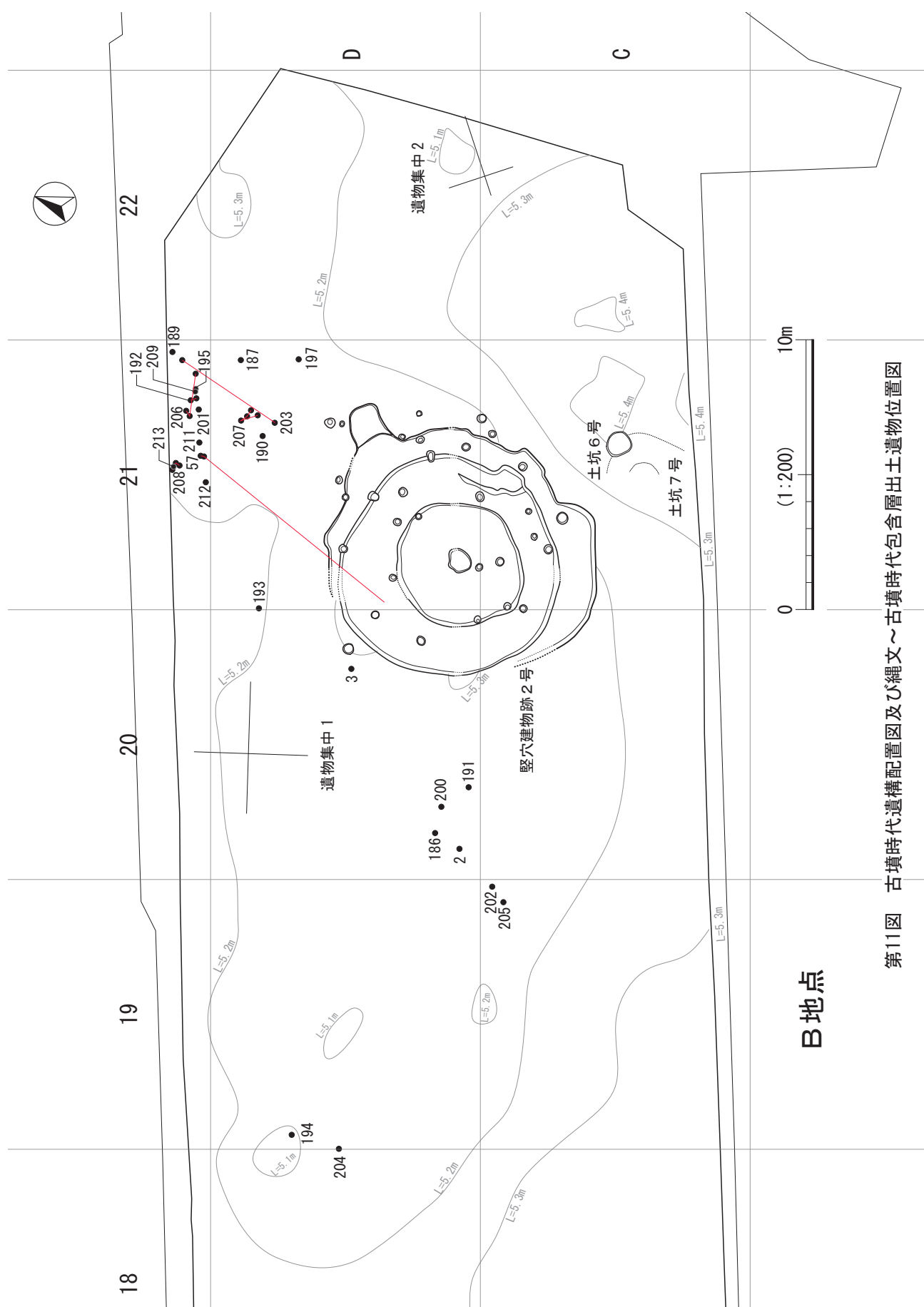
3は、深鉢形土器の底部である。端部は張り出し、丸く仕上げられている。端部から大きく開いて立ち上がる器形と想定される。また、器面は摩滅しており、外面に横位のナデ調整が部分的に確認できる。



第9図 縄文時代 出土遺物



第10図 遺構配置図 (全時代)



第11図 古墳時代遺構配置図及び縄文～古墳時代包含層出土遺物位置図

第2節 古墳時代の調査成果

1 調査の概要（第11図）

古墳時代の遺構は、竪穴建物跡1軒、遺物集中2か所、土坑2基を検出した。出土した遺物は、古墳時代前期に比定される。また、本調査区では竪穴建物跡から出土した遺物が最も多い。遺物集中は2か所確認されたが、掘り込み等は確認できず、遺物に完形品が少ない点からも、河川作用により流れ出た土砂等とともに運ばれてきた遺物が堆積した可能性がある。

遺物の組成は土器が大部分を占め、数点の石器が出土している。また、土器は在地の脚台付甕を伴う在地系の一群と、薄手で丸底甕を伴う布留系の一群とに大別できる。石器は、建物跡内から出土した台石、凹石がある。

古墳時代の土器のうち、主要な器種については、形態的な特徴から以下のとおり分類した。

【甕形土器】

甕A類：口縁部が直口または外反・外傾し、頸部で屈曲して胴部が膨らみ、底部に向かってすぼまる器形のもの。脚台を伴うものと想定される。器面調整はハケ等によるナデ調整を主体とし、厚手のものが目立つが、タタキ成形によるものは薄手の例もみられる。

甕B類：口縁部径と胴部径がほぼ同じであり、頸部の屈曲部からなで肩または球状に胴部が膨らむもの。丸底になるものが主体をなすと考えられる。細かいハケ調整や内面のケズリ調整が施されるものが多く、器壁が薄手のものが目立つ。

甕C類：口縁部が内湾または外傾し、頸部の屈曲部からあまり膨らみを持たずに胴部となるもの。A地点の出土例から、長胴形になると想定される。底部は丸底か脚台付かは不明である。

【壺形土器】

壺A類：口縁部が直口または外傾する器形。口縁部が直口して肩部がやや張るもの（A-1類）と、口縁部が直線的に外傾し、緩やかに肩部に繋がるもの（A-2類）に細分される。

壺B類：口縁部が中位から広く外反し、ラップ形に開く、いわゆる広口壺。

壺C類：頸部及び口縁部下位に屈曲を有する、いわゆる二重口縁壺。屈曲部に刻みや突帯を施さないもの（C-1類）と、刻みや突帯を施すもの（C-2類）に細分される。

【高坏】

高坏A類：坏部の屈曲部から下部が深く椀形を呈し、屈曲部から緩やかに外反しながら口縁部が開くもの。大型で、口径が25cmを超える例もある。タタキ成形によるものが目立つ。

高坏B類：坏部の屈曲部から下部は浅い碗形ないしは皿

形を呈し、口縁部が屈曲部から直線的に立ち上がるか、広く開くもの。中型で、口径が15cm程度のものが主体を占める。ミガキ調整が施される例が多い。

高坏C類：坏部が丸い碗形を呈し、口径が10cm前後の小型のもの。

なお、甕形土器・壺形土器・高坏の出土例で上記の分類に該当しないものや、小型器種やその他の土器とした器種の特徴については、本文中で個別に記載した。

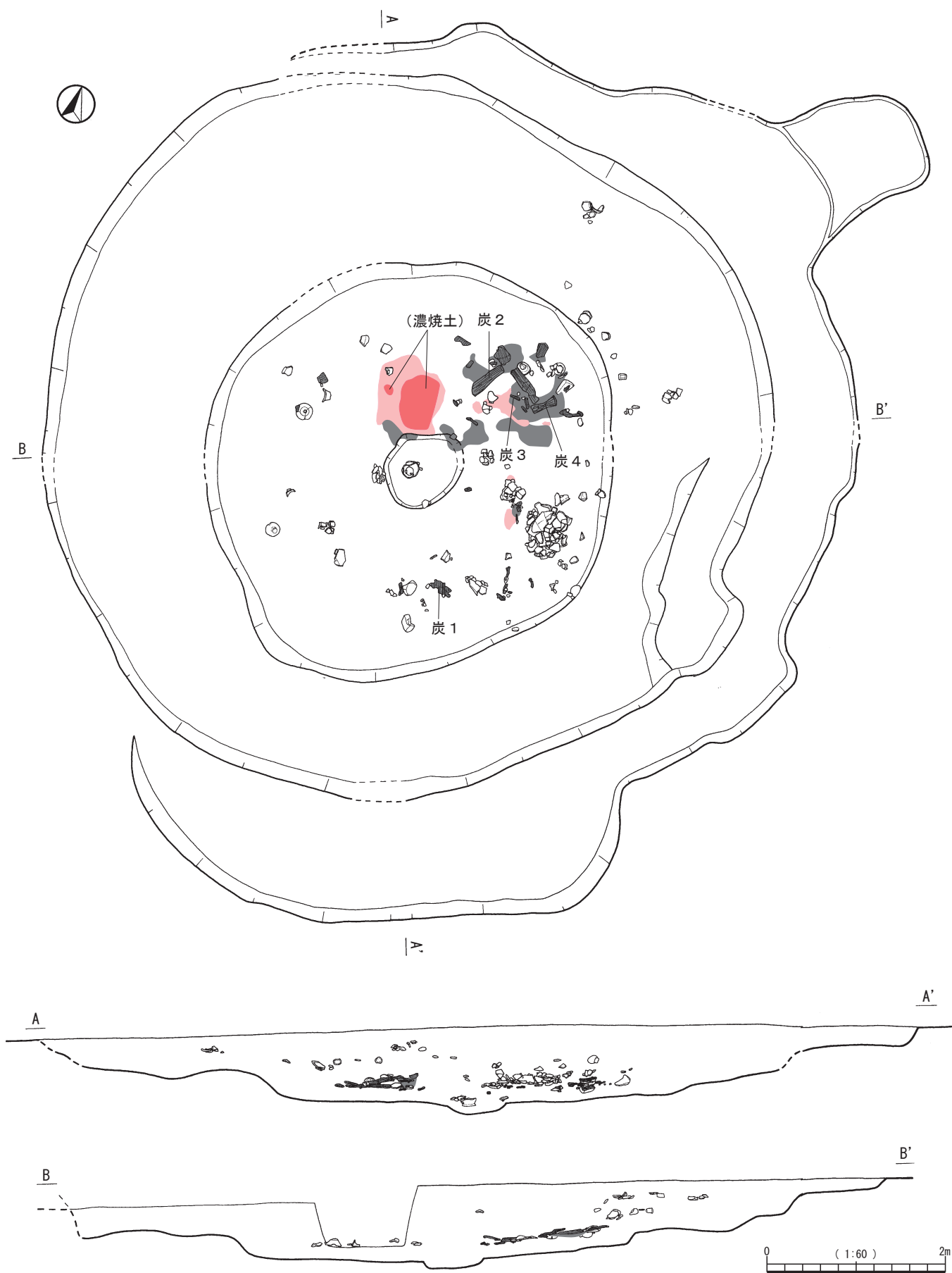
2 遺構

（1）竪穴建物跡2号（第12図～第15図）

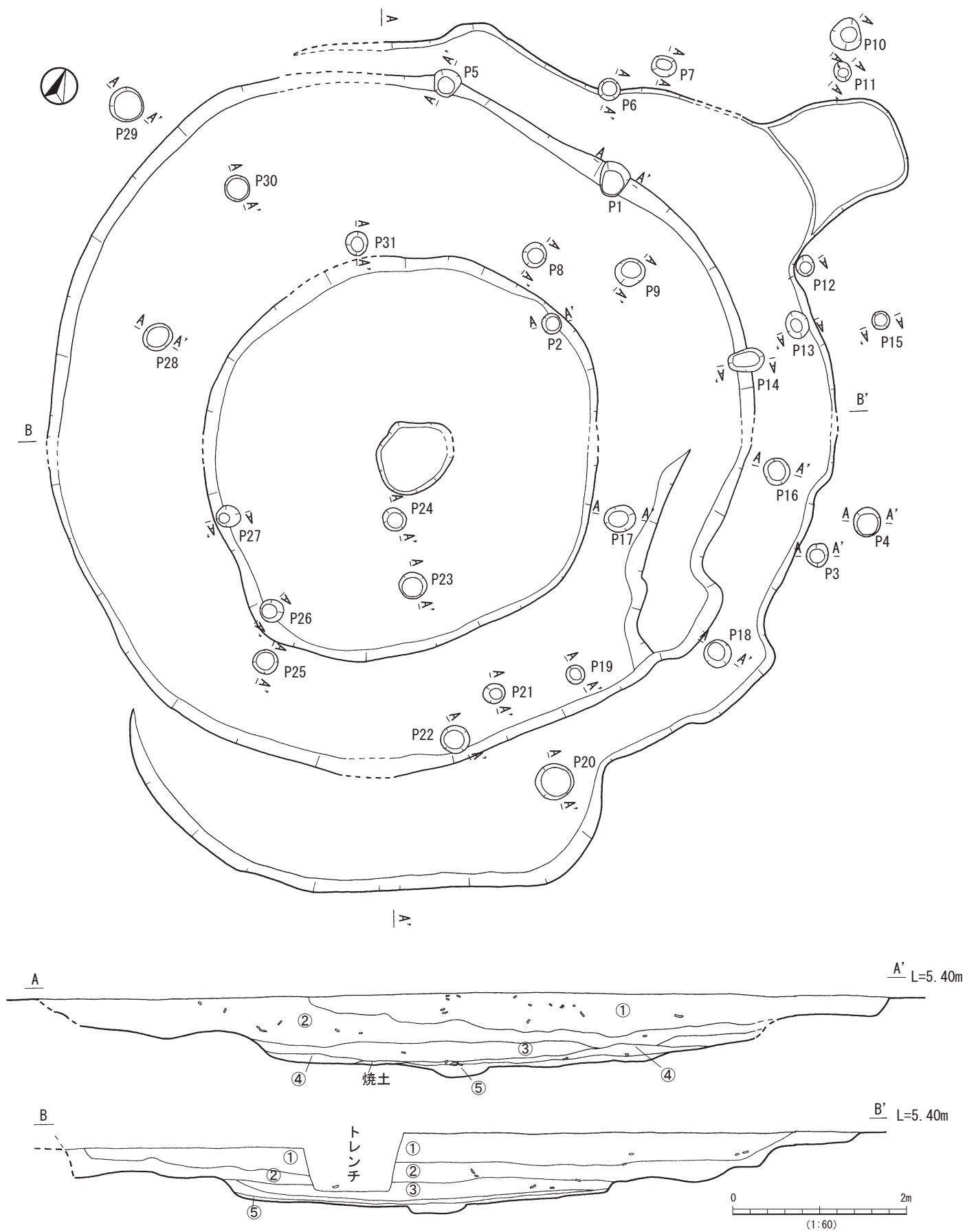
C・D-20・21区のⅡc-2層で検出された。直径約10m程度と大型の建物で、平面形は円形を呈する。検出面から最下部までの深さは約1m余りである。

三段のテラス状構造を持ち、上段から中段、下段へと同心円状に下る構造である。北西側の上段は、確認できなかった。北東方向と南側には、張り出し状の構造がある。生活面に近いと考えられる最下段の東側を中心に、炭化材や土器の大型の破片がまとまって出土した。また、中～上位では、シルト質の堆積物中からも土器片が出土しており、埋没の過程で土砂とともに流れ込んだと思われる。中央付近には焼土と炭化材がまとまっており、中心部には浅いレンズ状の掘り込みがみられた。位置的に炉の可能性も考えられるが、明確な埋土での区分はできなかった。埋土は、計5層に分層できた。埋土5層は貼り床と考えられ、2～8cm程度の厚さである。床面まで礫や砂と土器片が複数枚の埋土で堆積する状況から、一気に埋没した可能性は想定しにくい（第4表）。ピットは、中段を中心に円形構造に沿うように検出された。総数で31基のピットが検出され、住居に伴うものと考えられるが、やや数が多く、同時期での組み合わせについては不明である。ピットの平面形は20～40cmの円形が多く、深さは12～36cm（平均23cm）である。埋土はピット1～4までが2層に分層でき、それ以外のピットは単層であった（第5表）。

床面付近から出土した炭化材は、建物の部材の一部と考えられる。複数方向に重なりを持ち、比較的形状を留めたものもあったが、ホゾ穴等の加工痕は確認できなかった。また、埋没過程でシルト質の土壤に覆われて固着しており、土壤ごと一部を切り取ってサンプリングを行った。炭化材の一部（第12図 炭化材1～4）については、樹種同定及び放射性炭素年代測定を実施した。樹種同定の結果、クリ近似種やコナラ属といった広葉樹材であることが分かった。また、年代は弥生時代後期～古墳時代前期とやや時期幅がある結果となったが、おおよそ遺物の時期とも符合する。詳細は、第V章を参照とされたい。



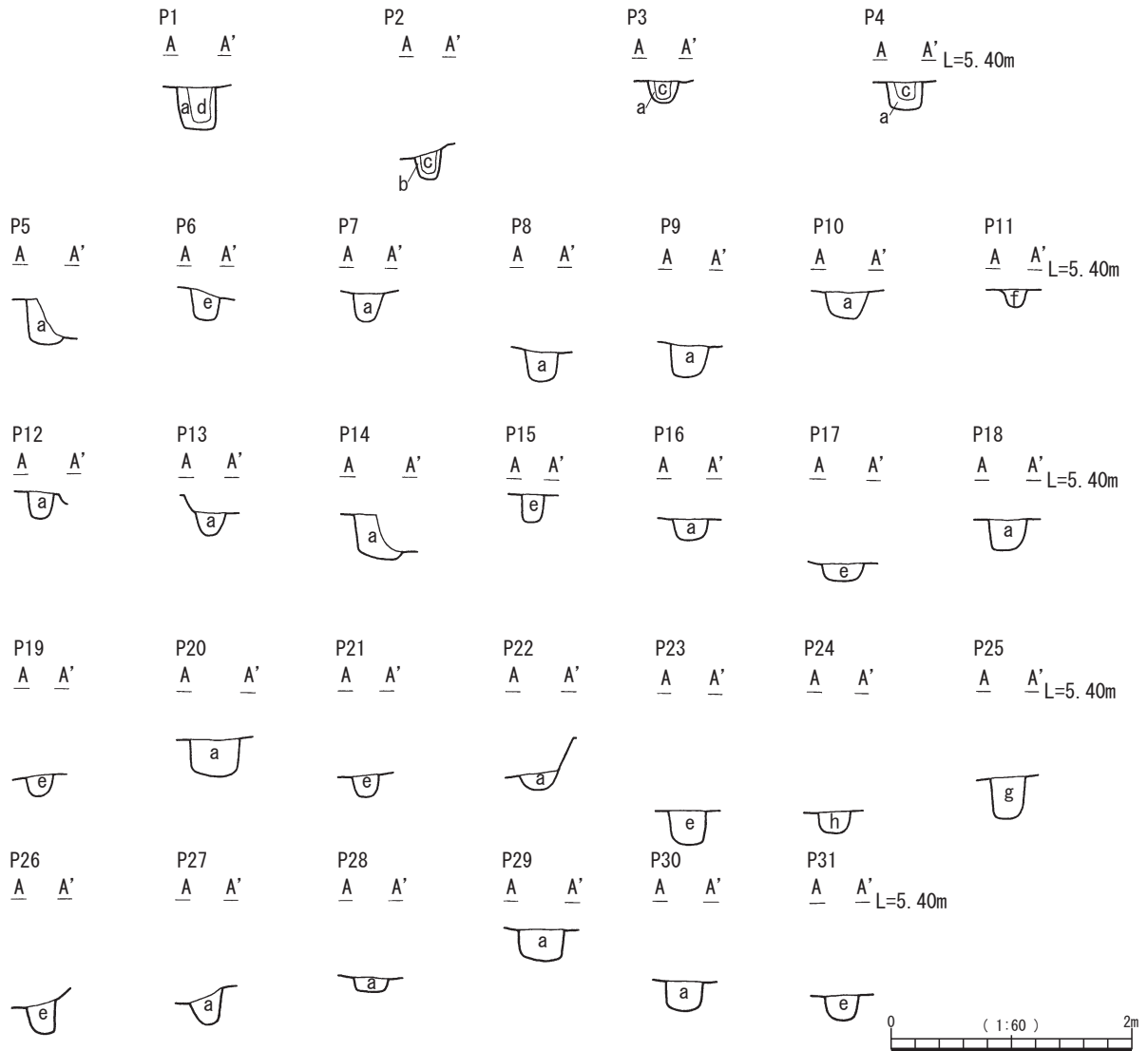
第12図 竪穴建物跡 2号 遺物出土状況



第13図 竪穴建物跡2号 平面図・断面図

第4表 竪穴建物跡2号 埋土

埋土	土質	色調		しまり	特徴
①	シルト質	黒褐色	2.5Y 3 / 1	弱	自然礫混(2~3cm大)炭化物少混 Ⅱc層主体流入土が変色
②	シルト質	暗灰黄褐色	2.5Y 4 / 2	強	小礫 土器片 炭化物少混 ①より含有量少ないマンガン粒混 Ⅱc-2層主体土流入土
③	シルト質	暗褐色	10YR 3 / 3	強	小礫 炭化物 土器片 砂粒混 ②より小石などの混在率少
④	シルト質	黒褐色	10YR 3 / 2	強	砂粒 小石多混 炭化物粒大 大量の土器混 中心部に炭化材残存
⑤	シルト質	灰黄褐色	10YR 5 / 2	強	細粒な土器片 炭化物少混 掘り込み面の直上に敷かれたもの



第14図 竪穴建物跡2号 ピット断面図

第5表 竪穴建物跡2号 ピット埋土

埋土	土色	色相・明度・彩度	土質
a	灰黄褐色	10YR 5 / 2	シルト質
b	灰黄褐色	10YR 5 / 3	シルト質
c	灰褐色	10YR 5 / 2	シルト質
d	灰褐色	10YR 4 / 1	シルト質
e	灰褐色	7.5YR 5 / 2	シルト質
f	灰褐色	7.5YR 5 / 2	砂質
g	褐灰色	10YR 5 / 1	砂質
h	黒褐色	住居埋土と類似	シルト質

埋土	しまり	特 徴
P1	a 強	小石・砂粒混 マンガン粒混 Ⅱ c-2層主体土
	d 強	マンガン粒多混 ①よりやや暗 Ⅱ c-2層主体土
P2	b 強	小石・砂粒混 マンガン粒混 Ⅱ c-3層主体土
	c 強	灰色土小ブロック混 マンガン粒多混 ①よりやや暗Ⅱ c-2層主体土
P3	a 強	小石・砂粒混 マンガン粒混 Ⅱ c-2層主体土
	c 強	灰色土小ブロック混 マンガン粒多混 ①より砂粒が少混
P4	a 強	小石・砂粒混 マンガン粒混 Ⅱ c-3層主体土
	c 強	灰色土小ブロック混 マンガン粒多混 ①より砂粒が少混

出土遺物

竪穴建物跡2号では、埋土2・3層を中心に比較的まとまった個体が確認された。遺構内から出土した土器の総破片数は、12,250点である。中央からは壺形土器が2体重なって出土するなど、完形率は低いものの、ある程度の大きさまで復元できた資料が目立つ。また、他の遺物集中等の遺構と比較して、脚台付甕の比率が低いのが特徴である。床面直上の資料は少ないが、床面近くと埋土上位の遺物にはさほど時期差がなく、埋没過程での時期幅はあまり長くはないと考えられる。実測資料のうち、一括以外の資料の出土位置及び接合関係は第15図に示した。

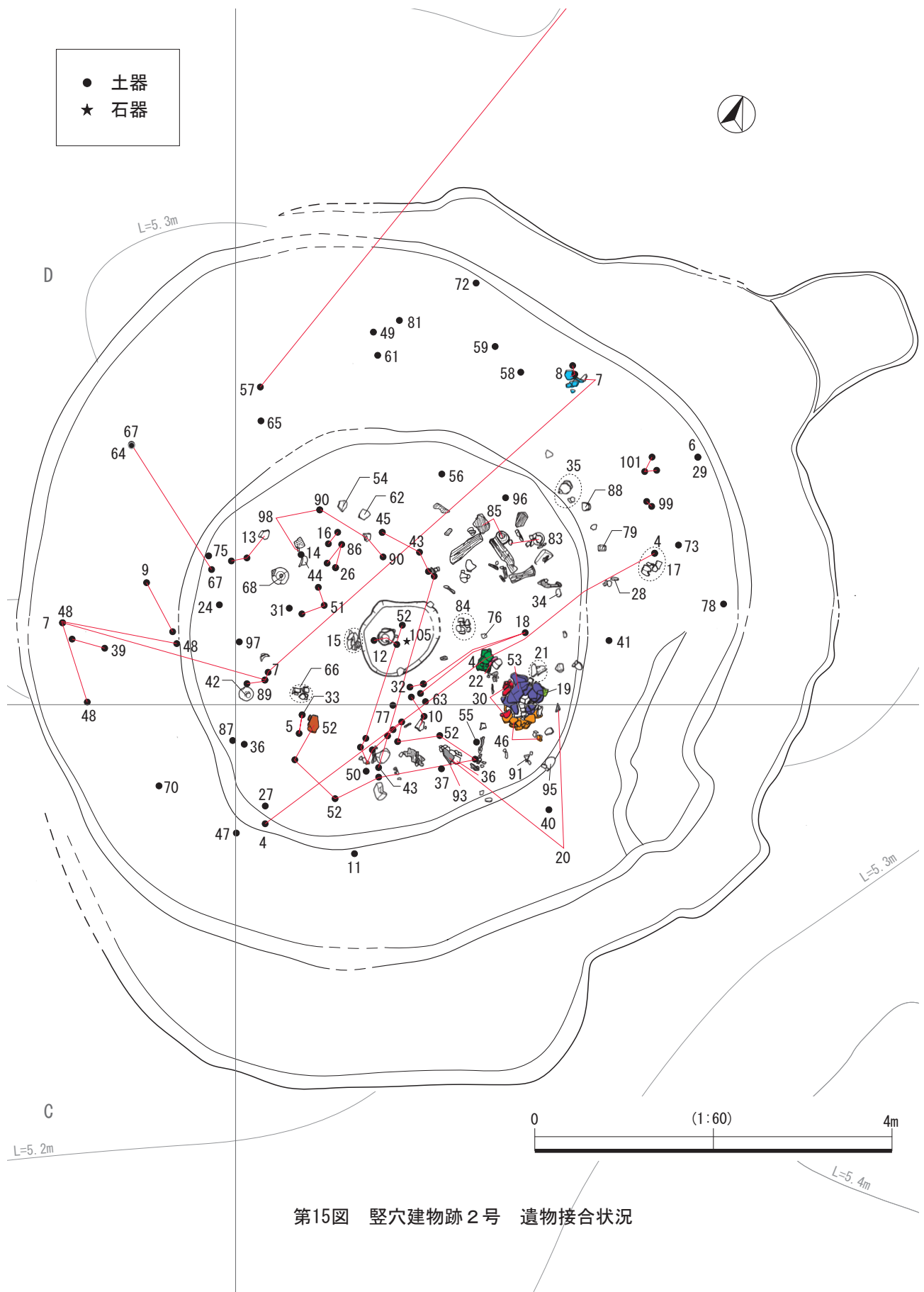
甕形土器（第16～19図 4～42）

甕形土器のうち、4～36は丸底甕（甕B類）である。4～21は、口縁部～底部・胴部付近まで残存する資料である。また、4～17は口唇端部が丸みを帯びるもの、18～21はナデ調整により口唇端部が平坦面状をなすものである。

4は、口縁部～底部までがそろう唯一の資料である。胎土は砂粒が細かく粘質で精製されているが、全体的にゆがみが大きく厚手である。胴部下半が広く剥落し、破断面にもススが付着しているため、剥落後も継続して使用されていたことが分かる。胴部外面には幅広の水平方

埋土	しまり	特 徴
P5	a 弱	砂粒混
P6	e 弱	灰色土小ブロック混
P7	a 強	マンガン粒混
P8	a 弱	砂粒混
P9	a 弱	小石混
P10	a 強	マンガン粒混
P11	f 弱	灰色土小ブロック混
P12	a 強	マンガン粒混
P13	a 強	小石混 マンガン粒混
P14	a 弱	砂粒混
P15	e 強	マンガン粒混 土器片
P16	a 弱	砂粒混
P17	e 強	マンガン粒混 小石礫混
P18	a 弱	砂粒混
P19	e 強	マンガン粒混 炭少混 土器粒少混
P20	a 弱	砂粒混
P21	e 強	マンガン粒混 炭少混
P22	a 弱	砂粒混
P23	e 強	マンガン粒混 小石多混
P24	h 弱	マンガン粒混 炭化物・土器粒混
P25	g 弱	マンガン粒混 小石多混 砂粒混
P26	e 強	マンガン粒混
P27	a 弱	砂粒混
P28	a 弱	砂粒混
P29	a 強	マンガン粒多混
P30	a 弱	砂粒混
P31	e 強	マンガン粒混 小石多混

向のタタキ痕が残っており、その上からハケによるナデ調整が加えられている。ハケ目は、頸部にも及んでいる。内面は、頸部以下は縦位の指ナデ調整の後、ケズリに近い強めのナデ調整が加えられている。5は、やや大型の丸底甕である。口縁部はほぼ直線的に外傾する。口唇端部はつまみ上げたように細く仕上げられており、やや波打つ。頸部直下には水平なハケ目が明瞭に残り、肩部～胴部にかけては細かい右上がりのタタキ痕が残るが、タタキ成形の後にナデ調整をおこなっているため、部分的にタタキ痕が薄くなっている。内面は縦位または斜位のケズリ調整で、頸部周辺は横位のナデ調整である。胎土は砂粒も細かく精緻であり、器壁も薄く仕上げられている。6は底部がわずかに欠損するのみで、比較残りが良い資料である。外面は頸部下に横位のナデ調整がめぐり、胴部は縦位のやや幅の広い単位のミガキ調整である。また、胴部下半に部分的に右上がりのタタキ痕があるため、タタキ成形と考えられる。内面は頸部下が指ナデ調整で、胴部はケズリ調整である。全体的に丁寧な作りであるが、器壁は厚手である。7は胴部最大径が胴部下半に位置し、ややなで肩の長胴となる器形である。胴部の器面は凹凸が目立つ。外面は、肩部を中心に幅広の右上がりのタタキ痕が残る。胴部以下は細かいハケ目が縦位にみられる。内面は、頸部以下は斜位のケズ



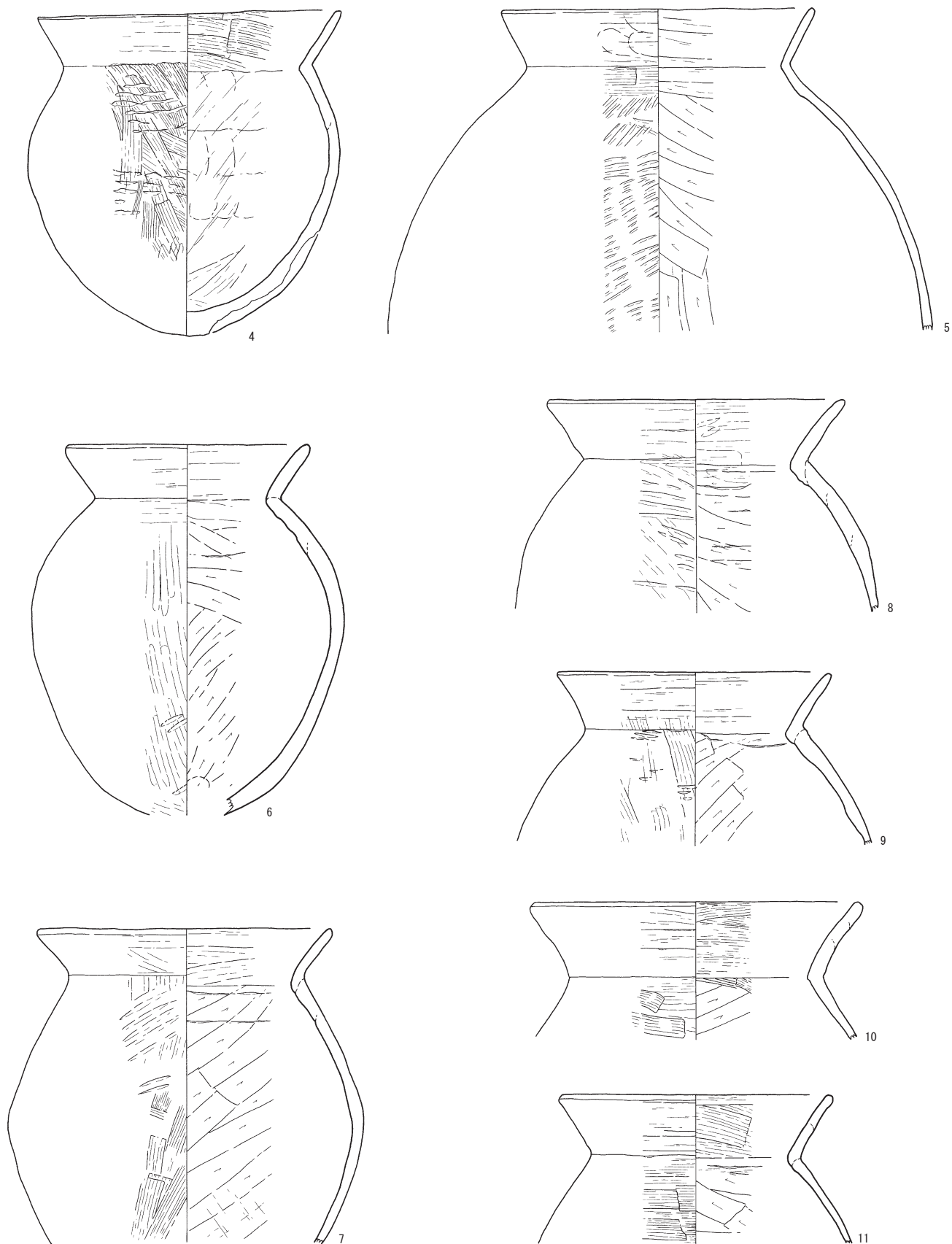
り調整で、頸部直下に接合痕が明瞭に残る。胎土には3～5mm程度の長石がまばらに入り、全体的に粗い。8は、外面にはやや幅広で若干左上がりのタタキ痕が確認でき、その後ナデ調整が加えられている。タタキ痕は部分的に頸部の屈曲付近までみられる。胴部内面はケズリ調整で、部分的に接合痕が残存する。また、内面の頸部屈曲部はナデ調整によりやや平坦面をもつ。タタキ成形及び内面のケズリ調整は明瞭であるが、頸部から肩部にかけての器壁は厚い。胎土には、3～5mm程の長石をまばらに含む。9は、胴部外面に部分的にタタキ痕が確認できる。また、水平方向のタタキ痕の上位からやや幅広のハケ目によるナデ調整が施され、さらに指ナデ調整が加えられている。ハケ目は、部分的に頸部の屈曲上まで及んでいる。頸部の内面は接合痕が明瞭で、胴部は斜位のケズリ調整である。10は、頸部下は内面のケズリ調整により器壁が薄く仕上げられているが、頸部より上位の口縁部付近は比較的厚手である。口縁部は、外面に数条の接合痕が確認できる。また、外面にはハケ目が残るが、頸部直下には横位のナデ調整がめぐっている。11は、比較的薄手で丁寧な作りである。口縁部及び内面の屈曲部下に、接合痕が確認できる。外面胴部及び口縁部内面はハケ目がナデ消されており、胴部屈曲部以下はケズリ調整で器壁も薄く仕上げられている。頸部の内外面には、横位のナデ調整がみられる。12は内面の頸部下に接合痕が確認でき、胴部はケズリ調整の単位が複数切り合い、凹凸が生じている。器面には細かい単位で平坦面が形成されており、タタキ成形と考えられるが、タタキ痕は残存しない。色調が明るく、胎土も精製されている。13は頸部の稜線は明瞭で、肩はほとんど張らずに直線的に胴部へ広がる器形である。内面はケズリ調整であるが、比較的器壁が厚い。頸部及び胴部には、接合痕もみられる。内面は、ナデ調整によりほぼ直線的で平滑な面をなしている。タタキ痕は残存しないが、器面が部分的に平坦面をなしており、タタキ成形と考えられる。14は全体的に薄く仕上げられ、胎土も砂粒が細かく精製されている。色調も明るく、搬入品と考えられる。口唇部内面は、強めの横位のナデ調整が加えられるため、端部が丸く内側に張り出す。屈曲部及び胴部内面には接合痕が確認できる。ハケ目が細かく、精緻なつくりである。15は胎土に砂粒が多く1～3mm程の長石が露出しているが、全体的に薄く丁寧なつくりである。胴部外面には左上がりのタタキ痕、頸部外面には縦位のハケ目が部分的に残存する。内面は頸部以下がケズリ調整で、頸部は内外面とも明瞭な稜をもつ。16は、口縁部外面に接合痕が残る。胴部外面は斜位のハケ目が明瞭に残るが、部分的に左上がりのタタキ痕も確認できる。ケズリ調整は他の資料と比べても弱く、ケズリ調整により器壁を薄くする効果はみられず、厚手である。17は、胴部外面にわずかに右上が

りのタタキ痕が残り、その後ナデ調整が加えられる。また、内面は指ナデ調整や指頭押圧が明瞭に確認できる。

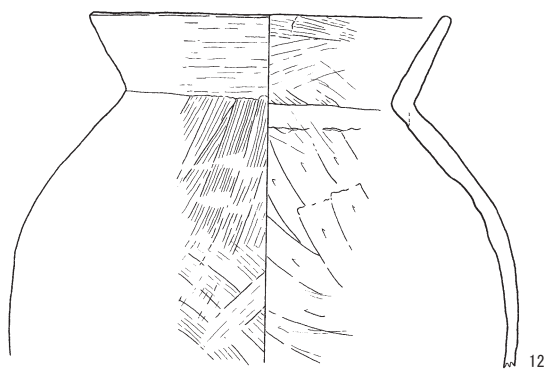
18は口縁部内面は摩滅のため調整が不明瞭であるが、口唇部内面が強いナデによりやや内側に張り出している。全体的に薄く丁寧な作りであり、胎土に多量の赤褐色礫を含む。胴部には、細かいハケ目が明瞭に残る。搬入品と考えられる。19は、肩部～胴部の張りが弱く、直線的に胴部へ広がる。薄く丁寧な作りであり、口唇部は強めのナデにより中央が筋状にくぼむ。外面は、器面が部分的に平坦面をなすため、タタキ成形と考えられる。口縁部と頸部下に、接合痕が確認できる。頸部～胴部外面にかけて、棒状の工具によると思われる縦方向の沈線が2条部分的に確認できる。20は、粒子が細かく砂礫も少ない精製された胎土である。外面には、頸部から胴部上半にかけて幅が広く水平なタタキ痕が明瞭に残存し、その後ハケ目による調整およびナデ調整が加えられている。本遺跡出土の甕形土器の中で最も幅が広いタタキ痕である。口縁部外面はナデ調整を主体とするが、わずかに縦位のハケ目痕が確認できる。胴部内面はケズリ調整で、頸部下に段を有する。21は、全体的に薄く、色調が明るい。口縁部と胴部に接合痕が観察され、内面はケズリ調整により頸部に段ができています。口縁部内面及び頸部の内外面に、赤色顔料が塗布されたような淡い赤褐色を呈する範囲がある。

22～28は、口縁部片である。口縁部付近は、基本的に内外面ともナデ調整が施されている。22～24は、強いナデにより口唇部内面が張り出す。25は頸部が緩く屈曲し、口唇部付近で強いナデ調整が加わりやや外反するものである。内面は、頸部下に接合痕が明瞭にみられ、胴部は、ケズリ調整のちナデ調整である。胎土は比較的砂粒が少ないが、全体的に器壁は厚い。26は、下端に頸部の稜線がわずかに残っている資料である。直線的に外傾し、端部がやや外側に反っている。口唇部は、ナデ調整により平坦に仕上げられている。また、口唇部下と頸部付近にナデ調整が加えられ、その間に帯状に右下がりのタタキ痕が残っている。口縁端部が明瞭な方形を呈する点や、口縁外面にタタキ痕が見られる点はこの丸底甕の口縁部とやや異なるが、頸部から口縁部までの長さが短いことや器壁の薄さから丸底甕の類に入ると判断した。27はやや丸みを帯びて緩やかに内湾し、口唇端部が横位のナデ調整により細く舌状に仕上げられている。内外面とも摩滅しているが、外面には縦位のハケ目が残る。また、頸部の屈曲部は内面側に張り出す。28は、外面の口唇部下には強めのナデ調整がめぐり、緩やかにくぼむ。口唇端部は平坦面をなし、外面側に張り出す。器壁は薄く、稜線も比較的明瞭に作られているが、内外面とも摩滅しており、調整痕はほとんど観察できない。

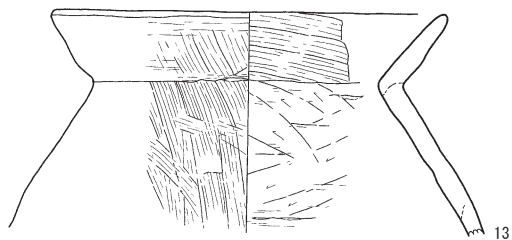
29～36は、頸部～底部付近の資料である。29は、器壁



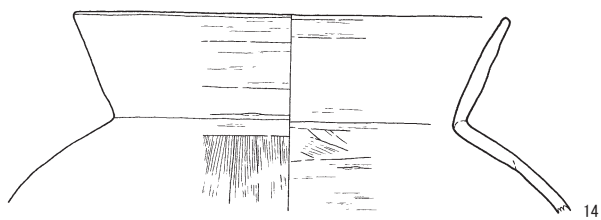
第16図 竪穴建物跡2号 出土遺物1



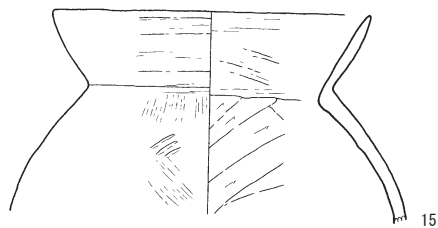
12



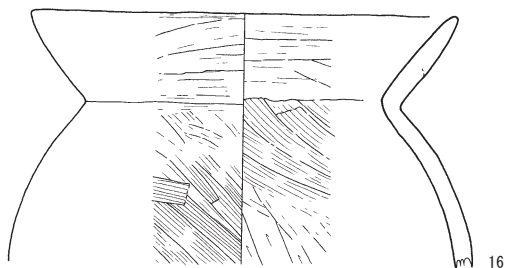
13



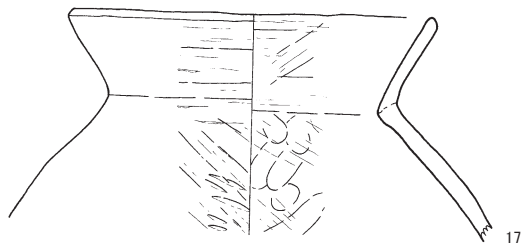
14



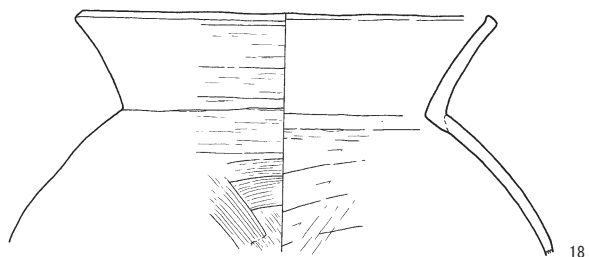
15



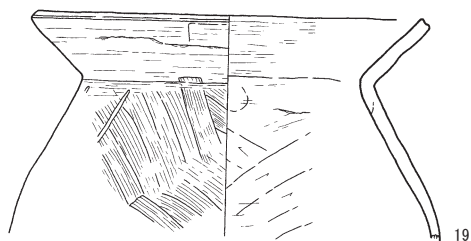
16



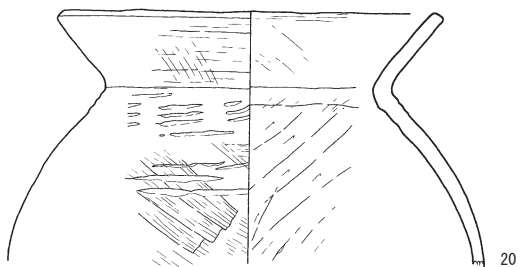
17



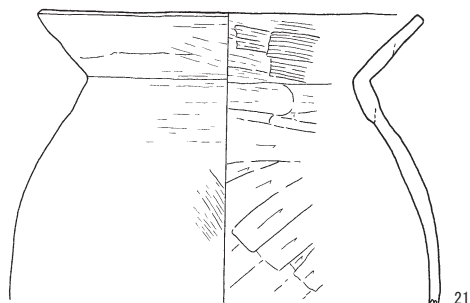
18



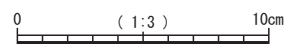
19



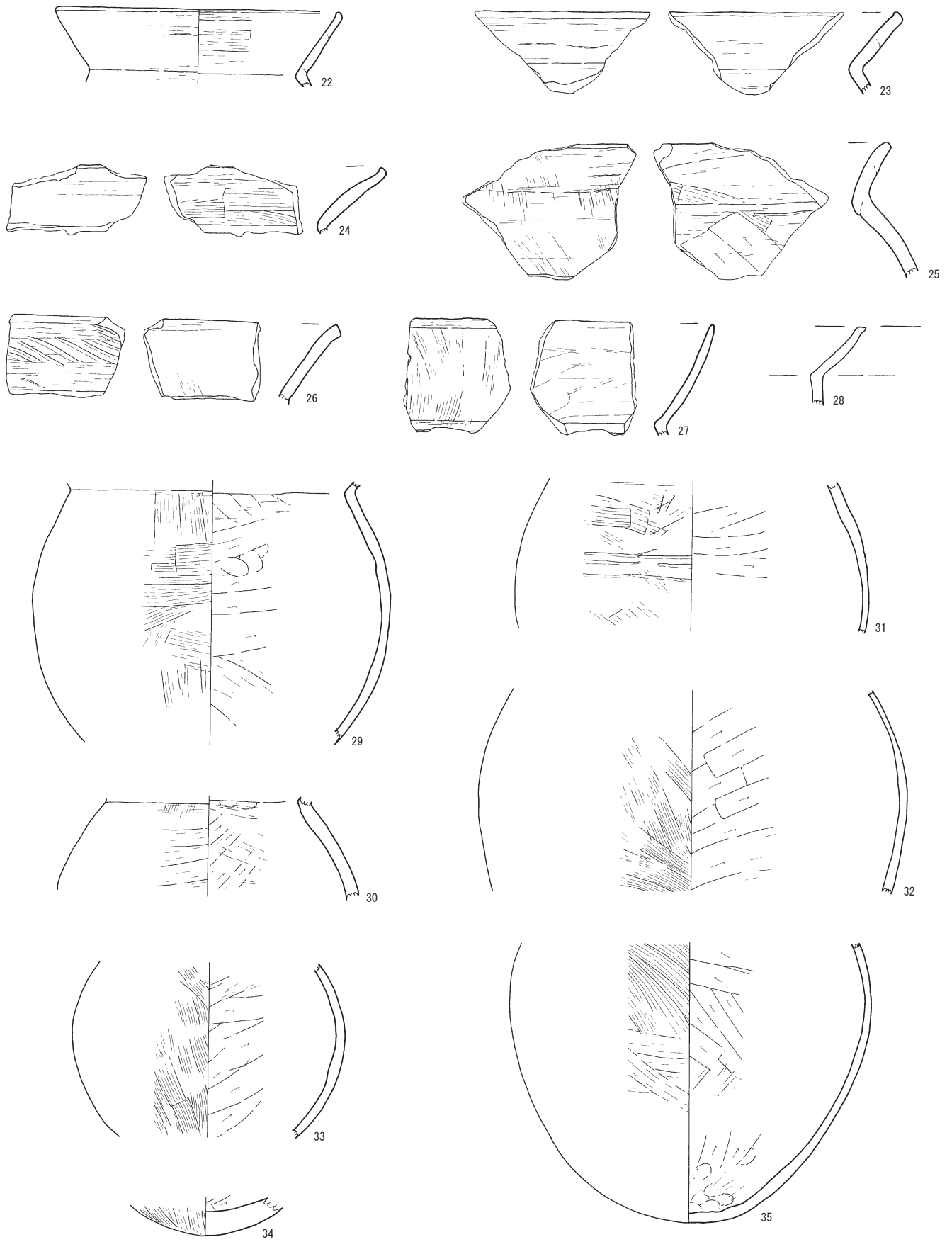
20



21

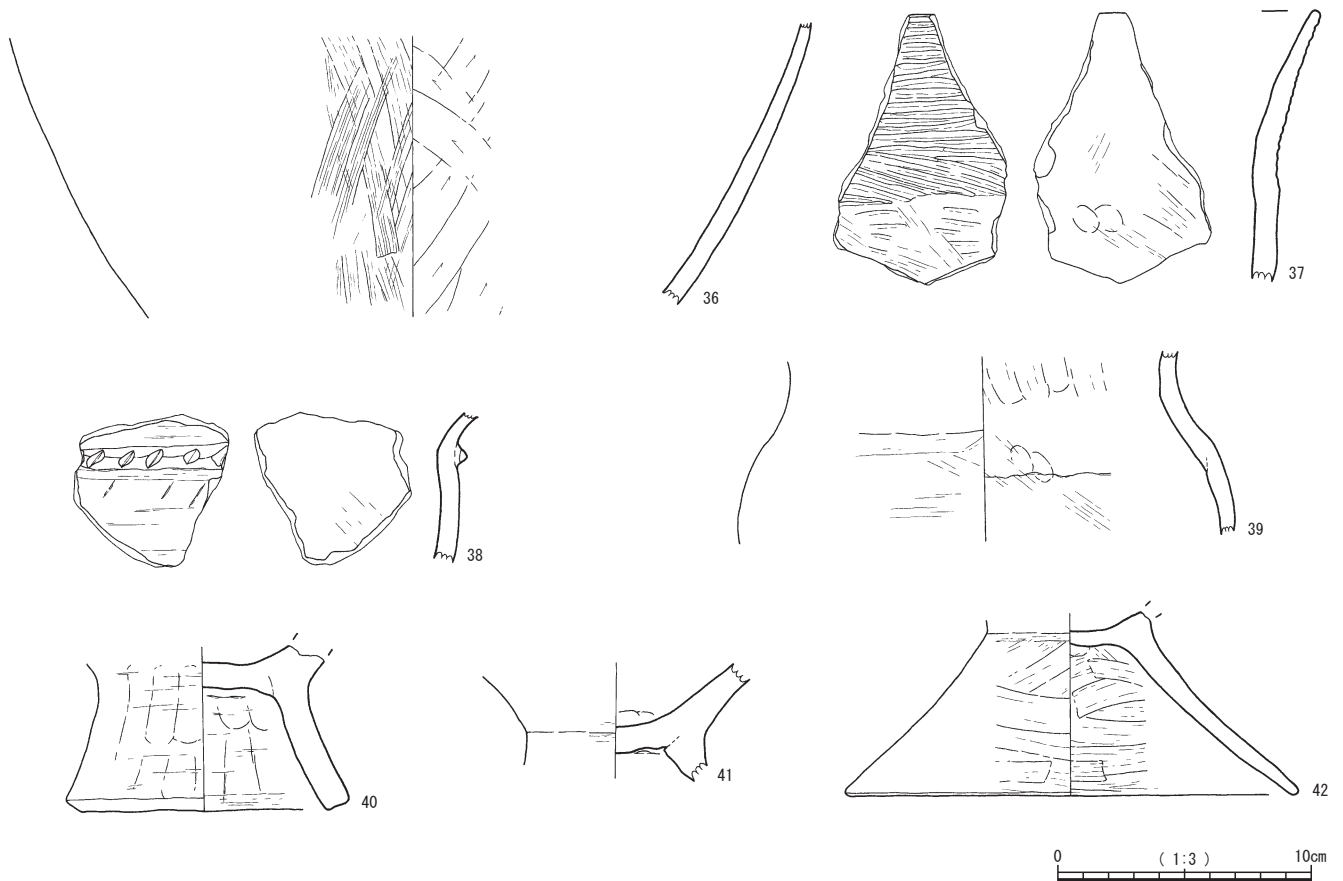


第17図 竪穴建物跡2号 出土遺物2



第18図 竪穴建物跡2号 出土遺物3

0 (1 : 3) 10cm



第19図 竪穴建物跡2号 出土遺物4

が薄く、丁寧な作りである。胎土には3mm大の長石を多く含む。外面は頸部下は縦位、胴部は横位または斜位のハケ目がみられる。内面は頸部の屈曲部付近は指ナデ調整であるが、胴部はケズリ調整である。胴部内面は、指頭押圧により部分的に凹凸を持つ。30は、外面は頸部に縦位のハケ目痕が残り、その後横位のナデ調整が加えられている。内面はケズリ調整であるが、器壁は厚く屈曲部の稜も緩い。頸部付近は指頭押圧がみられ、器面に凹凸がある。31は、胎土が泥質で砂粒も少なく、軟質である。内面はケズリ調整で、胴部は器壁も薄い。外面には太く粗い水平方向のタタキ痕が部分的に残存し、横位に直線的に伸びるため胴部に沈線が入っているように見える。32は、内面にケズリ調整が密に入っており、器壁が非常に薄い。外面は縦位・斜位を基本とするハケ調整で、その後ナデ調整により平滑に仕上げられている。33は比較的小型であり、内面にはケズリ調整が明瞭に確認できる。器壁も薄手である。外面は連続する斜位のハケ調整の後ナデ調整が加えられている。34は内面はケズリ調整で、外面はハケによるナデ調整である。35は、底部が残る資料である。外面には斜位のハケ目が明瞭にみられ、

下半はナデ調整である。胴部下半は、被熱により部分的に表面がただれたように剥落している。内面は胴部がケズリ調整で、底面付近のみ指頭押圧が明瞭に残っている。器壁は薄く、他の土器と比較しても軽量である。36は、大型の甕形土器の胴部と考えられる。壺形土器の可能性も検討したが、調整から甕形土器と判断した。外面には細かいハケ目が明瞭に目立ち、内面はケズリ調整である。胎土には長石を多く含み器面にも露出するが、全体的に胎土は精製されて泥質で、器壁も薄い。

37は口縁部～胴部片である。丸底甕ではなく、脚台付甕の口縁部と想定される。外面は口縁部に明瞭な水平方向のタタキ痕がみられ、胴部にかけてはタタキ後にナデ調整が施されている。緩やかに外傾し、口唇部はわずかに平坦面をもつ。外面に比べ、内面は指頭押圧により凹凸が顕著である。38は、頸部の突帯である。断面が緩やかな三角形に粘土が貼り付けられ、刻みが施されている。右側に傾いた刻みであり、胴部に工具が当たって筋状の痕跡が残っている。39は、頸部～胴部片である。頸部の屈曲は緩やかで、内面には接合痕が残る。口縁部はゆるやかに外反し、肩部～胴部にかけて最大径をもつ小

型の甕形土器と想定される。胎土は比較的精製されており、砂粒も細かい。

40・41は、脚台付甕の脚部である。40は、胎土も砂粒が少なく精製されており、焼成も良好である。内外面とも縦位の指ナデ調整によって整形され、その後横位のナデ調整で仕上げられている。端部はナデ調整により平坦面が作出され、断面隅丸方形を呈する。内底面には、部分的に接合痕が確認できる。41は、全体的に摩滅しており、内底面にわずかに指頭凹圧が確認できるのみである。また、内底面には接合痕が明瞭に残る。

42は、器高に対し底径が広く末広がりになる甕の脚部、または台付鉢の台部と考えられる。上部は接合部分で剥落している。胎土は精製され、粒子が細かく砂粒が少ない。また、全体的にゆがみが少なく、器壁の厚みも一定である。外面は丁寧なナデ調整で表面が平滑に仕上げられ、摩滅により部分的に薄膜状に剥落している。

壺形土器（第20～22図 43～65）

壺形土器は完形率は低い、二重口縁壺が一定量出土している。また、胴部最大径が30cmを超える大型のものが目立つ。

43は壺A-2類に該当し、肩部の張りが弱くなで肩で、長胴形を呈すると想定される。口唇部は舌状で端部は丸く、頸部から直線的に外傾する。外面の頸部には縦位のハケ目が確認でき、接合痕が残る。また、胴部には左上がりのタタキ痕が部分的に確認でき、その上からハケ及び指ナデ調整が加えられている。内面は頸部に縦位の指ナデ痕が残るが、胴部以下はケズリである。器壁は薄く、胎土も精製されている。

44・45は広口壺（壺B類）の口縁部である。44は緩やかにラッパ状に開く器形で、口径から想定して大型の壺と考えられる。胎土は軟質で色調も赤みが強い。45は口唇部に向かって大きく外反し、端部がほぼ水平になる角度で開く。外面の頸部付近は縦位のハケ調整で、中位より上は横位のナデ調整である。口唇端部は強めのナデにより筋状に凹んでいる。

46～49は二重口縁壺（壺C類）である。49以外は、口縁部の屈曲部外面に刻みを施す壺C-2類である。46は大型の二重口縁壺で、胴部下半まで残存していた。口縁の屈曲部外面にはヘラ状工具による浅い刻みが施される。頸部から肩部にかけては、内面側は縦位の指ナデ調整が明瞭であり、部分的に指頭押圧状に表面に凹凸が生じている。外面は、基本的にナデ調整を主体とするが、部分的にタタキ痕が残存し、下部は斜位のケズリ調整である。胴部の最大径となる部分には2条の沈線が巡っており、突帯を意識したものと考えられる。摩滅はしているものの、他の資料と比べて焼成は良好である。47及び48は屈曲部の稜が緩く、袋状口縁に近い器形を呈する。47は赤みが強い色調で、胎土には長石及び白色礫を多量

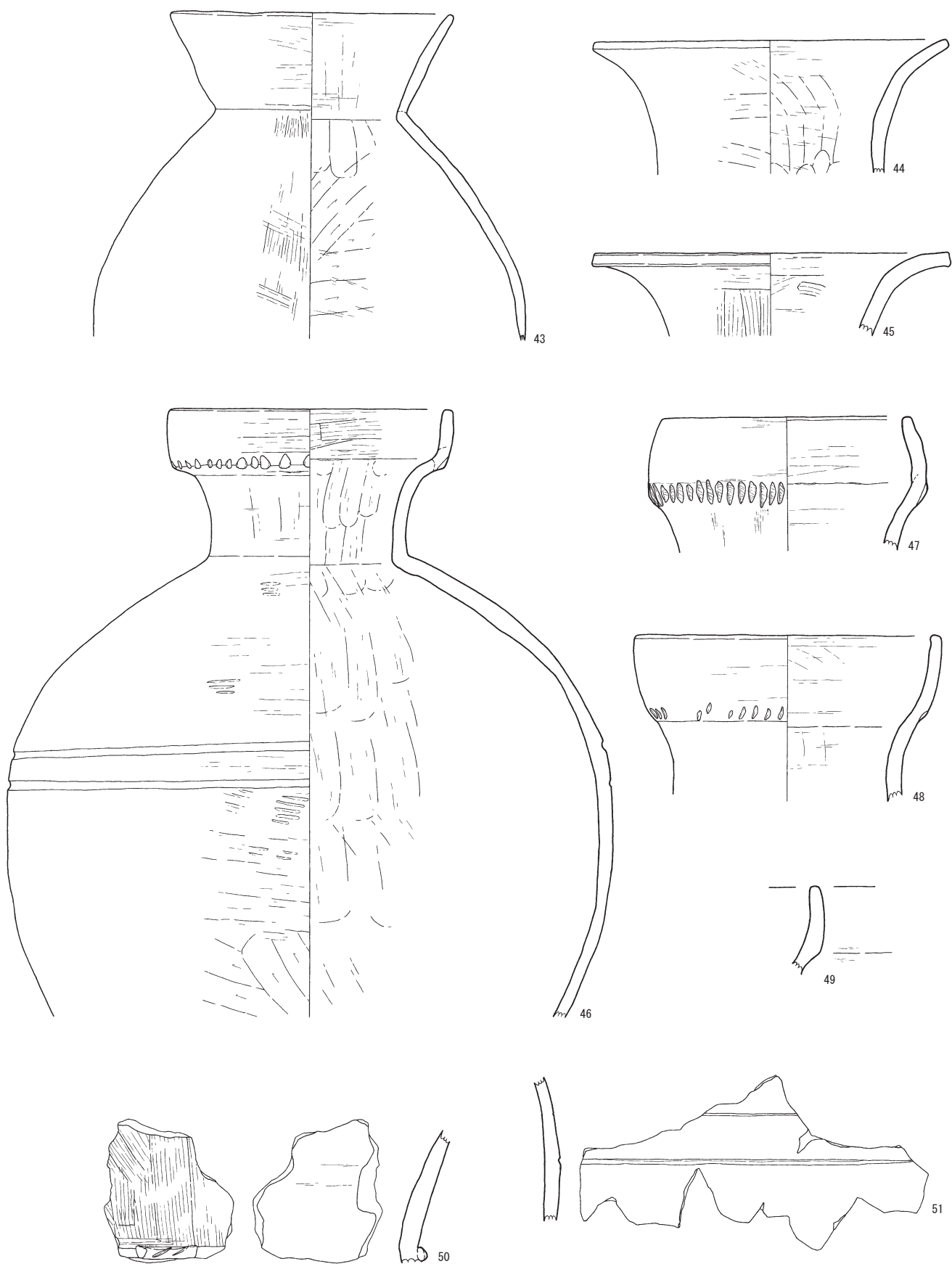
に含む。口唇部はナデ調整で仕上げられているが緩やかに丸みを帯びている。外面は屈曲部に刻み調整が連続して施されており、刻みにはハケ目が明瞭に残っている。器面は摩滅により荒れているが、部分的に縦位のハケ目調整が残存している。48は内外面とも摩滅が激しく、外面の刺突文も残りが良くない。屈曲部の稜は緩く、その稜上に刻目が不整列に刻まれている。49は、口唇部はナデ調整により、平坦に仕上げられている。稜部の刻みはみられない。

50は、口縁部～頸部であり、口唇部付近は欠損している。遺物集中2の類例から二重口縁壺の頸部である可能性が高い。頸部に粘土紐が1条貼り付けられ、上位から斜位の刻み調整が加えられている。外面には明瞭なハケによるナデ調整がみられ、その後さらにナデ調整が加えられる。ハケ目は縦位を主体とし、斜位など複数方向からの切り合いもみられる。51は、46と同様に大型壺の胴部片と考えられる。内面は摩滅している。46と同様に、壺形土器の中では比較的器壁が薄い。

52・53は、胴部に突帯等を持たないタイプの大型の壺形土器である。52は胴部が球状となる。胎土は精製されており、成形・調整ともに丁寧である。頸部にわずかに立ち上がり部分が残存しており、ほぼ直角に立ち上がると想定される。外面はハケによる器面調整の後、丁寧なナデ調整を加えており、筋状に細かいハケ目が残っている。頸部付近は、横位のミガキ調整が主体である。内面はケズリ調整で、薄く仕上げられている。53は、最大径が胴部の中心よりやや高い位置にある。胎土に砂粒は目立つが、器壁は全体的に薄く、器形もゆがみが少ない。頸部は同じ高さで欠損しており、接合面で欠落、あるいは打ち欠いた可能性が考えられる。器面が部分的に面をなすため、タタキ調整と考えられる。内底面には指頭押圧が明瞭にみられ、わずかに平坦面をもつ。54・55は、山陰系の壺形土器と考えられる。54は大型であり、胎土が軟質で精製されており、色調も明るい。内外面とも最終調整はナデであるが、外面には部分的に縦位のハケ目調整が確認できる。55も胎土は精製されており細かく、部分的にマール状になる。頸部外面には部分的にミガキ調整が残っている。

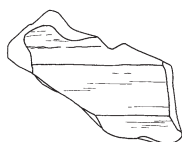
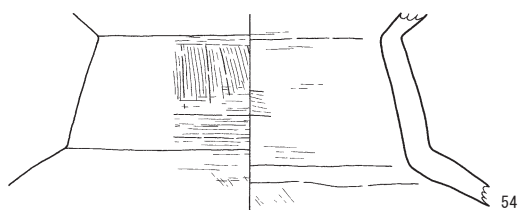
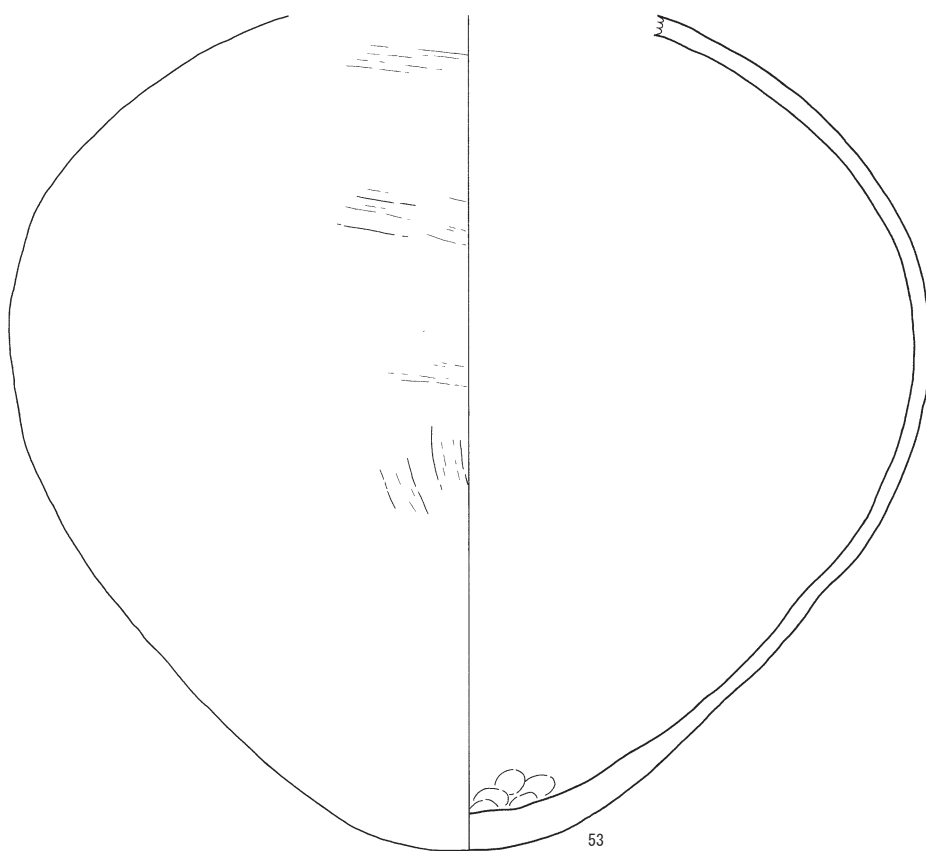
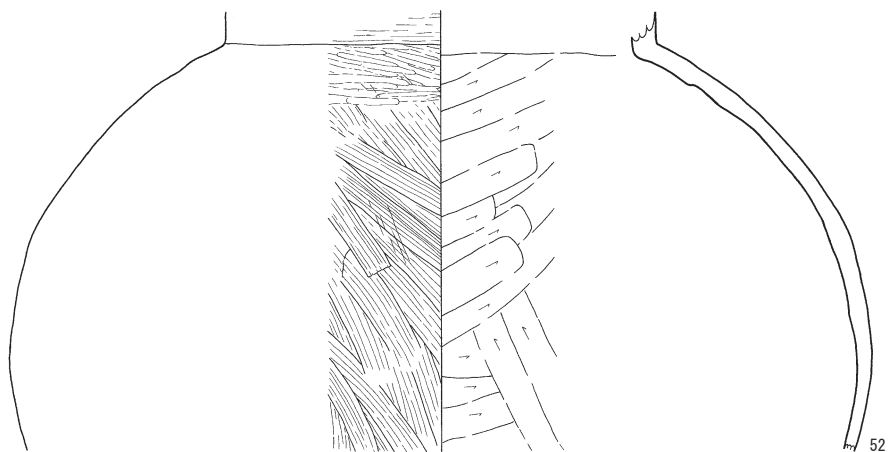
56は頸部であり、胎土は精製されており軟質である。断面に緩い三角形の突帯をもつ。54・55と質感は類似するが、突帯を有する点で異なっている。

57～64は底部である。57～59は底面が明瞭な平坦面をなし、60～62はわずかにレンズ状、63・64は丸底である。57は、内底面付近は接合面で剥落している。なお、57は遺構外のD-21区包含層出土資料と接合している。58は、内底面付近は指頭押圧によって中心が凹んでいる。60は復元径から大型壺と考えられるが、器壁は比較的薄手である。61は、部分的に器面が平坦になっているため、



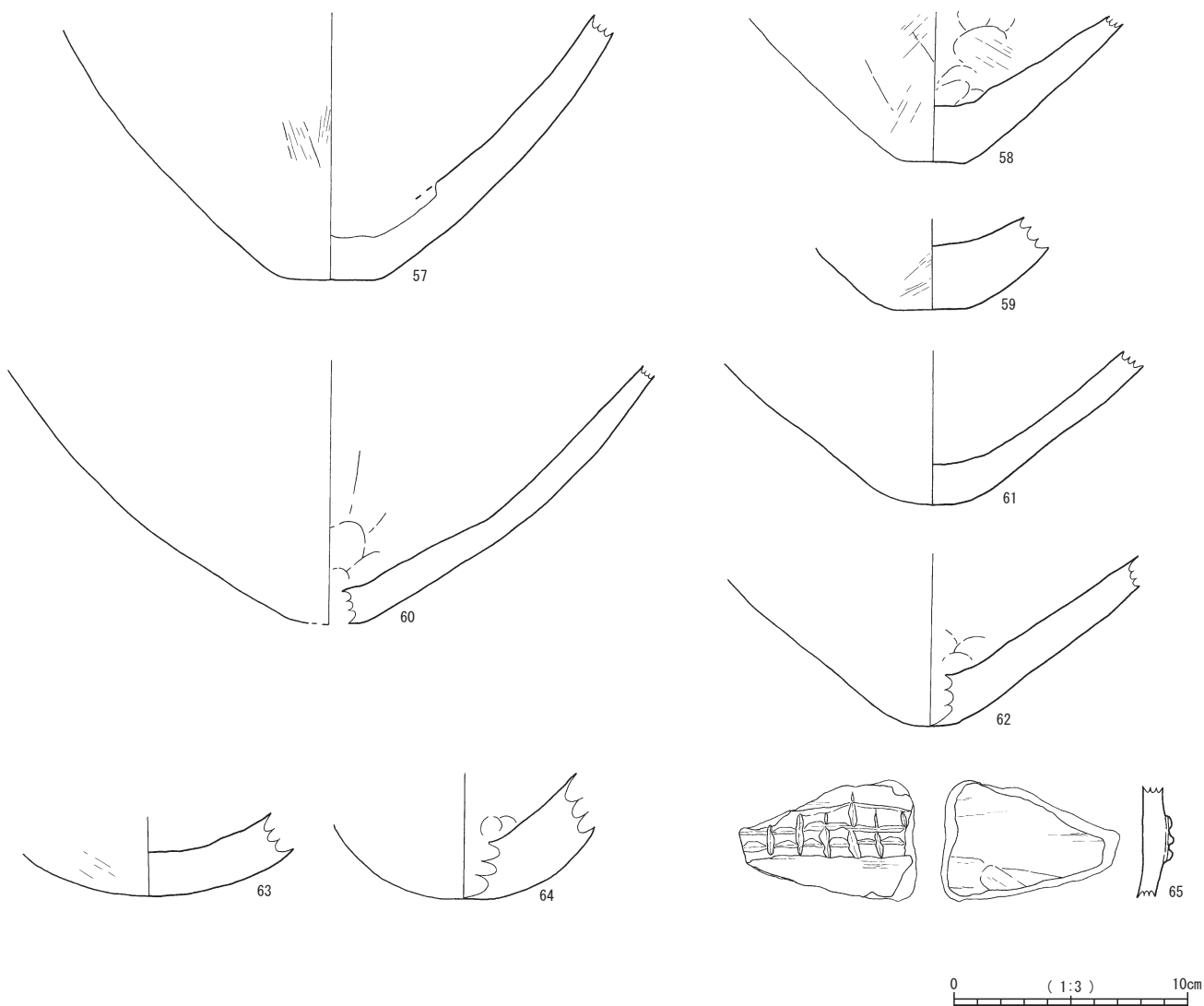
第20図 竪穴建物跡 2号 出土遺物 5

0 (1 : 3) 10cm



第21図 竪穴建物跡2号 出土遺物6

0 (1:3) 10cm



第22図 竪穴建物跡2号 出土遺物7

タタキ成形の可能性がある。63・64は比較的器壁が厚く、胎土に砂粒や礫を多く含む。64の内底面には、指頭押圧による凹凸が確認できる。

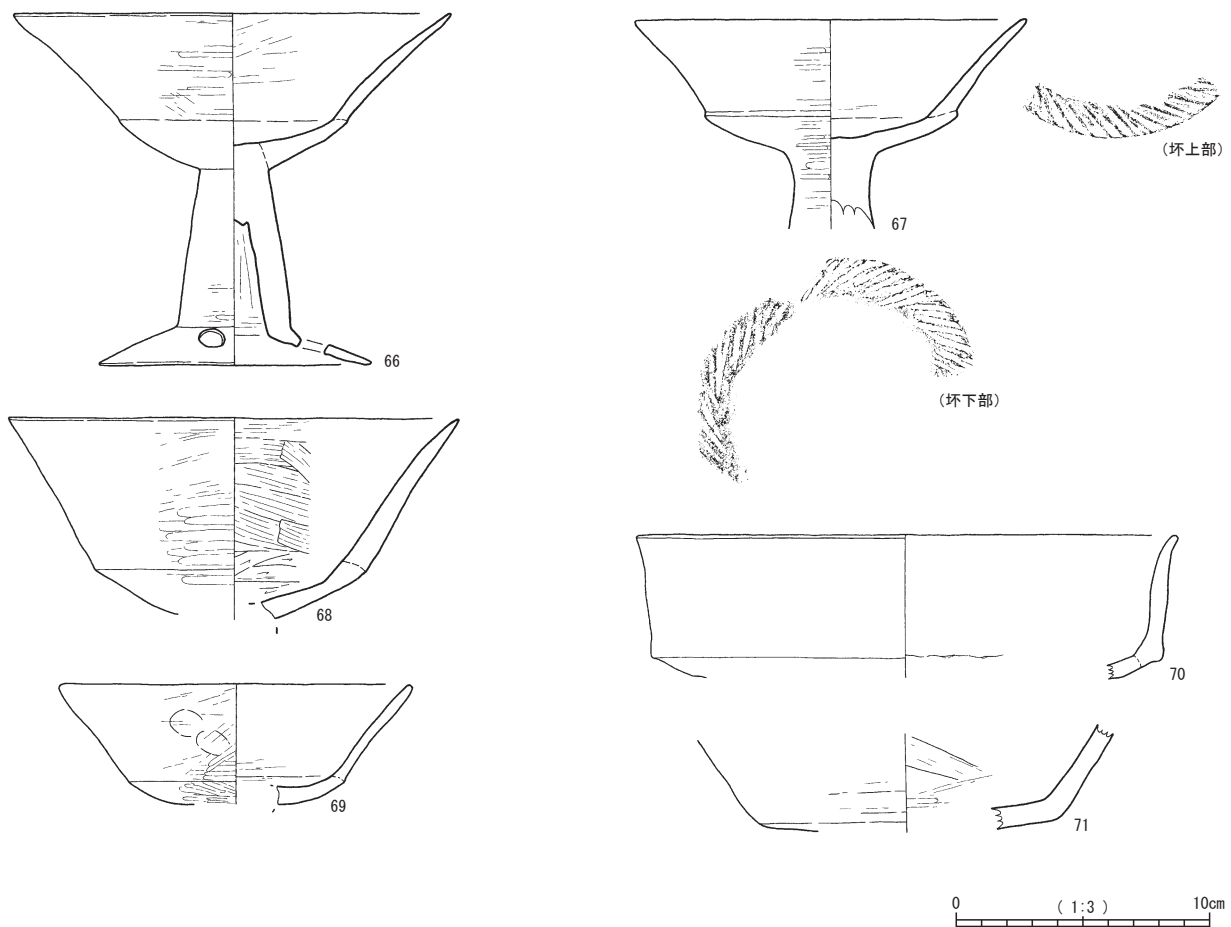
65は、胴部の突帯である。幅広く粘土紐を貼り付け、2条の横位の沈線を巡らせることで3条突帯状に仕上げられている。さらに上位から突帯全体に刻みを施しており、部分的に突帯外にまで刻みが及んでいる。

高坏（第23～24図 66～82）

高坏は、高坏A類～C類の3タイプがいずれも出土しており、中でもB類の残存状況が良好であった。

66～71は高坏B類で、坏部が屈曲部からやや外反して開くタイプである。66は口縁部～底部まで残存率の高い資料である。薄く丁寧に仕上げられており、胎土も精製されている。口縁部は薄くつまみ上げるように作られており、端部は細い舌状を呈する。外面はミガキ調整と思われるが、摩滅により部分的にしか残存しない。脚部の

内面は筒状に仕上げた際の工具痕が観察でき、稜の下位に円形の穿孔が2箇所残存する。穿孔の位置から、本来は3箇所程度であったと考えられる。67は、坏部は浅い皿状で屈曲部の稜に段差をもち、直線的に外傾する。内外面とも摩滅しており、表面が膜状に剥離しているが、部分的に外面には横位のミガキ調整が確認できる。坏部の屈曲部が接合面で剥離しており、接合面の両面とも刻みが施されている（拓本）。刻みには、やや粒子の細かい明黄褐色の土が残っており、接合面の接着を良くするために刻みをつけ、粒子の細かい粘土を用いて接合したものと考えられる。胎土に5mm程の長石をまばらに含み、全体的に砂粒が目立つ。68は、脚部との接合部で剥離している。口唇部は細い舌状を呈する。摩滅のため器面が荒れているが、外面はミガキ調整、内面はハケ目上にナデ調整が加えられている。また、内面の屈曲部以下はケズリ調整である。器壁は比較的厚手であるが丁寧に



第23図 竪穴建物跡 2号 出土遺物 8

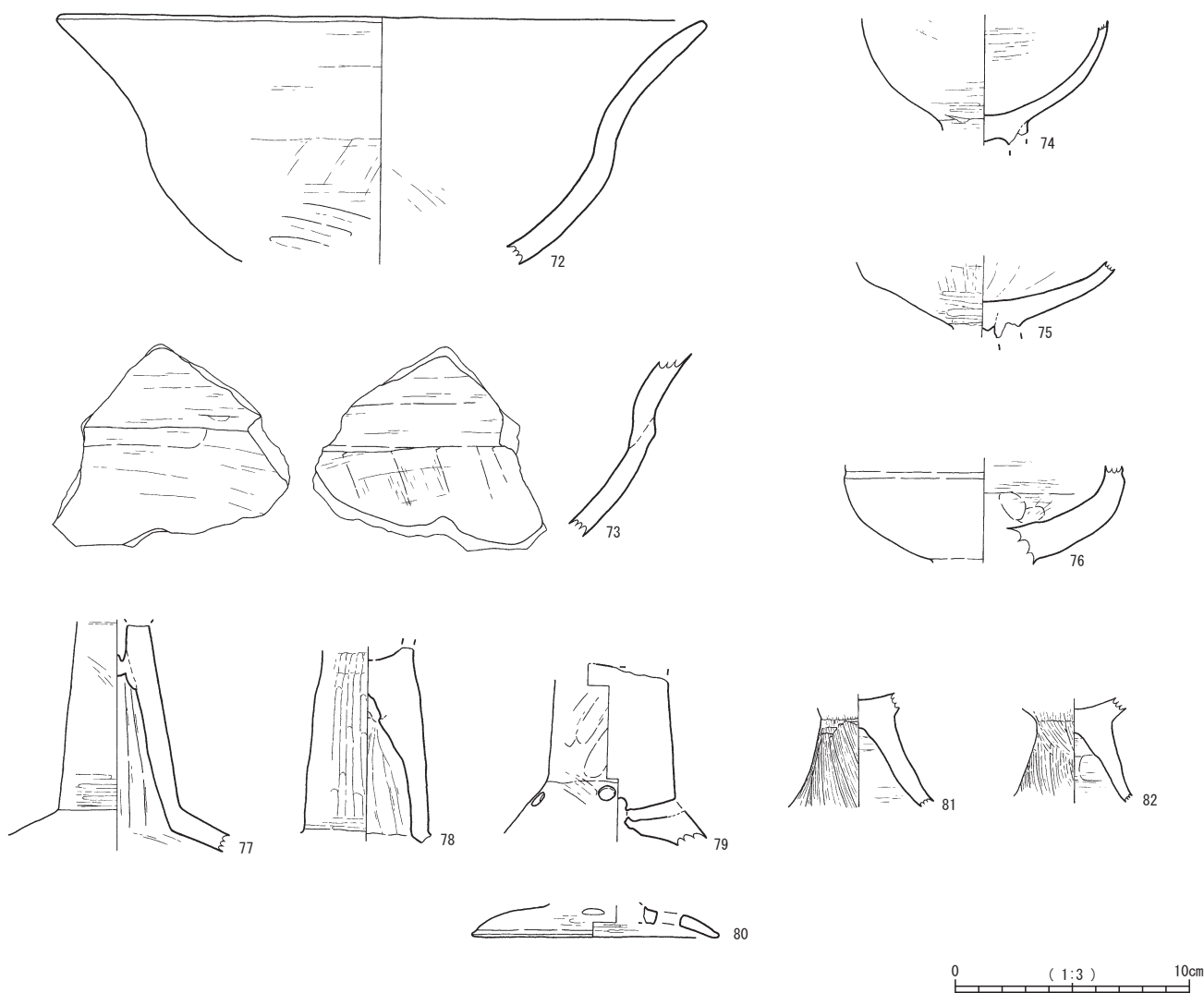
作られており、屈曲部の稜も明瞭である。69も68と同様に、脚部との接合部で剥離している。胎土は精製され、全面が赤く発色している。器壁は薄く、口縁部は細く端部が丸く仕上げられている。胴部下位に稜をもって屈曲する。外面は指頭押圧ののち、ミガキ調整が加えられている。特に、脚部との接合付近のミガキ調整は単位が細かく丁寧である。70・71は、坏部が方形の皿状に近い器形を呈するものである。70は内外面とも摩滅が激しく、調整は不明である。屈曲部が明瞭で、屈曲部から口縁部がほぼ直線的に立ち上がり、口唇部がやや外反する器形である。胎土には、2・3mm程の長石を多く含み、器面に露出している。71は、屈曲が弱く70と69の中間的な器形を呈する。

72・73は高坏A類である。全体的に器壁が厚く大型で、屈曲部から下が碗状になるタイプである。72は口唇端部は丸く、屈曲部も緩く稜は不明瞭である。また、胎土も砂粒が多く、粗い。外面には下半に部分的に幅の広いタキ痕が残っており、その上からナデ調整が加えられている。73も比較的厚手であり、72と同様のタイプと考えられる。屈曲部の稜は明瞭で、内面はナデ調整の方向が

屈曲部の上下で変わっている。胎土に2・3mm程の白色礫をまばらに含む。

74～76は、小型の高坏C類である。74・75は胎土が精製され、砂粒も少なく軟質である。74は碗状に胴部が膨らみ、脚部との接合面で剥落している。全体的に摩滅しているが、部分的にミガキ調整が確認できる。脚部内底面は、ナデ調整により中央部がゆるやかに膨らむ。75は脚部との接合面で剥落しており、脚内部の断面形状から、粘土を充填して脚部と坏部とを接合していることが分かる。全体的に摩滅しているが内外面ともミガキ調整と考えられ、外面は下半ほど調整痕が明瞭に残存している。76は器壁が厚く、胎土も砂粒が目立つ。内面下半に、指頭押圧が明瞭に残る。また、脚部との接合部がわずかに残っている。

77～82は、脚部である。77・78の内面には、筒状に絞って成形した際のしわ状の縦筋がみられる。77は、精製された軟質な胎土である。外面は屈曲部の上位にわずかにミガキ調整がみられるが、全体的に摩滅している。また、坏部との接合の際に充填したと思われる粘土が部分的に残っており、本来は脚部は中空であったと考えられる。



第24図 竪穴建物跡2号 出土遺物9

78は、上下とも接合面で剥落している。赤色礫を多く含み、胎土は軟質で部分的にマーブル状をなす。外面は摩滅しているが、やや幅広のミガキ調整が縦位に施されている。79は、中実脚で柱状を呈する。胎土に雲母を多く含む。屈曲部付近に4ヶ所の穿孔があり、外面から内面に穿たれている。上端に坏部の内面がわずかに残存している。80は、屈曲部の接合面で剥落している。欠損により2カ所しか確認できないが、本来は等間隔に3箇所穿孔が穿たれていたと考えられる。胎土はほとんど砂粒を含まず、軟質である。底径も小さく器高もさほどないため、小型の高坏と想定される。81・82は、外面に細かいハケ目調整が施されるものである。径が比較的小さいため、小型の高坏と考えられる。外面のハケ目は屈曲部上位まで及び、内面はナデ調整により緩やかな山形を呈している。

小型器種（第25図 83～97）

83～89は、小型丸底壺である。いずれも、口縁部は外傾し、頸部から直線的に立ち上がる。83は薄手であるが胎土は粗く、2～5mm大の長石・赤色礫を多量に含む。底部に接地面はほとんど無く、完全な丸底である。内面はナデ調整で仕上げられているが、部分的に筋状の砂粒の流れが見えるため、ケズリ調整で成形したものと考えられる。また、内面では接合痕も明瞭に確認できる。口縁内面にはハケ目が明瞭に観察でき、口唇部は薄く舌状に仕上げられている。外面は、胴部はミガキ状の丁寧な指ナデ、底部付近はケズリ調整である。84の底部はレンズ状に近く、胴部最大径の稜は一定の高さになく、ややゆがみがある。胎土には2mm大の長石を多く含み、器壁も厚手である。外面にはハケによるナデ調整が残っており、頸部付近は横位のナデ調整である。内面は頸部下にケズリ調整による緩やかな稜をもち、ナデ調整によって

表面が平滑に仕上げられている。85は、胴部の最大径で緩やかに屈曲し、そろばん玉状の器形を呈する。外面はハケによるナデ調整の後、屈曲部には横位のナデ調整がめぐる。86は口縁部が全体的に薄く仕上げられ、端部は舌状に丸く収まる。本地点で出土している小型丸底壺の中で、口縁部から頸部が最も長い。内外面ともハケ目が明瞭であり、頸部外面には屈曲の上部にもハケ目がおよんでいる。内面の頸部下に接合痕が明瞭に残っている。87は口唇部が舌状を呈し、波状にややゆがんでいる。胴部でもやや高い位置に最大径をもつと想定される。内面の頸部下に、接合痕がみられる。88は胎土が精製され、つくりも丁寧である。外面は横位のミガキ調整を主とし、内面にはわずかにハケ目が確認できる。胴部は屈曲部直下に稜をなす。底部は完全な丸底で、内底面は中心にわずかにぼみがある。89は胴部である。胎土は軟質であるが、1mm大の砂粒を多く含む。内外面ともミガキ調整であり、内面はナデ調整が部分的に加えられている。頸部外面は、横位のナデ調整によりわずかに凹んでいる。

90～94は口縁部が短く、屈曲部から外側に開くタイプの小型鉢で、器高に対して口径が大きい。また、最大径が胴部の上半に位置する。90～92は、口唇部が細く舌状に仕上げられている。胎土はいずれも軟質で精製されたものである。90は丸底で、内外面ともナデ調整を主とし、底面付近にのみわずかにハケ目がみられる。屈曲部は内面の稜線はやや鈍いが、外面は屈曲下に強めの横位のナデ調整が加えられ、わずかに平坦面をなしている。91は、外面は横位のミガキ調整で丁寧に仕上げられている。胎土に赤褐色の粒子を多く含む。92は、口唇部内面が横位のナデ調整によりやや凹む。内面頸部の直下に接合痕が確認できる。93・94は胴部片である。93は内外面とも丁寧なミガキが施され、頸部の屈曲部は横ナデで成形されている。頸部からの立ち上がりは薄い、全体的には厚手である。94は、内外面とも頸部には横位のナデ調整がみられ、胴部内面は斜位の指ナデ調整である。

95は、完形の鉢である。内外面とも丁寧なナデ調整で仕上げられている。口唇部は横位のナデ調整により、細く外反している。薄手であり、全体的に丁寧な作りである。胎土は軟質であり、淡褐色～赤褐色の色調がマール状を呈する。他の小型器種と胎土が異なり、搬入品と考えられる。96・97は小型の鉢形土器あるいは壺形土器の底部である。96は器壁が薄く、外面はナデ調整を主体とし、部分的に細かいハケ目が観察される。焼成は良好であり、胎土に雲母を多く含む。97は器壁が厚く、調整も粗い。胎土には3～5mm程の長石をまばらに含む。外面はナデ調整により平滑に仕上げられているが、内面は内底面を中心に指頭押圧が明瞭で、底面に粘土が塊状に溜まっている。また、部分的にハケ目が残っているが、ケズリ状に深く食い込んでおり、さらにその後ナデ調

整が加えられている。

その他の土器（第26図 98～101）

98は、丸底甕と壺形土器の中間的な形態を有し、砂粒が少なく精製された胎土である点は、他の小型器種に類似する。口唇部は細く舌状に仕上げられ、やや波打っている。内外面とも横位のミガキ調整であり、頸部に部分的にハケ目が残っている。頸部内面には段状の稜がみられ、胴部以下はケズリ調整であったと考えられる。

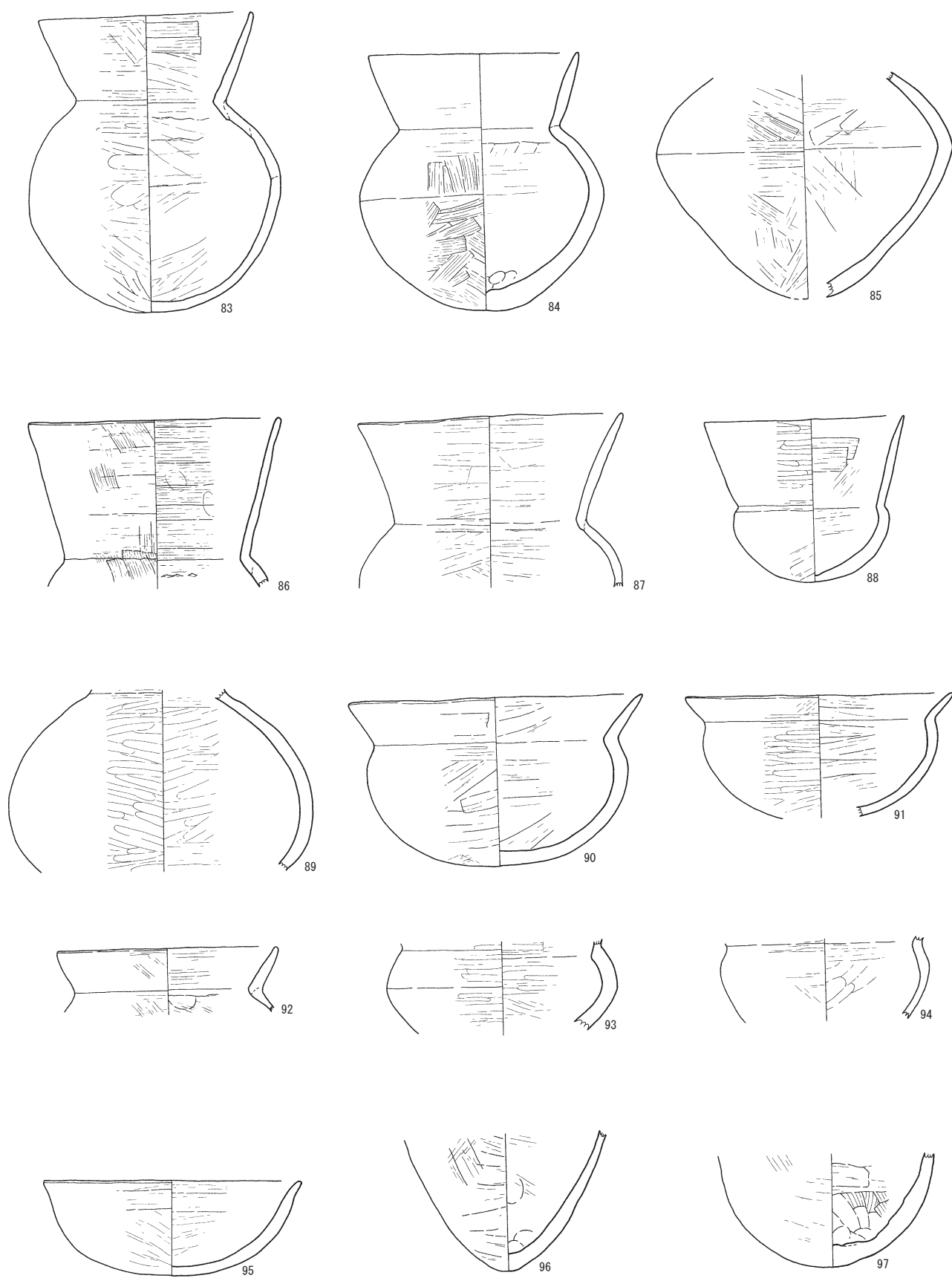
99は、小型の器台である。胎土は精製され、器壁も薄い。脚台部は底部に向かって細く舌状を呈し、全体的にゆがんでいる。口縁部は脚台部と同程度に開き、端部は丸く仕上げられている。口縁部側が厚く、脚台部に比べてしっかりした作りである。外面はナデ調整を基本とし、内面には部分的にハケ目が見られる。100は、小型の器台の胴屈曲部分と考えられる。全体的な器形は高坏に似るが、中央に直径6mmの孔がある。胎土は精製されており、砂粒を含まず軟質である。

101は、器高16.5cmをはかり、口唇部が部分的に欠損するのみでほぼ残存していた。底部が尖底状の鉢形を呈し、底面に径6mmの穿孔がある。穿孔は、口縁部の中心に対しややずれた位置にある。口縁部は内外面とも横位のナデ調整がめぐり、端部はやや丸みを帯びた方形に仕上げられている。外面は、胴部上半は目の粗いハケによるナデ調整が斜位に施され、胴部下半はケズリ調整後ナデ調整が加えられている。また、外面には粘土の接合痕が部分的に確認できる。内面は、胴部上半は指ナデ調整、胴下半はケズリ調整である。また、穿孔付近の内底面には指頭押圧がみられる。胴部は表面が荒れており、被熱によるものと考えられる。被熱の範囲が胴部中位までのため、他の器種に重ねるか、あるいは単独で火にかけて使用すると考えられる。しかし、甌として用いるには穿孔が小さく、機能的な部分も含めて検討が必要である。

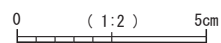
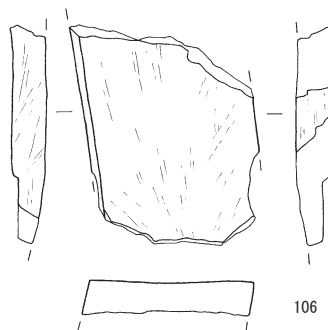
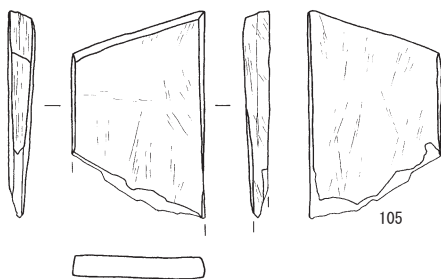
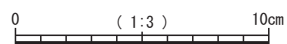
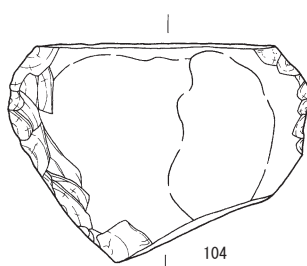
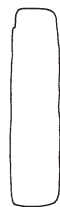
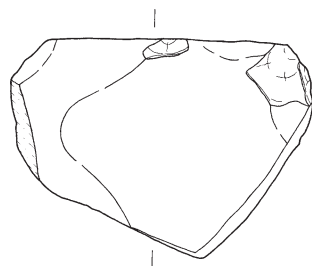
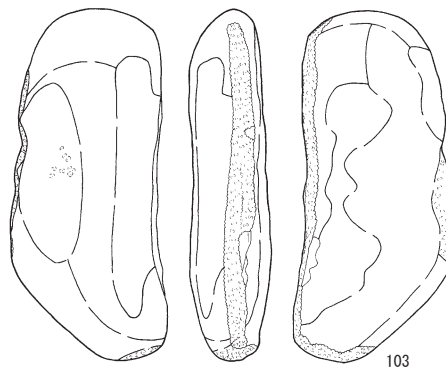
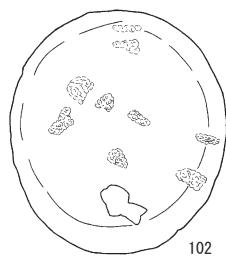
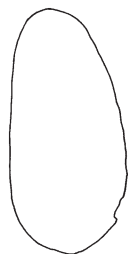
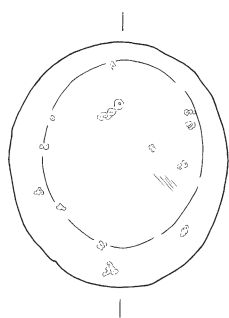
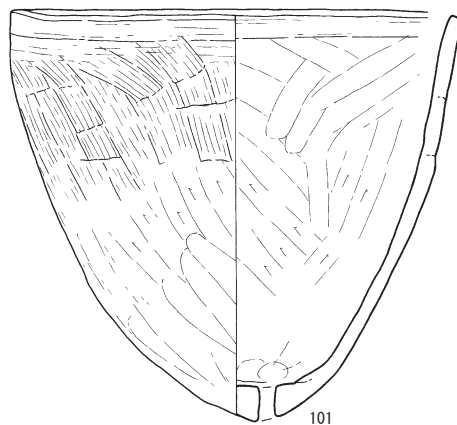
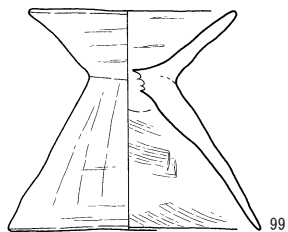
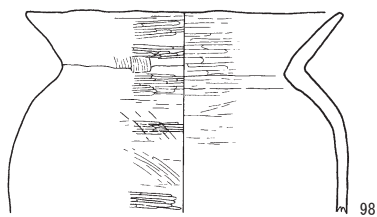
石器

102は安山岩製の磨敲石で、楕円形を呈する。磨面は表面のみ形成されている。表裏面には、敲打痕が散在する。103は、安山岩製の長楕円形の円礫を利用した敲石である。右側面のわずかにえぐり状になる部分、右側面全体、左側面中央下部に敲打痕が残存する。104は砂岩製の砥石で、表裏面とも砥面として用いられている。面の形成後に表裏面とも側縁から剥離が加えられ、不整形な三角形に近い2つの角が生じている。そのため、砥石を転用し、角の部分を楔状の用途として使用した可能性も考えられる。

105・106は硯状の石製品であり、106は下面側が欠損している。105は頁岩、106は砂岩製の板状の石材を用いている。表裏面及び側面にも細かい擦痕がみられ、表面は平滑でやや光沢を持っている。表裏面の擦痕が集中する範囲は、部分的に浅く凹んでいる。



第25図 竪穴建物跡 2号 出土遺物10



第26図 竪穴建物跡2号 出土遺物11

(2) 遺物集中1 (第27図・第28図)

D・E-20区のⅡc層で検出された。長軸4.6m、短軸3.0mに遺物がまとまる。北側は調査区境に近く、さらに北側へ広がる可能性も考えられる。南東方向へ約5.6mに竪穴建物跡7号、西方向には近世の掘立柱建物跡1・2号が位置している。検出段階で略円形を呈する遺物の集中がみられ、竪穴建物跡を想定して調査を進めた。しかし、土器片と礫が混ざり合って窪地状の範囲に集中している状況であると確認された。レベルが低い部分に遺物がややまとまっているが、掘り込み等は確認できなかった。また、遺物の重なりもさほど重層的ではなくこのエリアに土器が廃棄されたか、河川等の作用によって遺物が堆積した可能性がある。

出土遺物

小片を含め、642点の土器が出土したが、いずれも完形復元できた資料はなく、破片が目立つ。竪穴建物跡とは対照的に、脚台を伴うと考えられる甕形土器(甕A類)が大半を占めている。また、壺形土器や小型器種が少ない。

甕形土器 (第29～30図 107～120)

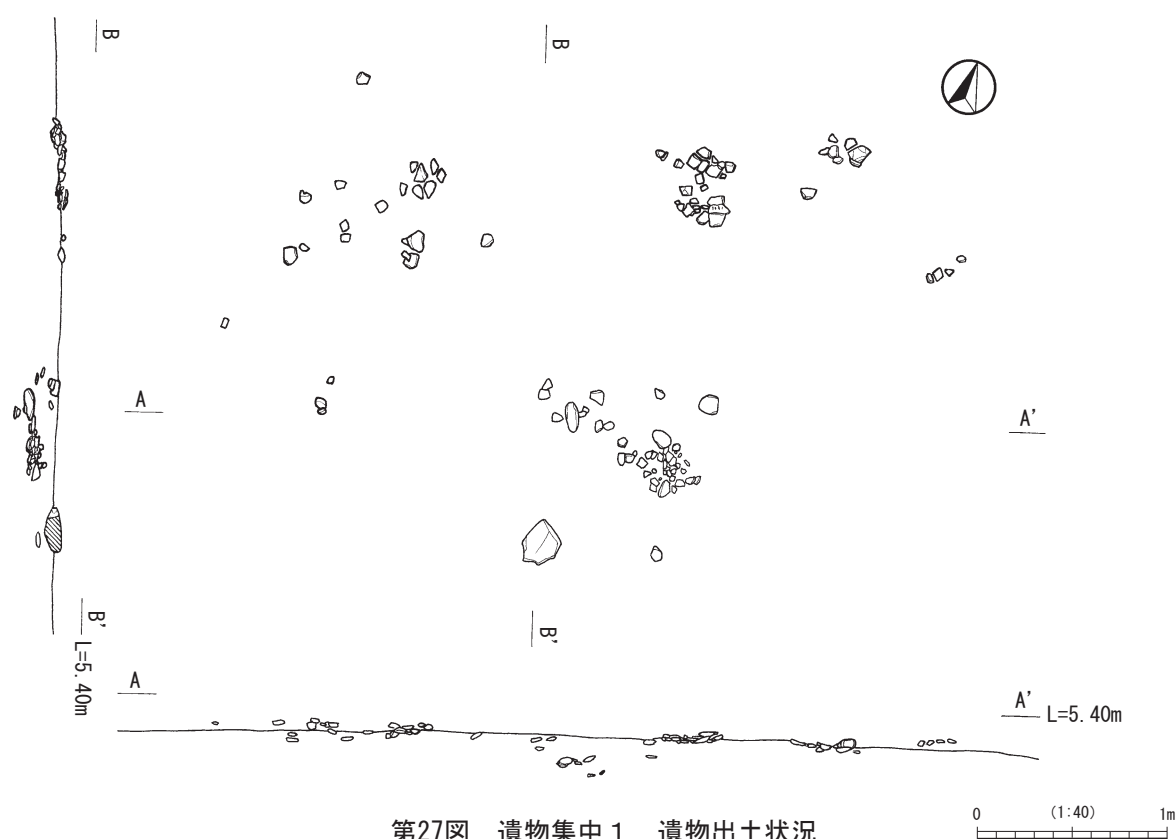
107～109は甕A類で、口縁部が外傾し、屈曲部から胴部が膨らみをもつタイプである。107・108は胴部の張りが強く、109はなで肩状である。いずれも口唇部はナデ調整により平坦面をもつ。また、胴部には比較的幅の広

い水平方向を主としたタタキ痕を有し、内面はナデ調整で仕上げられている。107は器壁が厚く、胴部下半ほど器壁が安定しない。109の胴部内面にはナデ工具の端部と思われる縦筋が残り、屈曲下に接合痕が部分的に残存する。また、107と同様に器壁が厚い。

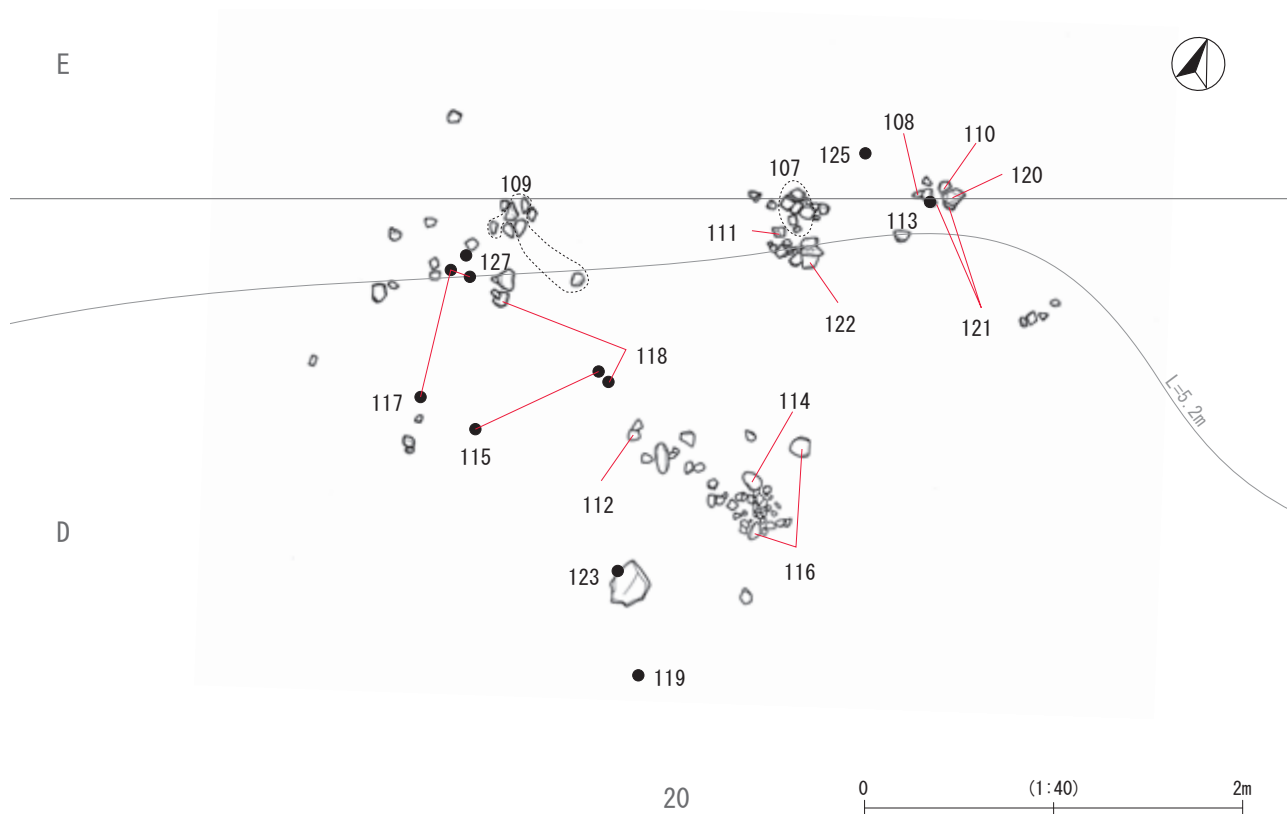
110～113は口縁部片である。110・111は口唇端部に平坦面をもつもの、112・113は口唇端部が丸みを帯びるものである。110・111・113は外面に縦位のハケ目が残る、いわゆるカキアゲ口縁である。111の口唇端部は強めのナデ調整により、溝状に中央がくぼむ。また、口唇部下の内面に横位のナデが加えられ、帯状に凹む。112は、外面に段状のわずかな稜をもつ。比較的薄手であるが、ややゆがみがある。

114～116は胴部である。114は、外面にわずかに水平あるいは右上がりのタタキ痕が確認できる。内面は指頭押圧の後、ハケによるナデ調整が加えられている。115・116はいずれも器壁が厚く、外面は縦位のケズリ調整の後、ナデ調整がくわえられる。116の外面は部分的に赤みが強い色調を呈しており、被熱による可能性もある。

117～121は胴部～脚部であり、117・118は脚部との接合面で剥落ないしは欠損している。117は胴部外面にはケズリ調整がみられ、脚部との接合部分是指頭押圧に近い指ナデ調整である。また、内底面には指頭押圧により凹凸が生じている。118の外面には、部分的にタタキ調



第27図 遺物集中1 遺物出土状況



第28図 遺物集中1 遺物接合状況

整がみられる。119は、胴部との接合面で剥落している。端部はナデ調整により、平坦面を有する。120は、外面に縦位の指ナデ調整の後、端部付近に横位のナデ調整を加えている。端部は面を持たず、丸く仕上げられている。

台付鉢（第30図 121）

台付鉢の台部分であり、鉢との接合部分で剥落している。内外面ともナデ調整を主体とし、内底面付近に部分的に指頭押圧がみられる。また、内底面には接合痕が確認できる。

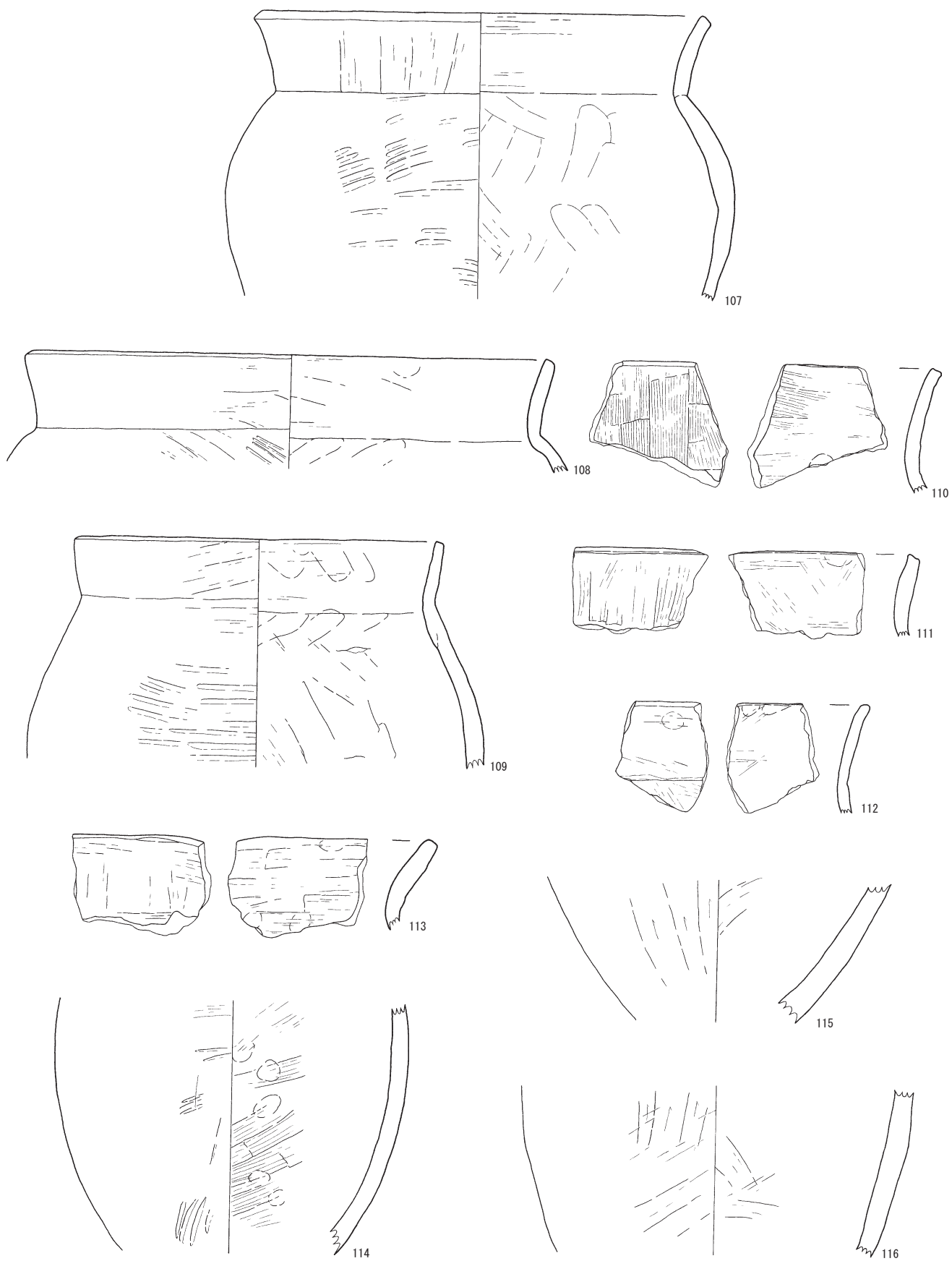
壺形土器（第30図 122～124）

壺形土器は特徴的な部位が復元できた資料がなく、突帯周辺のみを図化した。122は頸部～胴部で、最大径と思われる部分に突帯が施されている。突帯は上下端がナデられ、断面が緩い三角形を呈する。刻みは鋭く、突帯の上下まで及んでいる。胴部の上位には右下がりのタタキ痕がみられ、その後ナデ調整が加えられている。内面は指ナデ調整を基本とし、突帯の上部に接合痕がみられる。123は幅広の粘土紐を貼り付け、中央に深い沈線を

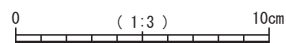
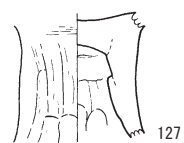
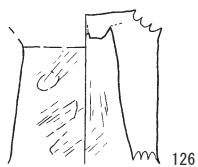
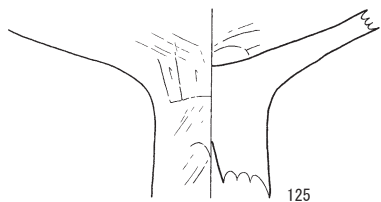
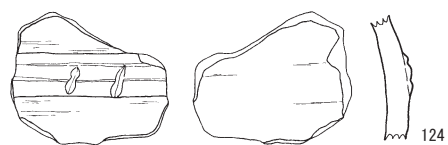
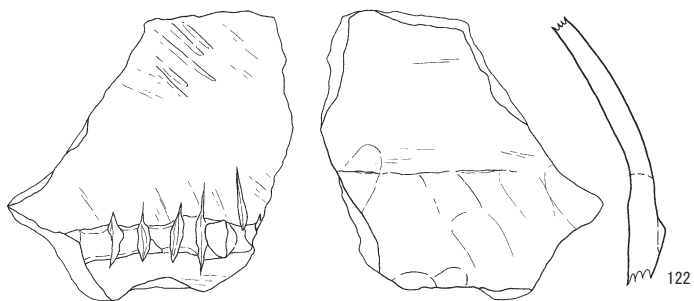
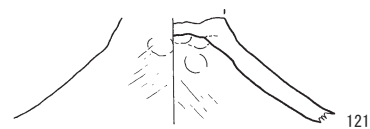
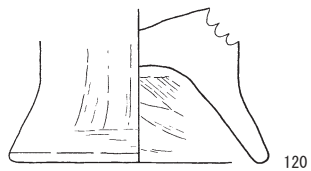
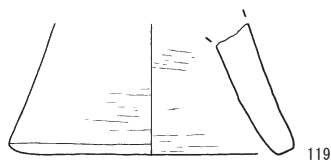
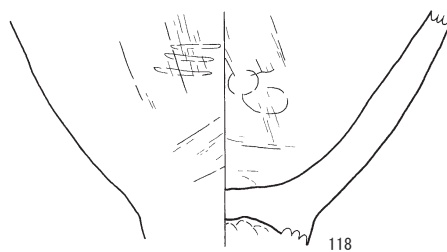
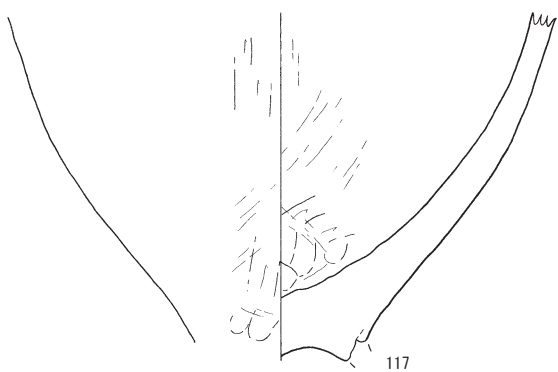
1条めぐらせ、見かけ2条突帯状をなしている。また、その上から斜位の刻みを加えている。突帯の上下はナデ調整で仕上げられており、沈線や刻みの付け方も丁寧である。内面は、摩滅により剥落している。124は幅広の粘土を貼り付け、その上に2条の沈線を施すことで見かけ3条突帯状をなしている。突帯上には、間隔の広い斜位の刻みが施される。

高坏（第30図 125～127）

高坏は、いずれも坏部と脚部との境界付近の破片であり、口縁部及び脚部全体が残存する例はない。125は器壁は厚く、胎土も石英・長石類を主体とした砂粒が多く粗い。脚部は中空と考えられるが、器壁は厚い。接合部から坏部にかけては、上方向へのケズリ調整がみられる。126は、内底面に坏部との接合の際の粘土塊が張り出している。127は、外面が縦位のやや強めの指ナデ調整であり、ナデの単位ごとの幅で面状をなす。内面は、坏部と脚部の接合痕や粘土の塊が明瞭に残り、接合部を中心にいびつな形状になっている。



第29図 遺物集中1 出土遺物1



第30図 遺物集中 1 出土遺物 2

(3) 遺物集中2 (第31図～第33図)

C・D-22区のⅡc層で検出された。令和元年度調査時に検出され、北側は平成30年度調査区との境界、東側はB・C調査区の境界となっている。南西-北東方向を軸に遺物が面的に広がって出土し、一部周囲とは異なり砂利状の礫が半円状に集中する土壌が堆積していた。先行トレンチ等を入れて土層を確認したが、人為的な掘り込みは確認できず、自然作用でできた落ち込みと判断した。落ち込み内部の埋土は、周辺とほぼ同じ土壌(10YR3/3 暗褐色)だが、砂利状の小礫が多く含まれていた。遺物は大型の破片が目立つが、個体ごとのまともは少なく、完形復元できた資料もなかった。前述のとおり、遺物の広がり方が東西に帯状をなしており、北東側に向かってやや落ち込んでいくため、西側から流れ込んだものと考えられる。落ち込み部分の周囲からも、土器と小礫が混って出土した。

出土遺物

遺物集中2では、小片を含め3,038点の土器が出土した。接合状況を第33図に示した。近接した破片同士での接合が多いが、164のように離れて接合した事例もある。出土遺物は胴部片が多く、全体的な出土数に対して、部位や形態が明瞭で実測対象となった資料は少なかった。

前述のとおり完形資料はないが、遺物集中2と同様に甕形土器の中でも脚台付甕(甕A類)が主体を占め、中でもいわゆるカキアゲ口縁の特徴を有する資料がまとまてみられる。ただし、遺物集中1はタタキの調整が主体であり、遺物集中2の甕形土器とは同じ甕A類でも調整が異なる。一方で、丸底甕(甕B類)は破片でしか出土例がなく、2号堅穴建物跡とは対照的な出土状況である。この他、壺形土器や高坏など、甕形土器・壺形土器と併せてセット関係を構成する主要な器種は出土しているが、全体形状をつかめる資料はなかった。

甕形土器 (第34～37図 128～162)

128～141は脚台付ないしは平底と考えられる甕形土器であり、口縁部が外傾し開くもの(128～135)、直口に近いもの(136～138)、直口気味に立ち上がり端部のみ外反するもの(139～141)に細分できる。

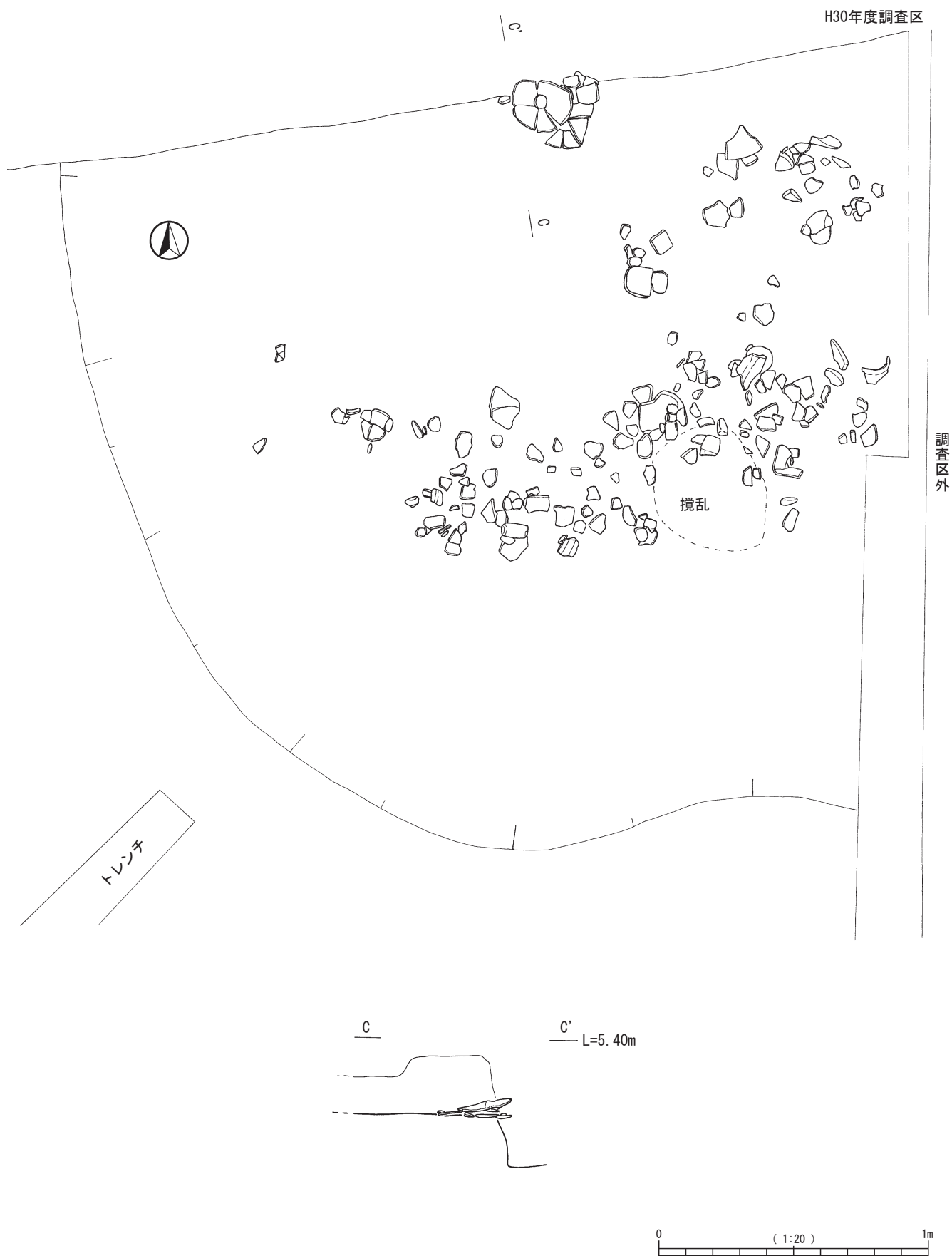
128～135は、外面の頸部から口縁部にかけてハケ調整が下から上に施されるいわゆるカキアゲ口縁の資料である。頸部のカキアゲの始点は、稜状に小規模な段差が生じている。128は頸部から広く外傾し、口唇部はわずかに面を持つが角は丸く収められている。外面には細かいハケ目が明瞭に残り、胴部は縦位の後、横位のハケ調整が施されている。内面も頸部まではハケ調整であるが、頸部屈曲以下は指ナデ調整であり、内面にはハケ調整と指ナデ調整の境に不整形な稜が生じている。129は、内外面とも口唇部付近は横位のナデ調整で、内面下半は指ナデ調整で仕上げられている。口縁部のナデ調整部分か

ら大きく外反する。130は頸部から緩やかに外傾し、口唇部は平坦に仕上げられている。胴部外面には水平ないしは右下がりのタタキ痕がみられ、その上からナデ調整が加えられている。内面は摩滅により詳細な調整は観察できないが、部分的にハケ目が残っている。赤褐色礫を多量に含む。131は口縁部にややゆがみがあり、端部は丸く収められている。外面は細かいハケによるナデ調整を主体とし、頸部の屈曲部下に帯状に横位のナデ調整が施されている。内面は口縁部～頸部までが斜位のハケ調整、胴部以下は縦位の指ナデ調整である。132は口唇部下は横位、胴部は斜位のハケ調整であり、頸部付近に帯状にカキアゲのハケ目が確認できる。133・134は、全体的に器面が摩滅しており、詳細な調整痕は確認できないが、カキアゲ口縁のハケ目は明瞭に確認できる。134は胴部上位に最大径をもち、外面にススガわずかに付着している。135と胎土・色調共に類似しているが、胴部の張りや調整の違いから別個体と判断した。135は、口唇端部がナデ調整によって隅丸方形に仕上げられている。内外面とも横位のナデ調整であり、カキアゲ口縁の特徴はみられないが、頸部にはわずかに段差があり、口縁部は緩く外反し、端部でさらに反りが大きくなる。

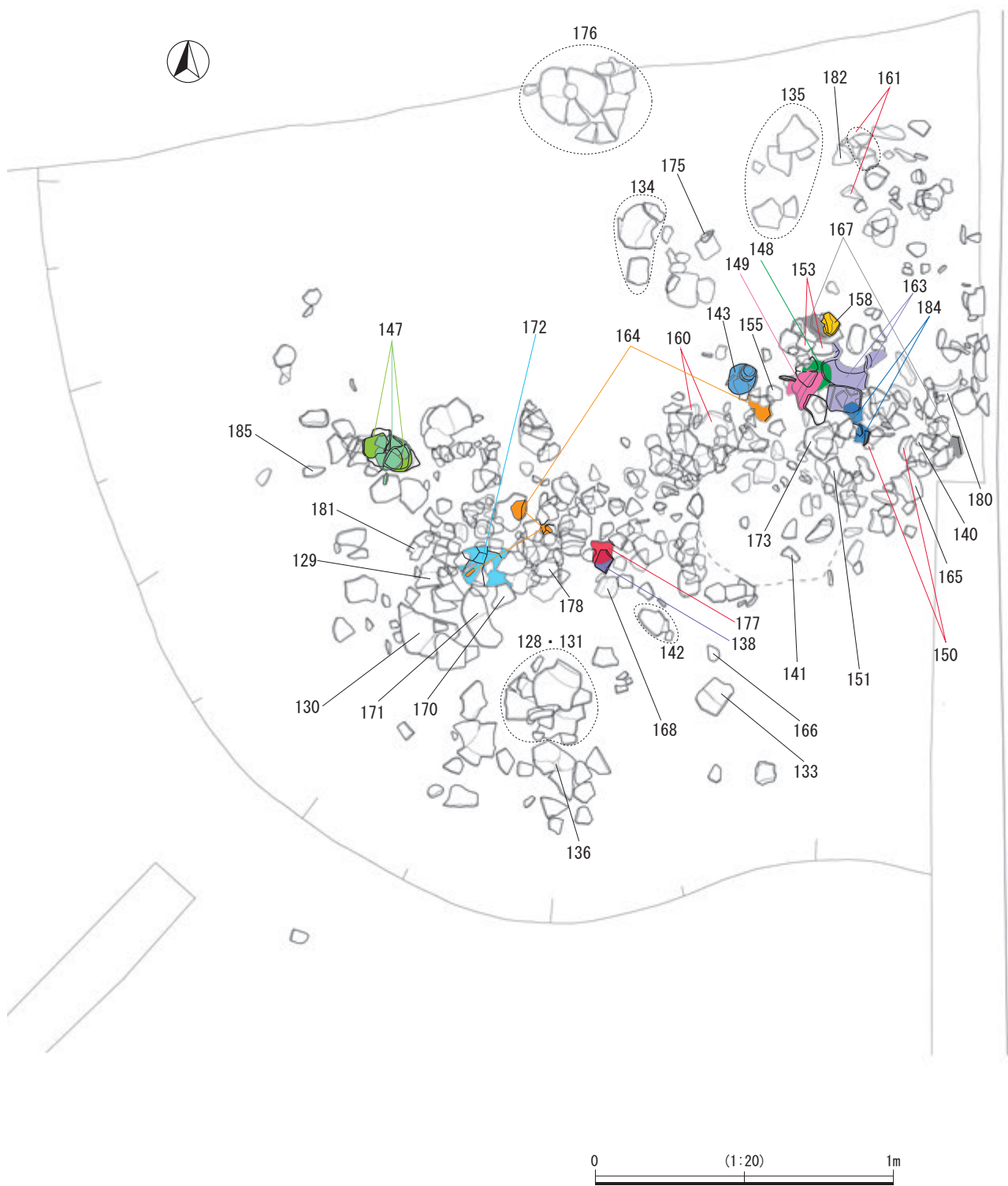
136は、口唇部付近でゆるやかに外反する。外面は摩滅により調整痕がほとんど残存しないが、内面は指頭押圧と横位の細かいハケ調整が確認できる。137は薄手で、口唇部もナデ調整によって平坦面が形成されている。内外面とも摩滅しているが、内面に指頭押圧が部分的に残っている。138は口唇部がゆがみ、口唇端部も丸みを帯びている。内外面とも細かいハケ目が残るナデ調整で仕上げられており、複数方向で切り合っている。

139は口縁部の中位から外反し、内外面の横ナデ調整と対応する。外面は縦位のハケ目残り、カキアゲ口縁に近い特徴を有する。胎土は雲母を多く含み、暗い色調である。140・141は口縁部中位で横位のナデ調整が加えられ、折り曲がるように外傾する。また、いずれも外面側に口唇端部がやや張り出す。内外面とも横位のナデ調整を主体とし、外面の下半は縦位のナデ調整である。

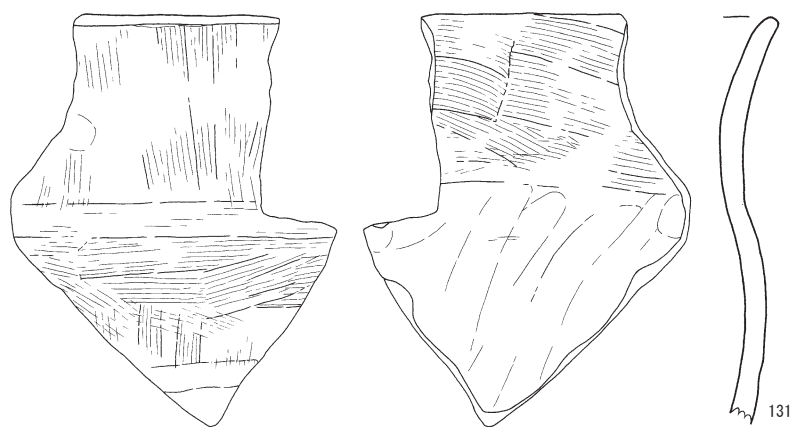
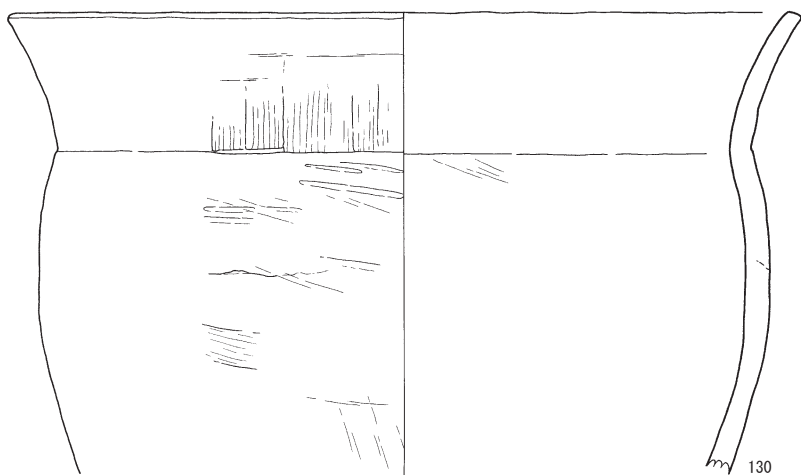
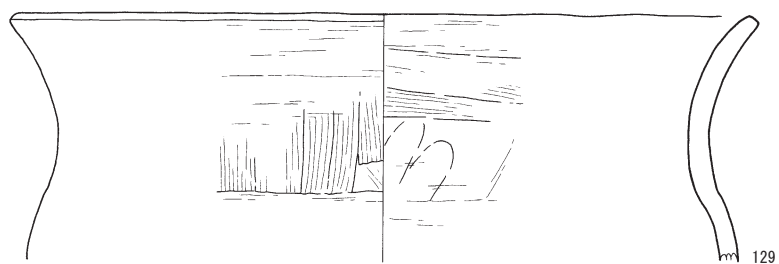
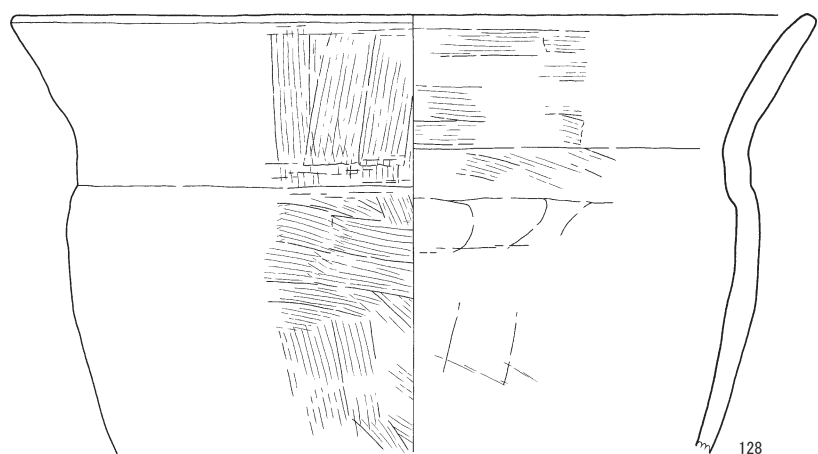
142～148は胴下半～脚台部分である。145～147は、外面に縦位の指ナデを巡らせて成形している。142は厚みがあり、やや大型の甕形土器と考えられ、胴部と脚台との接合部分で剥離している。外面には僅かにハケ目が残存し、内面は縦位の指ナデ調整が主体をなす。143・144は小型の甕形土器と考えられ、いずれも脚台の付け根部分で剥落している。143は、器壁が薄い。145・146は底径に対して器高が低く、断面形も緩やかなドーム状を呈する。また、端部が舌状をなし、丸みを帯びる。145は胴部の器壁が厚く、胎土も3mm程の白色礫が多く含まれる。147は端部がナデ調整により断面方形に仕上げられている。内底面には指頭押圧が連続して加えられ、底面



第32図 遺物集中2 遺物出土状況及び部分立面図（2面目）

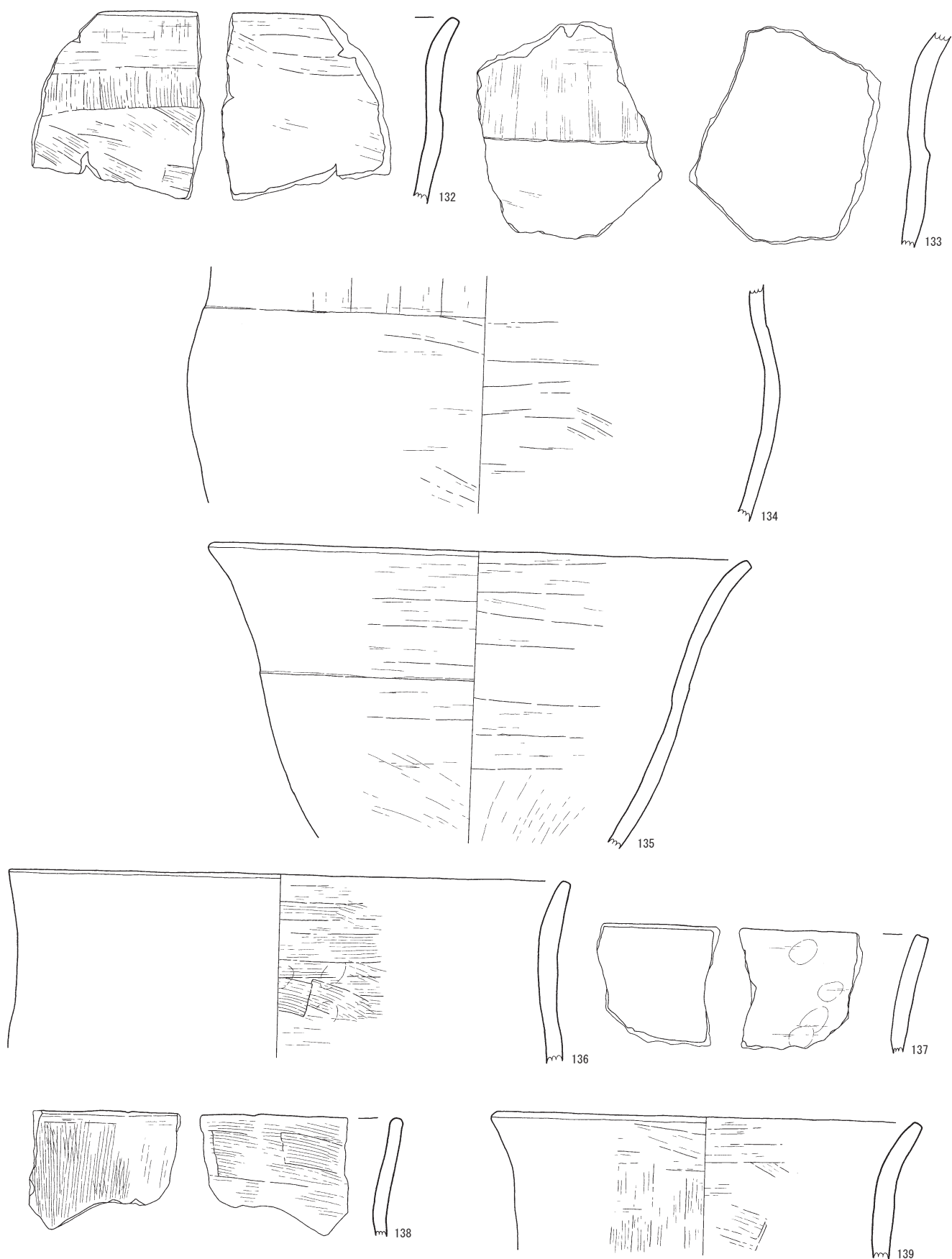


第33図 遺物集中2 遺物接合状況

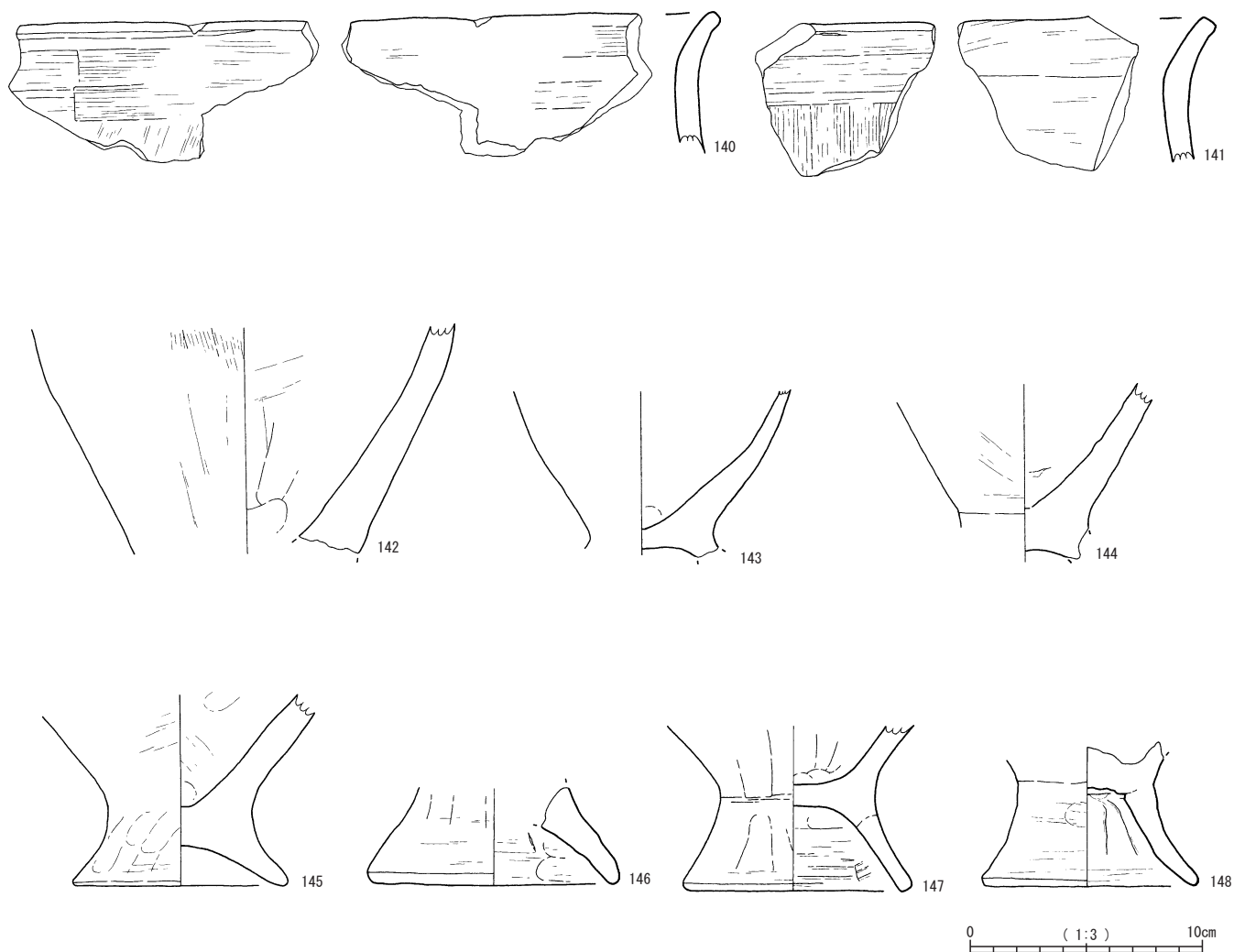


0 (1:3) 10cm

第34図 遺物集中2 出土遺物 1



第35図 遺物集中2 出土遺物2



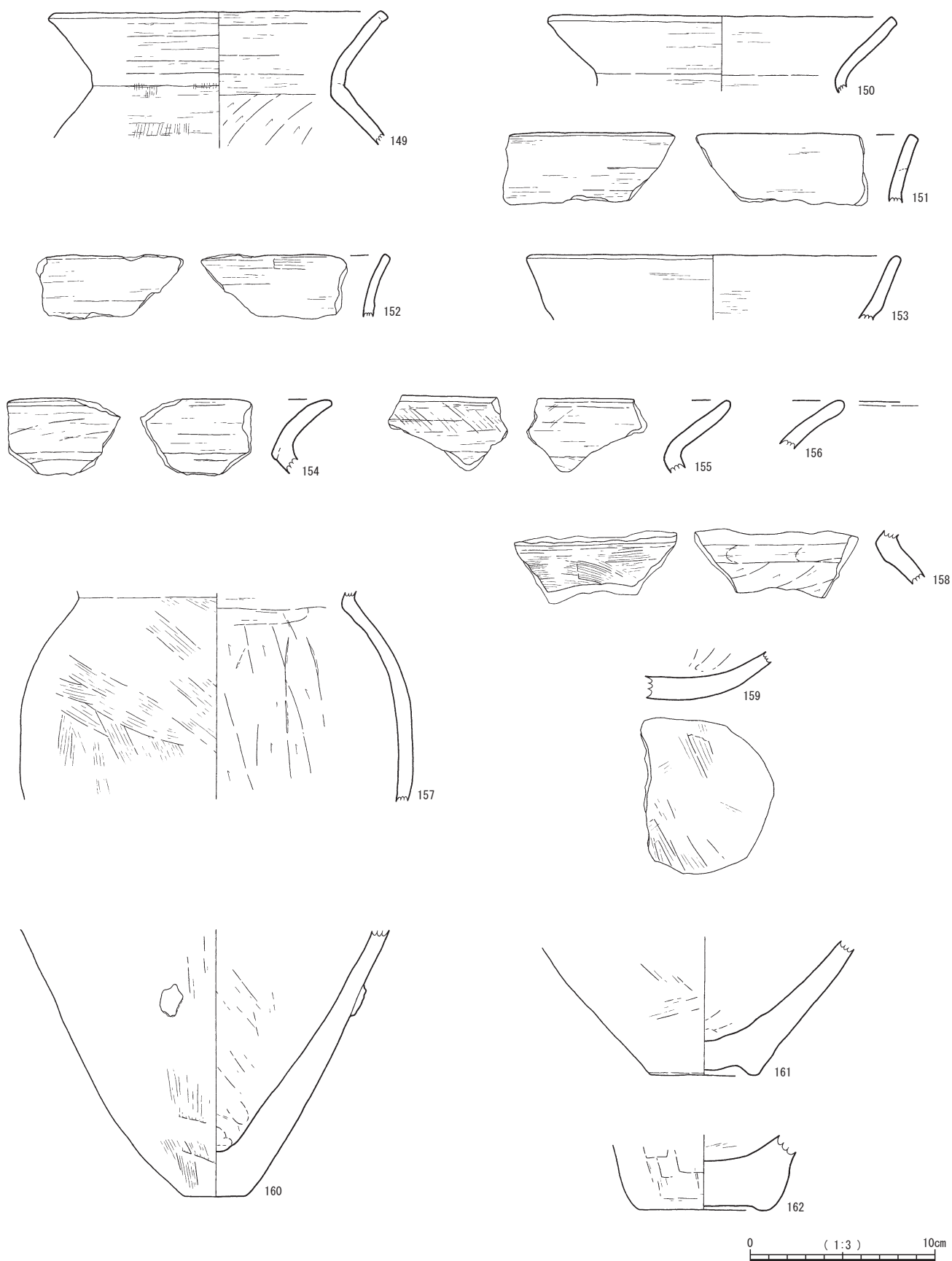
第36図 遺物集中2 出土遺物3

は平坦状をなしている。148は、内面に明瞭な接合痕がみられ、縦筋状に工具痕が確認できる。先端はナデにより方形を呈する部分と、端部が丸く収まる部分とで一定ではない。また、それに対応するように外形が直線的になる部分と、やや外反する部分があり、器形がゆがんでいる。

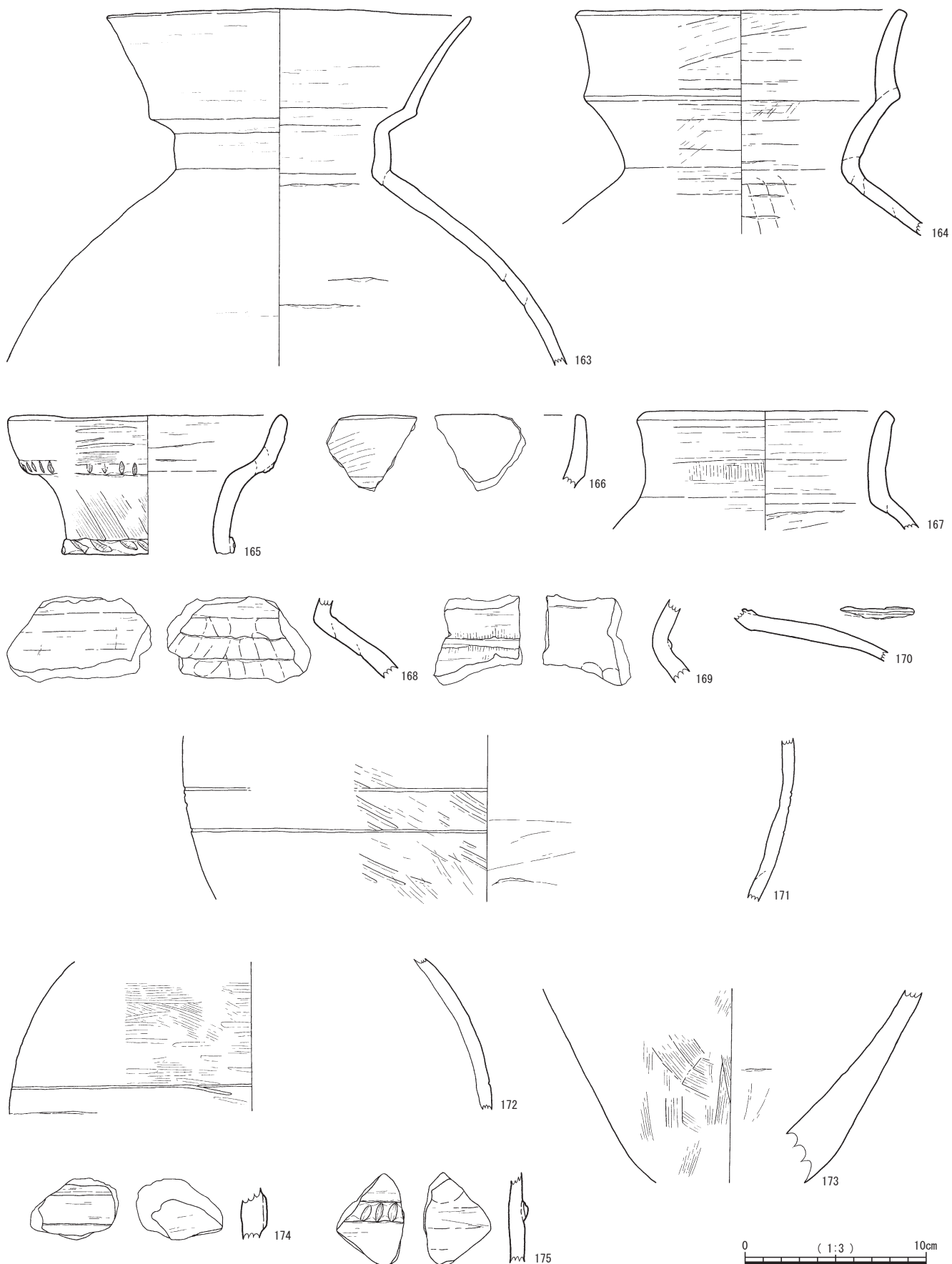
149～159は、竪穴建物跡2号の出土例と類似しており、丸底甕（甕B類）に該当すると考えられる。いずれも器壁が薄く、内面にケズリ調整が施されるものが多い。149は口縁部～肩部まで残存しており、丁寧な作りである。内外面とも屈曲部の稜が明瞭であり、口縁部は頸部から直線的に外傾する。外面は横位のナデ調整を主体とし、頸部や胴部に部分的に縦位のハケ目が残る。内面は屈曲部以下は斜位のケズリ調整のち、ナデ調整が加えられている。部分的に接合痕がみられる。150～156は、口縁部片である。150～152は口唇端部にナデ調整が

加えられ、断面方形を呈し、153～156は端部が丸く収められている。150は屈曲部の稜が緩く、直線的に口縁部が開く。外面の口唇部は成形時のナデ調整により帯状にわずかに凹んでいる。152は、口唇部にゆがみがある。胎土には2・3mm程の長石や白色礫を多く含み、器面に露出する。153はやや内湾気味に立ち上がり、154・155は大きく外反または外傾する。また、154の頸部の屈曲部には、接合痕がみられる。

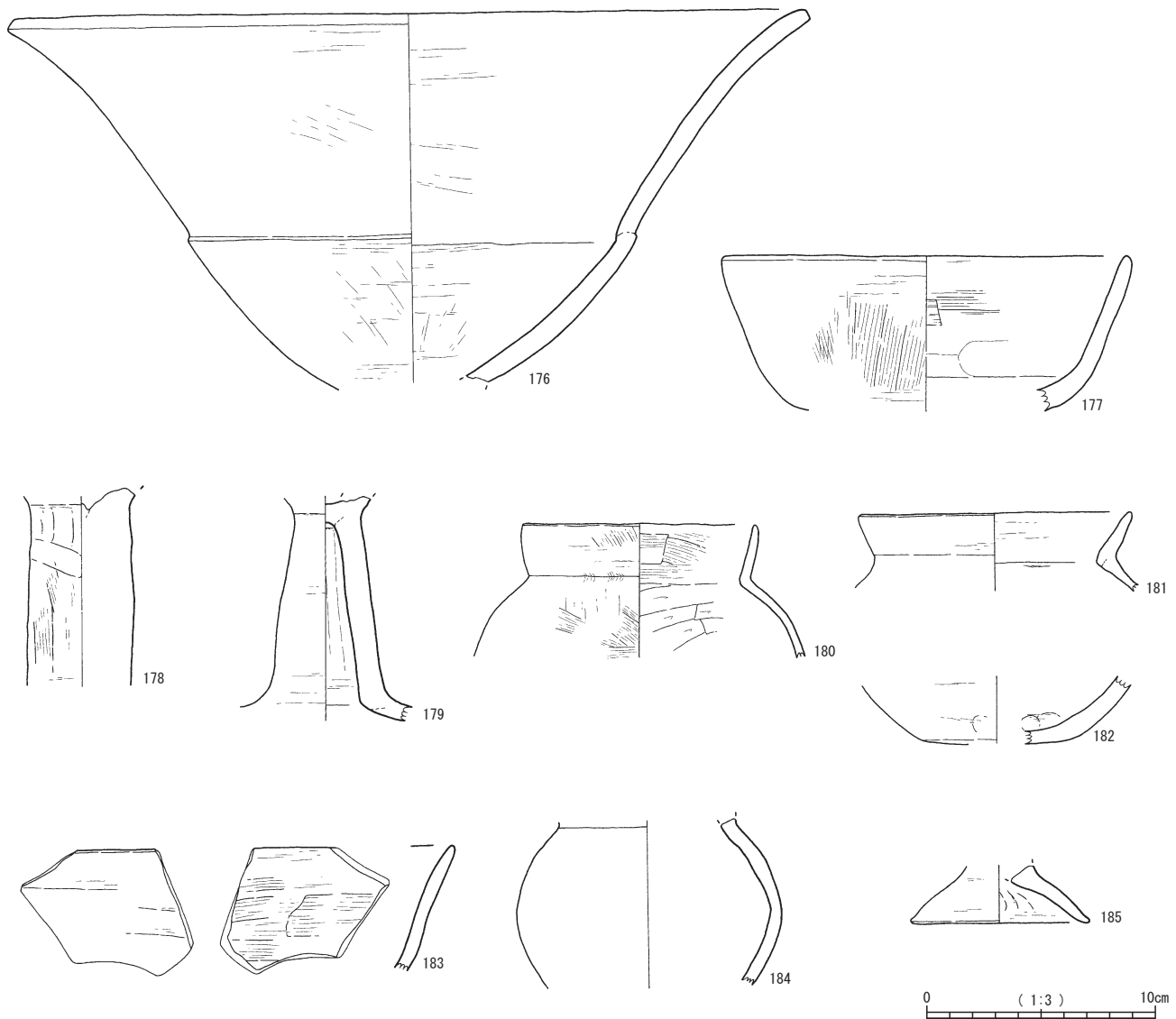
157は頸部～胴部である。胎土には3～5mm程のやや大きめの長石を多量に含む。外面は斜位のハケ目残り、複数方向に切り合っている。内面は縦位のケズリ調整で、頸部付近は横位のナデ調整である。ケズリ調整が密に入っているが、器壁は肩部ではやや薄いものの胴部は厚めである。158は、頸部付近である。外面には細かいハケ目が残っており、頸部の稜線付近のみ横位のナデ調整である。内面は屈曲部付近の指ナデ調整と、その下



第37図 遺物集中2 出土遺物4



第38図 遺物集中2 出土遺物5



第39図 遺物集中2 出土遺物6

位のケズリ調整の境にわずかな稜がみられる。159は底部である。器壁は厚手であるが、大きさから甕形土器と判断した。胎土はやや軟質で、まばらに砂粒を含む。外面にはハケ目、内面には指ナデ調整が確認できる。

160～162は、胴部～底部である。底径が小さく、胴部への立ち上がりでありあまり膨らまないことや、底面が上げ底になることを考慮し、甕形土器と判断した。160は底面が平底で、直線的に立ち上がる。比較的器壁は厚く、しっかりした作りである。外面はハケ目、内面にはナデ調整および内底面付近に指頭押圧がみられる。外面にボタン状に粘土が張り付いている。161・162は、若干上げ

底になるタイプである。161は内外面とも摩滅しており部分的なナデ調整しか確認できないが、内底面には指頭押圧及び指ナデ痕がみられる。162は器壁が厚く、重量感がある。外面にはハケ状の工具によるナデ調整が部分的にみられる。

壺形土器（第38図 163～175）

163～167は口縁部～胴部片で、163～166は二重口縁壺、167は直口の短頸壺（壺A-1類）である。165・166は竪穴建物跡2号でも出土している壺C-2類と類似するが、163・164は同じ二重口縁壺でも、屈曲から口唇部が外反する点で形態が異なっている。また、163は色調

に赤みが強く、堅穴建物跡2号で出土した大型の二重口縁壺とも類似するが、164は色調が明るい。163は器壁が薄く、口唇部は細く舌状に仕上げられている。口唇部はゆがみがあり、上面観は楕円形を呈する。残存部分が多い長軸側で図化した。短軸の場合は、直径18.6cmと直軸より約2cm小さい。頸部の稜は明瞭で、丁寧に仕上げられている。内外面とも摩滅が激しく、内面に接合痕が確認できた以外は詳細な調整は不明である。胎土が粗く、3～5mm程の長石を多量に含む。164は、口唇部はナデ調整によりわずかに面を有し、断面が隅丸方形に仕上げられている。内面には接合痕が明瞭に残っており、頸部～肩部にかけては細かく粘土が積み上げられていることがわかる。内外面はナデ調整を主体とし、内面肩部には縦位の指ナデが確認できる。胎土は比較的精製されているが、赤褐色及び白色の礫を多量に含む。

165は、口縁部下の屈曲部及び頸部に1条の突帯がめぐるタイプである。ハケ目が明瞭な工具による刻みが施されており、口縁部突帯の刻みはほぼ垂直であるのに対し、頸部の刻みは斜位である。口唇部は平坦ではなく、ややゆがみがある。口縁部外面には水平方向のタタキ痕が残り、その後ハケによるナデ調整が加えられている。また、頸部には斜位のハケ目が明瞭に残っている。内面は摩滅が激しく、調整痕はほとんど観察できないが、部分的に接合痕がみられる。166は口縁部小片であるが、屈曲部分が残存しているため二重口縁壺と判断した。外面にはわずかに右上がりのタタキ痕みられる。167は全体的に厚みがあり、稜線も緩やかである。外面は横位のナデ調整を主体とし、頸部に部分的に縦位のミガキ調整がみられる。内面の頸部下には接合痕が残っており、肩部以下はケズリ調整である。

168～170は、頸部付近の破片である。168は、内面には接合痕と縦位の指ナデ痕が明瞭で凹凸がある。全体的に器壁は厚い。169は頸部に細めの粘土紐を突帯状に巡らせ、上下をハケにより押さえつけている。170は頸部に突帯が巡り、上面に沈線が施されるため、2条突帯のようにみえる。胎土は砂粒が多くザラザラした質感であるが、器壁は薄い。内外面とも摩滅が激しく、調整痕は不明瞭だが、外面にはハケ目が部分的に確認できる。

171・172は、胴部に2条の沈線を有する胴部片である。いずれも大型であるが器壁は比較的薄く、赤褐色の色調で胎土に2・3mm程の白色礫を多く含む。外面には水平ないしは右下がりのタタキ痕が明瞭に残っており、さらに上からハケ状の工具でナデ調整が加えられている。171は胴部の最大径よりやや下位に、172は胴部最大径とほぼ同位置に沈線が施されている。

173は胴部～底部付近である。底面は欠損しているが、丸底に近い形状と想定される。外面には複数方向のハケによるナデ調整が施されている。

174・175は突帯である。174は、扁平で幅広の粘土を薄く貼り付けたのみで、刻み等は加えられていない。175は、かまぼこ状に緩やかに貼り付けた粘土紐に刻み目を施している。内面は、指ナデ調整である。

高坏（第39図 176～179）

176は高坏A類の坏部である。自然層であるⅣ層に近い、最下面でほぼ潰れたような状況で出土した。口径は復元で35.2cmをはかり、脚部との接合部分で剥離している。中位の屈曲部から大きく開く器形で、屈曲部に接合面があり、わずかに段がある。内外面とも器面が荒れているが、ナデ調整で仕上げられている。177は小型の高坏の坏部と考えられ、皿状に平たく、ゆるく屈曲して口縁部がほぼ直口するタイプと考えられる。外面には細かいハケ目がみられ、内面も丁寧なナデ調整である。器壁は比較的厚い。

178・179は脚部である。178は、柱状に残存する中実脚である。上面は坏部との接合面で剥離しており、外面にわずかにくびれが確認できる。外面は指ナデ調整によって、器面に緩やかな凹凸が生じている。179は直線状に底部に向かって広がるタイプで、上部は坏部との接合面で剥落している。胎土は精製されて砂粒をほとんど含まず、軟質である。内面には、坏部との接合で充填された粘土の接合痕がみられる。また、脚部の下位にも接合痕が確認できる。さらに、中空構造を成形する際の調整痕が縦筋状に残っている。

小型器種（第39図 180～185）

180・181は、小型丸底壺の口縁部～胴部である。いずれも胎土は砂粒が細かく精製されており、薄い作りである。また、口唇部は細い舌状でわずかに内湾し、頸部に明瞭な稜をもつ。180は、外面及び口縁部内面には複数方向の細かいハケ目が残っており、胴部内面は斜位のケズリ調整である。181は、口縁部が直線的に外傾する。摩滅が激しく調整痕はほとんど確認できないが、頸部下に接合痕が残っている。182は、小型丸底壺の底部付近と考えられる。胎土は5mm大の長石をまばらに含むが、胎土は細かい。器壁は厚手であり、色調も暗い。183は胎土は軟質で、砂粒の細かい粘土である。頸部付近で欠損しており、口縁部がやや長いタイプの小型丸底壺と考えられる。184は、小型丸底壺の頸部～胴部である。胎土は軟質だが、2・3mm大の円礫を多く含む。頸部の接合面で剥離しており、外面に稜が確認できる。表面は内外面とも摩滅している。185は小型の台付鉢の台部と考えられる。胴部との接合面で剥離している。外面はナデ調整により平滑に仕上げられているが、内面は指頭押圧に近い指ナデのため、やや凹凸がある。

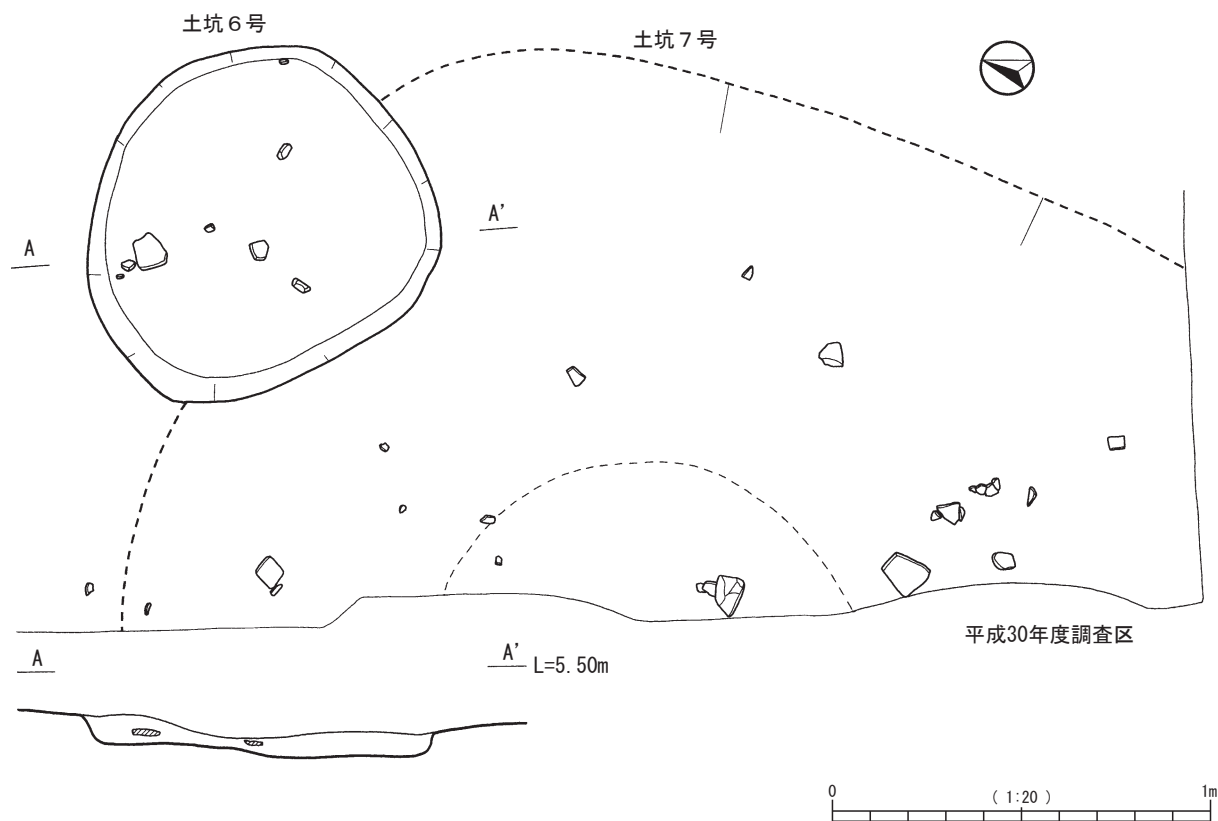
(3) 土坑6号 (第40図)

C-21区, II c層で検出された。北側にピット226と243が近接している。平面形は, 約100cm×95cmのほぼ円形を呈する。断面形は, 深さ約7cmの浅いレンズ状を呈する。埋土中から摩滅した土器片が数点出土し, いずれも古墳時代の土器と考えられるが, いずれも胴部片であり, 図化に至らなかった。

(4) 土坑7号 (第40図)

C-21区, II c層で検出された。土坑6号に切られて

いる。床面付近までほぼ削平されており, 埋土はわずかに2・3cm残存するだけであった。そのため, 想定されるプランを破線で図示した。検出時の平面形は楕円形状で, 土器が点的に広がるように出土していた。埋土は, しまりがやや強い, 暗褐色(10YR3/3)の砂質シルトであった。西側は攪乱等により, 検出できなかった。南側は調査区外のため, さらに南側に広がる可能性もある。遺物は古墳時代の土器と考えられるが, いずれも胴部片あり, 図化には至らなかった。



土坑6号

[埋土]

①砂質シルト

色 調: 黄褐色 (2.5Y 5/3)

特 徴: 径5mm大のマンガン粒
をまばらに混

土坑7号

[埋土]

①砂質シルト

色 調: 暗褐色 (10YR 3/3)

しまり: やや強

第40図 土坑6・7号

3 包含層出土遺物（第41～43図 186～214）

古墳時代の遺物が出土したⅡc層を中心に、Ⅱ層全体で13,375点の破片が出土した。基本的な器種組成は、遺構内出土資料とほぼ同じである。接合作業を経て、特徴的なものを図化したのが破片資料が多く、完形復元できた資料はなかった。ただし、一部の甕形土器や高坏、小型器種については器形がある程度復元できたものもある。時期は、堅穴建物跡や遺物集中と同じく古墳時代前期に比定される。なお、一括取上以外の座標が分かる資料については、第11図に示した。

包含層出土遺物は、古墳時代の遺構がまとまっている、調査区東側、C・D-19～21区周辺に偏る傾向がみられる。

甕形土器（第41図 186～194）

186・187は器壁の薄さや色調的な特徴から、丸底甕ないしは長胴甕と考えられる。いずれも精製された胎土で、砂粒をほとんど含まない。186は薄手で丁寧な作りであるが、内面は器面が剥落し調整痕は観察できない。外面には胴部にハケ目と、頸部に横位のナデ調整が確認できる。堅穴建物跡2号の出土遺物との比較から、甕B類に比定される。187は頸部から緩やかに内湾し、口唇端部に平坦面を有する。また、口唇部のナデ調整により内外面に張り出しを持つ。内外面とも細かいハケ目がみられ、内面は複数方向に切り合っている。口唇部形態が特徴的であり、A地点の出土事例と比較すると甕C類に含まれると考えられる。

188～191は口縁部片である。厚手で外傾ないしは外反する器形から、甕A類の口縁部と想定される。188・190は口唇端部に平坦面を有する。190は胎土が軟質である。189・191は外面に左上がりないしは水平方向のタタキ調整を有するもので、189は口唇端部は丸く収められている。191は口径復元はできないが破片のカーブが緩い点から、大型になると考えられる。口唇部はナデ調整により平坦に仕上げられている。外面はタタキ調整の後、ハケによる縦位のナデ調整を主体とするが、口唇部下は横位のナデ調整である。

192～194は脚部である。192は全体的に丁寧な作りでゆがみが少なく、端部もナデ調整により方形に仕上げられている。外面は縦位のナデ調整が施され、ナデの単位ごとにやや平坦面をなす。内底面は接合痕や指頭押圧がみられるが、下半はハケによる横位のナデ調整である。193は一部しか残存していないが、器高が高く、脚部がスカート状に広く開く大型の脚部と考えられる。外面は、斜位のケズリ調整が施される。端部の角は丸みを帯びるが、接地面付近にわずかに平坦面をもつ。194は、胎土にやや砂粒が目立つ。端部はナデ調整により平坦面を持ち、内面には斜位の指ナデ調整が明瞭にみられる。

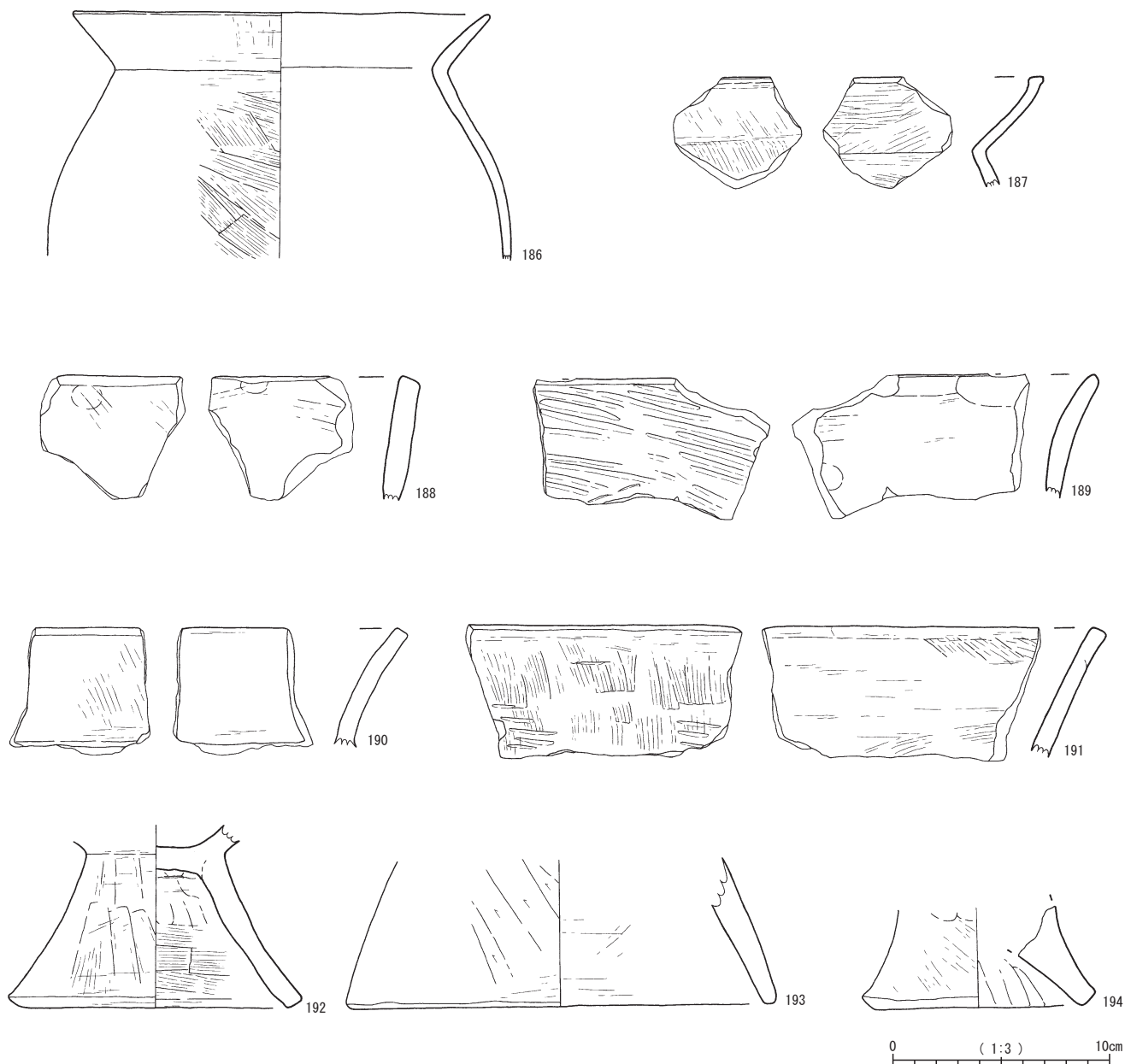
壺形土器（第42図 195～206）

195・196は頸部片である。195は上部が接合面で剥落

しており、擬口縁状をなしている。堅穴建物跡等の類例から、二重口縁壺（壺C類）の頸部と考えられる。色調は赤みが強く、胎土は軟質で白色礫をまばらに含む。内外面とも摩滅している。196は屈曲部分の外面にヘラ状工具による刺突が連続して施されている。刺突の内部には、工具の痕跡が明瞭にみられる。胎土は砂粒が多く、やや粗い。外面には部分的に水平方向のタタキ痕が薄く残っており、その上からハケによるナデ調整が加えられている。ハケ目の間隔が広く、刺突文内の工具痕とハケ目の間隔が類似しており、同一の工具によるものと考えられる。

197～202は突帯である。突帯はバリエーションに富んでおり、粘土帯の厚みや幅、刻み等に複数の組み合わせがみられる。遺構内からも突帯を伴う胴部片が出土しており（65・122・175など）、器形から壺形土器の胴部に付された突帯と考えられる。しかし、B地点の復元資料の中では、甕形土器・壺形土器のいずれにも明瞭に突帯を施したものはみられず、器形と突帯の組み合わせについては把握できなかった。197・198は幅広で薄い突帯を1条巡らせ、198はさらに刻み目を施す。197は、軽石状の発泡した礫をまばらに含む。199は、緩やかな三角形状を呈する1条の突帯に刻みを施している。刻みが切り合っている部分もあり、浅い沈線状の筋も横位に巡るため、2段階で施文が行われた可能性もある。突帯の上下は、ナデ調整により仕上げられている。200～202は、幅広の突帯の中央に沈線を施し、2条突帯状をなすものである。200は内外面とも丁寧なナデ調整あり、外面の突帯より上位は縦位のナデがみられる。202は外面にわずかにタタキ痕がみられる。いずれも内外面ともナデ調整であり、丁寧に仕上げられている。

203～206は底部であり、203・204は丸底あるいは尖底、205・206はレンズ状を呈する。203は外面が部分的に平坦面をなし、部分的に筋状の凹みが確認される点からタタキ成形の後にナデ調整が施されたと考えられる。胎土は軟質で、2・3mm大の礫を多量に含むため、脆い。204は胴部への立ち上がりのゆがみが大きく、断面Aのように直線的に薄く立ち上がる部分もあれば、断面Bのように厚く緩やかに立ち上がる部分もある。内底面には指頭押圧によるくぼみがみられ、立ち上がりにかけて指ナデ調整が施される。胎土に含まれる8mm程の灰色円礫が露出している。205は、器壁が厚く胴部へ緩やかに立ち上がる。外面にはタタキ成形の痕跡が一部残存しており、その上からハケ目やケズリに近い縦位のナデ調整が確認できる。内底面付近には、連続した指頭押圧による凹みがみられる。206は底面にわずかに平坦面を有するが全体的に器形のゆがみがあり、安定しない。内底面には、指頭押圧が連続して加えられている。



第41図 古墳時代 包含層出土遺物 1

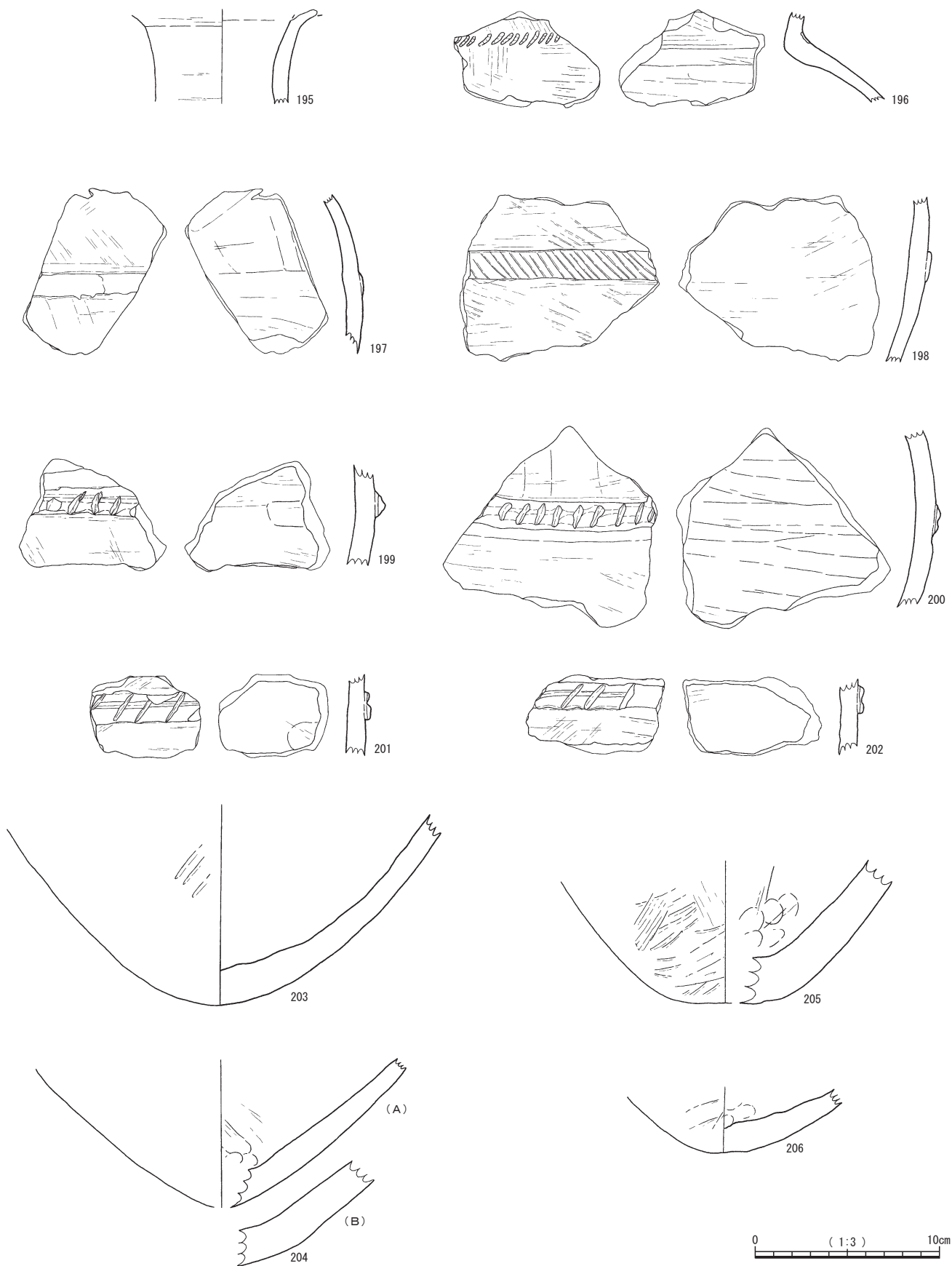
高坏（第43図 207～211）

器形がある程度復元できており、遺構内出土遺物と同様に、大型で厚手の高坏A類（207）と小型で精緻な高坏B類（208）がある。

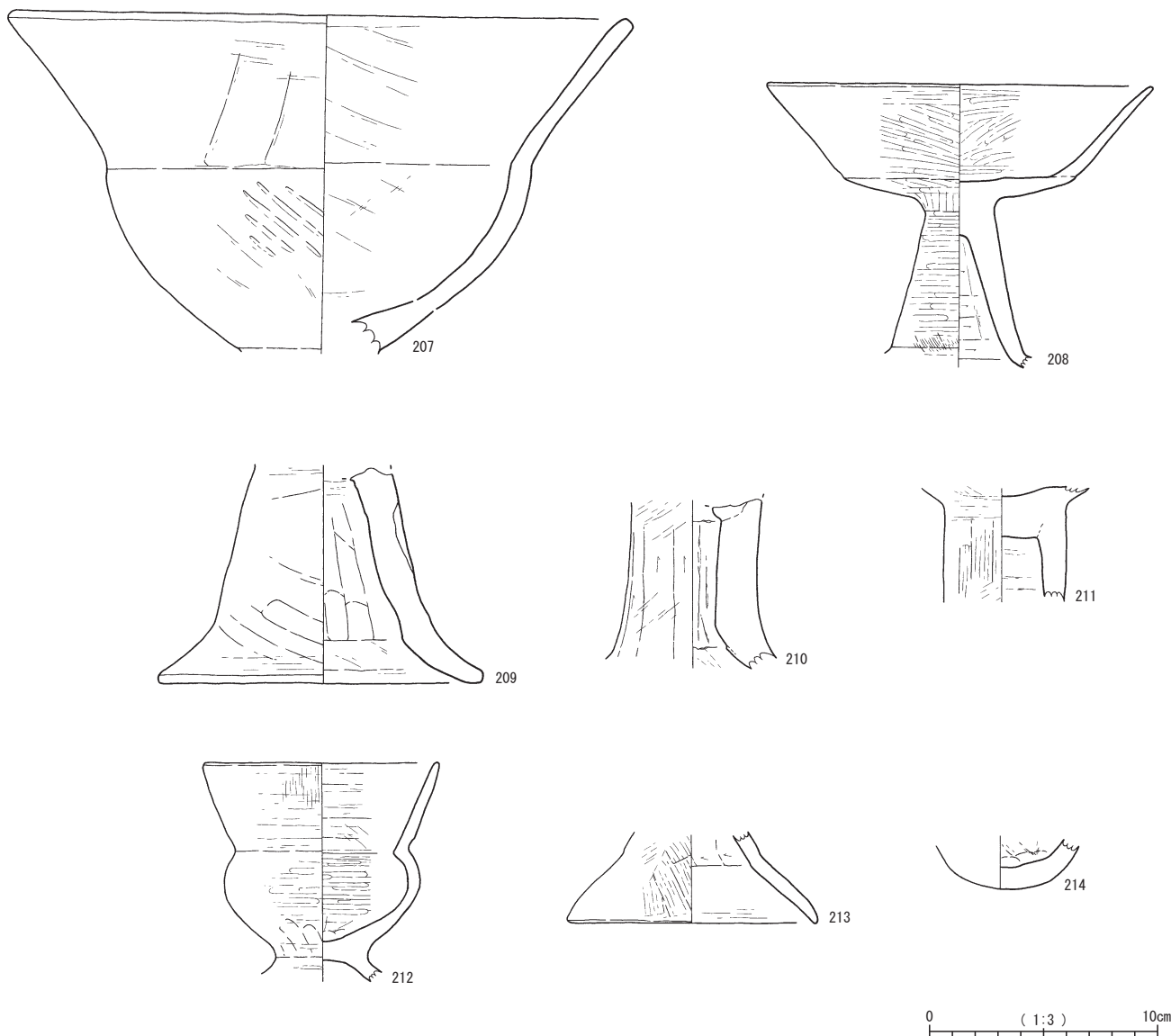
207は胴部および口縁部付近に部分的にタタキ痕が残っており、口縁部外面は屈曲部からかき上げるような強めの指ナデ調整で仕上げられている。稜はやや緩く、口唇端部も丸く収められている。208は、胴部屈曲部から広く開く器形で、口唇部は細く舌状に仕上げられている。胎土は比較的精製されており、3～5mm程の長石を多く含む。内外面とも丁寧なミガキ調整であり、横位ま

たは斜位を基本とする。外面の坏部と脚部との接合部分は、縦位のミガキ調整である。また、外面の下端にわずかに細かいハケ目が残っている。脚部の内面は横位のケズリ調整であり、工具を止めた際の縦筋がみられる。

209～211は脚部である。209は坏部との接合部で剥落している。本遺跡の中でもかなり大型で、器壁も厚くしっかりした作りである。胎土は器壁が厚いのに対し、胎土の粒径は小さい。下部はスカート状に開く器形で、屈曲部から胴部にかけて外面には斜位の指ナデが連続して施されている。内面は縦位のナデ調整が残っており、やや凹凸がある。大型の坏部と組み合わさる脚部と考え



第42図 古墳時代 包含層出土遺物 2



第43図 古墳時代 包含層出土遺物 3

られる。210は外面は縦方向のケズリ調整の後にナデ調整が施され、ケズリ調整の単位ごとに面をなす。内面は脚部を筒状に成形する際の、絞ったような縦方向の筋が入る。全体的に器壁が厚く、重量感もあり、砂粒が目立つやや粗い胎土である。211は、外面はハケによる縦位のナデ調整の後に坏部と脚部の接合部は横位のナデ調整が施され、緩やかに凹む。内底面には接合痕があり、筒状の脚部を充填し、坏部と接合していることがわかる。胎土には赤褐色粒を多量に含み、1～3mm大の長石も露出している。

小型器種（第43図 212～214）

212は小型の台付壺である。底部は欠損しているが、胴部以上はほぼ残存している。全体的に薄く丁寧につくられており、屈曲部の稜も明瞭である。頸部以上は細かい横位のナデ調整が内外面とも明瞭であるが、外面のみ

一部縦位のハケ目調整が残存する。胴部以下は、内外面とも横位の細かいミガキ調整である。脚部と胴部との接合部分の外面は、縦位の指ナデ調整が加えられている。胎土は精製されており、泥質で細かい粒子の粘土を基本に、2・3mm程の長石を多く含む。213は、台付鉢あるいは小型の高坏の脚部と考えられる。薄く丁寧に仕上げられているが、胎土は3mm程の長石を多く含み、器面に露出する。外面には、斜位のハケ目が残る。内面の上半は縦位のケズリ調整による稜があり、下端に向かって直線的に開く器形を呈する。214は、小型丸底壺の底部と考えられる。内面には指頭押圧が明瞭に残る。小型器種の中では器壁は厚手であるが、胎土は精製されており、砂粒も少ない。

第3節 古代～中世の調査成果

1 調査の概要

遺構は確認されず、包含層からの遺物出土のみである。古代～中世の遺構は、A・B地点はほとんどなく、C・D地点で検出されている。今後の報告書を参考とされたい。

2 遺物（第44図・第45図 215～226）

包含層中の出土遺物は、25点と非常に少ない。図化した遺物は比較的残存状況の良い、土師器（皿・坏）、須恵器、摺鉢である。いずれの資料も完形復元には至らなかったが、瓦質土器の摺鉢がある程度まとまって出土している点は特筆される。また、遺物の出土位置の座標が分かるものは第46図に示した。

土師器（第44図 215～217）

215は坏，216は皿の破片であり、いずれも糸切り底である。217は表土からの出土であるが、甕形土器の例が少ないため図化した。内外面とも、ハケ目が残存している。

須恵器（第44図 218）

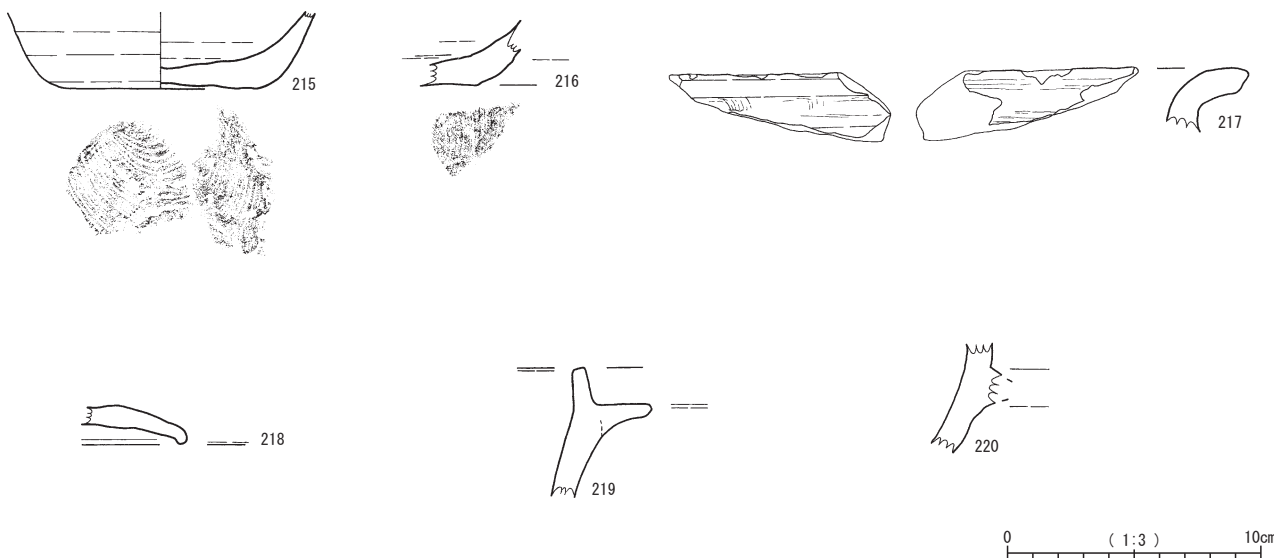
蓋片である。端部の色調が部分的に暗色を呈する。

瓦質土器（第44図・第45図 219～226）

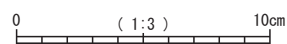
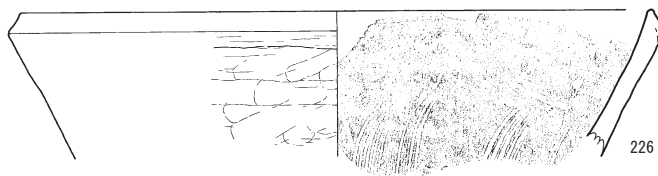
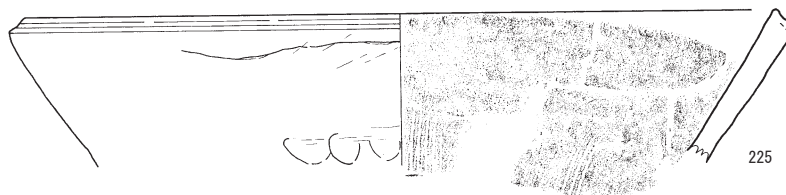
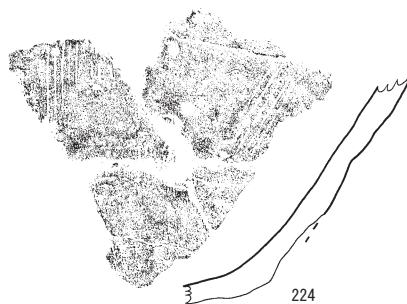
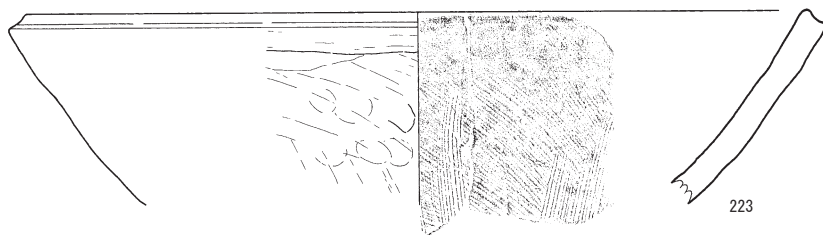
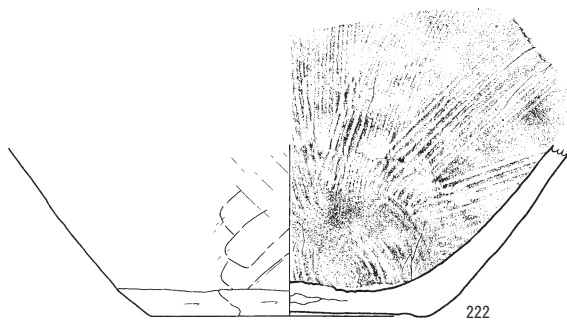
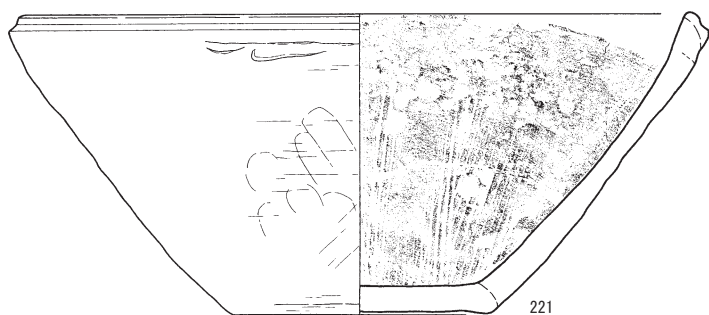
219・220は、羽釜形土器である。219は胎土に長石を多量に含み、断面に露出している。また、鏝の下面に接合痕が残る。220は鏝が欠損しているが、下半にはス

が付着している。中世初頭～前半頃と考えられる。

221～226は摺鉢である。色調で2種類に分けられ、221・222・224・225は黄褐色、それ以外は灰色を呈する。221は口唇部の外面側が1段低くなり、口縁部付近に接合痕が明瞭に残る。外面は指ナデ調整で仕上げられている。内面の摺り目は、見込みに同心円状を呈する摺り目と、体部には、12本を1単位とする摺り目が放射状に施される。223も221と同様に口唇部が外面側が1段低くなり、外面は指ナデ調整で仕上げられる。口唇部下には、帯状に横位のナデ調整が施される。内面の摺り目は放射状になると考えられ、10本を1単位としている。222は、底面付近は焼きぶくれがみられる。外面は粗いナデ調整であり、底面付近はヘラ削りで成形されている。見込みには同心円状の摺り目が施され、体部には10本を1単位とする摺り目が放射状に施されている。223は、口唇部は外面側が1段低くなる。外面は指ナデ調整で仕上げられ、口唇部下は1条横位のナデ調整が施される。内面の摺り目は放射状になると考えられ、10条を1単位としている。224は外面に部分的にスがつき、表面が剥離しており、二次被熱によるものと考えられる。225・226は、口唇部の外面側が1段低くなる。外面は指ナデ成形であり、部分的に指頭押圧がみられる。内面は摺り目の先端部分が残っており、10本前後を1単位とする摺り目が放射状に施されていると考えられる。



第44図 古代～中世 包含層出土遺物 1



第45図 古代～中世 包含層出土遺物 2



第46図 近世以降遺構配置図及び古代以降包含層出土遺物位置図

第4節 近世・近代の調査成果

1 調査の概要（第46図）

掘立柱建物、土坑、溝状遺構が、Ⅱb層及びⅡc層で検出された。遺構の埋土中からは、陶磁器や摩耗した土器も出土した。中には、磨耗した古墳時代の土器片のみが出土するものであり、遺構内遺物から時期を明確に決定することは難しかったため、埋土中に旧水田層を含むものを、近世以降と判断した。

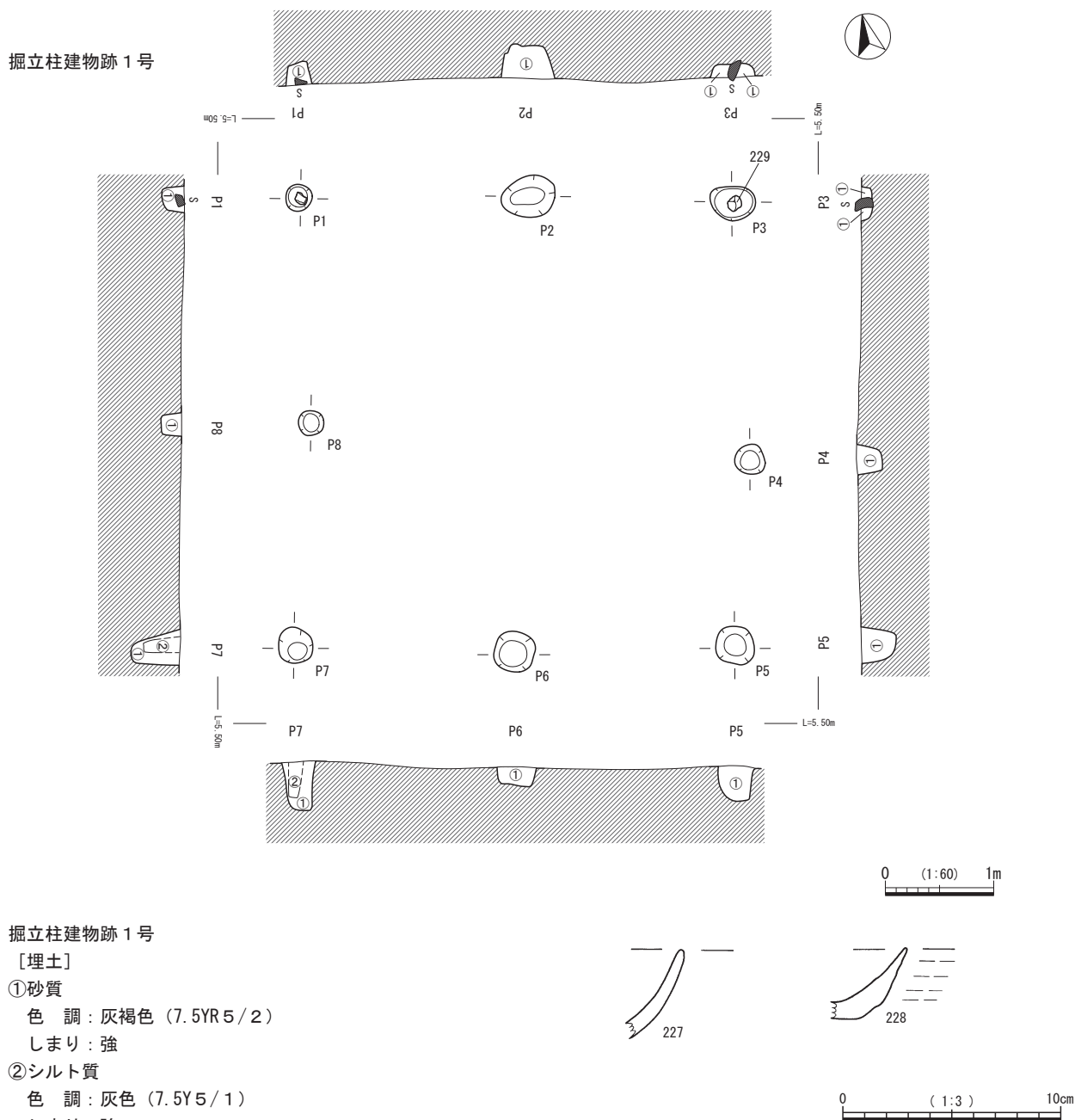
近世～近代の遺物は、一部Ⅱb層とⅡc層で出土しており、攪乱や後世の耕作等により部分的に混入した可能性もある。

2 遺構

（1）掘立柱建物跡（第47図～第51図）

掘立柱建物跡は、4棟が検出された。いずれも、調査区中央のC・D-17～19区付近に位置し、形状・規模等は類似している。埋土は旧水田層を含むため近世以降であるが、近代以降の遺物が出土していない点から、近世の遺構と考えられる。近接してピットが多数検出されているが（第5節参照）、関係性は不明である。

梁・桁行は、柱穴の心-心間で計測した。また、小数点以下は、四捨五入して整数で記載している。



第47図 掘立柱建物跡 1 号及び出土遺物 1

掘立柱建物跡 1 号（第47図）

D-18・19区のⅡc層上面から検出された。2間×2間の建物で、平面形はほぼ正方形を呈しており、主軸は南北方向で、梁行（ピット1-ピット3）が400cm、桁行（ピット1-ピット7）が420cmを測る。ピット7のみ柱穴痕が確認された。ピットの平面形状は楕円形ないし円形であり、平均して径36×32cm、深さ24cmである。

出土遺物（第47図～第48図）

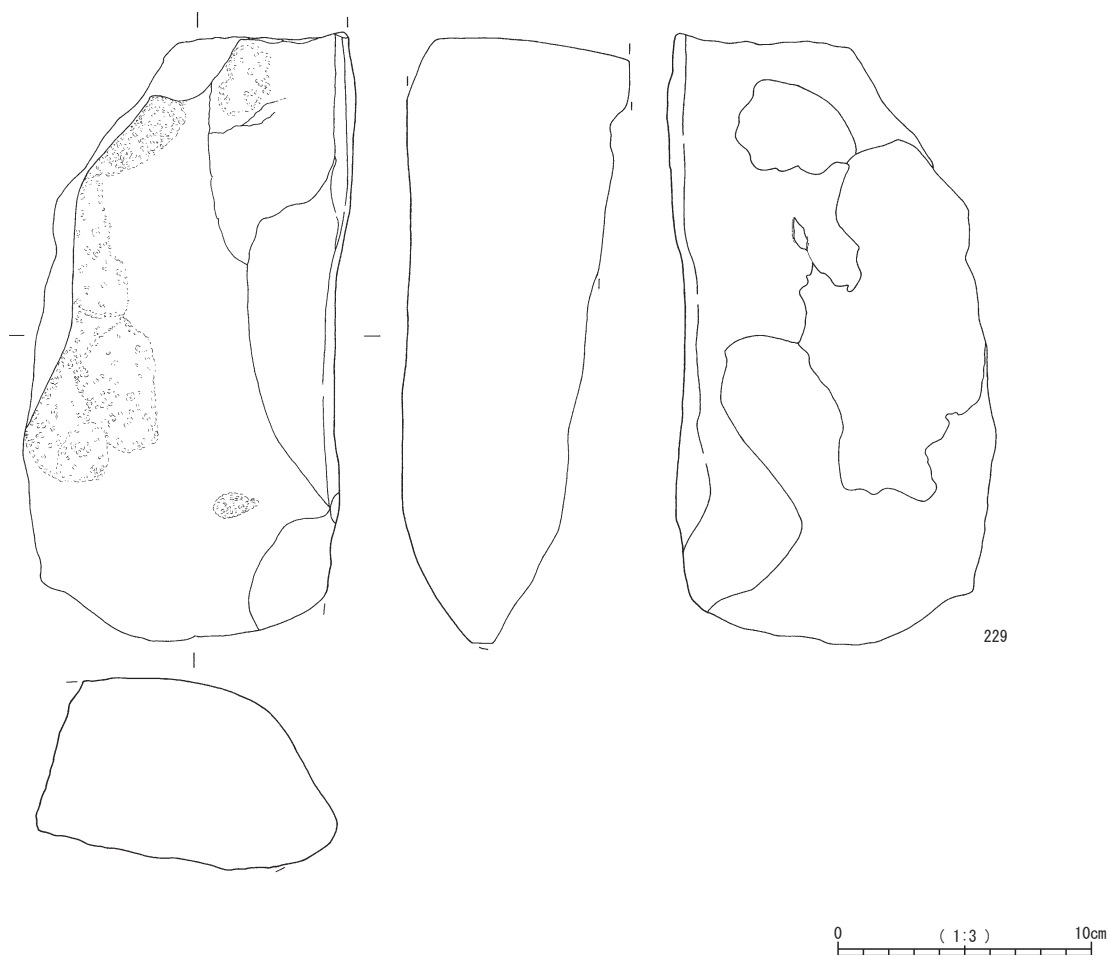
いずれも小片であり、特徴的な部位が残存するもののみ図化した。また、ピット1とピット3より安山岩製の台石が出土したが、ピット1の台石は剥落部分が多かつ

た。そのため、ピット3から出土したもののみ図化した。

227・228は土師器である。227はピット5、228はピット6で出土した。228の底面は摩滅により、糸切り等の痕跡は確認できない。227は、土師器の坏または碗である。破片のため詳細は不明であるが、硬質である。

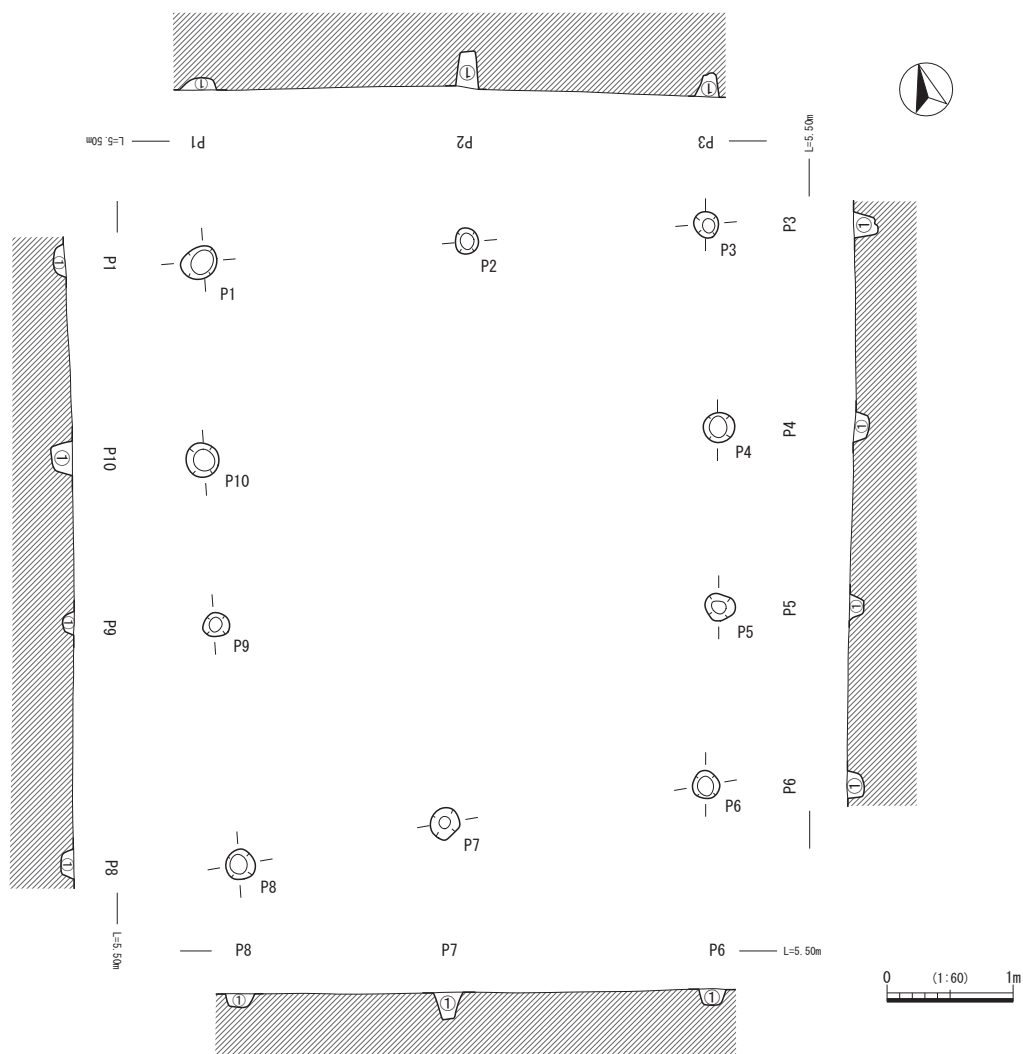
229は、台石である。底面が剥落しているが、表面に細かい敲打痕が認められた。残長23.9cm、幅13.0cm、厚さ8.8cm、重さ3.5kgである。

227・228とも破片であり、掘立柱建物の時期に伴うものであるかは不明である。



第48図 掘立柱建物跡 1 号 出土遺物 2

掘立柱建物跡 2 号



掘立柱建物跡 2 号

[埋土]

①シルト質

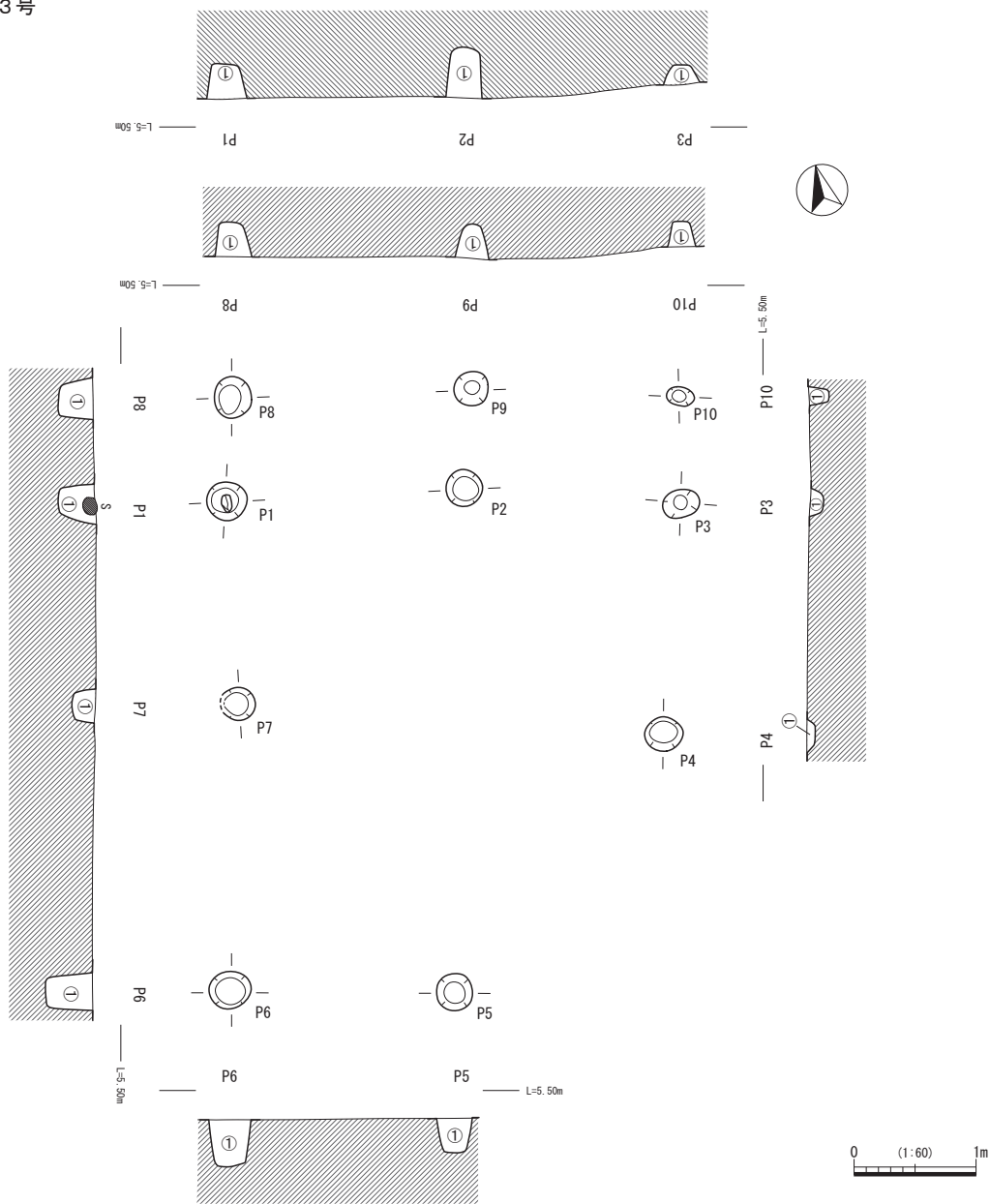
色 調：灰色（5Y6/1）

しまり：強

特 徴：小石や砂粒混

第49図 掘立柱建物跡 2 号

掘立柱建物跡 3 号



掘立柱建物跡 3 号

[埋土]

①砂質

色 調：灰黄褐色 (10YR 5/2)

しまり：強

特 徴：マンガン混在 II b 層

第50図 掘立柱建物跡 3 号

掘立柱建物跡 2 号（第49図）

C・D-19区のⅡc層で検出された。2間×3間の建物で、平面形はわずかに西側の列が長い台形を呈する。主軸は南北方向で、梁行（ピット1-ピット3）が400cm、桁行（ピット1-ピット8）が480cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。ピットの平面形は楕円形ないし円形であり、平均して径24×22cm、深さ15cmである。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡 3 号（第50図）

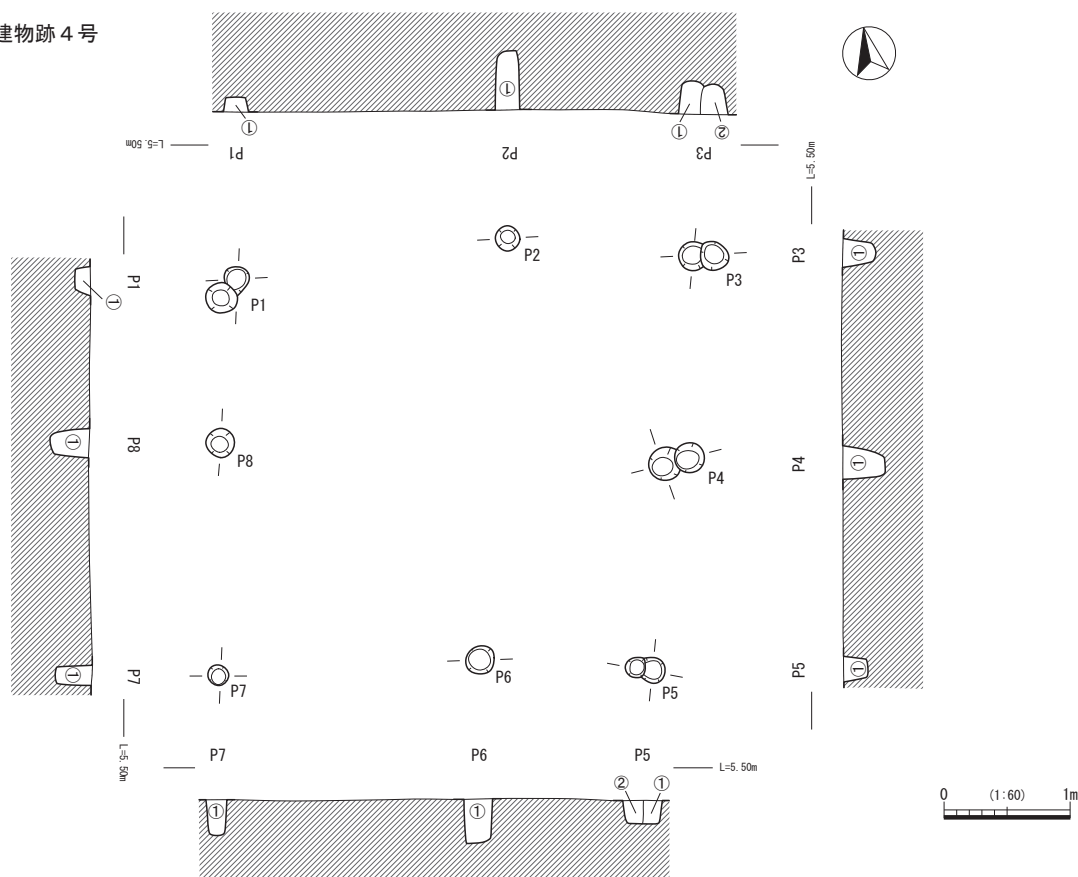
D-18区のⅡc層で検出され、掘立柱建物跡 1 号の西側に隣接する。2間×2間で、北側に庇を持つ。主屋の平面形は、ほぼ正方形を呈しており、梁行（ピット1-ピット3）が375cm、桁行（ピット1-ピット6）が400cmを測る。ピットの平面形は楕円形ないし円形であり、

平均して径31×28cm、深さ26cmである。庇の平面形は、長方形を呈しており、ピットの平面形は楕円形ないし円形と、主屋と違いはない。平均して径29×25cm、深さ25cmである。南東部のピットは、検出できなかった。

掘立柱建物跡 4 号（第51図）

C・D-17・18区のⅡc層で検出された。4棟の中で最も南側に位置する。2間×2間の建物で、平面形はほぼ正方形を呈する。主軸は南北方向で、梁行（ピット1-ピット7）が314cm、桁行（ピット1-ピット3）が360cmを測る。ピット1・3・4・5の4基のピットに建て直し痕が確認された。ピットの平面形状は楕円形ないし円形であり、平均して径30×22cm、深さ29cmである。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡 4 号



掘立柱建物跡 4 号

[埋土]

①砂質

色 調：灰褐色（7.5YR 5/2）

しまり：弱

②砂質

色 調：灰褐色（7.5YR 5/2）

特 徴：褐色土小ブロック少混

①よりマンガン数やや

少ない

第51図 掘立柱建物跡 4 号

土坑（第52図～第58図）

土坑は10基確認された。東側の2基を除いては、主にD-15区とD-17区に集中している。D-15区付近の土坑は形状が類似しているものが多い。D-17区付近の土坑は、形状や焼土・炭化物の分布からカマドの可能性が考えられる。遺物が出土した土坑は2基であった。

土坑8号（第52図）

D-15区、Ⅱc層で検出された。北隣に土坑10号と土坑13号が位置する。南側と北側の一部は現代の攪乱により消失している。平面形は、約110cm×85cmの円形を呈する。主体となる褐色土の埋土に、灰褐色土の小ブロックが混ざる。また、炭化物と小礫も少量混ざる。埋土内から、遺物の出土はなかった。

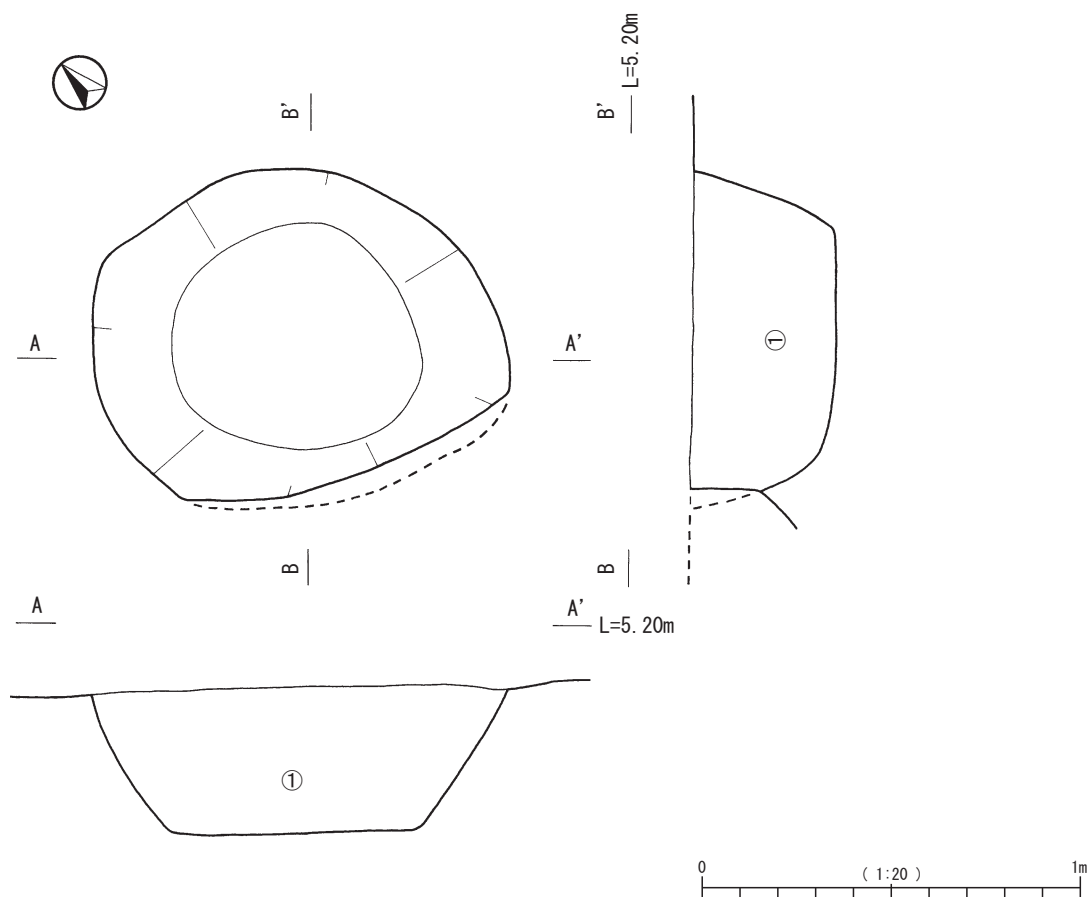
土坑9号（第53図）

D-15区、Ⅱc層で検出された。土坑8号の東側約2mに位置する。平面形は、約77cm×70cmのほぼ円形を呈する。南側の一部は現代の攪乱により消失している。断面形は、深さ約20cmの皿状を呈する。埋土内から遺物の出土はなかった。

土坑10号（第53図）

D-15区、Ⅱc層で検出された。東側の一部に隣接する土坑13号に切られている。平面形は、約58cm×53cmの円形を呈する。断面形は、深さ約8cmの皿状を呈する。

230は、埋土中から出土した磁器製のメンコである。コンプラ瓶を転用したもので、外面に施文された「JAPAN」の「PAN」の部分を使用されている。幕末～明治期のものと考えられる。



土坑8号

[埋土]

①砂質

色 調：灰褐色（7.5YR 5/2）

しまり：弱

特 徴：褐色土小ブロック

炭化物少混

第52図 土坑8号

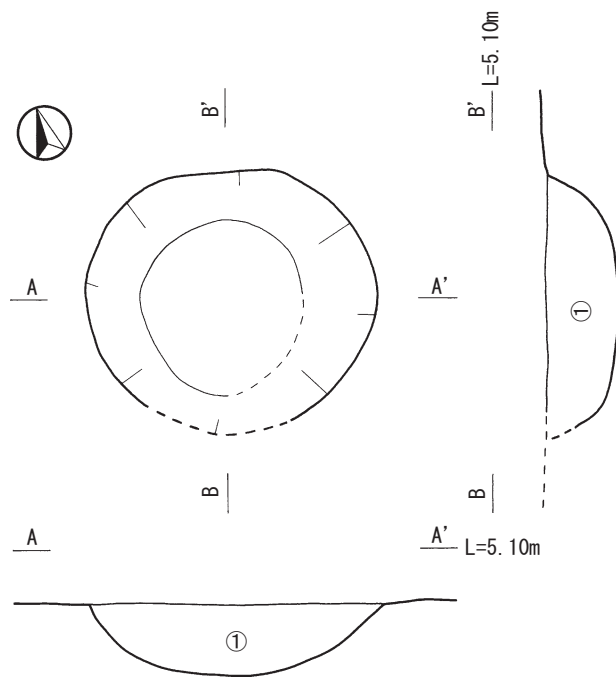
土坑11号（第54図）

D-21・22区，Ⅱc層で検出された。平面形は，約80cm×70cmの楕円形を呈する。断面形は，深さ約50cmの平底のバケツ形を呈する。埋土内から遺物の出土はなかった。

土坑12号（第54図）

D-17区，Ⅱb層で検出された。土坑15号の南西側で近接している。平面形は，約90cm×80cmの不定形であ

る。東側は一部攪乱によりプランが不明瞭であるが，西側の隅が部分的に方形を呈することから，本来は隅丸方形のプランであった可能性がある。断面形は，深さ約25cmの平底の深ナベ形を呈する。底面に不規則な段が確認され，堀り跡の可能性がある。埋土の中に灰を大量に含むことから，近接する焼土を伴う土坑中から掻き出した土が廃棄された可能性も考えられる。



土坑9号

[埋土]

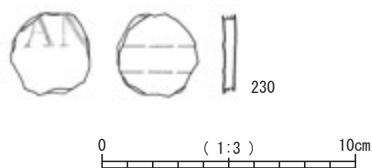
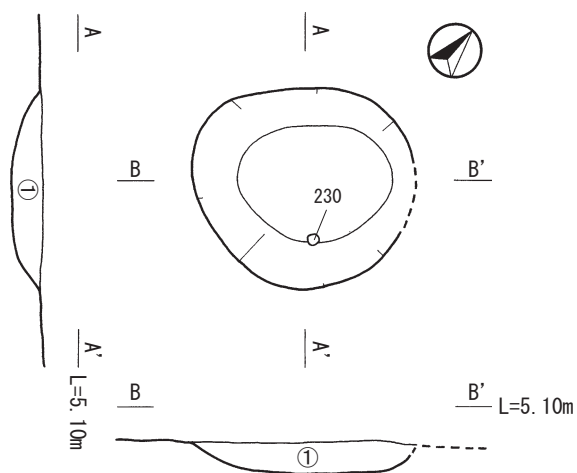
①砂質

色 調：灰黄褐色（10YR 5/2）

しまり：強

特 徴：小石

砂粒少混



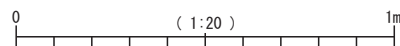
土坑10号

[埋土]

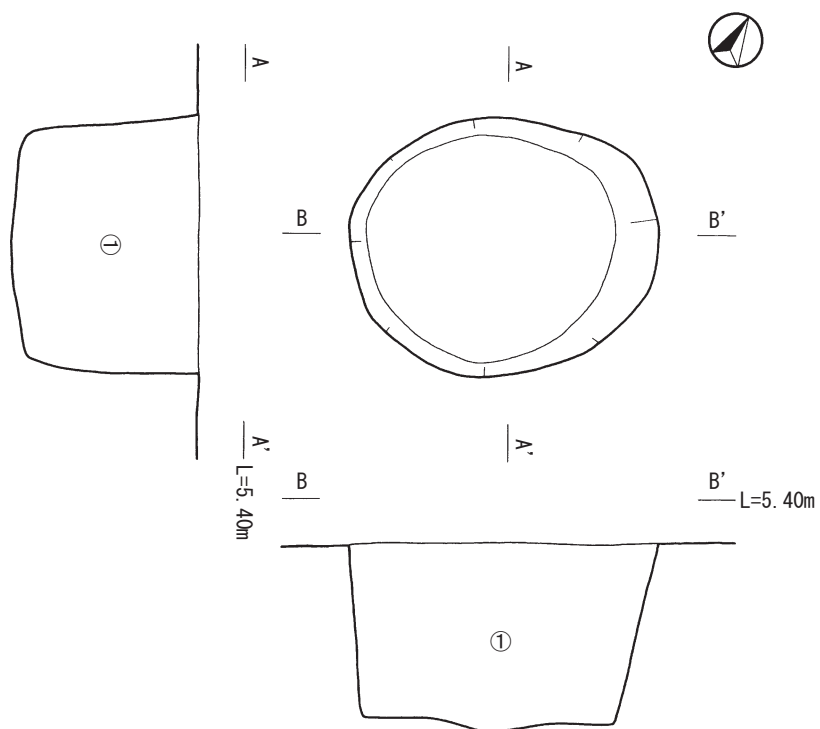
①砂質

色 調：灰褐色（7.5YR 5/2）

特 徴：小礫少混



第53図 土坑9・10号及び出土遺物



土坑11号

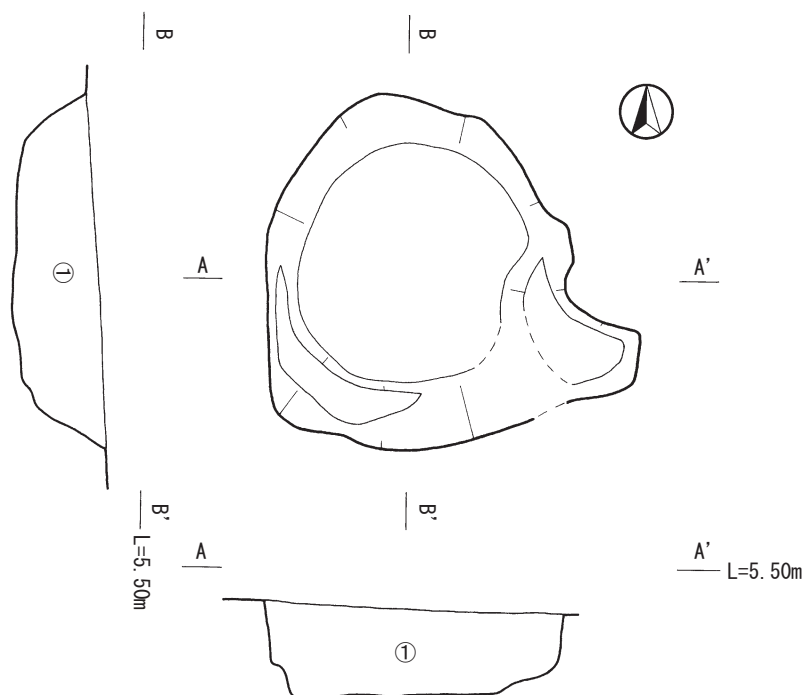
[埋土]

①砂質

色 調：灰褐色 (7.5YR5/3)

しまり：やや有

特 徴：小石少混



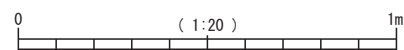
土坑12号

[埋土]

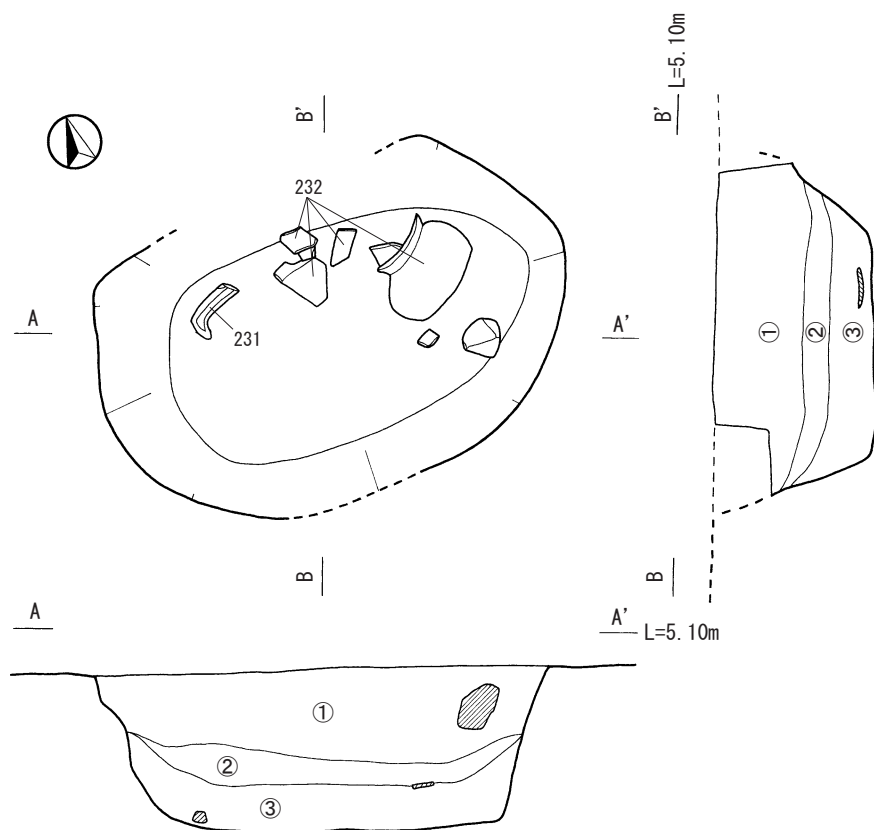
①砂質

色 調：黄灰色 (2.5Y5/1)

特 徴：細粒な灰が主体の土
褐色土・灰黄褐色土・
灰色土が小ブロック状
に多混
炭化物混



第54図 土坑11・12号



土坑13号

[埋土]

①砂質

色 調：褐灰色 (10YR 4/1)

しまり：弱

特 徴：灰多混

細粒な土器片

褐色土のブロック

小礫 (3cm大) 混

②砂質

色 調：黄灰色 (2.5Y 4/1)

しまり：強

特 徴：褐色土のブロック混

炭化物多混

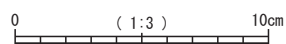
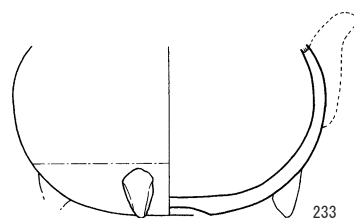
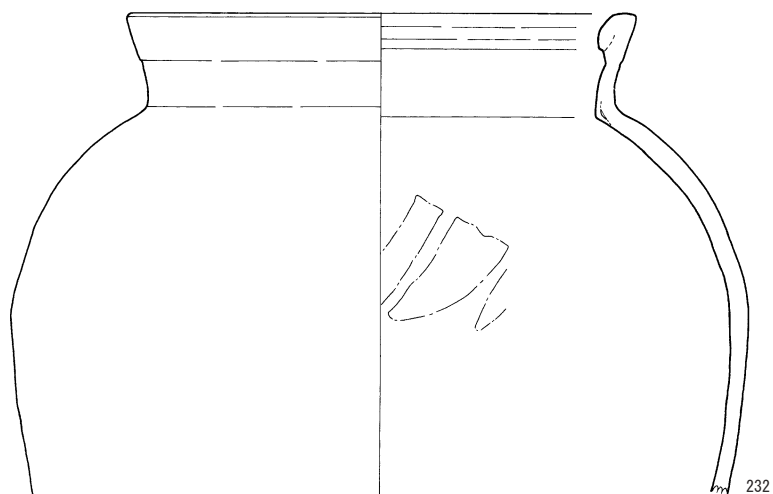
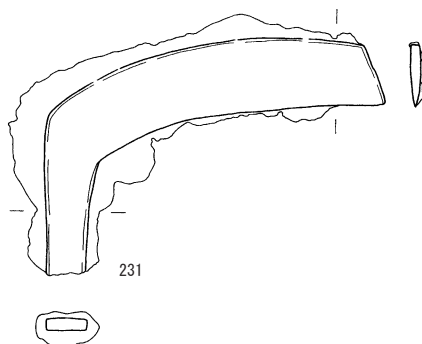
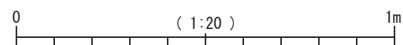
③砂質

色 調：灰褐色土 (7.5YR 5/6)

しまり：強

特 徴：小石 炭化物混

褐色土小ブロック混



第55図 土坑13号及び出土遺物

土坑13号（第55図）

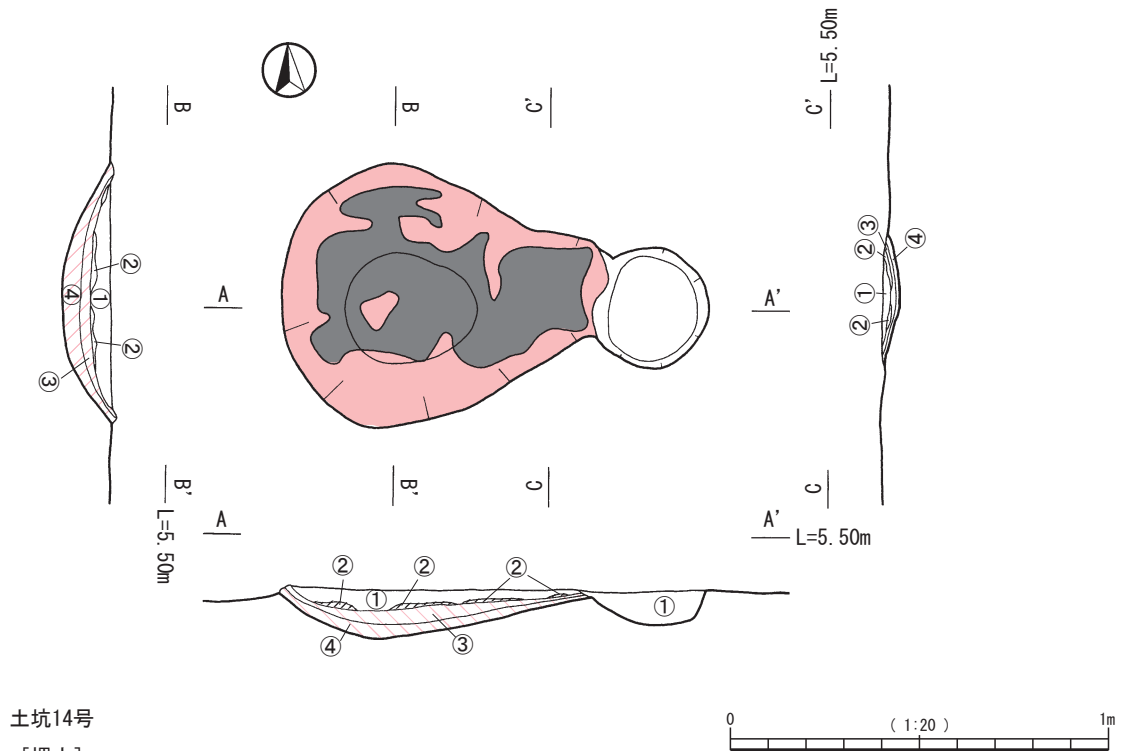
D-15区、Ⅱc層で検出された。西側に土坑10号が近接する。北と南側は攪乱により一部消失している。平面形は、約1.3m×1mの楕円形を呈する。断面形は、深さ約40cm強の深ナベ形を呈する。埋土①と②には、灰と炭化物が多量に含まれるが、土坑壁面に焼土らしきものは確認されなかった。別の場所で焼いた後の灰や炭が入り込んだ可能性がある。

最下層から陶器片が数点出土した。鉄製品も同じレベルで出土している。231は鉄製の鎌片である。柄の部分及び先端は欠損している。時期は不明である。232は備

前焼の壺である。口縁部は内面に折り返して成形されており、頸部には断面三角形の接合時の空隙がみられる。口縁部外面に、1条浅い溝がめぐる。内面は施釉時の釉薬の流れが明瞭に残っており、部分に無釉の範囲がある。近世のものと考えられる。233は苗代川系の土瓶の胴部～底部であり、18世紀～19世紀と考えられる。注ぎ口は欠損している。足は3カ所につくと想定され、1カ所のみ残存している。胴部は丸く膨らみ、下部は無釉である。足の先端は尖り、接地面が少ない。

土坑14号（第56図）

D-17区、Ⅱb層で検出された。南東方向に土坑16



土坑14号

〔埋土〕

①細粒砂

色 調：褐灰色（7.5YR 4/1）

しまり：弱

特 徴：細粒な砂粒

褐色土・灰色土・炭化物

の小ブロック混

燃烧後の残灰の掻き出し

②シルト質

色 調：赤黒色（10R 2/1）

特 徴：Ⅱc-1層が被熱により硬化

炭化物により黒化変色

中央部付近に表面にうすく

残存

③シルト質

色 調：赤橙色（10R 5/8）

特 徴：被熱により硬化

非常に硬質化

④シルト質

色 調：暗赤褐色土（10R 4/4）

特 徴：②ほど硬化していない

小石・炭化物少混

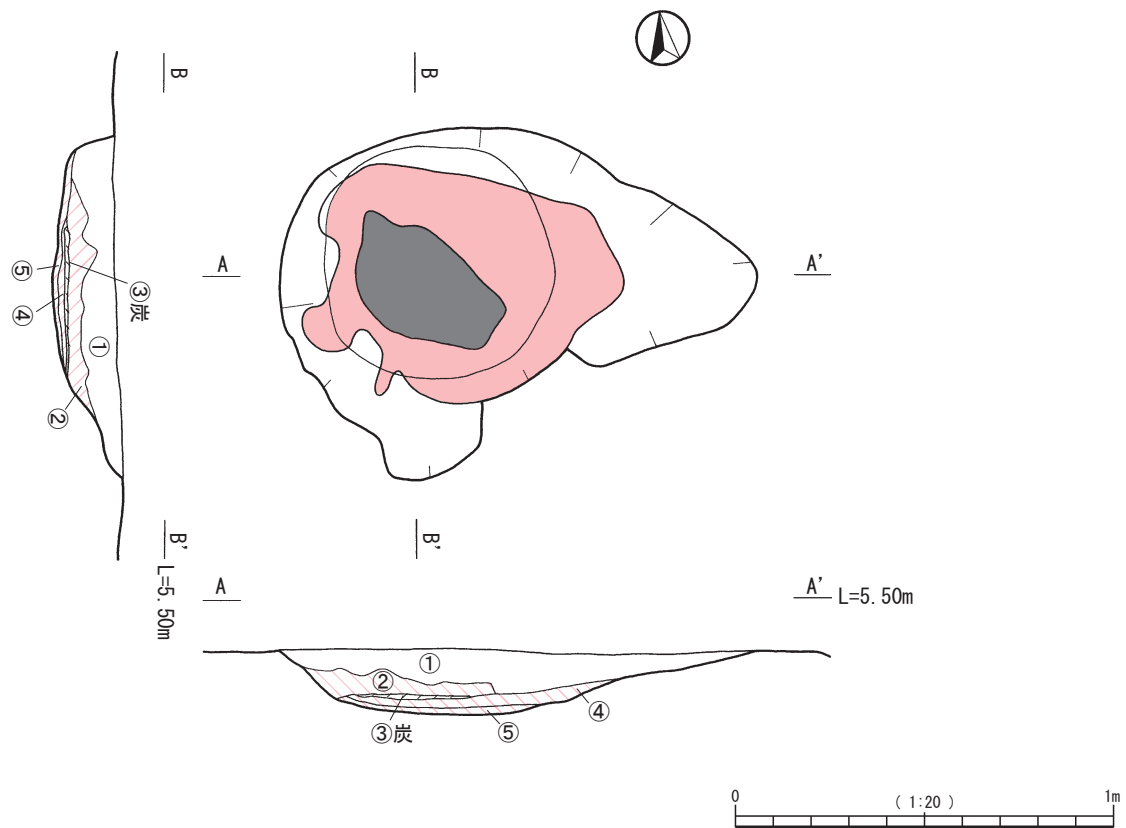
第56図 土坑14号

号が近接し、南側約1m離れて土坑15号が位置する。上位は削平により消失しており、底面付近のみが残存している。全体形は瓢箪形を呈し、全体的に焼土と炭が認められる。焼土範囲は径約80cmの円形で、断面形の深さは約15cmの浅い皿状を呈する。内壁が赤橙色に変色し硬化している。西側から東側にかけて炭化物が黒化し、薄く膜のように貼り付いている。西側壁は、被熱が強く焼土壁も厚い。東側のすばまり張り出している部分の平面形は径30cm程度に広がり、浅く掘り込まれ、全面が黒化している。上部削平のため、埋土はほとんど残存していない。

い。形状や焼土・炭化物の出土状況から、カマドの可能性も考えられる。

土坑15号（第57図）

D-17区、Ⅱb層で検出された。約1m北側に土坑14号・16号が位置する。上部は削平により消失している。全体形は、瓢箪形を呈し、底面は良好に残存し、焼土と炭化物が認められる。焼土範囲は径約80cmで、断面形の深さは約20cmの浅いレンズ状を呈し、内壁は赤橙色に変色し硬化している。焼土壁の厚みは約3cmである。床面からは焼土塊がまとまって出土しており、15～20cm大の



土坑15号

〔埋土〕

①細粒砂

色 調：褐灰色（7.5YR 4/1）

しまり：弱

特 徴：褐色土 灰色土

焼土塊が小ブロック状混

炭化物多混

②焼土

色 調：赤橙色（10R 5/8）

特 徴：壁面の焼土が小塊とな

って堆積

赤黒色土・灰褐色土の

小ブロック炭化物混

③シルト質

色 調：赤黒色（10R 2/1）

特 徴：掘り込み面のⅡc-1層

が被熱により硬化

炭化物により黒化変色

中央部付近表面にうす

く残存

④シルト質

色 調：赤橙色（10R 5/8）

特 徴：被熱により硬化

非常に硬質

⑤シルト質

色 調：暗赤褐色（10R 4/4）

特 徴：②ほど硬化していない

小石・炭化物少混

第57図 土坑15号

ものも認められる。東側がすばまり浅く張り出している部分の床面は、赤橙色に変色し硬化している。焼土範囲の側壁面が剥がれて、中央部を埋めるように堆積している。形状や焼土・炭化物の出土状況から、カマドの可能性も考えられる。

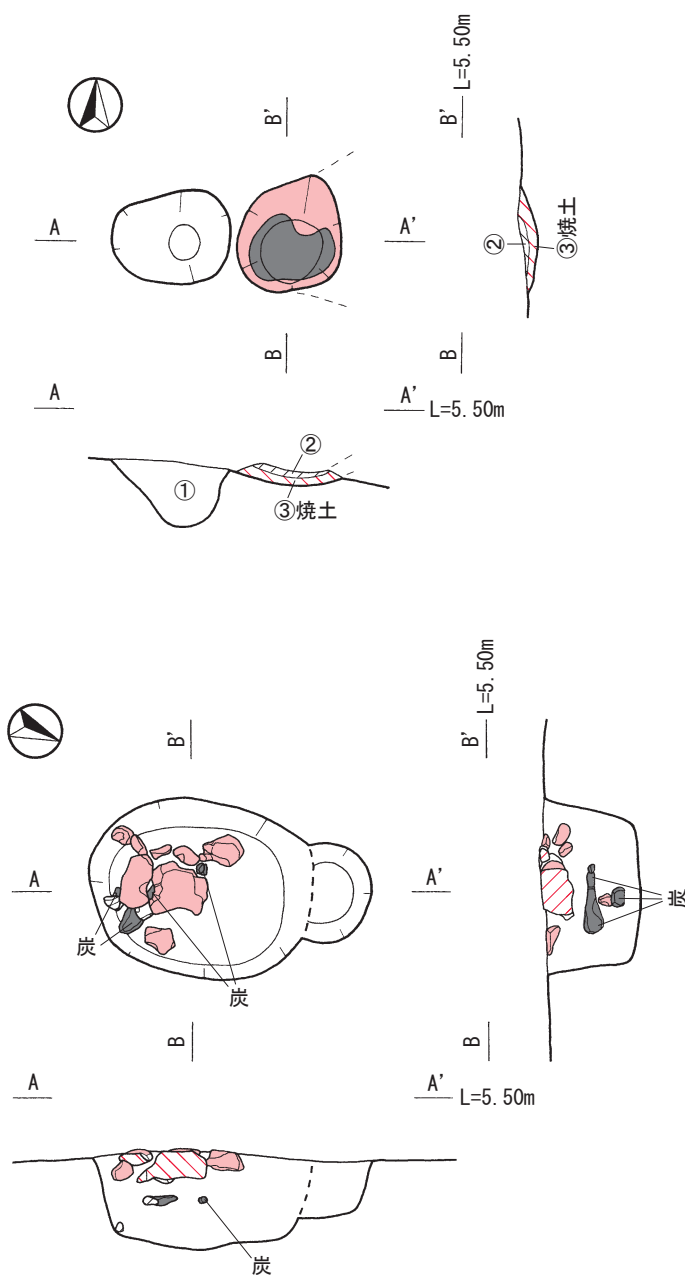
土坑16号（第58図）

D-17区、II b層で検出された。北側に土坑14号が近接する。東側の大部分が攪乱により消失しており、全体形は不明である。東側の内壁は赤橙色に変色し、一部炭化物により黒化している。切り合っていない西側部分は、平面形は30cm×20cm大の楕円形で、深さ約15cmに掘り込まれている。形状や焼土・炭化物の分布状況から、

カマドの可能性も考えられる。

土坑17号（第58図）

D-22区、II c層で検出された。平面形は、約60cm×50cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ約25cmの平底の洗面器形を呈する。ピット249に北側の上位が切られ消失している。検出面南側に、2～15cm程度の焼土ブロックと1～16cm程度の炭化物が残る。また、埋土中の南側半分に15cm大のものを含んだ大型の赤橙色をした粘土塊が多くある。粘土塊下部より、棒状の炭化木が出土したが、壁面や底面に明瞭な焼土は確認されなかった。粘土塊と一緒に入り込んだ可能性がある。埋土内からの遺物の出土はなかった。



土坑16号

〔埋土〕

①細粒砂

色 調：褐灰色（7.5YR 4/1）

しまり：弱

特 徴：細粒な砂粒の土

褐色土・灰色土・焼土塊の

小ブロック混

②シルト質

色 調：赤橙色（10R 5/8）

特 徴：II c-1層が被熱により硬化

表層の一部に黒化

③シルト質

色 調：暗赤褐色（10R 4/4）

②ほど硬化しておらず

砂質強

小石・炭化物少混

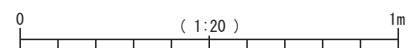
土坑17号

〔埋土〕

①シルト質

色 調：黄灰色土（2.5Y 4/1）

特 徴：小石・砂粒多混

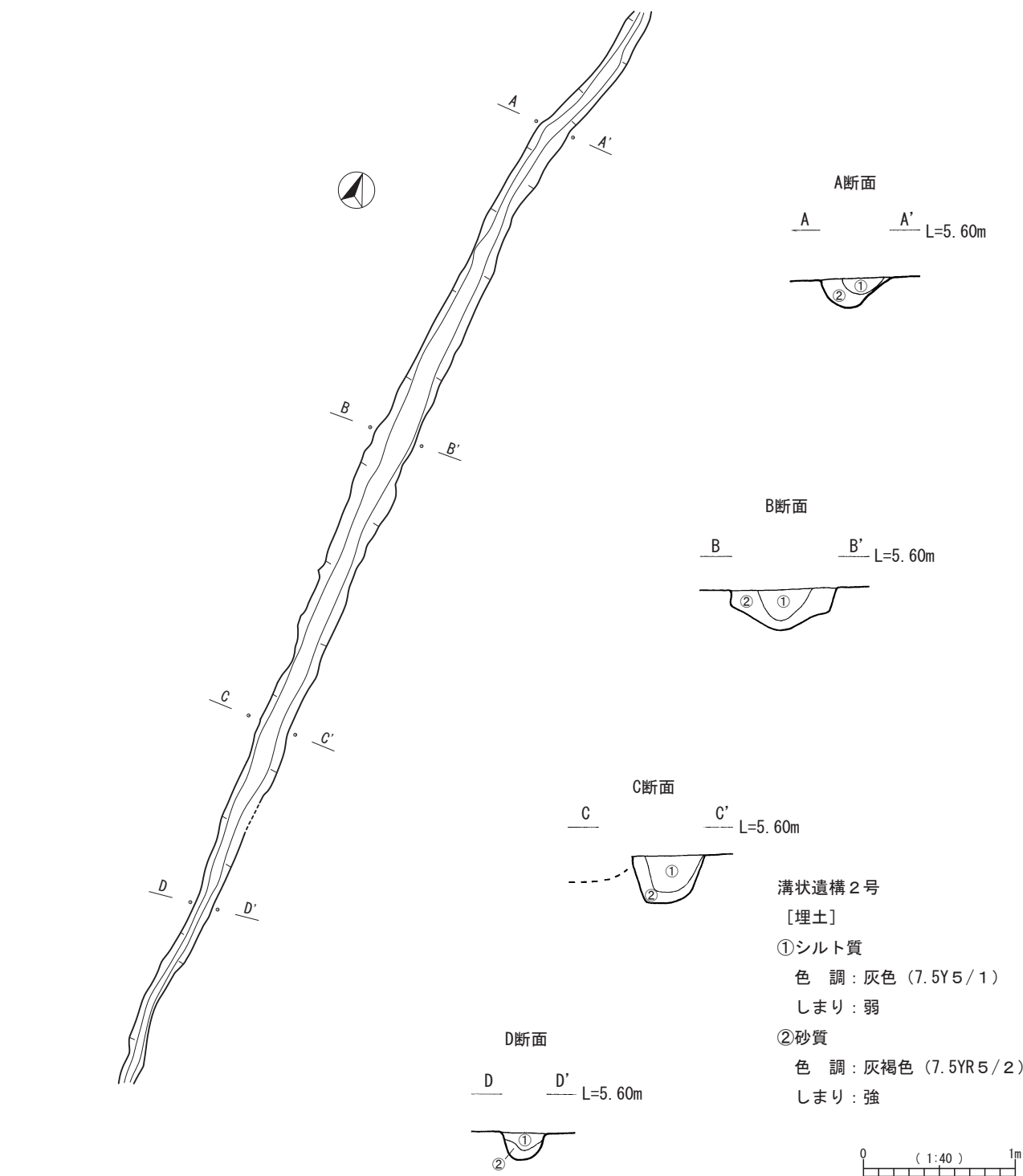


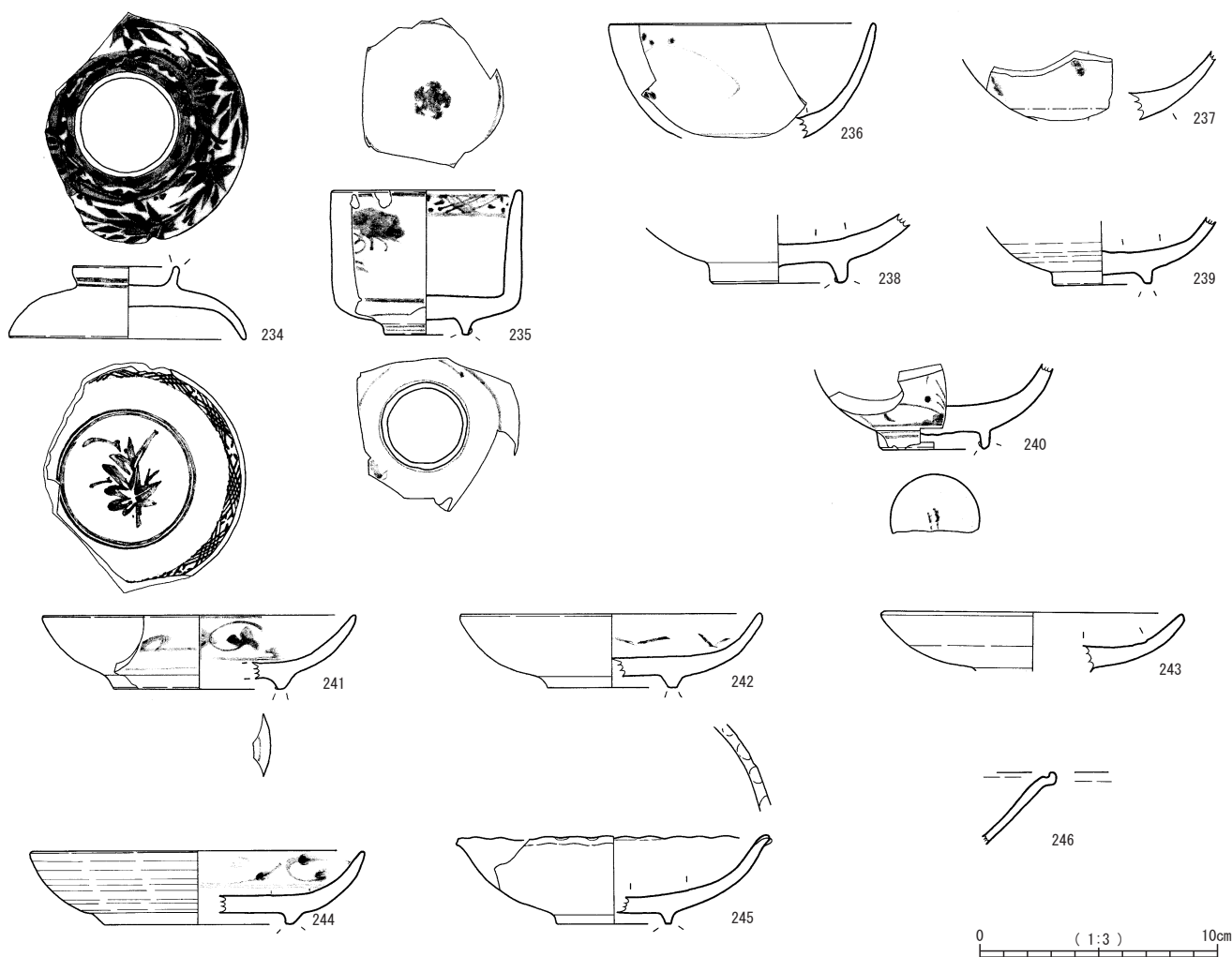
第58図 土坑16・17号

溝状遺構 2 号（第59図）

C～E-17・18区のⅡb層で検出された。調査区内で比較的標高が高い範囲に、南北方向へ直線的に掘り込まれている。東側には掘立柱建物跡3・4号が近接する。両端とも、調査区外に伸びると想定される。溝の幅は約30～70cmで、断面は逆台形または不正形を呈している。

また、埋土が2層に分かれており、平均の深さが15cmと10cm程度と異なっており、堆積状況から2時期にわたって使われた可能性もある。溝を挟んで掘立柱建物と土坑の分布が分かれており、また、現在の宅地境とも近い点から、当時も何らかの区境の役割を持っていた可能性がある。埋土内からは、遺物は出土していない。





第60図 近世～近代 包含層出土遺物 1

3 包含層出土遺物（第60～62図 234～253）

陶磁器（第60～61図 234～250）

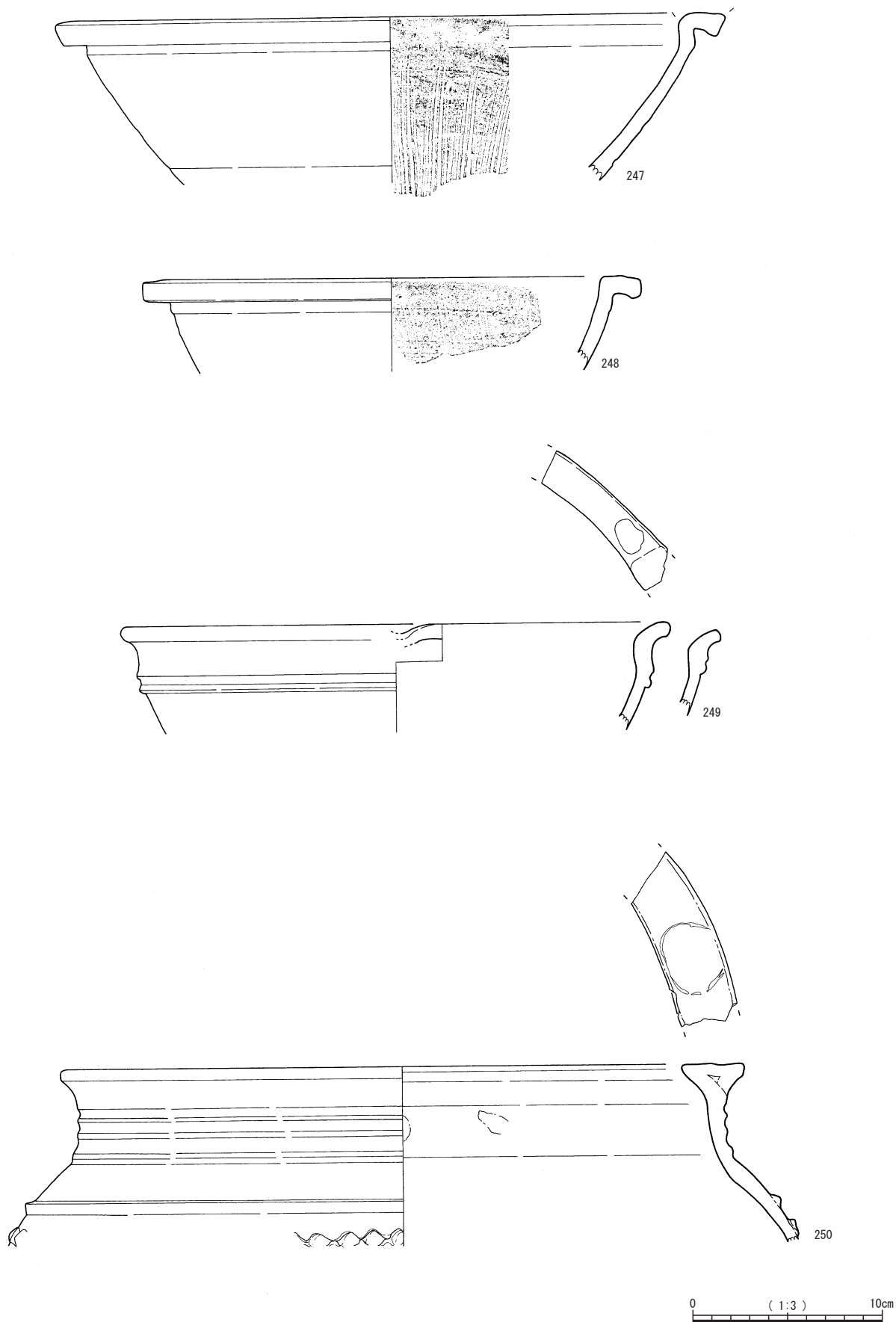
234は肥前系磁器の蓋である。外面は草花文、内面は四方櫛文及び見込みに圏線と草花文が描かれている。

235は18世紀後半の肥前系磁器の筒形碗である。外面には口唇部下、胴下、高台に圏線、胴部に草花文、内面には口縁部に四方櫛文、見込みに1条の圏線と五弁花文が描かれている。畳付は露胎し、焼成時の付着物がみられる。

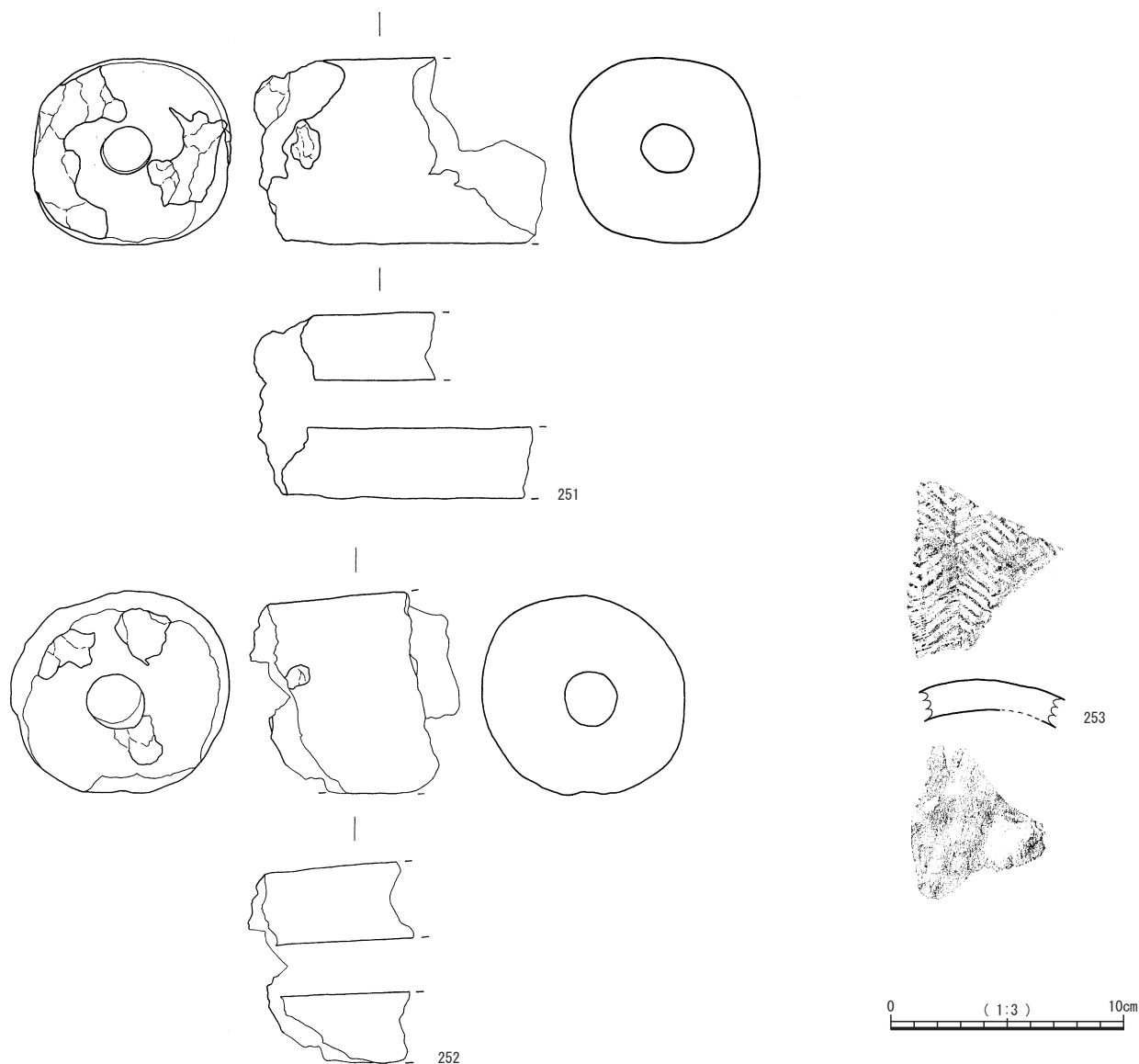
236～240は碗であり、237・238は陶器である。磁器は18世紀後半の肥前系磁器が主体である。236は外面のみ文様があり、1条の圏線と梅文と考えられる。内面の見込みは欠損部分付近が露胎するため、蛇の目釉剥ぎと考えられる。237は、17世紀後半の内野山窯系の碗と考えられる。淡黄褐色の陶土に、緑色の釉薬（銅緑釉か）をかけ、やや青みがかった釉で雨垂れ状の文様が描かれている。外面の体部下半は、露胎する。238は、18世紀後半の肥前系陶器である。灰色の陶土に、やや白濁した釉

薬を施釉している。見込みは蛇の目釉剥ぎで、畳付も露胎する。また、高台内面には重ね焼き時の付着物がみられる。239は見込みは蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎの上部にはアルミナが塗布されている。畳付は露胎する。240は外面のみ文様があり、3条の圏線と草花文が描かれている。高台内にも2本単位の短い文様が描かれている。畳付は露胎し、焼成時の付着物がみられる。

241～246は皿である。241は、18世紀前半の肥前系磁器である。外面には数条の圏線とモチーフ不明の文様、内面には圏線と草花文が描かれている。畳付は露胎し、焼成時の付着物がみられる。242は、18世紀後半の肥前系磁器である。内面には鋸歯文が描かれ、見込みは蛇の目釉剥ぎである。また、蛇の目釉剥ぎの上部にはアルミナが塗布されている。畳付は露胎する。243は、18世紀後半の肥前系磁器である。高台がわずかに残存する。蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎの上部にはアルミナが塗布されている。釉薬のかかり具合に、ややムラがある。244は、18世紀後半の肥前系磁器で、外面に緩い稜線が数段確認



第61図 近世～近代 包含層出土遺物 2



第62図 近世～近代 包含層出土遺物 3

できる。内面は草花文と2条の圏線が描かれ、見込みに五弁花文が部分的に残っている。また、蛇の目釉剥ぎが施され、畳付も露胎している。245は18世紀後半の中国産磁器の輪花皿で、端反り部分に押圧を連続して施している。見込みは蛇の目釉剥ぎで、畳付は露胎し、焼成時の砂状の付着物がみられる。246は、17世紀初めの肥前系陶器の溝口皿である。淡黄褐色の陶土に、透明釉が施釉されている。口唇部には、わずかに砂目の痕跡がみられる。

247・248は、18世紀後半の苗代川系の摺鉢である。緑褐色の釉薬で、口縁部が露胎している。口縁部は外面に折り返して成形され、内面には密に摺り目がつけられている。249は、18世紀前半の苗代川系の片口の破片である。褐色釉で、口唇部に土目跡が残っている。注ぎ口の約半分は欠損している。250は、大型壺の口縁部である。

口縁部は折り返して成形され、断面に三角形状の接合痕がみられる。緑褐色釉が施釉され、口縁と肩部には三角形状の突帯と縄状の突帯が各1条めぐる。口唇部は無釉で、貝目が残っている。苗代川系に類似するが、大型壺としては薄手であり、釉調が異なる。

その他の遺物（第62図 251～253）

251・252は、轆の羽口片である。いずれも、胎土は軟質である。251は、断面形がゆるやかな隅丸方形を呈する。先端には、ガラス質化した付着物や鉄滓が熔着している。また、被熱により灰色に変色している。252は欠損部分が多いが、ガラス質が熔着した先端部が残っている。また、被熱した範囲が灰色に変色している。

253は丸瓦の破片である。内面はケズリ調整であり、外面には綾杉状の型枠痕が残っている。

第5節 その他の調査成果

1 ピット（第63～65図・第6～9表）

本報告書では、明確に柱穴痕はみられないものの、柱穴状の直径が小さく深さのある小土坑を一括してピットとして扱った。これらは、調査区の中央部と南東部に集中し、西側にも点在している。配列等も検討したが、個々のピットの明確な関連性は把握できなかった。遺物が数点出土しているが、摩滅していたり、破片である点などから、確実な時期決定は困難であった。なお、灰色に近い色調のものは、旧水田層の土壌が混在するものと考えられ、比較的新しい近世以降に属する可能性が高い。第63図・第64図にピット群として位置を示し、その他の調査成果として掲載した。

ピット内から出土した遺物は小片が多く、特徴的なものは少数であった。254は、ピット50で出土した備前焼の鉢の口縁部である。内面側に折り返して成形され、暗赤褐色の釉薬が施される。内面の下半以下は、無釉である。255・256・262は、ピット71で出土した。255は瓦質土器のこね鉢である。焼成は甘く、軟質である。口唇部は、外面側が1段低くなる。内外面ともナデ調整で仕上げられており、外面には接合痕や指頭押圧が部分的に残っている。256は、高坏の脚部である。胎土は3～5mm程の長石をまばらに含み、表面に露出している。全体的に摩滅しており、内外面に横位または斜位のナデが部分的に残っている。262は鉄滓である。257は、ピット162で出土した青磁碗である。釉薬が全体的に厚く施釉されており、高台付近では2mm程の厚みがある。また、高台内面は蛇の目状に釉薬が掻き取られている。258は、ピット142で出土した甕の羽口片である。断面は円形で、下部は平坦面をなす。ガラス質や鉄滓の付着物が先端にみられ、被熱により帯状に灰色に変色した部分がある。259・260は、ピット172で出土した土師器の皿である。いずれも、底面は糸切りである。259は口唇部をつまみ上げて細く仕上げられている。261は、ピット102で出土した鉄滓片である。

第6表 ピット埋土・分類表

埋土	土色	色相・明度・彩度	土質
A	灰色土	5Y6/1	砂質
B	灰褐色土	7.5YR5/2	砂質
C	灰色土	7.5Y5/1	シルト質
D	灰黄褐色土	10YR5/2	砂質
E	黄褐色土	10YR5/6	砂質
F	灰色土	5Y5/1	シルト質
G	灰褐色土	7.5YR5/1	砂質
H	にぶい褐色土	7.5YR5/3	—
I	黄灰色土	2.5Y4/1	砂質
J	暗褐色土	7.5YR3/3	シルト質
K	黄灰色土	2.5Y5/1	砂質
L	灰黄褐色土	10YR4/2	砂質シルト質
M	暗褐色土	10YR3/4	砂質シルト質
N	暗灰黄色土	2.5Y4/2	砂質シルト質
O	黒褐色土	10YR3/2	砂質シルト質
P	暗褐色土	10YR3/3	砂質

第7表 ピット計測表 1

番号	位置	長径	短径	深さ	埋土
		(cm)	(cm)	(cm)	
P039	D-15	34	28	18	E
P040	D-15	36	35	21	E
P041	C-15	36	32	15	E
P042	C-15	44	35	19	C
P043	C-15	40	34	12	D
P044	D-15	37	36	21	D
P045	C-15	30	25	16	D
P046	C-15	33	32	14	E
P047	C-15	37	26	14	C
P048	C-15	33	31	22	B
P049	D-15	28	25	9	E・D
P050	D-15	>60	49	31	E
P051	D-15	43	43	21	D
P052	D-15	39	34	12	B
P053	D-17	45	44	66	K
P054	D-17	38	37	68	K
P055	D-17	51	45	81	K
P056	C-17	27	24	11	B
P057	D-17	24	22	17	B
P058	D-17	28	>25	19	B
P059	D-17	21	>17	-	-
P060	D-17	17	>14	-	-
P061	D-17	30	30	32	D
P062	C-17	23	22	34	D
P063	C-17	31	29	54	B
P064	C-17	24	23	20	B
P065	C-17	26	26	27	D
P066	C-17	22	21	33	D
P067	C-17	20	18	16	C
P068	C-17	15	14	24	D
P069	C-17	23	23	18	C
P070	C-17	14	13	20	B
P071	C-17	36	33	30	D
P072	C-17	24	22	21	D
P073	C-17	31	>24	19	B
P074	C-17	31	31	25	C
P075	C-17	38	27	31	D
P076	C-17	19	16	15	F
P077	C-17	17	16	11	B
P078	C-17	29	26	32	F
P079	C-17	23	21	20	B
P080	C-17	31	29	22	F
P081	C-17	25	23	11	F
P082	C-17	21	20	24	F
P083	C-17	30	28	48	D
P084	C-17	26	24	23	A
P085	C-17	27	26	25	F
P086	C-17	23	22	13	F
P087	C-17	30	29	46	F
P088	C-17	18	18	14	G

第8表 ピット計測表2

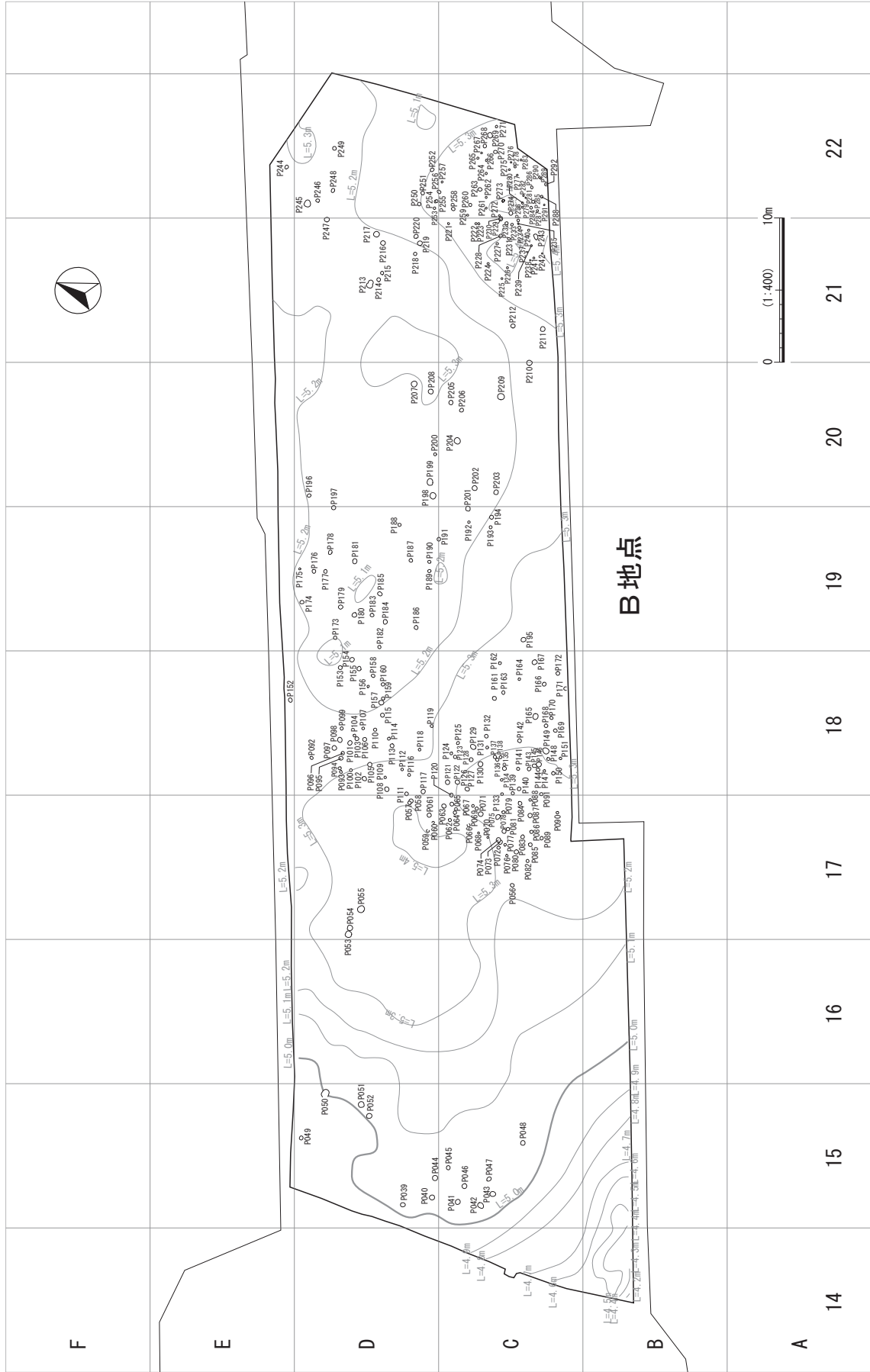
番号	位置	長径	短径	深さ	埋土
		(cm)	(cm)	(cm)	
P089	C-17	25	21	30	C
P090	C-17	19	18	28	B
P091	C-18	25	22	38	B
P092	D-18	24	21	25	C
P093	D-18	21	19	16	C
P094	D-18	22	19	24	D
P095	D-18	30	27	27	D
P096	D-18	24	22	32	C
P097	D-18	32	32	50	B
P098	D-18	36	32	53	B
P099	D-18	24	22	45	C
P100	D-18	20	20	17	C
P101	D-18	33	27	42	B
P102	D-18	33	28	21	B
P103	D-18	27	27	53	B
P104	D-18	20	19	33	C
P105	D-18	31	29	44	B
P106	D-18	28	27	18	B
P107	D-18	18	17	36	C
P108	D-18	33	29	36	C
P109	D-18	17	18	23	C
P110	D-18	23	21	45	C
P111	D-18	26	24	22	C
P112	D-18	19	17	41	B
P113	D-18	28	27	24	D
P114	D-18	21	20	28	B
P115	D-18	28	27	13	B
P116	D-18	20	20	40	C
P117	D-18	31	28	29	D
P118	D-18	19	18	36	D
P119	D-18	21	20	21	B
P120	C-17	28	25	44	C
P121	C-18	32	30	38	D
P122	C-18	32	28	48	D
P123	C-18	24	23	37	C
P124	C-18	20	18	32	C
P125	C-18	23	19	24	B
P126	C-18	26	>12	-	B
P127	C-18	26	23	17	D
P128	C-18	27	25	32	B
P129	C-18	41	32	19	C
P130	C-18	34	33	34	B
P131	C-18	20	18	8	B
P132	C-18	25	25	24	B・A
P133	C-18	18	17	12	D
P134	C-18	19	18	16	F
P135	C-18	29	26	28	B
P136	C-18	22	22	16	B
P137	C-18	24	22	11	B
P138	C-18	22	19	15	B
P139	C-18	22	21	15	G

番号	位置	長径	短径	深さ	埋土
		(cm)	(cm)	(cm)	
P140	C-18	27	26	16	F
P141	C-18	21	21	12	F
P142	C-18	27	25	39	D
P143	C-18	28	25	30	B
P144	C-18	27	23	24	B
P145	C-18	37	34	21	B
P146	C-18	32	34	35	F
P147	C-18	18	17	11	B
P148	C-18	24	22	14	F
P149	C-18	46	38	28	F
P150	C-18	24	24	41	B
P151	C-18	18	15	26	F
P152	E-18	31	26	31	B
P153	D-18	30	26	20	B
P154	D-18	32	32	24	C
P155	D-18	30	28	17	C
P156	D-18	18	15	9	B
P157	D-18	35	31	11	C
P158	D-18	23	>18	10	B
P159	D-18	23	23	21	C
P160	D-18	25	24	13	C
P161	C-18	29	27	34	A
P162	C-18	21	19	31	D
P163	C-18	29	23	27	F
P164	C-18	21	18	16	B
P165	C-18	41	36	29	B
P166	C-18	29	26	43	D
P167	C-18	35	31	20	F
P168	C-18	27	26	14	B
P169	C-18	26	23	18	F
P170	C-18	23	20	32	F
P171	C-18	25	>16	14	A
P172	C-18	27	26	24	B
P173	D-19	23	23	8	C
P174	D-19	29	23	22	C
P175	D-19	15	14	7	C
P176	D-19	26	25	8	C
P177	D-19	26	22	23	C
P178	D-19	32	26	12	C
P179	D-19	32	29	11	C
P180	D-19	33	31	19	C
P181	D-19	35	29	28	C
P182	D-19	23	22	27	C
P183	D-19	27	24	17	C
P184	D-19	33	28	27	B
P185	D-19	33	26	16	C
P186	D-19	28	26	30	C
P187	D-19	26	24	17	B
P188	D-19	24	23	19	C
P189	D-19	23	21	22	B
P190	D-19	23	21	13	C

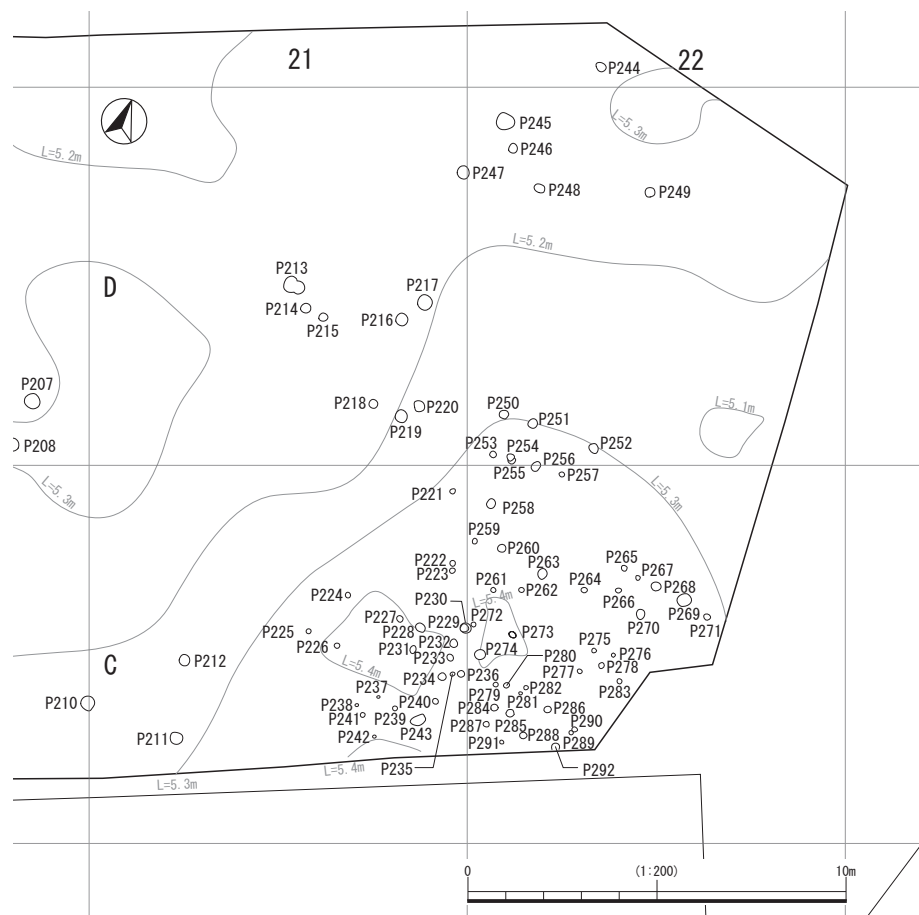
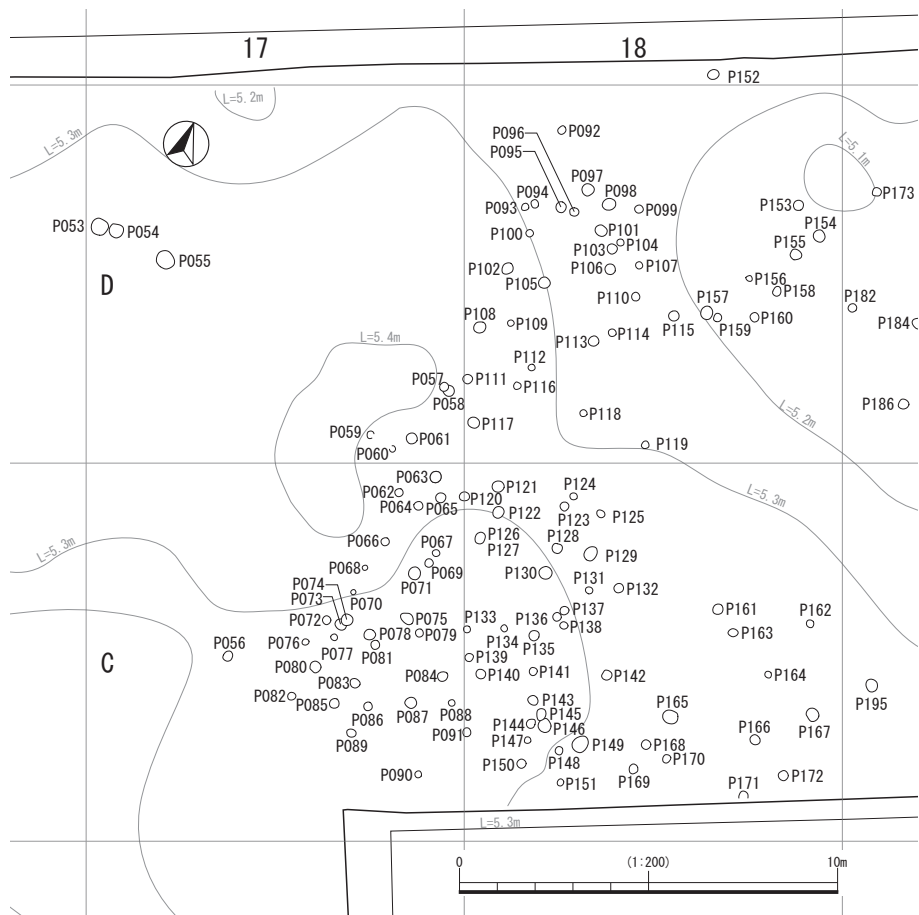
第9表 ピット計測表3

番号	位置	長径	短径	深さ	埋土
		(cm)	(cm)	(cm)	
P191	C-19	26	24	23	C
P192	C-19	18	16	17	C
P193	C-19	22	20	18	A
P194	C-19	27	27	26	A
P195	C-19	34	30	20	I
P196	D-20	27	22	23	C
P197	D-19	30	29	17	C
P198	D-20	45	41	10	A
P199	D-20	46	38	7	B
P200	D-20	21	19	7	B
P201	C-19	34	31	28	B・C
P202	C-20	35	33	16	B・A
P203	C-20	34	31	20	J
P204	C-20	45	42	16	B
P205	C-20	31	28	16	D
P206	C-20	30	25	13	D
P207	D-20	43	39	26	D
P208	D-20	35	33	21	D
P209	C-20	47	42	24	I
P210	C-20	37	36	22	I
P211	C-21	34	33	18	J
P212	C-21	31	28	26	D
P213	D-21	56	43	29	D
P214	D-21	28	26	38	D
P215	D-21	24	21	22	D
P216	D-21	35	32	23	D
P217	D-21	41	39	32	D
P218	D-21	24	23	25	D
P219	D-21	36	32	23	D
P220	D-21	29	27	21	D
P221	C-21	15	13	20	L
P222	C-21	15	14	9	B
P223	C-21	15	14	9	M
P224	C-21	15	13	10	N
P225	C-21	13	13	9	B
P226	C-21	14	14	9	L
P227	C-21	17	16	6	L
P228	C-21	26	21	17	L
P229	C-21	22	22	31	L
P230	C-21	29	27	16	P
P231	C-21	21	16	9	L
P232	C-21	22	20	10	M
P233	C-21	19	16	10	L
P234	C-21	21	20	17	L
P235	C-21	12	10	18	L
P236	C-21	19	17	19	L
P237	C-21	8	7	3	M
P238	C-21	9	8	4	B
P239	C-21	13	13	8	L
P240	C-21	16	14	21	L

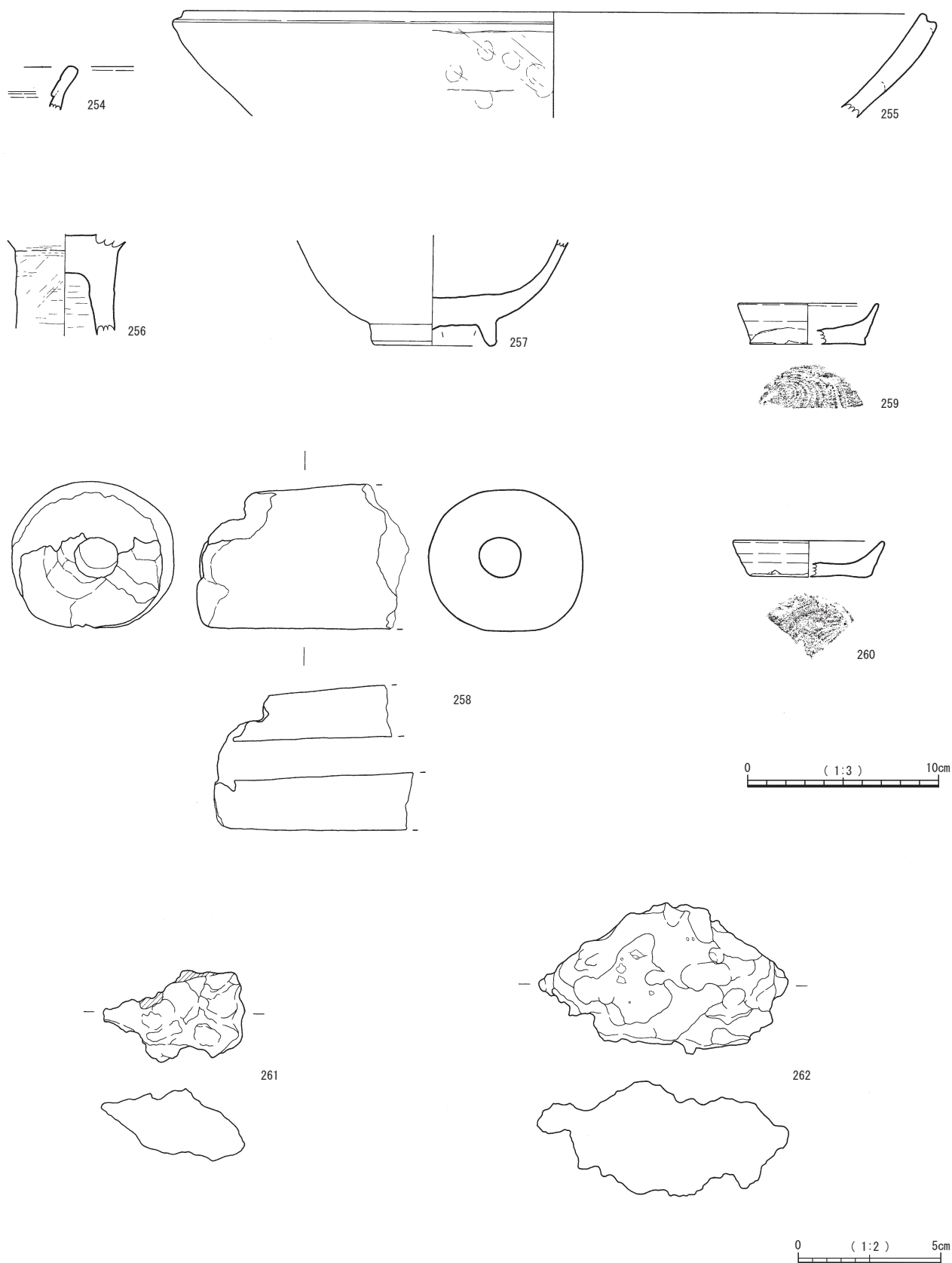
番号	位置	長径	短径	深さ	埋土
		(cm)	(cm)	(cm)	
P241	C-21	13	13	10	B
P242	C-21	9	8	8	M
P243	C-21	40	34	8	M
P244	E-22	28	23	33	D
P245	D-22	48	45	32	B
P246	D-22	26	23	36	B
P247	D-21	35	32	34	D
P248	D-22	29	22	55	C
P249	D-22	26	25	8	A
P250	D-22	24	23	17	L
P251	D-22	25	24	13	L
P252	D-22	26	23	22	L
P253	D-22	17	17	16	B
P254	D-22	20	19	9	P
P255	D-22	19	18	15	B
P256	C-22	28	21	21	L
P257	C-22	15	13	12	L
P258	C-22	26	22	11	L
P259	C-22	15	13	6	B
P261	C-22	14	13	12	M
P262	C-22	14	13	15	B
P263	C-22	28	24	30	B
P264	C-22	16	14	17	B
P265	C-22	15	14	24	B
P266	C-22	16	13	13	M
P267	C-22	12	12	10	M
P268	C-22	26	23	12	M
P269	C-22	32	27	15	I
P270	C-22	27	22	13	B
P271	C-22	18	16	14	M
P272	C-22	13	13	16	P
P273	C-22	19	18	17	B
P274	C-22	29	26	20	B
P275	C-22	10	10	4	M
P276	C-22	10	10	7	M
P277	C-22	13	11	10	M
P278	C-22	16	15	14	B
P279	C-22	13	12	16	L
P280	C-22	16	13	15	L
P281	C-22	9	8	3	B
P282	C-22	12	11	11	N
P283	C-22	13	13	10	B
P284	C-22	19	19	15	L
P285	C-22	22	22	29	O
P286	C-22	19	18	16	N
P287	C-22	16	15	11	L
P288	C-22	19	17	14	M
P289	C-22	11	11	9	M
P290	C-22	14	13	11	L
P291	C-22	12	10	8	M



第63図 ピット位置図(全体)



第64図 ピット位置図 (拡大)



第65図 ピット内出土遺物

2 包含層出土の時期不詳遺物（第66図）

Ⅱ b・Ⅱ c 層で出土した遺物のうち、時期不詳の資料を一括して掲載した。

263は刀子片と考えられる。両端は欠損しているが、断面で片側に刃部があることが分かる。264・265は鉄滓片である。時期等は明確でないため、ここで一括したが、近世以降の資料で鞆の羽口が出土している点から、関連する資料の可能性もある。

266は、砂岩製の砥石で上下部が欠損しているため、全体形は不明である。全面が砥面となるが、表面中央部

が浅く凹むため、最も使用頻度が高い部分と考えられる。残長7.4cm、幅6.3cm、厚さ6.6cmである。267は、硯状の石製品である。上面は平滑で、部分的に墨が残っている。268は、安山岩製の凹石である。一部欠損はあるが、表面中央部に凹みが1か所ある。下面には、敲打痕がみられる。長さ10.3cm、幅5.6cm、厚さ5.7cmである。269は、安山岩製で隅丸方形の凹石である。表面中央部が全体的に浅く凹み、その中に小さな凹みが3か所ある。長さ10cm、幅6.4cm、厚さ4.1cmである。



第66図 時期不詳 包含層出土遺物

第10表 土器・土師器・須恵器観察表 1

挿図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫	
第9図	1	-	C-17	-	土器	深鉢	口縁部	縄文	-	-	(6.8)	外:貝殻条痕・ナデ・指頭押圧 内:貝殻条痕・ナデ	10YR6/6(明黄褐)					○		○	
	2	-	D-20	II c-3	土器	深鉢	口縁部	縄文	-	-	(3.2)	(摩滅)	10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○				○	
	3	-	D-20	II c-2	土器	深鉢	底部	縄文	-	(9.1)	(3.5)	外:ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)		○	○				○	
第16図	4	SH2	C-21	①・②	土器	甕	口縁部～底部	B類	(16.5)	-	17.7	外:タタキ後ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・ナデ	5YR4/6(赤褐)			○			○	○	
	5	SH2	C-21	③・④	土器	甕	口縁～胴部	B類	(17.0)	-	(17.5)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	5YR4/6(赤褐)	○	○					○	
	6	SH2	D-21	①	土器	甕	口縁～胴部	B類	(13.3)	-	(20.1)	外:ミガキ・ナデ 内:指ナデ・ケズリ	5YR5/6(明赤褐)		○		○		○	○	
	7	SH2	D-21	上層	土器	甕	口縁～胴部	B類	(15.4)	-	(17.1)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR5/4(にぶい褐)	○	○				○		
	8	SH2	D-21	①・②	土器	甕	口縁～胴部	B類	(16.2)	-	(11.6)	外:タタキ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	5YR4/6(赤褐)	○	○				○	○	
	9	SH2	D-20	①	土器	甕	口縁～胴部	B類	(14.8)	-	(9.4)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	5YR5/6(明赤褐)	○	○		○		○	○	
	10	SH2	C・D-21	③・④	土器	甕	口縁～胴部	B類	(19.0)	-	(7.4)	外:ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・ケズリ	7.5YR7/4(にぶい橙)		○	○		○	○		
第17図	12	SH2	D-21	中央下	土器	甕	口縁～胴部	B類	(14.4)	-	(13.9)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ハケナデ・ナデ	10YR8/2(灰白)	○				○	○	○	
	13	SH2	D-20・21	②・③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(15.8)	-	(8.8)	外:ハケナデ 内:ハケナデ・ケズリ	外:7.5YR4/6(褐) 内:5YR5/8(明赤褐)	○	○				○	○	
	14	SH2	D-21	③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(17.4)	-	(7.8)	外:ナデ・ハケナデ 内:ナデ	外:7.5YR6/3(にぶい褐) 内:10YR7/2(にぶい黄橙)			○			○	○	
	15	SH2	D-21	⑤	土器	甕	口縁～胴部	B類	(12.7)	-	(8.3)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR4/6(褐)	○	○				○		
	16	SH2	D-21	③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(20.0)	-	(9.7)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ハケナデ・ナデ	外:2.5YR4/3(にぶい赤褐) 内:5YR5/4(にぶい赤褐)	○	○	○			○	○	
	17	SH2	D-21	①・②	土器	甕	口縁～胴部	B類	(14.7)	-	(8.9)	外:タタキ・ナデ 内:指ナデ・ナデ	外:7.5YR5/6(明褐) 内:7.5YR4/1(褐灰)	○	○				○	○	
	18	SH2	D-21	③・④	土器	甕	口縁～胴部	B類	(16.9)	-	(9.5)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)	○	○			○	○	○	
	19	SH2	D-21	②・③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(15.8)	-	(8.8)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	2.5YR6/6(橙)	○	○	○			○		外面に沈線あり 口縁部内外面に赤色顔料?付着
	20	SH2	C-21	②・③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(15.3)	-	(10.1)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:10YR8/3(浅黄橙)				○		○	○	
	21	SH2	D-21	③	土器	甕	口縁～胴部	B類	(15.6)	-	(11.6)	外:ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・指ナデ・ケズリ	10YR8/3(浅黄橙)	○	○	○			○	○	口縁部内外面に赤色 顔料?付着
第18図	22	SH2	D-21	③	土器	甕	口縁～頸部	B類	(16.0)	-	(4.2)	外:ナデ 内:ハケナデ	10YR8/3(浅黄橙)	○				○	○	○	
	23	SH2	一括	-	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(4.6)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)	○	○				○	○	
	24	SH2	D-20	②	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(3.7)	外:ナデ 内:ハケナデ	外:7.5YR6/4(にぶい橙) 内:7.5YR6/6(橙)	○				○	○	○	
	25	SH2	一括	-	土器	甕	口縁～胴部	B類	-	-	(7.6)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ハケナデ・ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)	○	○		○	○	○		
	26	SH2	D-21	③	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(4.6)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)	○		○			○	○	
	27	SH2	C-21	③	土器	甕	口縁部		-	-	(7.3)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	5YR5/6(明赤褐)		○		○		○	○	B類またはC類
	28	SH2	D-21	①	土器	甕	口縁部		-	-	(4.5)	(摩滅)	2.5YR6/8(橙)		○	○				○	〃
	29	SH2	D-21	①・②	土器	甕	頸～胴部	B類	-	-	(14.9)	外:ハケナデ 内:指ナデ・ケズリ・指頭押圧	外:7.5YR5/6(明褐色) 内:5YR5/6(明褐色)		○				○	○	
	30	SH2	C・D-21	③	土器	甕	胴部	B類	-	-	(5.7)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	10YR8/2(灰白)		○	○			○	○	
	31	SH2	D-21	③	土器	甕	胴部	B類	-	-	(8.5)	外:ハケナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR8/6(浅黄橙)						○		胴部に2条沈線
	32	SH2	D-21	④	土器	甕	胴部	B類	-	-	(11.4)	外:ハケナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR7/3(にぶい黄橙)	○	○			○	○		
	33	SH2	C-21	③・④	土器	甕	胴部	B類	-	-	(9.8)	外:ハケナデ 内:ケズリ・ナデ	外:10YR7/3(にぶい黄橙) 内:10YR5/1(褐灰)	○		○			○	○	
	34	SH2	D-21	①・②	土器	甕	底部	B類	-	-	(2.2)	外:ハケナデ 内:ケズリ	外:2.5YR5/6(明赤褐) 内:2.5YR4/1(赤灰)		○			○		○	
	35	SH2	D-21	①・②	土器	甕	胴～底部	B類	-	-	(15.6)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・指頭押圧	外:7.5YR7/4(にぶい橙) 内:10YR7/3(にぶい黄橙)	○	○				○	○	外面一部剥落
第19図	36	SH2	D-21	③	土器	甕	胴部	B類	-	-	(11.1)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	外:5YR6/6(橙) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)	○	○				○	○	
	37	SH2	C-21	③・④	土器	甕	口縁	-	-	-	(10.2)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ・指頭押圧	外:5YR6/8(橙) 内:10YR4/1(褐灰)	○		○			○	○	
	38	SH2	一括	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(6.0)	ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○			○	○	

第11表 土器・土師器・須恵器観察表 2

押図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考		
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫			
第19図	39	SH2	D-20	①	土器	壺	頸～胴部	-	-	-	(7.3)	外:ナデ 内:指頭押圧・ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)										
	40	SH2	C-21	①	土器	壺	脚部	-	-	(11.2)	(6.5)	外:指ナデ 内:指ナデ・指頭押圧	5YR6/8(橙)	○									
	41	SH2	D-21	①	土器	壺	脚部	-	-	-	(4.6)	外:ナデ 内:指頭押圧	5YR6/8(橙)			○		○	○	○			
	42	SH2	D-21	③	土器	台付鉢	台部	-	-	(17.9)	(7.2)	外:ナデ 内:ハケナデ	外:7.5YR5/6(明褐) 内:7.5YR6/6(橙)				○		○		○		
第20図	43	SH2	D-21	③・④	土器	壺	口縁～胴部	A-2類	(15.5)	-	(17.8)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:指ナデ・ケズリ・ナデ	5YR6/8(橙)			○				○		○	
	44	SH2	D-21	①	土器	壺	口縁	B類	(19.4)	-	(7.3)	外:ナデ 内:指ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○			○		○		
	45	SH2	D-21	②・③	土器	壺	口縁	B類	(19.6)	-	(4.5)	ハケナデ・ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR6/6(橙)	○		○				○		○	
	46	SH2	C-21	③	土器	壺	口縁～胴部	C-2類	15.6	-	(33.2)	外:タタキ・ケズリ・指ナデ 内:ハケナデ・指ナデ	7.5YR5/8(明褐)	○	○					○		○	
	47	SH2	C-20・21	①	土器	壺	口縁	C-2類	(13.4)	-	(7.3)	ナデ	10YR6/8(赤橙)	○		○					○	○	
	48	SH2	D-20	①	土器	壺	口縁	C-2類	(16.8)	-	(9.1)	ナデ	2.5YR6/8(橙)	○	○	○			○			○	
	49	SH2	D-21	①	土器	壺	口縁	C-1類	-	-	(4.8)	ナデ	外:2.5YR6/8(橙) 内:2.5YR5/8(明赤褐)				○		○				
	50	SH2	C-21	③・④	土器	壺	頸部	-	-	-	(7.6)	外:ハケナデ・ミガキ 内:ナデ	5YR6/8(橙)	○	○								
	51	SH2	D-21	①	土器	壺	胴部	-	-	-	(9.4)	(摩滅)	2.5YR5/8(明赤褐)	○		○					○	○	胴部に2条沈線
第21図	52	SH2	C・D-21	③・④	土器	壺	頸～胴部	-	-	-	(17.6)	外:ミガキ・ハケナデ 内:ケズリ・ナデ	外:5YR6/8(橙) 内:7.5YR7/6(橙)			○				○		○	
	53	SH2	C・D-21	③	土器	壺	胴～底部	-	-	-	(33.1)	外:ナデ 内:指頭押圧	5YR7/6(橙)	○		○					○	○	
	54	SH2	D-21	③	土器	壺	口縁部	山陰系	-	-	(7.8)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR6/6(橙)	○	○		○						
	55	SH2	C-21	①	土器	壺	頸部	山陰系	-	-	(5.2)	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	5YR5/6(明赤褐)			○					○	○	
	56	SH2	D-21	③	土器	壺	頸部	-	-	-	(3.5)	(摩滅)	5YR5/6(明赤褐)	○		○					○	○	
	第22図	57	SH2	D・E-21	①	土器	壺	胴～底部	-	-	(4.5)	(11.5)	外:ナデ 内:(摩滅)	外:10YR6/3(にぶい黄橙) 内:7.5YR6/4(にぶい黄橙)					○		○		○
58		SH2	D-21	①・②	土器	壺	胴～底部	-	-	(2.6)	(6.4)	外:ナデ 内:指頭押圧・ナデ	外:7.5YR6/6(橙) 内:5YR5/6(明赤褐)	○	○					○	○	○	
59		SH2	D-21	①	土器	壺	底部	-	-	(3.2)	(3.9)	(摩滅)	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:10YR7/3(にぶい黄橙)	○		○					○	○	
60		SH2	一括	-	土器	壺	胴～底部	-	-	-	(11.2)	外:(摩滅) 内:ユビナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○		○				○		○	
61		SH2	D-21	①	土器	壺	胴～底部	-	-	-	(6.6)	(摩滅)	外:2.5YR6/8(橙) 内:2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○					○		○
62		SH2	D-21	③	土器	壺	胴～底部	-	-	-	(7.5)	内:指頭押圧	外:2.5YR5/8(明赤褐) 内:5YR5/8(明赤褐)			○					○	○	
63		SH2	D-21	①	土器	壺	底部	-	-	-	(3.5)	(摩滅)	外:7.45YR6/3(にぶい褐) 内:5YR5/8(明赤褐)	○	○	○					○	○	○
64		SH2	D-20	①・②	土器	壺	底部	-	-	-	(5.4)	内:指頭押圧	10YR6/4(にぶい黄橙)	○	○		○		○		○		
65		SH2	D-21	①	土器	壺	胴部	-	-	-	(5.2)	ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)			○		○			○	○	
第23図	66	SH2	D-21	③	土器	高坏	口縁～脚部	B類	17.2	10.7	14.9	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/4(にぶい橙) 内:7.5YR7/6(橙)		○	○					○		脚部に穿孔あり
	67	SH2	D-20	②	土器	高坏	口縁～脚部	B類	(15.4)	-	(8.3)	外:ミガキ 内:ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○					○	○	坏接合部に刻みあり
	68	SH2	D-21	③	土器	高坏	口縁～胴部	B類	(17.8)	-	(7.9)	外:ミガキ・ナデ 内:ハケナデ・ケズリ	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)		○		○				○	○	口縁内面にスス
	69	SH2	一括	-	土器	高坏	口縁～胴部	B類	(14.0)	-	(4.9)	外:指頭押圧・ミガキ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR5/8(明褐) 内:5YR6/6(橙)		○						○	○	
	70	SH2	C-20	①	土器	高坏	口縁部	B類	(21.2)	-	(5.6)	(摩滅)	5YR6/8(橙)		○								
	71	SH2	一括	-	土器	高坏	胴部	B類	-	-	(3.6)	外:ナデ 内:ナデ・ミガキ	7.5YR8/4(浅黄橙)							○		○	○
第24図	72	SH2	D-21	①	土器	高坏	口縁～胴部	A類	(27.8)	-	(10.6)	外:タタキ・ナデ	外:7.5YR4/4(褐) 内:7.5YR5/6(明褐)	○		○	○				○		○
	73	SH2	D-21	①・②	土器	高坏	胴部	A類	-	-	(8.8)	外:ナデ 内:ハケナデ・ナデ	外:5YR6/8(橙) 内:5YR6/6(橙)	○						○		○	
	74	SH2	一括	-	土器	高坏	胴部	C類	-	-	(5.6)	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)								○	○	
	75	SH2	D-20	①・②	土器	高坏	胴部	C類	-	-	(3.5)	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	7.5YR7/6(橙)			○						○	○
	76	SH2	D-21	③	土器	高坏	胴部	C類	-	-	(4.5)	内:指頭押圧・ナデ	外:10YR8/2(灰白) 内:10YR7/2(にぶい黄橙)			○							

第12表 土器・土師器・須恵器観察表 3

押図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考			
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫				
第24図	77	SH2	C・D-21	③・④	土器	高坏	脚部	-	-	-	(9.9)	外:ミガキ・ナデ 内:ケズリ	7.5YR8/4(浅黄橙)	○	○	○			○	○				
	78	SH2	D-21	①	土器	高坏	脚部	-	-	-	(8.4)	外:ミガキ 内:ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)		○				○	○				
	79	SH2	D-21	①・②	土器	高坏	脚部	-	-	-	(7.6)	外:ナデ	7.5YR7/6(橙)	○	○		○		○	○	脚部に穿孔あり			
	80	SH2	一括	-	土器	高坏	脚部	-	-	10.6	(1.4)	ミガキ	外:10YR8/4(浅黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	○			○		○		脚部に穿孔あり			
	81	SH2	D-21	①・②	土器	高坏	脚部	-	-	-	(4.9)	外:ハケナデ 内:ナデ	5YR5/6(明赤褐)		○				○	○				
	82	SH2	一括	-	土器	高坏	脚部	-	-	-	(4.5)	外:ハケナデ 内:ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)			○		○		○				
第25図	83	SH2	D-21	②・③	土器	小型 丸底壺	口縁～底部	-	11.4	-	15.9	外:ハケナデ・ナデ・ケズリ 内:ハケナデ・ナデ	5YR5/8(明赤褐)		○					○	○			
	84	SH2	D-21	③・④	土器	小型 丸底壺	口縁～底部	-	(11.2)	-	13.8	外:ハケナデ・ナデ 内:指頭押圧・ケズリ・ナデ	外:2.5YR5/8(明赤褐) 内:2.5YR5/6(明赤褐)		○				○	○	○			
	85	SH2	D-21	③	土器	小型 丸底壺	胴部～底部	-	-	-	14.0	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:10YR8/2(灰白) 内:7.5YR7/3(にぶい橙)				○	○	○	○				
	86	SH2	D-21	③	土器	小型 丸底壺	口縁～頸部	-	(13.4)	-	(9.0)	外:ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・指頭押圧	7.5YR4/3(褐)		○					○	○			
	87	SH2	C-20	①・②	土器	小型 丸底壺	口縁～胴部	-	(14.2)	-	(9.1)	ナデ	5YR6/4(にぶい橙)		○		○	○	○	○				
	88	SH2	D-21	②	土器	小型 丸底壺	口縁～底部	-	(10.6)	-	8.8	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	5YR7/6(橙)		○	○				○	○	○		
	89	SH2	D-21	②	土器	小型 丸底壺	胴部	-	-	-	(9.7)	外:ミガキ 内:ミガキ状ナデ・ミガキ	外:2.5YR5/6(明赤褐) 内:2.5YR4/8(赤褐)	○			○				○			
	90	SH2	D-21	③	土器	鉢	口縁～底部	-	(15.8)	-	9.0	外:ハケナデ・ケズリ状ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/4(にぶい橙) 内:7.5YR7/3(にぶい橙)	○				○	○					
	91	SH2	C-21	②・③	土器	鉢	口縁～胴部	-	(14.2)	-	(6.5)	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/4(にぶい橙) 内:7.5YR8/4(浅黄橙)							○				
	92	SH2	一括	-	土器	鉢	口縁～頸部	-	(11.8)	-	(3.5)	外:ナデ 内:ナデ・指頭押圧	10YR8/4(浅黄橙)							○	○			
	93	SH2	C-21	②・③	土器	鉢	頸～胴部	-	-	-	(4.4)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)								○			
	94	SH2	D-21	-	土器	鉢	頸～胴部	-	-	-	(4.9)	外:ミガキ 内:ミガキ・ナデ	外:2.5YR5/8(明赤褐) 内:5YR6/6(橙)		○					○				
	95	SH2	C-21	①	土器	鉢	口縁～底部	-	13.6	-	5.1	ナデ	5YR6/6(橙)		○					○	○	胎土マーブル状		
	96	SH2	D-21	③	土器	小型壺	胴～底部	-	-	-	(7.5)	外:ナデ 内:指頭押圧・ナデ	外:7.5YR5/2(灰褐) 内:10YR5/2(灰黄褐)		○		○				○			
	97	SH2	D-21	②・③	土器	小型壺	胴～底部	-	-	-	(6.0)	外:ナデ 内:ハケナデ・指ナデ・指頭押圧	外:5YR7/8(橙) 内:5YR6/8(橙)		○	○			○	○	○			
第26図	98	SH2	D-21	③	土器	小型 甕?	口縁～胴部	-	(12.5)	-	(7.9)	外:ハケナデ・ミガキ・ナデ 内:ミガキ・ナデ	5YR7/8(橙)							○	○			
	99	SH2	D-21	①	土器	小型 器台	口縁～底部	-	8.0	9.7	8.7	外:ナデ 内:ハケナデ・ナデ・指頭押圧	7.5YR7/6(橙)		○					○	○			
	100	SH2	一括	-	土器	小型 器台	胴部	-	-	-	(2.4)	ナデ	7.5YR7/6(橙)							○				
	101	SH2	D-21	①・②	土器	鉢?	口縁～底部	-	17.9	-	16.3	外:ハケナデ・ケズリ・指ナデ 内:指ナデ・ケズリ	2.5YR7/8(橙)	○					○	○	○	底部に穿孔		
第29図	107	遺物集中 1	D・E-20	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	(25.0)	-	(15.6)	外:タタキ・ナデ 内:指ナデ・ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR6/6(橙)			○	○			○	○			
	108	遺物集中 1	E-20	-	土器	甕	口縁～頸部	A類	(29.0)	-	(6.2)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ	10YR7/2(にぶい黄橙)		○				○	○	○			
	109	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	(20.2)	-	(12.5)	外:タタキ・ナデ 内:指ナデ・ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)		○		○		○	○	○			
	110	遺物集中 1	E-20	-	土器	甕	口縁	-	-	-	(6.9)	外:ハケナデ 内:ハケナデ・ナデ	外:10YR5/4(にぶい黄橙) 内:7.5YR5/4(にぶい褐)		○		○	○	○	○	○			
	111	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	口縁	-	-	-	(4.7)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ・指頭押圧	外:10YR6/4(にぶい黄橙) 内:10YR5/3(にぶい黄橙)				○		○	○	○			
	112	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	口縁	-	-	-	(6.0)	ナデ・指頭押圧	外:10YR5/3(にぶい黄褐) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)		○		○	○		○				
	113	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	口縁	-	-	-	(5.9)	外:ナデ 内:ハケナデ・ナデ・指頭押圧	7.5YR4/2(灰褐)	○	○		○			○				
	114	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(13.9)	外:タタキ・ナデ 内:ハケナデ・指頭押圧	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)					○	○	○	○			
	115	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(8.1)	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	外:5YR7/6(橙) 内:7.5YR5/3(にぶい褐)	○					○	○	○			
第30図	116	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(9.2)	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	外:2.5YR6/6(橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)						○	○	○			
	117	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(13.8)	外:ナデ・指ナデ 内:ケズリ・ナデ・指頭押圧	外:5YR6/6(橙) 内:10YR6/2(灰黄褐)	○	○	○			○	○	○			
	118	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(9.1)	外:タタキ・ナデ 内:指頭押圧・ナデ	外:10YR7/3(にぶい黄橙) 内:10YR6/3(にぶい黄橙)	○	○		○				○			
	119	遺物集中 1	D-20	-	土器	甕	脚部	-	-	(11.2)	(5.2)	ナデ	7.5YR6/6(橙)			○				○	○			

第13表 土器・土師器・須恵器観察表 4

押図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫	
第30図	120	遺物集中 1	D-E-20	-	土器	甕	脚部	-	-	(10.2)	(6.1)	外:指ナデ・ナデ 内:ハケナデ・ナデ	外:2.5YR6/6(橙) 内:2.5YR6/8(橙)				○	○	○	○	
	121	遺物集中 1	D-20	-	土器	台付鉢	台部	-	-	-	(4.2)	ナデ・指頭押圧	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:7.5YR7/4(にぶい橙)		○		○		○	○	
	122	遺物集中 1	D-20	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(11.2)	外:タタキ・ナデ 内:指ナデ・ナデ	外:10YR6/3(にぶい黄橙) 内:7.5YR7/6(橙)	○		○		○	○	○	
	123	遺物集中 1	D-20	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(5.8)	(摩滅)	5YR5/8(明赤褐)		○		○		○	○	
	124	遺物集中 1	一括	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(5.2)	ナデ	10YR7/4(にぶい黄橙)		○				○	○	
	125	遺物集中 1	E-20	-	土器	高坏	胴部	-	-	-	(7.4)	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	7.5YR7/4(にぶい橙)	○	○	○			○	○	
	126	遺物集中 1	一括	-	土器	高坏	脚部	-	-	-	(6.0)	ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:5Y7/1(灰白)	○	○	○			○	○	
	127	遺物集中 1	D-20	-	土器	高坏	脚部	-	-	-	(5.1)	指ナデ	5YR5/6(明赤褐)	○			○	○	○	○	
第34図	128	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	(32.0)	-	(17.4)	外:ハケナデ 内:ハケナデ・指ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR7/6(にぶい黄橙)				○		○	○	
	129	遺物集中 2	C-D-22	-	土器	甕	口縁～頭部	A類	(29.8)	-	(9.8)	外:ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・指ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR8/3(浅黄橙)			○	○		○	○	
	130	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	(31.5)	-	(18.3)	外:タタキ・ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/8(黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)		○		○		○		
	131	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	-	-	(16.2)	外:ハケナデ・指頭押圧・ナデ 内:ハケナデ・指ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	
第35図	132	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	-	-	(10.3)	外:ハケナデ 内:ナデ	外:7.5YR4/4(褐) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)				○		○	○	
	133	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	-	-	(12.0)	外:ハケナデ・ナデ 内:(摩滅)	外:10YR5/3(にぶい黄褐) 内:10YR6/3(にぶい黄橙)				○		○	○	
	134	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	胴部	A類	-	-	(13.1)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:10YR5/4(にぶい黄橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)				○		○	○	
	135	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	口縁～胴部	A類	(30.0)	-	(16.1)	ナデ	外:10YR5/4(にぶい黄橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	
	136	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	口縁～頭部	A類	(32.0)	-	(10.1)	内:ハケナデ・指頭押圧	外:10YR8/3(浅黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)		○		○	○	○	○	
	137	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(6.6)	外:(摩滅) 内:指頭押圧	10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○				○	
	138	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(6.5)	ハケナデ	7.5YR6/6(橙)				○	○	○	○	
	139	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁部	A類	(23.8)	-	(7.6)	ハケナデ・ナデ	7.5YR4/2(灰褐)				○		○	○	
第36図	140	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁部	-	-	-	(6.0)	ハケナデ・ナデ	外:7.5YR4/4(褐) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)				○	○	○	○	
	141	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁部	-	-	-	(6.2)	外:ハケナデ 内:ナデ	外:10YR5/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○		○	○	
	142	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(10.6)	外:ハケナデ・ナデ 内:ユビナデ	外:7.5YR6/3(にぶい褐) 内:10YR3/7(にぶい黄橙)				○		○	○	
	143	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(7.2)	内:指頭押圧	外:5YR7/8(橙) 内:5YR6/8(橙)		○			○	○	○	
	144	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	胴部	-	-	-	(8.1)	ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR4/1(褐灰)	○					○	○	
	145	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	胴～脚部	-	-	(9.2)	(8.3)	外:指ナデ 内:ナデ	外:5YR7/6(橙) 内:7.5YR6/6(橙)		○			○		○	
	146	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	脚部	-	-	(10.8)	(4.2)	外:指ナデ 内:ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)				○		○	○	
	147	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	胴～脚部	-	-	(10.0)	(7.1)	外:指ナデ 内:ナデ・指頭押圧・工具ナデ	外:2.5YE6/8(橙) 内:2.5YR5/8(明赤褐)	○				○	○	○	
	148	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	脚部	-	-	(9.4)	(6.0)	工具ナデ・ナデ	5YR5/8(明赤褐)		○		○	○	○	○	
第37図	149	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	口縁～胴部	B類	(18.4)	-	(7.3)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	外:10YR5/4(にぶい黄橙) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)				○		○	○	
	150	遺物集中 2	C-D-22	-	土器	甕	口縁～頭部	B類	(19.0)	-	(4.1)	ナデ	外:7.5YR5/6(明褐) 内:7.5YR6/6(橙)				○	○	○	○	
	151	遺物集中 2	C-22	-	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(3.7)	ナデ	外:7.5YR5/6(明褐) 内:10YR7/6(明黄褐)		○		○			○	
	152	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(3.4)	ハケナデ・ナデ	7.5YR5/6(明褐)		○		○			○	
	153	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	口縁部	B類	(20.4)	-	(3.5)	ナデ	外:10YR5/6(黄褐) 内:7.5YR5/6(明褐)			○	○	○	○	○	
	154	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁～頭部	B類	-	-	(4.1)	ナデ	5YR5/6(明赤褐)		○		○		○		
	155	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	口縁～頭部	B類	-	-	(4.0)	外:ハケナデ 内:ナデ	7.5YR4/6(褐)		○					○	
	156	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	口縁部	B類	-	-	(2.7)	(摩滅)	外:7.5YR7/8(黄橙) 内:10YR8/4(浅黄橙)				○	○		○	
	157	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	胴部	B類	-	-	(11.5)	外:ハケナデ 内:ミガキ・ナデ	外:5YR4/8(赤褐) 内:5YR4/6(赤褐)		○				○	○	

第14表 土器・土師器・須恵器観察表 5

押図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫	
第37図	158	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	頸部	B類	-	-	(2.9)	外:ハケナデ 内:ケズリ・ナデ	外:7.5YR4/3(褐) 内:7.5YR6/3(にぶい黄橙)			○			○	○	
	159	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	底部	B類	-	-	(2.6)	外:ハケナデ	外:10YR6/4(にぶい黄橙) 内:10YR4/4(褐)	○				○	○	○	
	160	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	胴部～底部	-	-	(3.2)	(14.5)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ・指頭押圧	外:5YR7/6(橙) 内:5YR7/4(にぶい橙)	○			○		○	○	外面に粘土塊付着
	161	遺物集中 2	D-22	-	土器	甕	胴部～底部	-	-	(5.8)	(7.4)	外:ナデ 内:ナデ・指頭押圧	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)			○	○		○	○	
	162	遺物集中 2	一括	-	土器	甕	底部	-	-	(7.6)	(4.0)	外:工具ナデ 内:ナデ	外:5YR7/6(橙) 内:10YR6/4(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	
第38図	163	遺物集中 2	D-22	-	土器	壺	口縁～胴部	二重 口縁	20.3	-	(18.7)	ナデ	205YR5/8(明赤褐)		○				○	○	
	164	遺物集中 2	D-22	-	土器	壺	口縁～頸部	二重 口縁	(18.4)	-	(12.5)	外:ナデ 内:ナデ・指ナデ	5YR7/6(橙)		○		○	○	○	○	
	165	遺物集中 2	C-22	-	土器	壺	口縁～頸部	C-2類	(15.5)	-	(7.7)	外:タタキ・ハケナデ 内:ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○			○	○	
	166	遺物集中 2	C-22	-	土器	壺	口縁部	二重 口縁	-	-	(4.1)	外:タタキ・ナデ 内:(摩滅)	外:2.5YR6/8(橙) 内:7.5YR6/4(にぶい橙)	○						○	
	167	遺物集中 2	C・D-22	-	土器	壺	口縁～頸部	A-1類	(14.2)	-	(6.5)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR5/6(明褐)					○	○		
	168	遺物集中 2	C-22	-	土器	壺	頸部	-	-	-	(4.4)	外:ナデ 内:指ナデ	5YR6/6(橙)			○	○	○	○	○	
	169	遺物集中 2	一括	-	土器	壺	頸部	-	-	-	(4.8)	外:ハケナデ・ナデ 内:指頭押圧	外:10YR7/3(にぶい黄橙) 内:10YR7/2(黄橙)					○	○	○	
	170	遺物集中 2	C-22	-	土器	壺	頸部	-	-	-	(2.9)	外:ハケナデ・ナデ 内:(摩滅)	5YR5/8(明赤褐)	○		○				○	
	171	遺物集中 2	C-22	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(9.3)	外:タタキ・ハケナデ 内:ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○				○	
	172	遺物集中 2	C・D-22	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(8.3)	外:タタキ・ハケナデ 内:(摩滅)	2.5YR6/8(橙)	○	○	○				○	
	173	遺物集中 2	D-22	-	土器	壺	底部付近	-	-	-	(11.2)	外:ハケナデ 内:ユビナデ	外:5YR7/6(橙) 内:7.5YR7/3(にぶい橙)	○						○	○
	174	遺物集中 2	一括	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(3.4)	ナデ	外:7.5YR6/6(橙) 内:5YR5/6(明赤褐)				○			○	○
	175	遺物集中 2	D-22	-	土器	壺	胴部	-	-	-	(5.3)	ナデ	2.5YR6/8(橙)				○			○	○
	第39図	176	遺物集中 2	D-22	-	土器	高坏	口縁～胴部	A類	(35.2)	-	(16.5)	ナデ	外:10YR8/6(黄橙) 内:2.5YR7/4(淡赤橙)	○		○			○	○
177		遺物集中 2	C-22	-	土器	高坏	口縁～胴部	-	(18.0)	-	(6.7)	外:ハケナデ・ナデ 内:ハケナデ・ナデ・ユビナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/3(にぶい黄橙)				○	○	○		
178		遺物集中 2	C-22	-	土器	高坏	脚部	-	-	-	(8.4)	外:ハケナデ・ナデ	外:7.5YR6/6(橙)		○	○				○	○
179		遺物集中 2	一括	-	土器	高坏	脚部	-	-	-	(9.8)	ナデ(部分的にミガキ)	7.5YR7/4(にぶい橙)	○						○	
180		遺物集中 2	D-22	-	土器	小型 丸底壺	口縁～胴部	-	(10.4)	-	(5.8)	外:ハケナデ 内:ハケナデ・ケズリ・ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:5YR6/8(橙)				○			○	○
181		遺物集中 2	D-22	-	土器	小型 丸底壺	口縁～頸部	-	(12.0)	-	(3.5)	(摩滅)	外:7.5YR8/6(浅黄橙) 内:7.5YR7/6(橙)							○	○
182		遺物集中 2	D-22	-	土器	小型? 丸底壺	胴部	-	-	-	(3.0)	ナデ・指頭押圧	外:7.5YR5/4(にぶい褐) 内:5YR5/4(にぶい赤褐)	○	○					○	○
183		遺物集中 2	一括	-	土器	小型 丸底壺	口縁部	-	-	-	(5.5)	外:ナデ 内:ハケナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:7.5YR6/6(橙)						○	○	
184		遺物集中 2	D-22	-	土器	小型 丸底壺	頸～胴部	-	-	-	(7.3)	(摩滅)	外:10YR8/3(浅黄橙) 内:2.5YR8/2(灰白)						○	○	○
185		遺物集中 2	D-22	-	土器	小型 台付鉢?	底部	-	-	(7.8)	(2.5)	ナデ	7.5YR6/6(橙)							○	○
第41図	186	-	D-20	II c-2	土器	甕	口縁～胴部	B類	(19.4)	-	(11.4)	外:ハケナデ・ナデ	2.5YR6/8(橙)	○						○	
	187	-	D-21	II c-2	土器	甕	口縁部	C類	-	-	(5.2)	ハケナデ・ナデ	外:7.5YR5/4(にぶい褐) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)				○			○	
	188	-	D-18	II b	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(5.7)	ナデ・指頭押圧	外:7.5YR6/4(にぶい橙) 内:7.5YR4/1(褐灰)	○	○		○			○	
	189	-	E-21	II c-2	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(6.6)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ・指頭押圧	外:7.5YR5/4(にぶい褐) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	○						○	○
	190	-	D-21	II c-2	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(5.8)	外:ハケナデ	7.5YR6/6(橙)		○					○	○
	191	-	D-20	II c-2	土器	甕	口縁部	A類	-	-	(6.0)	外:タタキ・ハケナデ 内:ハケナデ・ナデ	7.5YR8/4(浅黄橙)				○	○	○	○	
	192	-	E-21	II c-2	土器	甕	脚部	-	-	13.6	(8.5)	ハケナデ・ナデ	外:2.5YR6/8(橙) 内:10YR5/3(にぶい黄褐)	○		○				○	○
	193	-	D-21	II c-2	土器	甕	脚部	-	-	(20.0)	(6.7)	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR6/6(橙) 内:5YR6/6(橙)		○		○			○	○
	194	-	D-19	II c-2	土器	甕	脚部	-	-	(10.7)	(4.6)	外:ナデ 内:指ナデ	5YR5/8(明赤褐)	○	○		○			○	○
第42図	195	-	E-21	II c-2	土器	壺	頸部	-	-	-	(5.2)	(摩滅)	2.5YR6/8(橙)	○		○				○	

第15表 土器・土師器・須恵器観察表 6

押図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調整	色調	胎土							備考
														石英	長石	角閃 石	雲母	灰色 礫	赤褐 色礫	白色 礫	
第42図	196	-	C-15	II c-2	土器	壺	頸部	-	-	-	(5.2)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:5YR5/8(明赤褐) 内:7.5YR5/8(明褐)	○	○				○	○	
	197	-	D-21	II c-2	土器	壺	胸部	-	-	-	(8.9)	指ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○		○				○	
	198	-	D-19	II c-2	土器	壺	胸部	-	-	-	(9.1)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR8/3(浅黄橙)	○		○			○	○	
	199	-	D-19	II a	土器	壺	胸部	-	-	-	(5.9)	ナデ・ユピナデ	外:5YR5/8(明赤褐) 内:5YR7/8(赤褐)				○	○	○	○	
	200	-	D-20	II c-2	土器	壺	胸部	-	-	-	(10.9)	指ナデ	5YR4/8(赤褐)	○			○		○	○	
	201	-	E-21	II c-2	土器	壺	胸部	-	-	-	(4.5)	(摩滅)	外:10YR6/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)	○		○			○	○	
	202	-	C-19	II c-2	土器	壺	胸部	-	-	-	(4.2)	外:タタキ・ナデ	外:10YR7/4(にぶい黄橙) 内:10YR7/2(にぶい黄橙)	○		○			○	○	
	203	-	D-E-21	II c-2	土器	壺	胸～底部	-	-	-	(9.2)	外:タタキ・ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)		○	○		○			
	204	-	D-19	II c-2	土器	壺	底部	-	-	-	(8.0)	内:指頭押圧・指ナデ	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○		○		○	
	205	-	C-19	II c-2	土器	壺	底部	-	-	(3.8)	(7.3)	外:タタキ・ハケナデ・ケズリ 内:ナデ・指頭押圧	外:2.5YR7/4(淡赤橙) 内:10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○		○		○	
	206	-	E-21	II c-2	土器	壺	底部	-	-	-	(3.6)	外:ナデ 内:指頭押圧	2.5YR5/8(明赤褐)	○	○	○				○	
第43図	207	-	D-21	II c-2	土器	高環	口縁～胸部	A類	(27.4)	-	(14.8)	外:タタキ・ナデ 内:ナデ	5YR5/6(明赤褐)	○		○	○		○	○	
	208	-	E-21	II c-2	土器	高環	口縁～脚部	B類	16.9	-	(12.4)	外:ミガキ・ハケナデ 内:ミガキ 脚内:ケズリ	5YR6/8(橙)		○	○			○	○	
	209	-	E-21	II c-2	土器	高環	脚部		-	14.3	(9.6)	外:ユピナデ・ナデ 内:ナデ	10YR6/4(にぶい黄橙)	○	○	○		○	○	○	
	210	-	E-19	II c-2	土器	高環	脚部	-	-	-	(7.4)	外:ケズリ・ナデ 内:ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)	○	○	○	○		○	○	
	211	-	E-21	II c-2	土器	高環	脚部	-	-	-	(4.9)	外:ハケナデ・ナデ 内:ナデ	外:7.5YR7/6(橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)		○		○	○	○	○	
	212	-	E-21	II c-2	土器	小型 台付壺	口縁～ 底部付近	-	(10.3)	-	(9.6)	外:ミガキ・指ナデ・ナデ 内:ミガキ・ナデ・指頭押圧	5YR5/8(明赤褐)		○			○		○	
	213	-	E-21	II c-2	土器	台付鉢か 小型高環	脚部	-	-	(11.0)	(3.9)	外:ハケナデ・ナデ 内:ケズリ・ナデ	7.5YR6/6(橙)	○	○		○		○	○	
	214	-	C-14	II c-2	土器	小型 丸底壺	底部	-	-	-	(2.2)	内:指頭押圧・ナデ	7.5YR7/6(橙)			○			○	○	
第44図	215	-	C-17	II c-2	土師器	環	胸～底部	-	-	(7.6)	(3.0)	回転ナデ	7.5YR7/6(橙)				○		○	○	底部糸切り
	216	-	C-18	II b	土師器	皿	底部	-	-	-	(2.6)	回転ナデ	外:10YR6/3(にぶい黄橙) 内:10YR7/4(にぶい黄橙)				○		○	○	底部糸切り
	217	-	C-16	表土	土師器	壺	口縁	-	-	-	(2.5)	外:ハケのちナデ 内:ハケ	7.5YR7/6(橙)					○		○	
	218	-	D-21	II b	須恵器	蓋	口縁部	-	-	-	(1.5)	回転ナデ	N71(灰白)					○		○	
	219	-	C-18	II a	瓦質土器	羽釜	口縁部	-	-	-	(5.1)	ナデ	外:10YR6/4(にぶい黄橙) 内:7.5YR6/6(橙)	○	○				○	○	
	220	-	D-18	II b	瓦質土器	羽釜	胸部	-	-	-	(4.3)	ナデ	外:2.5Y3/1(黒褐) 内:5Y5/1(灰)	○	○		○	○		○	
第45図	221	-	D-18	II a	瓦質土器	摺鉢	口縁～底部	-	(27.6)	(10.9)	11.8	外:指ナデ	10YR8/3(浅黄橙)							○	
	222	-	D-18	II a	瓦質土器	摺鉢	胸～底部	-	-	(10.8)	(7.7)	外:ナデ・ケズリ	10YR8/3(浅黄橙)							○	○
	223	-	D-18	II b	瓦質土器	摺鉢	口縁～胸部	-	(32.3)	-	7.5	外:指ナデ	5Y7/1(灰白)							○	
	224	-	D-19	II a	瓦質土器	摺鉢	胸～底部	-	-	-	(9.3)	外:ナデ	10YR7/2(にぶい黄橙)							○	
	225	-	D-19	II a	瓦質土器	摺鉢	口縁～胸部	-	(31.0)	-	(6.0)	外:指ナデ	10YR8/3(浅黄橙)							○	
	226	-	D-18	II a	瓦質土器	摺鉢	口縁～胸部	-	(26.0)	-	(5.3)	外:指ナデ	5Y6/1(灰)							○	
第47図	227	SB1-P5	D-19	埋土	土師器	碗か坏	口縁～胸部	-	-	-	(4.1)	ナデ	5YR5/8(明赤褐)			○			○		
	228	SB1-P6	D-18	埋土	土師器	皿	口縁～底部	-	-	-	(3.3)	回転ナデ	内:5YR6/6(橙) 外:5YR5/8(明赤褐)				○		○	○	
第65図	255	P71	C-17	埋土	瓦質土器	こね鉢	口縁～胸部	-	(40.4)	-	(5.5)	外:指頭押圧・ナデ	10YR8/3(浅黄橙)						○	○	
	256	P71	C-17	埋土	土器	高環	脚部	-	-	-	(5.4)	ナデ	10YR7/3(にぶい黄橙)		○	○			○	○	
	259	P172	C-18	埋土	土師器	皿	口縁～底部	-	(7.4)	(6.0)	2.1	回転ナデ	7.5YR6/6(橙)			○	○		○	○	底部糸切り
	260	P172	C-18	埋土	土師器	皿	口縁～底部	-	(8.0)	(6.0)	1.9	回転ナデ	7.5YR6/4(にぶい橙)				○		○	○	底部糸切り

第16表 陶磁器観察表

挿図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	種別	器種	部位	分類	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	素地／釉調	備考
第53図	230	SK10	D-15	①	磁器	メンコ	-	-	-	-	3.1	白色磁土	コンプラ瓶の転用
第55図	232	SK13	D-15	③	陶器	甕	口縁～胴部	備前焼	20.0	-	(19.0)	褐色釉	
	233	SK13	D-15	埋土一括	陶器	土瓶	胴部～底部	苗代川系	-	-	(6.8)	褐色釉	脚は1箇所のみ残存
第60図	234	-	一括	I	磁器	蓋	口縁～底部	肥前系	4.4	9.8	3.1	白色磁土	
	235	-	一括	攪乱	磁器	筒形碗	口縁～底部	肥前系	(8.0)	3.6	6.1	白色磁土	
	236	-	B-15	II c-3	磁器	碗	口縁～胴部	肥前系	(11.2)	-	(4.8)	白色磁土	
	237	-	D-16	II b	陶器	碗	胴部	内野山系	-	-	(3.0)	白色磁土	
	238	-	C-16	II c-2	陶器	碗	胴～底部	肥前系	-	(5.6)	(2.9)	白色磁土	
	239	-	C-16	II c-2	磁器	碗	胴～底部	肥前系	-	(4.2)	(2.7)	白色磁土	
	240	-	一括	表土	磁器	碗	胴～底部	肥前系	-	4.4	(3.6)	白色磁土	
	241	-	C-16	II c-2	磁器	皿	口縁～底部	肥前系	(13.2)	(7.2)	3.1	白色磁土	
	242	-	C-15	II c-3	磁器	皿	口縁～底部	肥前系	12.6	5.4	3.1	白色磁土	
	243	-	C-16	II c-2	磁器	皿	口縁～胴部	肥前系	(12.4)	-	(2.5)	白色磁土, 白色釉	
	244	-	一括	攪乱	磁器	皿	口縁～底部	肥前系	(14.2)	(8.0)	3.1	白色磁土	見込に五弁花文
	245	-	一括	表土	磁器	輪花皿	口縁～底部	中国産	(13.3)	4.8	3.7	白色磁土	
第61図	247	-	C-16	I・II c-2	陶器	摺鉢	口縁～胴部	苗代川系	(33.6)	-	(8.9)	緑褐色釉	
	248	-	一括	表土	陶器	摺鉢	口縁～胴部	苗代川系	(26.3)	-	(5.0)	緑褐色釉	
	249	-	一括	II c-2	陶器	片口	口縁～胴部	苗代川系	(29.0)	-	(5.7)	褐色釉	口唇部に土目跡
	250	-	一括	II c-2	陶器	壺	口縁～胴部	薩摩焼	(36.0)	-	(9.5)	緑褐色釉	口唇部に貝目跡
第62図	251	-	D-19	II a	釉	羽口	-	-	外径 7.9	内径 2.0	(11.8)	7.5YR7/6(橙)	器高＝残長
	252	-	D-19	II a	釉	羽口	-	-	外径 8.6	内径 2.3	(7.1)	外:10YR8/2(灰白) 内:10YR8/3(浅黄橙)	器高＝残長
	253	-	C-17	II c-2	瓦	-	-	-	-	-	(6.2)	7.5YR7/6(橙)	器高＝残長
第65図	254	P50	D-15	埋土	陶器	鉢	口縁部	備前焼	-	-	(3.1)	暗赤褐色釉	
	257	P162	C-22	埋土	磁器	碗	胴～底部	青磁	-	6.6	(2.4)	茶褐色釉	
	258	P142	C-18	埋土	釉	羽口	-	-	外径 7.4	内径 2.0	(10.3)	5YR7/4(にぶい橙)	器高＝残長

第17表 石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
第26図	102	SH2	一括	-	磨敲石	安山岩	9.7	8.6	4.7	431	
	103	SH2	D-21	③	敲石	安山岩	13.9	5.9	3.2	358.7	
	104	SH2	D-21	③	砥石	砂岩	8.7	12.0	2.0	301.5	二次加工か
	105	SH2	D-21	④	硯状石製品	頁岩	(5.5)	3.5	0.7	19.5	
	106	SH2	一括	中央下	硯状石製品	砂岩	(5.8)	5.0	(0.9)	36.5	
第48図	229	SB1-P3	D-19	①	台石	安山岩	(23.9)	13.0	8.8	3500	
第66図	266	-	D-19	II a	砥石	砂岩	(7.4)	6.3	6.6	441.1	
	267	-	C-14	II c-2	硯状石製品	砂岩	(5.5)	(2.8)	(0.5)	11.7	
	268	-	D-18	II a	凹石	安山岩	10.3	5.6	5.7	453.7	
	269	-	D-19	II a	敲石	安山岩	10.0	6.4	4.1	456.5	

第18表 鉄器観察表

挿図 番号	掲載 番号	遺構	区	層	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第55図	231	SK13	D-15	③	鎌	(14.5)	5.8	2.1	181.5	重量は錆も含む
第65図	261	P102	D-18	埋土	鉄滓	(5.0)	3.2	3.0	39	
	262	P71	C-17	埋土	鉄滓	(8.6)	5.0	4.1	140	
第66図	263	-	C-18	II b	刀子か	(2.8)	2.2	1.3	5	重量は錆も含む
	264	-	D-19	II a	鉄滓	(4.4)	4.7	2.3	89	
	265	-	D-19	II a	鉄滓	(3.5)	4.1	2.6	34	

第Ⅴ章 自然科学分析

第1節 分析の概要

平成29・30年度、令和元年度の発掘作業及び平成30～令和2年度における整理報告書作業において、樹種同定及び放射性炭素年代測定（AMS測定）の分析を行った。実績は次の通りである。

第2節 六反ヶ丸遺跡の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 概要

六反ヶ丸遺跡（鹿児島県出水市六月田町803）からは、古墳時代や、古代の遺構、遺物が検出されている。今回は、出土した木材に関して、樹種同定を行い、遺構の時代観や用材に関する情報を得る。

2 試料

試料は、炭化材1点（No.1）が樹種同定用試料である。泥炭質の植物塊で、アカガシ亜属の葉などからなる。分析には生材を用いる。試料名などの詳細は、樹種同定結果とともに第19表に示す。

3 分析方法

（1）樹種同定

炭化材は木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成する。炭化材は双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

4 結果

（1）樹種同定

結果を第19表に示す。分析の結果 No.1 がクヌギ節に同定される。以下に検出された種類の解剖学的特徴を示す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*） ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外では年輪界に向かって径を漸減しながら、小径の道管が単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

5 考察

検出される種類のうち、落葉広葉樹であるコナラ亜属クヌギ節は、湿ったところを好み、谷筋や河川沢沿い、

人里近くなどに明るい林地を作る。本遺跡周辺で入手しやすい種類であったと思われる。伊東隆夫・山田昌久編（2012）の出土木製品用材データベースをみると、県内の古墳時代における炭化材の出土例は少ないが、縄文時代～古代に範囲を広げてみると、いずれも出土例がある。これらは燃料材としての利用が考えられる。

引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL, Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafflidason H., Hajdas I., Hatte C., Heaton TJ., Hoffmann DL, Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turmery CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, *Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data*. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修),

海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第19表 樹種同定結果

No.	試料名	種類	備考
1	D-21 竪穴建物跡2号 炭3	コナラ亜属クスギ節	

第3節 六反ヶ丸遺跡出土材の樹種同定

(株) 加速器分析研究所

1 試料

鹿児島県に所在する六反ヶ丸遺跡の試料は、竪穴建物跡2号から出土した炭化材3点である。なお、これらの試料を対象に放射性炭素年代測定が行われており(別稿樹種同定報告参照)、樹種同定と同じ破片を用いている。

2 分析方法

炭化材の多くは土塊中に複数の破片が認められる。十分な大きさがある試料については、分割して年代測定と樹種同定にそれぞれ供する。一方、小片しか認められない試料については、最初に樹種同定を実施し、顕微鏡観察・写真撮影に必要な最小限の破片を採取した上で残りを年代測定に供する。以下に樹種同定の方法について記す。

抽出した炭化材を自然乾燥させた後、双眼実態顕微鏡(NIKON 製 SMZ-10)で観察しながら木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作成する。この際、脆い試料については、UV レジンを染み込ませて固化・補強する。作成した断面をアルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定し、破損防止のために周囲をUV レジンで固める。

走査型電子顕微鏡(株式会社日立ハイテクノロジーズ製 SU3500)の低真空モード10~500倍で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を第20表に示す。炭化材は、広葉樹2分類群(コナラ属アカガシ亜属, クリ近似値)に同定された。同定された各分類群の解剖的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen.

Cyclobalanopsis ブナ科

放射孔材。道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線径は、最大で100~120 μ m。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、

1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ cf *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
ブナ科クリ属

試料はいずれも保存状態が悪い。年輪界で割れており、孔圏部の多くを欠く。僅かに残る孔圏部と晩材部における道管径の違いから環孔材と判断できる。晩材部の小道管は、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

小片で孔圏部の多くを欠くことから、道管配列がよく似たコナラ節やシイ属との区別が困難である。これらの中では、道管径や配列の状況がクリに近いことからクリ近似種とした。

4 考察

竪穴建物跡2号から出土した炭化材は、種類不明も含めて全て広葉樹であり、3点に2種類が認められた。確認された各種類の材質についてみると、アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる常緑高木である。木材は比較的重硬で強度が高い。クリ(近似種)は、二次林等に生育する落葉高木である。木材は重硬で強度と耐朽性が高い。

竪穴建物跡2号では、クリ近似種の利用が目立つ。また、クリ近似種の他にアカガシ亜属が認められ、少なくとも2種類の利用が推定される。アカガシ亜属とクリ近似種の材質から、利用された木材の中に強度の高い木材が含まれていたことが推定される。

引用文献

- 林昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木

材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70P.
[Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson

P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

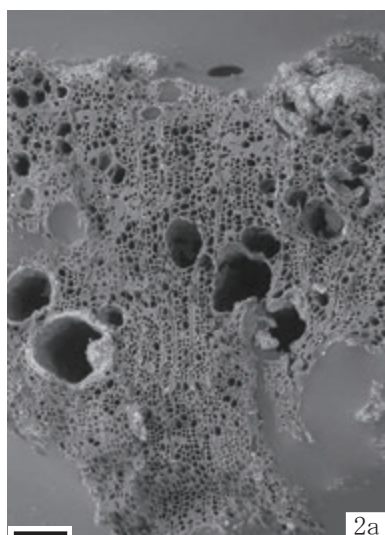
島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

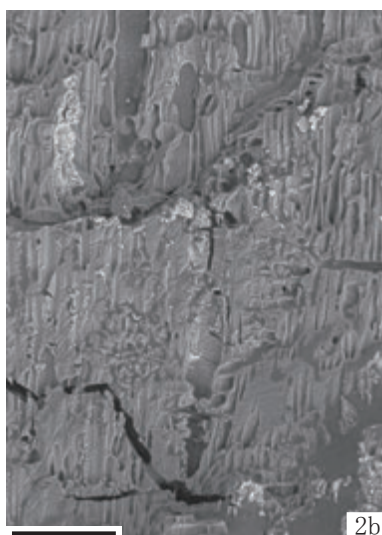
第20表 樹種同定結果

No	試料名	取上番号	形状	樹種
1	竪穴建物跡 2 号	炭 1	破片	コナラ亜属アカガシ亜属
2	竪穴建物跡 2 号	炭 2	破片	クリ近似種
3	竪穴建物跡 2 号	炭 4	破片	クリ近似種

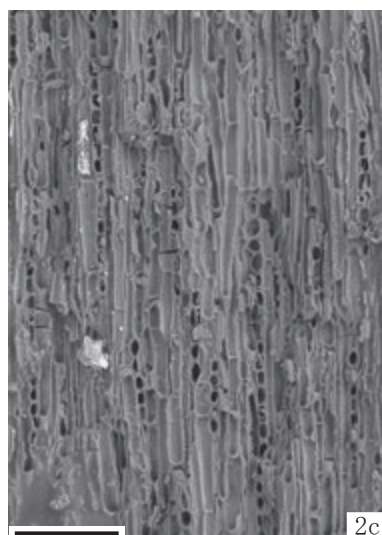
第67図 炭化材



2a



2b



2c

2 クリ近似値 (試料番号 3)

各写真のスケールは0.1mm

第4節 六反ヶ丸遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 概要

鹿児島県に所在する六反ヶ丸遺跡の測定対象試料は、
竪穴建物跡2号から出土した炭化物4点である(第21
表)。なお、これらの同一試料を対象に樹種同定が行わ
れている(別稿樹種同定報告参照)。なお、測定は平成
31年度と令和2年度の2回に分けて実施した。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理
により不純物を科学的に取り除く。その後、超純水
で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理
における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸
(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウ
ム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々
に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1
Mに達した時には、「AAA」、1M未満の場合は
「AaA」と第21表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元
し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレ
ス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置
に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)
を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/
¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)
から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。

この標準試料をバックグラウンド試料の測定も同時に
実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、
基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値で
ある(第21表)。AMS装置による測定値を用い、表
中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中
¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年
を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値
の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する
(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によっ
て同位体効果を補正する必要がある。補正した値を
第21表に、補正していない値を参考値として第22表
に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単
位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、

試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%で
あることを意味する。

- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭
素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMC
が小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、
pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)
の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正
する必要があるため、補正した値を第21表に、補正
していない値を参考値として第22表に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を
元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃
度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。
暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線状の暦
年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)ある
いは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表示される。グラ
フの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦
年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行
い、下一桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正
曲線および較正プログラムは、データの蓄積によっ
て更新される。また、プログラムの種類によっても
結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種
類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、
暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース
(Reimer et al.2013)を用い、OxCalv4.3較正プロ
グラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正
年代については、特定のデータベース、プログラム
に依存する点を考慮し、プログラムに入力する値と
ともに参考値として第22表に示した。なお、暦年較
正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)され
た年代値であることを明示するために「cal BP」ま
たは「cal BC/AD」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を第21表、第22表に示す。

竪穴建物跡2号から出土した試料1点の¹⁴C年代は、
1が $1860\pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1σ)は92
~214calADの間に3つの範囲で示され、弥生時代後期
頃に相当する(藤尾2009)。

なお、試料1が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関
しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対
して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの
指摘がある(尾寄2009, 坂本2010など)。その日本産樹
木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正
した場合、ここで報告する較正年代よりも新しくなる可
能性がある。

試料の炭素含有率は、27%で、炭化物としてはやや低
い値である。試料には土が混じり、除去しきれなかった。
測定された炭素の由来に若干注意を要するが、測定結果
に影響するほどではないと見られる。

竪穴建物跡2号出土炭化材の ^{14}C 年代は、2が $1910 \pm 20\text{yrBP}$ 、3が $1760 \pm 20\text{yrBP}$ 、4が $1750 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、2が67～125cal ADの範囲、3が245～325cal ADの間に2つの範囲、4が250～330cal ADの間に2つの範囲で示される。2は弥生時代後期頃、3、4は古墳時代前期頃に相当する(佐原2005, 藤尾2009)。

今回測定された試料はいずれも炭化材で、樹皮を確認できていない。このため、次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す(古木効果)。今回測定された試料には樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

また、試料2～4が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾寄2009, 坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値もより新しくなる可能性がある。

試料となった炭化材には、土塊に包含された細片もあり、付着した土を十分除去できない場合があった。炭素含有率は、3、4が45%以上のおおむねの適正な値であっ

たが、2は12%というかなり低い値を示した。2のように炭素含有率が特に低い試料については、測定された炭素の由来に注意を要する。

引用文献

- Bronk Ramsey,C.2009 Bayesian analysis of radio carbon dates,Radiocarbon 51(1), 337-360
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘 編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
- 尾寄大貴 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer,P.J.et al.2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP,Radiocarbon 55(4), 1869-1887
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原真, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木ー弥生から古墳へー, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1970 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第21表 放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\sigma^{13}\text{C}$ (0/00) (AMS)	$\sigma^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-190745	1	竪穴建物跡2号 炭3	炭化物	AaA	-25.59 ± 0.16	$1,860 \pm 20$	79.34 ± 0.23
IAAA-200326	2	竪穴建物跡2号 炭1	炭化材	AaA	-28.02 ± 0.45	$1,910 \pm 20$	78.81 ± 0.24
IAAA-200327	3	竪穴建物跡2号 炭2	炭化材	AaA	-24.49 ± 0.32	$1,760 \pm 20$	80.34 ± 0.24
IAAA-200328	4	竪穴建物跡2号 炭4	炭化材	AaA	-26.48 ± 0.44	$1,750 \pm 20$	80.44 ± 0.23

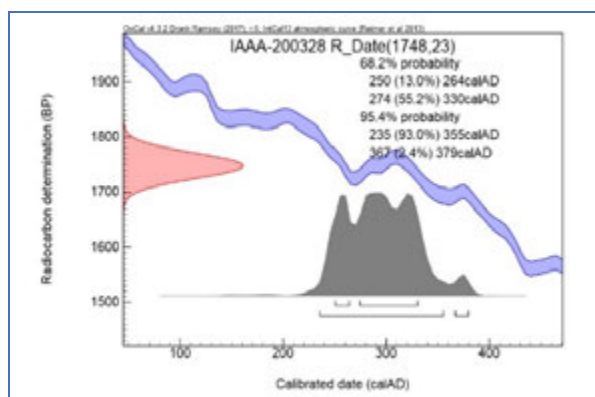
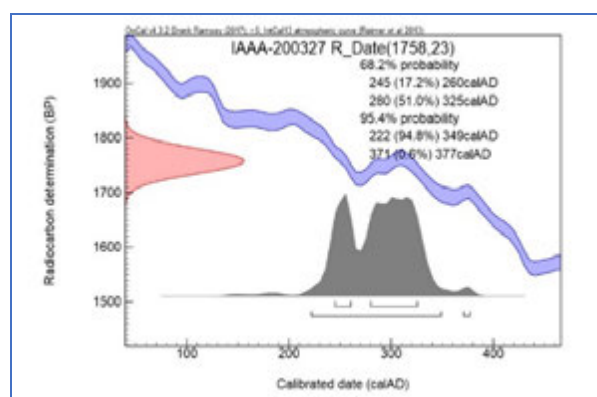
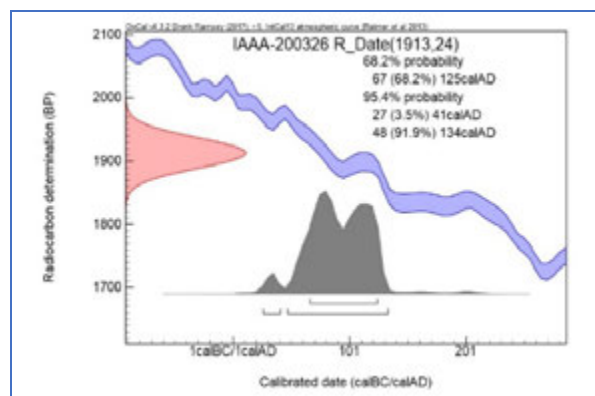
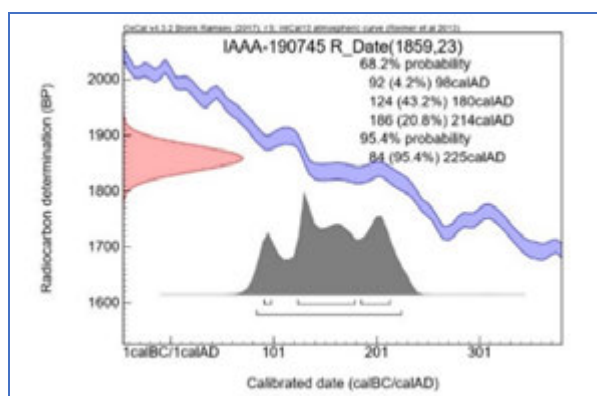
[IAA 登録番号: #9775]

[IAA 登録番号: #A212]

第22表 放射性炭素年代測定結果 ($\sigma^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年校正用 ^{14}C 年代, 較正年代)

測定番号	$\sigma^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-190745	1,870 $\pm$ 20	79.24 $\pm$ 0.23	1,859 $\pm$ 23	92calAD-98calAD (4.2%) 124calAD-180calAD (43.2%) 186calAD-214calAD (20.8%)	84calAD-225calAD (95.4%)
IAAA-200326	1,960 $\pm$ 20	78.32 $\pm$ 0.22	1,913 $\pm$ 24	67calAD-125calAD (68.2%)	27calAD-41calAD (3.5%) 48calAD-134calAD (91.9%)
IAAA-200327	1,750 $\pm$ 20	80.43 $\pm$ 0.23	1,758 $\pm$ 23	245calAD-260calAD (17.2%) 280calAD-325calAD (51.0%)	222calAD-349calAD (94.8%) 371calAD-377calAD (0.6%)
IAAA-200328	1,770 $\pm$ 20	80.20 $\pm$ 0.22	1,748 $\pm$ 23	250calAD-264calAD (13.0%) 274calAD-330calAD (55.2%)	235calAD-355calAD (93.0%) 367calAD-379calAD (2.4%)

[参考値]



第68図 暦年較正年代グラフ (参考)

第Ⅵ章 総 括

第 1 節 六反ヶ丸遺跡の地形的特徴

六反ヶ丸遺跡において、遺構・遺物の主体をなすⅡ層はシルト質の土壌であり、基盤層であるⅢ層は砂や細礫、大型の礫が混ざる砂礫層で、部分的にラミナ状に堆積する状況も確認できた。B地点では、Ⅲ層は平均して標高4.0～5.0m前後で検出されており（第70図）、浅いところでは、掘削深度が1mに満たなかった。これらの六反ヶ丸遺跡の基本土層は、遺跡の西側を流れる米ノ津川の河川堆積作用によって形成されたものである。一般的に、河川の本流から近い範囲には重量のある大型の礫等が堆積し、本流から遠ざかると重量が軽く粒径の小さい砂やシルトが堆積する。そのため、Ⅲ層が形成された時期は六反ヶ丸遺跡周辺と米ノ津川は比較的近く、Ⅱ層が形成された時期は遺跡と米ノ津川がやや遠ざかった状況であったと考えられる。また、Ⅱ層以上には大型の礫等があまり混入しておらず、連続してシルト質の土壌が堆積している点からも、Ⅱ層形成過程以降に大幅な河川流路の変動はなかったと想定される。ただし、Ⅱ層中から出土する遺物は破片が多く、摩滅している点から、小規模な河川氾濫等に伴う削平・再堆積は生じていたといえる。

B地点で検出された自然現象として、B・C-17区で確認された「噴礫」がある。地震に伴って下層の土壌が筋状に噴き上がる液状化現象の一種で、県内では同様の現象である噴砂が東九州自動車道に係る荒園遺跡（調査センター2017）の発掘調査をはじめ、複数の遺跡で確認されている。六反ヶ丸遺跡では、下層の砂礫層（Ⅲ層）がⅡ層上面まで幅広い帯状にせり上がる状況が確認された（第69図左）。通常であれば、礫は長軸が水平方向で堆積していることが多いが、土層がせり上がった部分の周辺は、礫の堆積方向が縦方向になっている。これは、下から上へ吹き上がる力が働いたことに起因したと考え

られ、遺跡内の通常の堆積と異なる点から、噴礫と認定した。噴礫の発生には、ある程度大きな規模の地震等の自然現象が影響したと考えられるが、現状では細かい時期認定には至っていない。今回の噴礫の検出状況では、噴礫の最上面がⅡ層上面まで至り、表土で削平されている状況から、古墳時代以降に発生したと想定される。なお、B地点で検出した噴礫については、剥ぎ取り保存を行っている（第69図右）。

第 2 節 縄文時代～弥生時代

六反ヶ丸遺跡では、A地点～D地点のいずれの地点においても、縄文時代～弥生時代の遺構・遺物量が少ない。一方で、古墳時代には大型の竪穴建物跡が形成され、遺物量も増大する点から、六反ヶ丸遺跡において人間の活動が活発になったのは古墳時代以降といえる。

B地点では、縄文時代～弥生時代にかけての遺構は検出されず、遺物も3例のみであった。現在、整理作業を進めているC・D地点においても、縄文時代の遺構は確認されていない。A地点では縄文時代晩期の土坑1基が検出され、深鉢・浅鉢・組織痕土器といったセット関係も小片ながら出土しており、A地点周辺では縄文時代の生活痕跡がうかがえる。

弥生時代については、B地点では遺構・遺物ともに確認されなかった。これはA地点でも同様であり、C・D地点でも遺構は確認されていない。弥生時代に関しては、いずれの地点においても遺物小片が出土する程度であり、遺構は確認されていない。

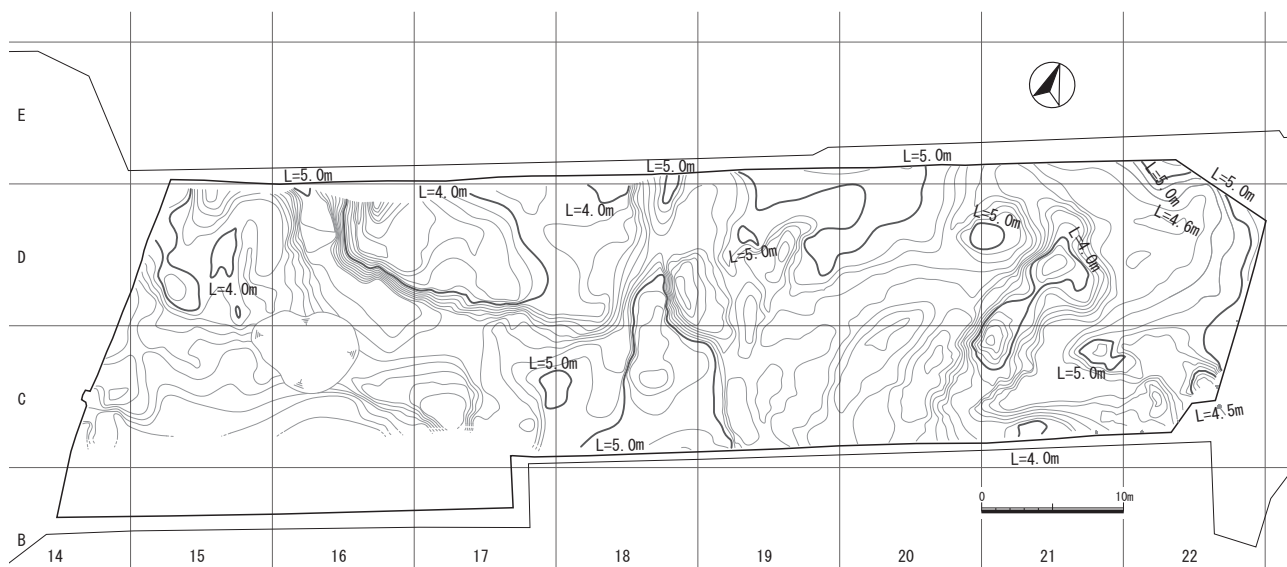
第 3 節 古墳時代

1 遺構

B地点では、竪穴建物跡1基、遺物集中2か所、土坑



第69図 B地点検出の噴礫（左：近景、右：剥ぎ取り風景）



第70図 B地点Ⅲ層上面地形図

2基を検出した。竪穴建物跡も検出され、遺物出土量も圧倒的に多く、B地点をはじめとする六反ヶ丸遺跡の中心をなす時代である。第70図に示したとおり、B地点はⅢ層上面の起伏が激しく、遺物集中1周辺から西側にかけてはⅡ層の堆積が薄い。竪穴建物跡2号が構築されているC・D-20・21区周辺はⅡ層が比較的厚く堆積しているため、居住域として選択されたと考えられる。

竪穴建物跡2号は直径約10mをはかり、A地点で検出された竪穴建物跡1号（長軸3.4m）と対比してもかなり大型である。近年発掘調査がなされた、熊本県水俣市の北園上野古墳群（熊本県教育委員会2020）において、六反ヶ丸遺跡とほぼ同時期の集落跡が発見されており、ベッド状の段を有する円形住居が検出されている。北園上野古墳群で検出された17基の竪穴建物跡は、4.0m～7.0m前後のものが多く、最大の竪穴建物跡は長軸8.4mである。B地点の竪穴建物跡2号は、北園上野古墳群の事例と比べても大型である点が注目される。また、両遺跡の竪穴建物跡の検出例から、長軸4.0m前後の比較的小型の竪穴建物跡と長軸8.0mを超える大型のものが集落内で並存すると考えられ、六反ヶ丸遺跡C・D地点も含めて当時の集落構造を検討する上で重要な事例といえる。

竪穴建物跡2号では、床面付近の埋土を中心に、炭化材及び焼土、遺物がまとまって出土し、特に3段目の北東部で炭化材が集中して出土した。本地点の古墳時代遺物の大半は、この竪穴建物跡2号から出土した土器である。炭化材は、大型のものは長さ50cm、幅15cm程で、建築部材の一部と考えられる。炭化材の太さや検出時の向き等も検討したが、建物内のどの部材に対応するかは把握できなかった。また、遺物も総合して考えると、土器の復元資料は多いものの完形率が低い点から、建物が焼失したとしてもそのままの状況ではなく、河川堆積作用などの影響を受けて、位置が移動している可能性が高い。

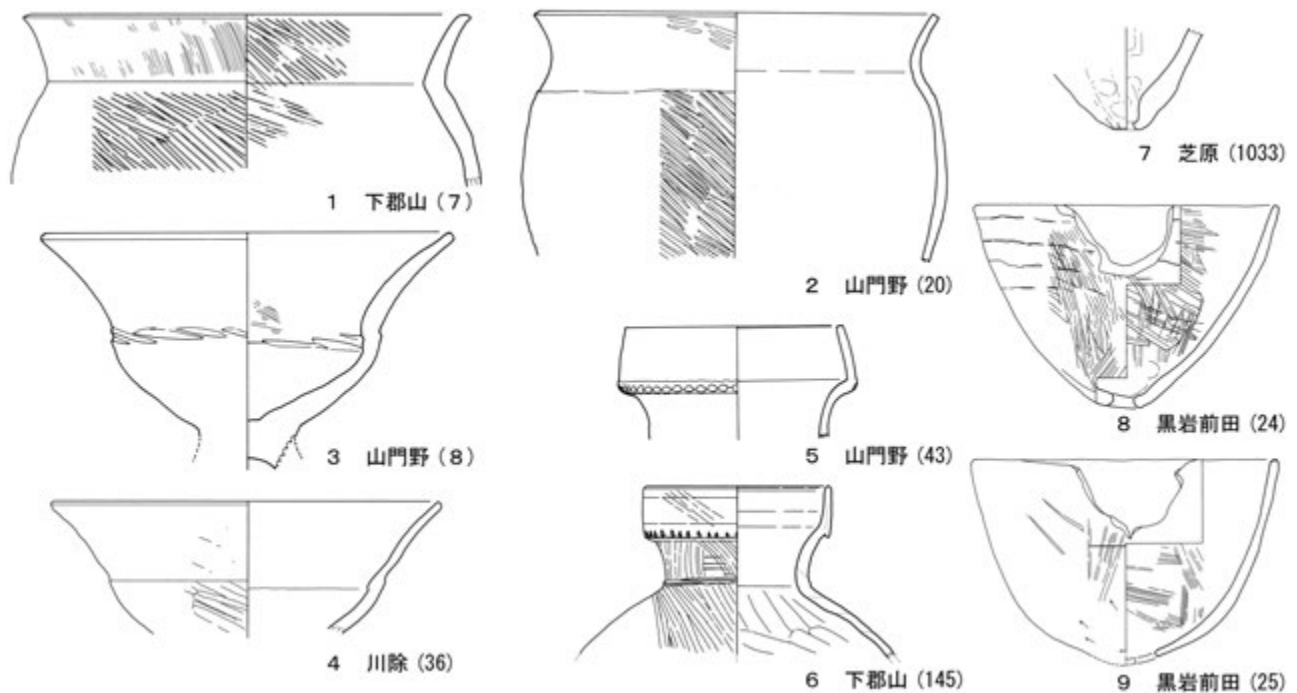
樹種同定の結果、炭1はコナラ属アカガシ亜属、炭2・3はクリ近似種、炭4はコナラ亜属クヌギ節と、いずれも常緑広葉樹のブナ科植物であった。第V章の考察にもあるように、これらの木材は硬質で、強度が高いという特徴がある。また、クリ材は水に強いという特性もあり、建物の建材や杭等にも比較的使用されている樹種である。また本例は、当時の自然環境を示す一つの試料ともいえる。

遺物集中は竪穴建物跡に次いで大型の破片がまとまってみられたが、完形復元できた資料はなく、河川堆積等で流れ込んだ土器溜まり状の遺構と考えられる。特に、遺物集中2は砂利を多く含む層中に土器片と5cm大の礫が混在する状況であり、河川堆積の影響を裏付けている。その他、土坑6・7号が検出されたが、いずれも削平を受けており、遺物も胴部片であったため、機能の推定には至らなかった。

2 遺物

古墳時代の出土遺物は、摩滅した小片を除いても遺構内及び包含層を含めて29,305点にのぼり、本来の個体数の多さがうかがい知れる。しかし、完形復元できた資料は数点であり、接合資料が少ない結果となった。

第四章第2節で述べたとおり、各器種とも数種に形態分類が可能であった。まず、甕形土器に関しては甕A～C類に大別した。甕A類は、カキアゲ口縁となるものが多く、脚台を伴う可能性が高い点からも在地的な要素が強い。胴部上半の形態から考えれば、カキアゲ口縁の手法や、頸部に突帯が伴わないことなどから、成川式土器東原段階前半の特徴に近いといえる。甕A類の中には、遺物集中1でみられるようなタタキ痕が明瞭なものが一定量含まれ、A地点でも出土例がある。県内でタタキ痕を有する甕形土器は六反ヶ丸遺跡以外では、長島町山門野遺跡（東町教育委員会1983）、薩摩川内市堀之内遺跡（調査センター2014）、外川江遺跡（県教委1984）、出水



第 71 図 関連資料（括弧内は報告書掲載番号、いずれも S=1/6）

市老神遺跡（出水市教委1995）、大坪遺跡（埋文センター2005）、下郡山遺跡（出水市教委2013）、日置市向楯城跡（埋文センター2008）に類例がある（第71図1・2）。いずれも、北薩地方を中心に出土例があり、器形は在地土器と同様だが、タタキ調整の痕跡を器面に残すという地域的な特徴があると考えられる。

甕B類はいわゆる丸底甕で、在地の成川式土器にはみられない器種である。甕B類がまとめて出土した竪穴建物跡2号の例をみれば、外面にはタタキ痕及び細かいハケ目が残っており、甕A類に比べて器壁は薄い。胴部以下が残存する資料が少ないが、底部の出土例35を参考にすれば、内底面は指頭押圧による成形と想定される。口唇部が短く外傾し、緩やかに胴部が球状に膨らむ点も、いずれの出土例にも共通する特徴である。以上のような特徴から、甕B類は古式土師器の系統ととらえることができる。しかし、北部九州のいわゆる布留式系甕と比較すると圧倒的に器壁が厚く、北部九州の布留式系甕に特徴的な、頸部の横位のハケ目や胴部上半の沈線文を有する資料もみられない。タタキ調整により器壁を伸ばし、内面にケズリ調整を加えることで器壁の薄さを求めていると考えられるが、六反ヶ丸遺跡の出土例は器壁が6mm程度と全体的に厚手であり、色調が暗く砂礫を多く含む点からも搬入品とは考えがたい^{註1)}。搬入品と想定される資料も少数であり、全体的には器形にやや歪みがある点からも、六反ヶ丸遺跡の甕B類は古式土師器が流入する過程で、形態や製作技術が変容したものと考えられる^{註2)}。古式土師器の特徴を有する資料がまとめて北薩地域で出土したことにより、今後の古式土師器の

伝播や拡散を検討する上で良好な資料となるであろう。

なお、甕B類は大半の資料が竪穴建物跡2号からの出土である。竪穴建物跡2号では甕A類がほとんど出土しない点で他の遺構と対照的であり、硯状石製品とした石器2点^{註3)}が伴う点からも、外来的な要素が強い遺構といえる。

甕C類とした長胴形甕の一群は、B地点では口縁部片のみと断片的であるが、A地点報告書（調査センター2020）掲載の71・72などが該当すると考えられる。薄手で長胴という特徴は成川式土器にはなく、外来系の一群ととらえられ、中九州以北にみられる長胴甕の流れをくむものと想定される。ただし、口縁部が内湾する例が多い点の中九州地域と異なっており^{註4)}、今後C・D地点の事例も含めてさらに広域的な視野で検討する必要がある。

壺形土器はA～C類に分類し、C類を突帯や刻みの有無でさらに2分した。口縁部～底部までの一連の器形が分かる資料がなく、口縁部と底部の形態の組み合わせは不明である。底部の出土例は、明瞭な平底はほとんどなく、レンズ状あるいは丸底・尖底である点から、弥生時代終末期～古墳時代前期には収まる特徴と考えられる。壺A類・壺B類は短頸壺や広口壺であり、胎土や器形は在地系土器の特徴を有する。壺C類に比べて、壺A・B類は出土例が少なく、全体的に小・中型の壺形土器の量が少ない傾向にある。壺形土器で注目すべきは、壺C類を含めた大型の二重口縁壺にバリエーションがみられる点である。本文中でも触れたように、標準的な壺C類である竪穴建物跡2号出土46～48等に加え、遺物集中2出

土163・164や、山陰系と考えられる大型二重口縁壺（54）があり、搬入品と考えられる54を除けば、いずれも在地で製作されている。このことから、二重口縁壺には複数の系統が影響している可能性がある^{註5)}。壺C類の類例は、山門野遺跡、老神遺跡、下郡山遺跡など、長島から出水市周辺での出土例が多く（第71図5・6）、水俣市の北園上野古墳群でも出土している。さらに、六反ヶ丸遺跡出土の54を除く大型二重口縁壺は、ほぼ全て色調に赤みが強く胎土に砂礫を含むという共通点があり、壺型土器の胴部片である171・172も同様の胎土である。このように、短頸壺や広口壺など小・中型の壺型土器はやや暗い色調、大型の二重口縁壺は赤みの強い色調と分かれる傾向にあり、壺形土器の形態によって発色を意識した製作がなされた可能性を指摘できる。なお、竪穴建物跡2号から出土した52・53は胎土が軟質かつ肩が張る球形に近い器形で、特に52の細かいハケ調整と内面のケズリ調整は上記した大型二重口縁壺とは異なる。口縁部片にも同様の色調・胎土のものはなく、さらに別の形態の大型壺となると想定される。

高坏はA～C類の3つに細分した。隣接するA地点出土の高坏は、比較的口径が大きく坏部が浅い資料が多いが、B地点では確認できなかった。高坏A類は、大型で碗形の坏部を有するもので、山門野遺跡や出水市川除遺跡（出水市教委2013）に類例がある（第71図3・4）。坏部の容積が大きく、厚みもある点で特徴的な高坏であり、現状では、出水・長島周辺に出土例がにまとまる傾向にある。県内の古墳時代の高坏と比較しても、容積・重量共にかなり大型の資料と位置づけられる。高坏B類はほぼ完形となる資料もあり、脚部が中空で屈曲して底部が広く開く長脚高坏であり、いずれも胎土も精製されている。さらに、坏部は深く稜も明瞭で、器壁が薄い。以上の特徴から、布留式系の高坏に位置づけられる。中でも66は特に精製度が高く、搬入品と考えられる。高坏C類は高坏B類よりも胎土が精製されて軟質であり、坏部下半が碗形を呈する点で形態が異なる。高坏C類はいずれも破片資料であり、坏部上半や脚部形態が不明であるため、系統等は検討できなかった。

その他、器台が2点確認された（99・100）。いずれも小型であり、小型丸底壺などと組み合うと考えられる。また、特徴的な器種として竪穴建物跡2号で出土した101がある。1点のみの出土であるが、完形品であったため全体形が把握できた。県内の出土例では類例はほぼみられず、南さつま市芝原遺跡出土事例（埋文センター2013）（第71図7）は特徴は類するが、破片資料のため詳細な検討には至らなかった。器形が類似する直近の出土事例では、佐賀県唐津市黒岩前田遺跡（唐津市教委2020）出土の有孔深鉢（甑）がある（第71図8・9）。黒岩前田遺跡の例は口径がより広い点や、胎土が精製さ

れており調整が丁寧である点、被熱痕があまりみられない点などで101と異なっているが、鉢形の器形で底部に1カ所の小穿孔を有する資料は点的に九州内でみられそうである。今後の資料の増加を待ちたい。

B地点の古墳時代の出土遺物は、甕形土器や高坏を中心に在地系と外来系に大別でき、在地系土器とした甕A類や壺C類には北薩地域の地域の特徴ともいえる要素が認められた。丸底甕に代表される古式土師器は、県内でも出土事例が増加しつつあり、六反ヶ丸遺跡で新たに北薩地域の事例を追加することとなった。北園上野古墳群の調査成果から、水俣地域は竪穴建物跡の形態や土器群の様相が六反ヶ丸遺跡と類似しており、さらに土器の形態が六反ヶ丸遺跡との類例が多い出水市域・長島・川内平野北部といった、八代海南部沿岸の北薩～水俣地域にかけて、南九州の在地土器と古式土師器とが接触して生じた一つの地域性が存在したと考えられる。A・C・D地点の出土資料も踏まえ、六反ヶ丸遺跡の資料を総合的に検証していきたい。

第4節 古代～中世

古代～中世については、遺構は検出されなかった。また、当該期で一般的に出土する土師器の皿・坏・甕類は少量であり、比較的まとまっていたのは、瓦質の播鉢であった。本文中でも述べたとおり2種類の色調がみられ、内底面はいずれも摺目が潰れており、使用がある程度認められる。

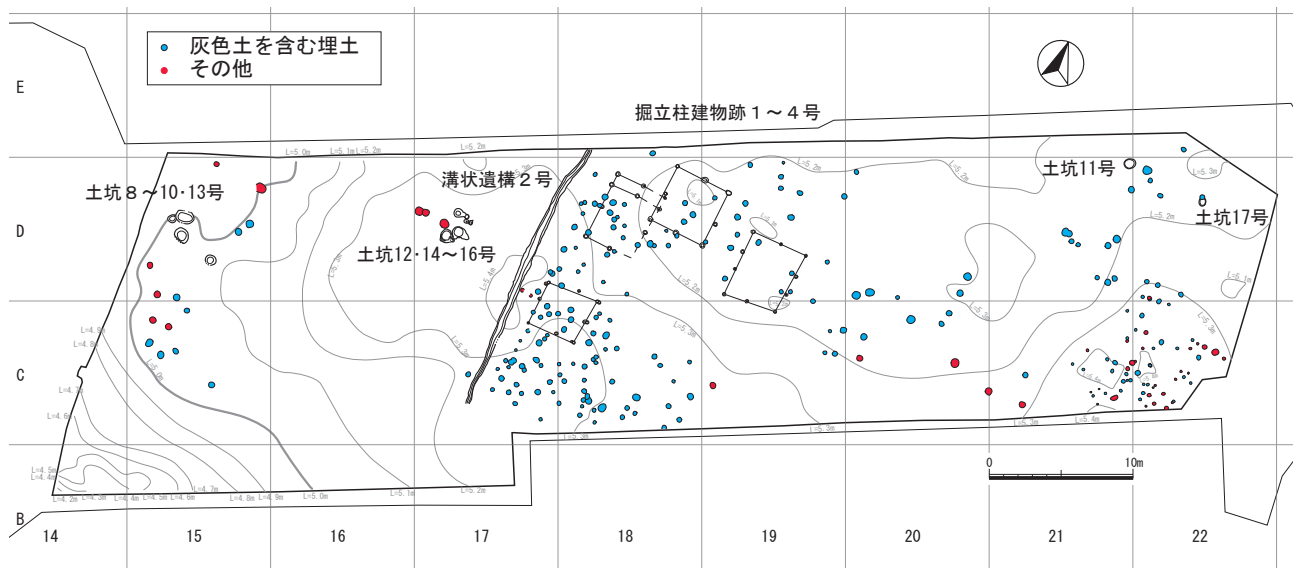
古代の遺構はC・D地点では検出されており、当該期の生活範囲の中心は六反ヶ丸遺跡の中でも東側であったと想定される。

第5節 近世以降・その他の遺構

1 遺構

近世以降は、掘立柱建物跡や土坑、溝状遺構など、遺構の種類が豊富であった。遺構は掘立柱建物跡4棟、溝状遺構1条、土坑10基が確認された。

特筆すべきは、カマド跡等と想定した焼土を伴う土坑群3基（土坑14・15・16号）と掘立柱建物跡4棟（掘立柱建物跡1～4号）が、溝状遺構を境に分かれて位置している点である（第46図）。遺構は、土坑が溝状遺構の西側、掘立柱建物跡が溝状遺構の東側を中心に位置しており、溝状遺構によって区画されて土地利用が分けられていたと考えられる。また、掘立柱建物に近接するピットや包含層からは、鉄関係の遺物が数点出土している（第65・66図）。さらに、溝状遺構の東側では鉄滓や轆の羽口片が出土しており、断片的ではあるが鍛冶関連の痕跡が認められる。そのため、カマド跡と想定した土坑は鍛冶に関連する可能性も想定されるが、遺構に明確に遺物が伴って出土していないため、可能性として指摘する



第 72 図 埋土別ピット位置図

に留めておきたい。

掘立柱建物跡の南側を中心に多数のピットが検出された。埋土も複数にわたり、明確な組み合わせが確認できなかったため、これらのピットに関しては時期不詳の単独の遺構として扱った。埋土の色調を大別すると、Ⅰ～Ⅱa 層に混在してみられる旧水田層由来の灰色系の色調と、その他に分けられる。旧水田層は古くても近世以降に位置づけられるものであり、時期的には新しいものである。第72図でみると、灰色系の埋土で構成されるピットはB地点全体に広がっており、近世の遺構が位置する範囲とも重なっているため、当該期の活動痕跡と考えたい。

2 遺物

近世以降の出土遺物は、陶磁器が中心であった。磁器は中国産輪花皿を除き、染付は肥前系、甕などの大型製品や土瓶は苗代川系が主体であった。B地点では、250のように苗代川系と特徴が類似するものの、釉調や器壁の厚みが若干異なる資料がみられた。出水では、高尾野焼と称される資料が数例確認されているが、窯跡が見つかっておらず、未だに不明な部分が多い（出口2007）。今後の資料増加に期待したい。

出水平野は八代海を通じて南北に開かれ、米ノ津川が流通の要所として機能していたと考えられる。先史時代に限らず、貿易陶磁器及び国内産陶磁器の流通過程においても、出水平野周辺は重要な地域であったといえる。

【註】

- 1 一部、14・18・51などは色調も明るく硬質で、器壁の薄さやハケ目の細かさが他の資料とは異なっており、これらは搬入品の可能性もある。
- 2 久住猛雄氏の御教示では、口縁部のゆがみ等の特徴は伝統的V様式系（久住1999のB系統）に類するもの

で、熊本平野南部にみられるような、B系統の製作技術を有する作り手による布留式系甕の模倣品の可能性があるとの指摘をいただいた。

- 3 久住氏により板石硯の可能性が高いとの見解を得ている。
- 4 檀佳克氏の御教示による。
- 5 B地点では出土例がないが、A地点では口縁部を三角形に肥厚する中・大型の壺形土器も出土している。

【引用・参考文献】

- 東町教育委員会 1983『山門野遺跡』東町埋蔵文化財調査報告書(1)
- 出水市教育委員会 2013『川除遺跡・下郡山遺跡』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書(24)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『芝原遺跡4』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(178)
- 唐津市教育委員会 2020『黒岩前田遺跡』唐津市文化財調査報告書第184集
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式並行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX
- 久住猛雄 2015「『土師器』の中の『成川式』土器-中津野式から辻堂原式にかけて-」『成川式土器って何だ？-鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器-』
- 檀 佳克 2011「土師器の編年 ①九州」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』
- 出口浩二 2007「北薩摩地域における近世陶磁器の一樣相-謎の高尾野焼と出水麓地頭仮屋跡出土品の検討-」『からから』No.23
- 松崎大嗣 2017「薩摩・大隅の古式土師器と在地土器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会発表要旨集・基本資料集
- ※ 図掲載以外の本文中であげた報告書は割愛した。

版 圖



①B調査区全景（C・D-21・22区） ②・③作業風景 ④土層断面（北壁） ⑤土層断面（東壁）
調査状況・土層断面



①検出 ②・③土層断面 ④遺物出土状況 ⑤遺物出土状況（全体）

古墳（竪穴建物跡2号①）



①～③遺物出土状況（近景） ④炭化物・遺物出土状況 ⑤完掘
古墳（竪穴建物跡2号②）



①



②



③



④



⑤

①～③遺物集中2 遺物出土状況 ④遺物集中1 検出 ⑤包含層出土遺物（台付鉢）
古墳（遺物集中1・遺物集中2・包含層）



①掘立柱建物跡 1号検出 ②掘立柱建物跡 2号検出 ③掘立柱建物跡 3号検出 ④土坑15号（焼土）検出
⑤土坑14号（焼土）検出 ⑥土坑13号遺物出土 ⑦溝状遺構 2号検出 ⑧溝状遺構 2号完掘

近世以降（掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構）



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 1



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 2



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 3



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 4



53



48

47

50

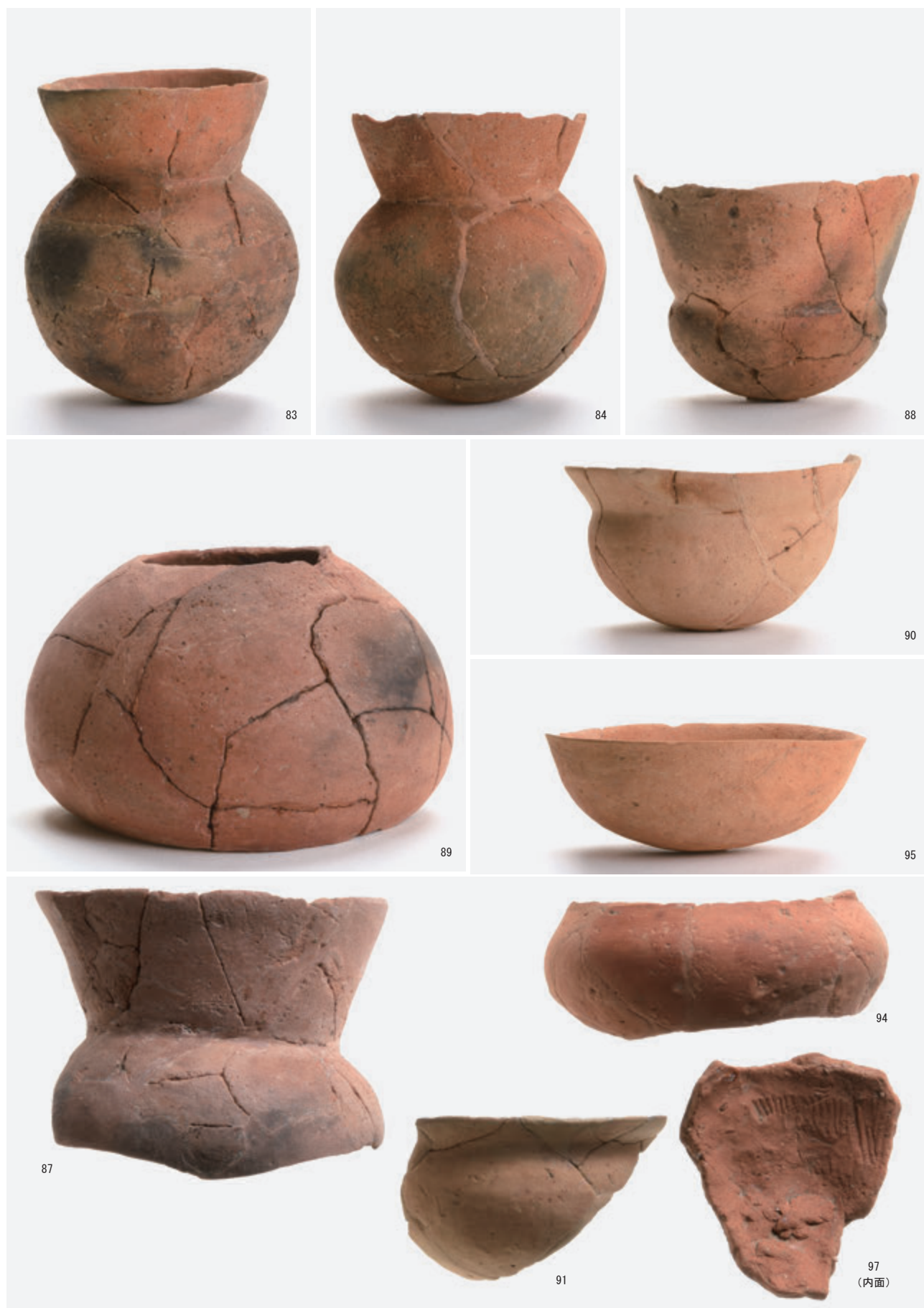
54

51

竖穴建物跡 2 号 出土遺物 5



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 6



竖穴建物跡 2 号 出土遺物 7



竪穴建物跡 2 号 出土遺物 8



竖穴建物跡 2 号 出土遺物集合写真



遺物集中 1・2 出土遺物



遺物集中2 出土遺物 1



遺物集中2 出土遺物2



古墳時代 出土遺物



古代～中世及び近世・近代出土遺物



近世・近代出土遺物



近世・近代及び包含層出土遺物

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（40）
南九州西回り自動車道建設（芦北出水道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六反ヶ丸遺跡 2

－ B 地点 －

発行年月 2021年3月
編集・発行 鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 斯文堂株式会社
〒891-0122 鹿児島市南栄2丁目12番地6
TEL 099-268-8211 FAX 099-269-5198



鹿児島県